平成 14・15・16 年度
科学研究費補助金　基盤研究(B)(2)
「東アジア地域における「早期教育」の現状と
課題に関する国際比較研究」
資料集　2（課題番号14401007）

東アジアにおける早期教育の現状と課題

資 料 集　2

平 成１７年３月

研究代表者　一見(鎌塚)真理子
国立教育政策研究所国際研究・協力部
総括研究官

はしがき

本書は、平成14-16年度科学研究費補助金[基盤研究(B)(2)]による共同研究「東アジア地域における早期教育の現状と課題に関する国際比較研究」の一環としてまとめられた、2冊目の資料集である。第1冊目の『韓国における早期教育の現状と課題』とあわせてごらんいただきたい。

本書は、第1冊目と同様、臨床の立場からみた韓国の早期教育・子育て論（第1部）と教育学・幼児教育学の研究者による早期教育関連の調査研究成果と政策提言（第2部）から成る。

韓国では、子女の大学入試に備えて親が私費を投じて行う教育の盛んなことはよく知られているが、それが年々低年齢化し、所謂、早期過熱教育が2000年前後に一気に社会問題化している。ところで、韓国ではこの問題を単なる家庭教育次元の問題とはとらえず、教育本来の原理にのっとって公費で運営される幼児の教育・保育の体制が不備であるからこそ、それを改革すべきであるという政策提言にむすびつけ、制度改革をかちとるというダイナミックな変化が起こったことを私たちは知るべきであろう。早期教育問題を世に訴えた勇気ある臨床関係の専門家と、実態を調査し政策立案につなげた研究者集団、それを後押しした広範な教師と父母との連携が、2005年を「満5歳児のための無償教育・保育の元年」にしたということができるだろう。

本書には、以上の動向の背景にある問題を浮かび上がらせてくれる資料を精選・翻訳の上、収録した。ちなみに、第1部でとりあげた「子どもよりもっと辛い母親たち」(2002) の著者、申宜真氏は、小児精神科医にして二児の母という立場から繰り出す、『賢い親は子どもをゆっくり育てる』（日本語版『かしこい親の子育て術』小学館2004）をはじめとしたユニークな言論活動で知られる。「子どもよりもっと辛い母親たち」はシリーズ第3部にあたり、早期教育問題の背後あるいは根源にある「この時代に韓国という国で育児をする母親の辛さ・痛み・心の傷」について焦点をあてなおしたもので、母親たちをエンパワーするためのさまざまな戦略や処方を提示している。また、第2部に収録した3つの資料は、それぞれ、韓国の早期教育の現状と親の意識、幼稚園教師の意見、幼児教育・保育の正常化政策の必要性について理解するための第一級の調査報告書等である。紙幅の関係で抄訳になった部分もあるが、以上が韓国の早期教育の現状と課題をさらに理解するため一助となれば幸いである。

以上について、今回も翻訳の労をとっていただいた丹羽孝教授はじめ、佐藤由美、金英美、辛椿仙、片成男の各位に深甚なる感謝を申し上げる。

平成17（2005）年3月

研究代表者　一見真理子

【研究課題】

平成14～16年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）

東アジア地域における「早期教育」の現状と課題に関する国際比較研究

【研究組織】

研究代表者　一見(綾屋)真理子　（国立教育政策研究所国際研究・協力部総括研究官）

研究分担者　橋本　昭彦　（国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官）
澤野　由紀子　（国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官）
鬼頭　尚子　（国立教育政策研究所生徒指導研究センター主任研究官）
汐見　稔幸　（東京大学大学院教育学研究科教授）
丹羽　孝　（名古屋市立大学人文社会学部教授）
山本　登志哉　（共愛学園前橋国際大学国際社会学部教授）

研究協力者　巷野　悟郎　（子どもの城小児保健部顧問）
植松　紀子　（子どもの城小児保健部技術主任）

辛　椿仙　（韓国ダンマー・アカデミー代表）
鄭　廣姫　（韓国教育開発院・研究委員）
片　成男　（中国政法大学専任講師）

金　泰勲　（国立教育政策研究所客員研究員）
佐藤　由美　（青山学院大学非常勤講師）
日暮トモ子　（文部科学省生涯学習政策局調査企画課）
渡辺忠温　（東京大学大学院生）
韓　在熙　（名古屋市立大学大学院）
金　英美　（拓殖大学大学院生）
鶴見 陽子　（中央大学大学院生）

総 目 次

はしがき
研究組織

第1部 [illegible]韓国の子育て[illegible]

資料Ⅰ　子どもより辛い母親たち …… 1
申 宜 真
佐藤由美・金英美・辛椿仙　訳

第2部 [illegible]に関する研究成果と[illegible]への[illegible]

資料Ⅱ　韓国における早期教育の実態と現況 …… 111
李 基 淑
張 英 姫
鄭 美 羅
洪 勇 姫
片 成 男　訳

資料Ⅲ　韓国「学父母」の教育熱分析研究 …… 149
ヒョンジュ
イチェブン
イヘヨン
丹羽 孝　訳

資料Ⅳ　幼児のための公教育・保育　―何が問題なのか― …… 183
李 基 淑
丹羽 孝　訳

子どもより辛い母親たち

序

よい母親コンプレックスが
あなたと子どものすべてを駄目にしている

一日に20名を超える心の病をもつ子どもたちに会うようになって10余年。

診療室の扉をそっと開けて、子どもと一緒に入ってくる母親と目を合わせると、いつも胸の片すみが痛くなってくる。何日も眠れなかったらしい生気のない疲れきって落ち窪んだ目。そこには子どもを心配する不安感とともに、その母親が経験してきた苦しみと痛みとがそっくりそのまま込められている。

この母親もまた、戦争のような日常にどれほど耐えてきたのだろうか。その我慢のなかでどれほど何度も自分自身を激しく責め立てたのだろうか。病んだ子どもを診療しながら、このような母親にさらに多くの神経を使う理由は、子どもを治すためでもある。

小児精神科の医師になるのには、子どもに関する勉強だけをするのではない。小児精神科の修練を2年間する前に、成人の精神的な問題とその治療について4年勉強する。なぜそんな必要があるのかといぶかる人もいるかもしれないが、それは当然なことである。子どもが心の病にかかるのは、先天的な場合を除くと、母親に原因がある場合が相当に高い比率を占めているためである。

それで母親に問題がある場合、治療は大部分難航する経験がある。「子どもがおかしい」からやって来た母親が、自分自身に問題があるという事実をすぐに受け入れることができないためである。

小学校1年生の子どもが学校で暴力事件を起こしたということで、その子どもの母親は私に、ああでもない、こうでもないとまくしたてた。「たいしたことでもないのに何故こんな騒ぎになるのかわからない。そうじゃないですか？ ねぇ先生？」

子どもは先生も嫌いで、勉強もみんなわかっているからおもしろくなく、友達を殴るのがとてもおもしろいという。それにもかかわらず母親は、「何事」でもないといい、むしろこのために病院に来たことをものすごく恥ずかしいと思っていた。

ある母親は自分の子どもの英才判別をしてくれるところを探しに来たのだが、6歳になる女児が怒りに耐え兼ねて母親を殴った。6歳のときの衝動調整力は、いくら怒っていても言葉でいうことができる程度はなければならない。怒って母親を殴るということは、正常から外れた深刻な「病」である。しかしながら、その母親は検査結果を認めることができずに、自分が子ど

もの教育にどれだけ徹底したかを主張し、そんなはずがないというだけだった。

少し前に、幼稚園児の父母を対象に質問紙調査をしたが、その結果、全員が自分の子どもには問題がないと答えていた。調査方法がよくなかったのではないかと思い、方法を変えてもう一度調査をしてみたが、結果は同じだった。しかし、そのなかには幼稚園の先生を通じて精神的な問題が深刻であるという報告があがってきている子どもも何名かいた。

子どもより病んでる母親たち。しかし自分に問題があるという事実を認めない母親たち。彼女たちは一様に子どもをとても愛していると言う。私は率直にいって、その言葉を聞くときが一番ひやっとする。どんな母親であっても自分の子どもを愛さないことはないだろうし、思い通りに育てたいと思わないこともないのではないか。しかし、せつなくても気持ちだけで、思い通りに表現することのできないのが、ほかならない母性である。

その母親たちはあらゆる「よい母親コンプレックス」に陥り、あがいていた。簡単に言うと、よい母親にならなければならないという強迫観念に悩まされていた。彼女たちは何故よい母親にならなければならないという強迫観念に悩まされていたのだろうか？

母親たちが経験する「疲れ果てた感じ」は、とうてい言葉で説明することはできない。誰にも助けてもらえない状況で、一日一日努力して家事をこなし、子どもを世話しているのに、その結果得るのは、取るに足らない、役に立たない、価値の無い存在であるという烙印だけである。はなはだしきにいたっては、影のような扱いまで受けながら、彼女たちの傷は一層深くなっていく。

認められたくない人が、愛されたくない人が、いるだろうか。彼女たちは涙をこらえて子どもをみる。そしてある瞬間、子どもをうまく育てるよい母親になろうという気持ちを抱くのである。子どもをうまく育てるよい母親になれば、存在価値を認めてくれるはずだから。

よい母親になるのに、誰が敢えて喧嘩をふっかけたりするだろうか。婚家に行くのが嫌ならば、子どもを前面に立たせて「子どもを学院（訳注：民間の学習塾やさまざまな教室）まで送らなければならないの」といえば済む。憎らしい夫も、子どもを前面に立たせて、「あなた、この程度しか稼げないの？子どものためにもっと稼いできたら？」と痛快に吹き飛ばすことができる。

あらゆる葛藤を、「よい母親コンプレックス」という安全な隠れ家（？）に入れて、とんでもない方法で解消する母親たち。彼女たちの危険性は、自分自身の歪曲された母性で、子どもまで駄目にしてしまうという事実を悟ることができないことである。

彼女たちは、四角い個性の子どもを、社会が願うのが丸い子どもであればそのようにしようとする。子どもがひっくり返るのをそのままにして見ていることもできず、子どもが言うことを聞かなければ、頭ごなしに叱りつけて急き立てることまでする。

固有な天性をそのままに認められない子どもが、決して健康に育つはずがない。しかしながら、それでも彼女たちは子どものために最善を尽くしていると強調する。

私は子どもよりさらに辛い母親を見ると、僅か7～8年前の自分を思い浮かべてしまう。私もまた母親業がしんどくて、2度も7ｋｇ痩せる最悪の状態にまでいった。1度は、最初の子であるキョンモを身ごもってつわりのときに、1度は、キョンモを産んで職場と育児を並行していたときに…。そんな戦争のような日々に耐えながら、離婚を考えたこともあった。

この本のなかには、二人の子どもの母親として私が堂々と立ちあがるまで、私が経験した挫折と悟りが入っている。そして自分自身が何を始めたらよいかわからない、まだ、よい母親コンプレックスに陥って自我を喪失し、子どもまで駄目にしている母親たちに、精神科の専門医として与えたい、いくつかの助言を付け加えた。

私が経験したきまりが悪く恥ずかしいことの一つ一つを、どうして全て取り出してみせるのかという理由は、「母親」になるためのそう簡単ではない過程を、今もあい変わらず経験している、私の友のようでもあり私の姉妹のようでもある母親たちに対して、そんな思いをしているのは決してあなただけでないことを伝えたかったからだ。そして私もまた例外ではなく、韓国のすべての母親と同じ様に、試行錯誤を経験したものの、いまは幸福かつ健康に暮らしており、彼女たちもやはりそんなふうにできることを知らせてあげたいためである。

しかし率直に言うならば、この本を書きながら「どうしても私の病める過去をすべて暴き出さなければならないのか？」と少なからず悩んだことも確かだ。病める過去の記憶を一つ一つもう一度、甦らせなければならないのは、とんでもない負担となって迫ってきた。しかしながら、「幸せな母親の神話」に覆われている、母親になる道に置かれている真実と虚偽をありのままに話すためには、私の過去を洗いざらい話すしかないと考え、勇気を出した。

子どもよりさらに傷ついて、よくも悪くもならない状態を繰り返している母親たちに、この本が少しでも慰めとなり、傷を癒すための一助となれば嬉しい。彼女たちが痛みから逃れ、幸福に向かって、堂々とした最初の歩みを始めるのがいまから待ち遠しい。

2002年9月

申　宜　真

目　次

序　1

1．母親たちが傷つくのにはすべて理由がある

面目ないけれどやりきれない告白 …… 6

母親の役割に対する誤解１－子どもを産みさえすれば母親になるの？ …… 9

母親の役割に対する誤解２－学ぶ必要はないの？ …… 12

母親の役割に対する誤解３－もともとこんなにまでしんどいものなの？ …… 15

母親たちを尊重しない国、大韓民国 …… 18

2．あなたも良い母親コンプレックスに陥っているかもしれない

子どもよりももっと傷ついている母親たち …… 22

あなたもよい母親コンプレックスに陥っているかもしれない …… 25

私が精神科の治療を受けながら悟ったこと …… 29

答はすでにあなたの中にある …… 32

3．良い母親コンプレックス、このように克服せよ

STEP１段階－劣等感をからぬけ出せ …… 36

STEP２－自分らを愛そう …… 38

STEP3－体力をつけよう …… 41

STEP4－子どもの権利を認めよう …… 43

STEP5－先生の役までしないで …… 45

STEP6－父親に居場所を作ってあげよう …… 48

STEP7－何も怖がらないで …… 52

4．ひょっとするとあなたが見落としている、本当に大事なこと

あなたは何のために生きているのか …… 55

「信じるもの」が与える力は思う以上に強い …… 57

子ども達が私にくれた予想外のプレゼント …… 60

私が夫をみて笑わずにいられない理由 …… 63

「共に生きること」を学ぶ母親たち …… 66

あなたが子どもに与えることのできる最も大きな遺産 …… 70

５．こんなにも病んでいる母親はいない

絶対に性本能を無視するな …… 74
おしゃべり、これほどよいことはない …… 79
２番目を産むのも一つの方法である …… 82
「ストレス」という敵を相手にする法 …… 86
夫のことが嫌だったら、こんなふうに変えてみては …… 89
専業主婦たちに …… 95
職場をもつ母親たちに …… 97
婚家のことで悩む母親たちに …… 102
病気を抱えている子どもをもつ母親たちに …… 104
離婚を考えている母親たちに …… 107

1 母親たちが傷つくのにはすべて理由がある

面目ないけれどやりきれない告白

アメリカのコロラド大学に留学していたときのことである。同じ大学に通って親しくなったアメリカの心理学者がいた。ある日、彼女とご飯を一緒に食べたのだが、彼女が唐突に言った。

「私は最初、ドクター申をおかしな人だと思ったのよ」

わけがわからなくてその理由を尋ねてみたところ、私の最初の印象がとても奇妙だったのだという。最初の学期、開講パーティーのときに私と最初に会った。若い東洋人がこんな大きな学会に参加したことをとても素晴らしいと思ったが、よく見ると期待したイメージとは異なり、横には男の子二人を連れ、後ろには夫まで同伴した正真正銘のオバサンだった。他の人たちは新しい情報を一つでも獲得しようとして東奔西走するのに、家族づれで何がそんなにおもしろいのか、パーティー会場の片側で終始一貫して笑って騒いでいる姿に、やはり後進国の田舎者だから仕方がないと笑っていたといった。また、私が韓国人であることから、韓国人の女性はすべて私のように早く結婚し子どもを産んで、仕事をするときも子どもを前面に押し立てて通うのだなと思わされ、韓国という国をアフリカの原始部族国家のようだと考えたという。

瞬間、こっけいでもあり、戸惑いもして「私がそんなにおかしかったの？」と問い返した。どんなに考えてみても、私は常識外の行動をとったつもりはなかったし、他人が私をそんなふうに見ているとは思ってもみなかった。ただ、開講パーティーのときは家族や恋人を連れてきてもよいことになっていたので、私も子どもたちを同伴しただけであった。もちろん実際に子どもを連れてきたのは、私以外には一人もいなかったが、もともと結婚しない専門家が多いので気にもかけずに、気持ちのままにその席を楽しんだだけのことだった。

彼女は戸惑う私に、にっこりと笑いながら、その間見て来た私の姿と感じた点を説明した。

「ところがね、それは私の誤解だったみたいよ。ドクター申が他人の視線などは気にしていないと思うほど堂々としているし、それは子どもたちのためにそうしているのでしょ？」

私は最近、私がこの世に生まれて最もよくやったことが子どもを産んだことではないかと思うほど、二人の子どもの母親であるという事実が誇らしい。しかしながら、私が最初からそう思っていたのでは決してない。最初の子であるキョンモを産んだのは結婚 3 年目、私が 27 歳のときである。100%完璧な避妊に自信があったので、まさかそんなはずはないけれど何かおかしいと、妊娠診断試薬で検査をしてみた。赤い平行線がだんだん鮮明になり、次第に果てしなく遠くなるのを感じたということは…、それほど妊娠は私にとって驚愕するくらいの大事であった。

当時、私はレジデントの 1 年目で、ジャングルのようなサバイバルゲームにまさに入ったば

かりであった。孵化したばかりのひよこが職分も忘れて妊娠したという声を聞くのが嫌で、最初は子どもを持ったという事実を包み隠した。その時まで、私の一番軽蔑する人は、家や家族の、あるいは個人的な事情を言い訳にして自分の職務をいいかげんにする人だったから。

しかし、キョンモはそんな私の願望をよそに、自分の存在を社会に知らせようとした。妊娠を確認したときから、いくらもならない時のことである。その日に限って早くから始められた大規模回診をようやく終えて、続いて行なわれるミーティングに参加するために、構内の食堂のそばを通り過ぎたとき、急に異常な食事の匂いが胃腸を刺激して、堪えきれない吐き気が込み上げて来た。前を行くレジデント２・３・４年目の先輩はもちろん、担当課長や教授まで押しのけて洗面所に駆け込んで行ったが、吐き気は止まらなかった。やっとおさまって会議室に入っていくと、人々の視線は好意的ではなかった。

「申さん、顔色が悪いけれどどうしたの？」

「何でもありません。すみません。」

何でもなくはない。とうとうつわりが始まったのだった。私の頭のなかには、もうすぐすべてが知られるようになる。本当にどうにもならない状況になって、見捨てられてしまうという考えしか出て来なかった。ミーティングが終わったとき、私を眺めているすべての目の色が冷たかった。暖かい言葉かけは最初から期待していなかったが、一朝一夕で、嘱望される才媛からいじめられる厄介者に転落した運命がどんなに惨めであったかは、言い尽くせなかった。

「何でそんなに早くレジデントの１年目なんかに妊娠するの？」という言葉は、それでも穏やかな方だった。「あなた、気が狂ったんじゃない？」という女性の同僚の反応。「申さん、人生これからなのに」という表情がありありとした男性の同僚の反応も真実だった。耐えられなかったのは、私にはなす術もなくプライドがズタズタになったことだった。子どもからお腹が空いたよとせがまれるのとは次元が違った。つわりは私がコントロールできることではなかった。薬もなかった。ただ、その期間を、その苦痛をそのままに、時間が過ぎていくことだけを待たなければならなかった。

つわりが始まって３週間のうちに私は７kg痩せ、結局、家でリンゲル液を打つようになった。男性たちもひどく驚いたのは、体力のあった私がリンゲル液を打って家で休んでいたから。非常に明るい世の中なのに、天井を見て横になっている私はあまりにも面目なかった。いま私にこんなことが起こっている。 悔しかった。何でよりによって女性に生まれて、この重要な時期に人生がめちゃくちゃにもつれたりするのだろう？　瞬間、「堕胎をしようか」という考えが脳裡をかすめていった。

そのときだった。キョンモが私の考えに気づいたかのように、突然吐き気が込み上げてきた。ひやりとした。キョンモはそうやって私に自分を扱う権利がないことを知らせて来たのだろう。生命の尊重ということを少しでも忘れていた私自身が恥ずかしかった。

けれどもそうしているうちに、私がキョンモを無事に生むために、母親としての役割をきちんと果たさないとしたら、それは筋違いだと考えた。私は、むしろ周囲の冷たい扱いによって

一層強くなった。妊娠したことが何か罪でも犯したかのように、当直であれば当直、試験であれば試験、研究ならば研究、絶対何ひとつ休まないで、これをさらに歯を食いしばって頑張った。どうか早く時間が過ぎてキョンモが産み落とせるようにと願い、妊娠期間を一日でも減らすために満36週を過ぎた日から、11階にある診療室まで歩いて登って通うことまでした。子どもを一日でも早く産み落とそうと、落ち窪んで死んだ魚のような目をした女性医師が、臨月のお腹を抱えて、狭くてひびの入った非常口の階段を登っている光景は惨めそのものだった。恥ずかしいことこの上ないけれど、正直いって恥ずかしくはなかったのだ。私にはそのときそうしながらも、自責感を持つことはできなかった。

振り返って考えてみると、そのとき私は、新しい命を産み育てようとすれば、気持ちの準備が必要だという事実を、必死になって否定していたようである。赤ちゃんを産む前に、父母になることの意味を考え、子どもをどのように育てるかについて夫とも話し合ってみて、生活習慣をどのように変えるかも計画しなければならなかったのだが、そこに私のエネルギーを割くことは、損害を受けることのようにやりきれなかった。子どもを妊娠して産むことは女性であれば誰もがする、別に資格認定を受けるのでもない、だからそんなことに神経を使いたくはなかったのだ。それだけではない。子どもを産むのはしんどいけれど、産んでしまえばきっと可愛いく、珍しい物や高価な物を食べさせたり着せたりしてとてもステキに育てることができるように思われた。「他の人たちだってそうやっているのだから、私にだってできないわけない」と、安易で傲慢な考えに陥っていったのである。

したがって子どもを出産して少し経つと、全ての苦痛は終わったと考えた。23時間の陣痛の果てに踏ん張って出産をして病室に横たわっていた一月余りの産休の間、他人よりも遅れている勉強をどうやって補うか、悩みながら計画を立てた。新生児は一日 20 時間程度、眠っているというし、この1ヶ月間に私に与えられる時間はかなり多いのではないか、などと。

キョンモが明るく笑いながら私の方に向かって走ってくると、とても鮮明にこの時のことが浮かんでくる。「そのように愛すべきキョンモに、私は何かしてやっただろうか？」思い出す度、胸が痛い。しかし恥ずかしいことだが、一方ではやりきれない自分がいた。誰も、あの時私に母親になることがどのくらい誇らしく価値があり、きわめて大事なことであるかを話してくれなかった。むしろ私の妊娠が自分にとって被害になるとか、また私が役割をおろそかにするのではないかと眉をひそめて警戒する人たちがいるだけだった。そして彼らは、私が、自分自身やお腹のなかのキョンモにとって苛酷なことをするときも、「そんなことしてはだめだ。」とは言わなかった。私が無理をしても「大丈夫？」という言葉だけで、結局、無理をするなとはいっても、私の仕事を減らしてくれはしなかった。むしろ辛抱強く一日、一日持ちこたえる私を見て「がんばっているね」という賛辞を贈った。

私にとって二人の子どもは、天が与えてくれた祝福であり贈り物である。私は二人の子どもを見て毎日毎日を今更のように感謝している。子どもを見ながら私の存在の根源がまさしくそ

こにあることを感じる。なので、私は一層やりきれない。私が子どもを育てること、母親になることの意味をずっと前から知っていたならば、初歩の母親時代の、子どもと私の二人のすべてを駄目にした凄惨な時期を避けることができたのに。大体、誰も何も、「あなたはお母さんをしなさい！」と教えてはくれなかった。どうしてなのか、できることならば行って問いただして聞いてみたい。もし「女性がそんなこともわからないの？」という人がいたら、頭を一つ拳固で小突いてやりたい。母親が病んでしまうのには、みな理由があるのだということを、大きな声で教えてやりたい。

母親の役割に対する誤解１ー子どもを産みさえすれば母親になるの？

5歳になる娘がとても恥ずかしがりやで、自分の意思表示をしないので診てもらいに来たという母親がいた。広告会社に勤めている彼女は、子どもを婚家に預けて週末にだけ連れ戻すので、それが子どもによくない影響を与えているのではないかと心配していた。けれども子どもはそんなに心配するほどではない。ただ母親がもう少し子どもに関心を示してやり、一緒の時間を過ごすようにすればすぐによくなるように思えた。

「子どもを家に連れてきたらどうですか？　旅行に一緒に行くのもいいですよ。」

「言われなくても今度の昇進試験さえ終われば、連れ戻そうと思っています。ところでですが…」

何も言わないか、根拠のないいいかげんなことを言っていた母親は、決心したのか、自分の心の内を打ち明けた。正直なところ、子どもを連れ戻すのは気後れがした。子どもをいつも婚家に預けているので、育てられないようにも思えたし、結局、自分が育てなければならないのだけれど、充分に果たすことができるかどうかと思うと怖い、と言った。

最初から父母と離れて転々とした子どもが、時間が流れて自分にとって馴染みのない親に対してよそよそしくするので、胸が痛かったのだという。それで「すぐに連れて来なければならないはず」と考えはしたのだが、「少し気楽な部署に移ってから」、「子どもがおしめだけでもとれたら」、「もう少し広い家に移ってから」と言い訳をしながら、子どもを連れて戻す時点を徐々に延ばし、とうとう２年経ったといった。

「何がそんなにしんどかったのですか？」

「この子を引き取れば、いまの私の生活はなくなります。残業も多いのに、上司の目の色を気にしながら、家に早く帰らなければならないし、毎日子どもを見てくれるところを探して、地団駄を踏みながら生きなくてはならないなんて…、私にそんな生活を果たしてすることができるのでしょうか？」

「いま、何がそんなに怖いのですか？」

「先生、私には母性本能がないみたいです。子どもだけのためを思う気持ちがそんなにない

のです。子どもが可愛いというよりは、自分の子どもだから私がしてやらなければならない、そんな気持ちだけなんです。私が母親で、私しかいないから、仕方がないから面倒をみなければならないという気持ちなんです。子どもを育てるのは、ただ義務のように感じています。他の人は、働いていても、子どもが涙を流して会いたがっているのではないかなんて言っているのに… 。週末に子どもを連れて来て、一緒に過ごしたあと日曜日にまた婚家に預けて出てくるじゃないですか。そうすると正直いって気持ちが軽くなるのです。私の気持ちがこんななのに、こんな母親のもとにいても、子どもにとっていいのでしょうか。」

最近、この母親のように自分に母性がないと、自分を責める母親に多く出会う。数あるなかには、自分の人生を奪った子どもが憎いとまで訴える母親もいる。そんな母親の内心には、子どもを育てるには自分を改善しなければならない、そして自分の人生を搾取されるかもしれないという考えが封じ込まれているのである。

そんな母親に私が出す処方はこうである。

「まず、罪の意識から自由になりなさい。」

他の親は当然のように子どもを愛しているのに自分にはできないということからも、である。なぜなら、母性は本能ではないためである。それゆえ罪責感を持つ必要はない。子どもを産んで徐々に母親になるのであって、母性がはじめからあるのでは決してない。

私も最初の赤ちゃんを産んだとき、白いおくるみに包まれて赤い皺の寄った生物体が私の子どもだという事実が信じ難かった。子どもをみた瞬間、面食らって、愛情が沸くというより、私はただ震えるばかりであった。

いままさに世に出てきた小さい坊やが持っている破壊力は本当に物凄かった。私の生活と価値観は毎日毎日、新しいやり方で崩れていった。3 週間の間、産後のもろもろを手伝ってくれた実家の母が家に帰っていった日、私は初めて自分の手で子どもを沐浴させることになった。母が横にいてみてくれていた時は、「そんなに難しくない、やればできる」と思っていたが、そうではなかった。

まず沐浴させる湯を入れて、ある程度の適当な温度にした。目を瞑らせるには子どもの頭をどんな姿勢にしなければならないか、首も据わっていない子どもを水のなかに入れるには入れたが、そのまま「すすぎ」だけして取り出してよかったのか、どこからどんなふうに洗ってやればいいのかも判断がつかなかった。眺めていたときは自信があったが、いざ自分がやろうと思うと簡単にはいかなかったし、何一つ満足にやることができなかった。それだけではない。四六時中、泣き出す子どものために耳をそば立てた状態にしておかなければならないのは勿論のこと、粉ミルクを混ぜたり、おしめを交換したり、おんぶして寝かせたりなどで一日中、気が抜けなかった。

その当時の私の心情は一言で、「情けなくて途方に暮れた」感じであった。ぼんやりと何もない空間を見つめながら、「私は医師に向いているのだろうか」から、「私は何でこんなにも母

親の役割をこなすことができないのだろうか」、「いつまでこの余計な苦労をしなければならないのか」まで被害意識と罪責感は止まるところを知らなかった。考えてみれば、私が子どもを産み育てる前にもっていた育児の知識というものは、中学校1年生の家事（家庭科）の時間に習った「おしめたたみ」だけであった。もちろん実際には布おしめを使わなかったので、その知識さえも役立たなかったというわけだが。その他の母親になるための知識は、すべて新しく学んで身につけなければならないものであった。

だれが、子どもは生まれれば自然に大きくなるものだといったのだろう？　子どもをうまく育てるのは、かなり精神的に健康で成熟した人でなければしんどいものである。理由なく泣く子どもを一日に何度も抱いてやり、2時間おきにミルクの準備をし、吐いたものが残っている臭い衣類を3，4組ずつ洗う過程を余すところなく経験しながら、子どもをそのまま受け入れることができなければならない。

母親になれば、子どもの成長発達に対する知識も持たなければならないし、感情を調節する能力も育てなければならず、一度に迫ってくる予想もできないことをしっかりと解決していく度胸もなければならない。そしてそのすべてのことは、ひとりでに獲得していくものではなく、経験の中で育てていくものである。母性は決して本能ではないということである。

世界中どこに、ひとりでにわかるようになるものがあるだろうか。母性も同じことである。それなのに私たちは「誰かの母親になる」ことに対し、あまりにも簡単に考えている。またそうでなければ、母親になる前にすでに怖じ気づいてしまって、絶対にその道を歩めないだろうけれど。

二人の子どもを連れて留学することを決心したときのことである。私の母はその事実を知るやいなや、いきなり電話でこう言った。

「あなた、気が狂ったの？　あなたの将来を台無しにするつもりなの？　子どもたちの世話をしながら、どうやって勉強するっていうの？」

母親には孫たちより、私がまず先決のようである。非常に遠い外国に連れていかれたら、洪氏の家系（著者の嫁ぎ先のこと）の息子たちは、自分の大事な娘の前途を塞ぐと考えたようである。しかし、私が子どもを置いては一人で渡航することができないというのなら、自分が子どもを育ててやるつもりだから、頼むから心置きなく安心して勉強だけしておいでと言った。

しかし、私は結局、子どもたちを置いて一人で渡航する考えはなかった。子どもたちを連れていった結果私の身体が粉々になるように疲れてだるくなるとしても、それは第二の問題だった。子どもたちにとって、私がいなければどんなにか辛いだろう。それに私もまた子どもがいなければ生きられなかった。子どもたちの顔を毎日見て、毎日肌をさすり、その変化をみることができないことのほうが、私には辛く大変なことだった。結局、私は子どもたち二人を連れて留学したが、いまもその決定を後悔していない。

私を知る人たちは、そのとき私をもう一度見直したという。利益と損害を正確に区分して、

前だけ見て走っていた申宜真に、そんな切ない母性があったとは知らなかったという。しかし、それは明らかに育てられたもので、天性の母性などではなかった。それゆえ「私には何故母性がないのか」という愚問に答える必要はないのだ。心理学者のフロム（Erich Fromm）も言っている。

「母性は、対象だけあれば起こるものではなく、対象に向き合う精神の力、活動であり能力である。」

したがって、先の母親のように、子どもに対して義務感しかないと考える母親たちに、私は力を込めて言う。とにかく「私はよい母親でない」という罪責感に縛られる必要はないのだということを…。私は、そんな母親が子どもに義務感で何かもっとしてやらなければならないという強迫観念に縛られながら、自分と子どもをどんなに駄目にしているかを数えきれないくらいみてきた。考えてもご覧なさい、人と人の間にある絆がただの義務感でしかなかったら、どんなに殺伐としているか。それが父母と子どもの関係であればもっと深刻である。

しかし、どうか母性本能がないという無用の罪責感に縛られないで欲しい。むしろ、胸が痛むあなたに今、当面必要なのは、「子どもとともにする経験」である。私がそうだったから言うのである。

母親の役割に対する誤解２ー学ぶ必要はないの？

少し前に後輩の家に遊びに行ったときのことである。満２歳になったばかりの後輩の子どもはよく遊んでいたが、こっちにきて甘え、あっちに行ってねだり、むずかり始めた。活発に見えたが、すぐに動くのをやめて座ってしまった。後輩は、じっと子どもがする姿を注意深くみていたが、「いけません」とは言わなかった。あわてふためきながら子どものお尻を叩くこともしなかった。後輩は子どもが無理な要求をしようとすると、子どもの関心を違うものを提示することによってそらすようにした。子どもは好奇心が旺盛なので、それを無理やりに押さえつけてもダメだということを理解している姿であった。そうしないで躾をしたり、厳しくこらしめたりしたら、言葉もまだよくわからない子どもに怒りをぶつけ、子どもに傷を与えることになる。

もちろん彼女も最初からそんなふうだったわけではない。彼女も１年前くらいまでは私に何度も電話をかけてきて、「子どものせいで気が狂いそうだ」といつも言っていた。その時ごとに私は後輩をなだめながら忠告してやった。

「母親になるのはそんなに簡単なことではないのじゃないかしら？　そんなに泣き言ばかり言ってないで、子どもについて勉強してごらんなさい。本も見て、周囲の人に聞いてみたりして･･･」

彼女だけでない。私は子どもに問題があって病院を訪ねて来る母親たちにも「勉強しなさい」

と言わないことはない。子どもの世話をしているからといって、すべての母親に母親としての自覚があるわけではない。子どもの発達過程をよく理解して、それに適した母親の役割をしようとするなら、学ばなければ不可能なためである。私にその事実を気付かせてくれたのは、まさしくキョンモを見てくれたベビーシッターのおばあさんだった。

「この子は本当に天使みたいねえ…」

おばあさんの第一声を聞いた瞬間、私はすぐにほっとした。空が崩れても飛び出る穴はある（どんなに困難な状況でもそれを切り抜ける方策はある）ということわざは、そんな時に使うのだろう。キョンモの面倒をみてくれる人を、あらゆる方面の手立てを使って探していたところ、先輩を通じて紹介を受けたのがまさにそのおばあさんだった。先輩は、どんなに世話の焼ける子どもも、そのおばあさんの手にかかれば、すぐに羊のように鳴くのを止めるので、「もうお前の苦労も終わりだ」と大言壮語した。

おばあさんがキョンモを世話してやる姿は、驚きそのものだった。世の中で一番明るくて慈愛に満ち溢れた表情をつくりながら、子どもを抱き上げるので、あたかもパズルのピースが合わせられたかのように過不足なく、子どもがその懐に遠慮なく入っていくなんて。そうしてから、子どもの呼吸に合わせてぶらんこのように身体を揺するので、とても自然に気持ちが落ち着いて、好き嫌いが激しく何でも１番にしてもらわないと泣き出す扱いにくいキョンモが、見慣れない人であることも忘れて、すやすやと穏やかな息を立てながらよく眠ってしまったのだ。「あ、今度こそいい人に出会えたようだ…」　安堵の溜息がひとりでに出てきた。

おばあさんに来てもらっている間、私は、一日に２～３時間しか睡眠をとれないようなぎりぎりの日常に少し安堵を得た。子どもを信ずるに値する人に預ける安堵感によって、私は初めて 24 時間キョンモに向けて働かせていたアンテナを引っ込めて、「子どもを育てる道」を横で観察することができるようになった。

キョンモは一度、泣き始めると、少なくとも 30 分は泣き止まない子どもだった。その時は食べるものも、おもちゃも全て必要ない。首に青筋を立てて、息が止まるくらいにヒクヒク泣いて、しまいにはおのずとくたびれて寝入ってしまう。だから「他人の世話」というのをしたことのない私がてんてこ舞いするのは当然だった。

それなのに、おばあさんはキョンモが泣き始めると、お腹が空いたか、オシメが汚れいるか一度確認してみてから、子どもを抱いて、「ウ～ン、キョンモや、何でそんなに怒っているの」と軽く撫でてやりながら、子どもが自然と落ち着くのを待っている。

そうしながらも癇癪混じりの言葉や表情をただの一度も見せない。それは、子どもが泣けばてんてこ舞いしたり、子どもの顔が赤くなれば同じようにうろたえて赤くなって、結局、誰に対してのものかわからない怒りを爆発させていた私の姿とは 180 度違っていた。

一度は、キョンモが抱かれていたときに、おばあさんの着物をさっと引ったくって破いて捨ててしまうことがあった。「アッチャァ･･･、キョンモや、みんな破いちゃったら、おばあちゃ

んはどうやって片付けるの」

それがおばあさんの反応の全てだった。それも子どもが着物を全部破いているときもだまって見ていて（！）、みんな破き終わった後にやっと、ゆったりとした普通の語調でこう言ったのだ。いくら幼い子どもだからといっても、誰だって自分の着物を引ったくられ破かれたら、驚いて「怒り」が出るのが普通である。私もやはり、キョンモに私の着物を破かれたならば、しつけをし直さなければならないという理由だとしても、まず怒りが出たものである。それなのにおばあさんは、いったん子どもの行動をすべて受け止めてやり、その次にワンテンポ遅れて反応するのだった。

子どもが、何が不便なのか、あるいは何が知りたくてそうしたのだろうと考えて、その全ての行動をスポンジのように吸収してやること。代価なくあらゆることを辛抱して吸収しながらも、尽きることのない関心を与えてやること。他人を平安な状態にさせる配慮が自然に体得され、それ自体がうれしいこと。それが、そのおばあさんに学んだ母性の実体だった。

その方は、私をあたかも母親のように抱えてくださった。私が夫のことでわなわなと神経を苛立たせていると、ただ笑っていた。「夫の若いときは、みんなそんなものよ。時間が解決してくれるわよ。」が、おばあさんの処方の全てだった。それは、やきもきすると短時間に解決されることも解決されないので、妻である私が少し我慢して待つようにという忠告が隠れた、とても気骨のある助言だった。私はその言葉を聞きながら、私をこらしめたり、叱ったりするよりも、私を暖かい目で見て優しく理解してくれていると感じた。「こういうのを母性というのではないかしら？私もキョンモにこのように穏やかに接してやらないと」という悟りが開かれた瞬間だった。

私は以後、勉強する母親になった。おばあさんの行動と姿をじっと見ながら、母親の役割を最大限、行うためにどうしなければならないかを学び始めた。それだけでない。数多くの本を見て、周辺の母親を観察するなど、尽きることない母親の役割に対する勉強を始めたのだ。

あらゆる人は、どこか似ているように見えても、実際、同じではない。それくらい各々の生命体は固有な個性を持っている。しかし、その個性を尊重して、それに合ったように育てるというのは、そう簡単なことではないものである。特に母親たちは、子どもが全て自身が見てやり教えるとおりについてくるものと考えやすい。固有の個性を持った子どもが必要とする母親の役割について考えるのではなく、自分がこうなってほしい子どもの姿だけを考える。自分が考える枠に子どもをはめ込んで、子どもがその枠から逃れようとすれば「ダメよ！」と警告する。

けれども、本当に子どものための母親であれば、自分の作る枠が子どもを苦しめてはいないか、振り返って見ることができなければならない。母親が母親の役割に対し、勉強しなければならない理由、学ばなければならない理由は、正にそこにある。だから、学ばなくても母親の役割をよくすることができると考えていたら、いまからでもその考えを捨ててほしい。

それでも、学んだことを実際に活かすことは、それほど簡単なことではない。私もまた自分は理論的には多くを知っていると思っていたが、実際にぶつかり体験すると、理論を思い出す

暇もないことがあまりにも多かった。それは、愛について理論でよく知っていることと、ホンモノの愛をもって行動することが違うということを意味している。そんなとき、私は保母のおばあさんという立派なモデルに出会ってとても幸せだった。

そこで私は、母親の役割をよく果たすことがどんなに大事であるかをまだよくわからない新しいお母さんたちに、育児知識を習得することはもちろんのこと、周辺で母親の役割をよく果たしている人を探してみることを勧めている。子どもたちが苦しまないでよく育っているケースを探し出して、その母親をモデルにするという意味である。よくやっている人に直接学んで習うことほど良い方法はないのだから。

母親の役割に対する誤解３－もともとこんなにまでしんどいものなの？

「ピピピピピピピピ」

カンファランスの準備をしようと無我夢中で働いているとき、ポケベルが鳴った。家からだ。ずしんと重たくなる胸。また何か起こったのだろうか。

家に電話をする手が震える。どうか変わったことがないように。

「おばあさん、どうかしたの？」

「嗚呼、キョンモの指がガラス扉に挟まってしまったの。血がどくどくと出ていて。お母さんが早く来てくれないと…。」

「わかった。すぐに行きます。」

素早く計算してみる。家は遠くないから今行けば 20 分。幸い午後の診療はない。カンファランスの準備は、同僚に了解を得るしかない。

あたふたと家のなかに入ると、キョンモが泣いている。指の先端が砕けて肉の塊の筋状のものが垂れ下がって出ていて、洋服は血で染まっていた。

どうしてこんなことになったのかと尋ねる状況ではなかった。とにかく子どもをおぶって応急室に駆け込む。これまでにも何度も連れて行っていたので、応急室の看護士たちとはおなじみだ。

「おう、キョンモまた痛くしたの？」

オンオン鳴いている子どものために、正確に答える状況ではなかった。みんなに 「ちっちっ」と脇から可哀そうな感じで眺められることは、それほど愉快ではなかったが仕方がなかった。慌てて痛い手を縫って止血した。母親が横にいてやるので若干、安心しているキョンモ。レジデントが心配そうな声で「手の爪が生えてくるのが少し遅くなるかもわからない」という。これだけすればそうなってもおかしくない、さらに何を望むだろうか。家に帰る途中で背中におんぶされて眠ってしまったキョンモを見て抱く思い…。

「今日もゆっくりおやすみなさい。」

≪風と共に去りぬ≫でスカーレット・オハラが「明日は明日の風が吹く」と言った。今日の不幸は今日で終わり、明日はまた違った希望で生きていくことができるという話である。

しかし、当時の私は明日に希望をもって期待する余裕はなかった。スカーレット・オハラのその言葉が「明日は明日で事故が起こる」と聞こえるほどであった。

キョンモは確実に、他の子どもよりもさらに母親のエネルギーを必要とする子どもだった。指のけが程度のことはキョンモを育てながらハッとさせられたことの 10 パーセントにもならなかった。キョンモは見慣れぬ場所や見慣れぬ人に接すると、ハリネズミのように棘を立てた。新しい洋服を嫌うために、洋服を買うと 1 週間、わざと洋服を引っ張って伸ばしておかなければならなかったし、靴はいつも他人のものをもらって履かせなければならなかった。3、4ヶ月過ぎたのち、もう少しはよくなっただろうと、新しい洋服を着せてみると、やはり頑強に抵抗して、また、ひとしきり騒動を起こすキョンモであった。

ご飯を食べさせるのも戦争だった。軽い病気という軽い病気はみんな罹って通過してきたほど弱いキョンモが、食べることまで思わしくないので、牛乳を飲ませるときになると、私はすっかり苛立つようになった。普通の子どもは満一歳の誕生日ぐらいになれば、一度に 150ml は繰り返し飲むようになるが、キョンモは 80ml も飲むのがきつそうだった。離乳食を食べるときも、キョンモは必要量を食べられないどころか、食べないことの方が多かった。食べることには本当に神経を使ったので、私は焦燥にかられて、1 年間、キョンモが一日に何をどのくらい食べたのか、毎日記録することまでした。

キョンモが少しでもよくなったならば、慰めになったはずなのに、キョンモの激しい偏食は、時間が経ってもまったくよくなる気配を見せなかった。

それでも食べることと着ることは、私がどんな努力であろうともすることができたので良い方だった。キョンモは突然、「理由なく」苛立たしいほどせわしくなって、いかなる「理由もなく」30 分単位で起きて泣いた。なぜ、おばあさんの洋服を突然引ったくって破いて捨ててしまうのか、なぜ、時に自分の頭を床に打ちつけるのか、どんなに私の身体と心を低くして子どもに合わせても、絶対知ることはできなかった。

「ダメでも、あきらめずになんとかしてみよう」という生活信条を堅く信じて生きてきた私は、何でも努力してダメなことがないと考えてきた。なので、私は、失敗したときに挫折してしまう人々を心の中であざ笑った。失敗するのはその程度しかあなたが努力しなかったためなのだから社会を恨む前に、怠惰な自分自身を恨むべきだ、と思いやりのない批判を加えたものである。

しかし、キョンモのおかげで、私は自分の努力ではどうにもならない世界があることを知るようになった。私の人生に初めて「赤信号」が灯り、ただすべてが物悲しく感じるようになったのだ。この子どもは確かに私が産んだのだけれど、こんなにも子どもを理解することがしんどかったとは。何事もするのが嫌になり、「夫の子ども」（キョンモのことだが）のすることが

憎たらしく感じて、事あるごとに癇癪が起き、手伝ってくれる人のすることも気に入らず、一言で生きるのが嫌になるほどだった。その間、体重も７キロ痩せた。

私はその当時、私だけ苦労していると思っていた。そして、その苦労には絶対どんな保障もないと思った。私だけでなく、すべての新米の母親の率直な気持ちはこうであろう。

「オシメを換えて、何か食べさせて、むずかればなだめてやり、泣けば抱いてやって・・・・・・、」一箇所に留まる暇なく忙しく繰り返される日常。もし、明日は全く同じことが繰り返されるのでないとしたら、「不意の事故」が起きるのである。子どもが突然、熱を出すこともあるし、転んでけがをすることもある。そして、その全てのことは、終わることなく私の労働だけを要求する。一体、私にどうしろというのか。

快方に向かわない、疲れてだるい日常と、いつ起こるかわからない事故。その間でみんなヒヤヒヤしながら一日一日を過ごしている。

特に予想できないことが継続して起こるのは、本当に身震いするほどのものである。子どもが突然に熱を出せば応急室に駆け込まなければならないし、子どもが迷子になれば派出所に駆け込まなければならないし、幼稚園で子どもが口喧嘩の果てに友だちを叩いたら、その父母と子どもに謝って、幼稚園の先生にも一度会いに行かなければならない。そんなふうに予測不可能なことが時々刻々と起こるのに、どこの誰が平常心を維持することができるだろう。

ネズミを対象にストレス実験をしてみると、不規則的に刺激を与えたネズミと規則的に刺激を与えたネズミとでは、ストレス指数に甚だしく差が出る。もちろん不規則的に刺激を与えられたネズミのストレス指数が高い。それだけ不規則的なストレスは、の強度が保たれて、耐えるがたいという話である。

人々が挫折を感じるのは、状況が自分の思いのままに解除されないためである。それ故、母親になれば、上に述べたように、予想しない、期待しない事件によって、統制不可能な状況にしばしば接しながら、挫折するしかなくなる。

しかし、それは母親になれば、当然に経験しなければならないことである。それ故、私だけがしんどい経験をしているのではない。むしろ、母親の役割を最大に果たそうとすれば、こんなまずまずの挫折くらいなら、超然としていることのできる「挫折耐性」を持たなければならない。また、常に反復される「ぐずぐずした」ことなども、気軽にやりすごすことのできる健康な身体と心を育てなければならない。

なぜならば、母親が子どもを育てることに少しでも懐疑を持つようになれば、元来母親の「肯定的な期待」を受けて成長しなければならない子どものほうに、勢いがなくなって顧みられなくなるためである。

子どもたちは、昨日今日と同じように見えても、ある瞬間ぱっと成長する。成長したときに母親の「肯定的な期待」を受けて大きくなった子どもとそうでない子どもは、実際に大きな差が出てしまう。子どもは母親が自分を信じているか、ひどく気を揉んでいるか本能的に感じる

ようになっている。母親が心身のくたびれた状態で子どもに接し、肯定的な期待の代わりに不満と癇癪以外に表現することができなかったならば、子どもはポジティブな領域から出て、ネガティブな領域に入っていくのは、当然なことではないだろうか。そうだとすれば子どもは否定的な自我を持つようになり、気持ちに病が入るようになる。

「母親になるってこんなにまでしんどいものなのか？」と悩んでいる母親たちに、私は母親の役割が元来そんなにくみしやすいものではない事実と、さもなければ、ほどほどの努力をしていれば充分であるという事実を話してやる。

どんな大切なことも犠牲なく、努力なく、ただで得られるものはない。学位を取るにしても3～4年、昼も夜もなく、時間と少なくないお金と努力を費やさなければならないし、質の良い安いおかずの材料を買うにしても、朝早くから農水産物の市場に行く苦労をしなければならない。思春期の彷徨を経て成熟したおとなになると20代の不安感を克服して30代、40代の安定感を探して当てられるように、「母親」になることも、やはりそれなりの苦労と努力によって可能になるものである。

しかも、その努力は他のどんな努力より効果が高い。敢えて数値で換算してみるとすれば、私が医師になるために費やした苦労が100であるとするとき、母親になるためには1000の苦労が必要だった。それで医師としての満足感は200であって、そこで止まっているが、母親として誇らしく思うことは500、1000、いや1万まで、どこが限界かわからないくらい、子どもが成長するように、どんどん高くなっている。

だから何故私だけ苦労しなければならないかという被害者意識に浸っている母親がいたら一度ぐらいじっくりと考えてみる必要がある。やはり何の努力もなくして何かを得ようとするのはよくない。当然しなければならない努力だったら、それを「社会が母親に要求する過度な苦労」の中に入れて自分が被害者になってしまうのも、やはりよくない…。

母親たちは本当にしんどいのであろうか。耐えなければならないことと、こらえなければならないことが何であるかを正確に探してみて、もしそれが、経験しなければならないことであれば「それくらいのことなんだ」と、経験する覚悟も持たなければならない。

「戦争」のような育児を、母親と子どもの双方が生かされるウィン（Win:勝つ）－ウィン（Win:勝つ）ゲームにする力は、そこにある。

母親たちを尊重しない国、大韓民国

ひとつの家庭の主婦が、母親と妻の席を蹴飛ばして家出を敢行するとする。そうするとどんなことが起こるだろうか？　いつだったかテレビでそんな題材のドラマをみたことがあった。結局、家族が彼女の存在感に遅まきながら気付いて、彼女を探して許しを請い、もう一度幸せ

な家庭を築いていくという内容であった。結果がよくなれば、全てを許すことができるのだろうか？　私はそのドラマを見ると始終、身の毛がよだつようで錯綜した気持ちになった。

母親の家出の事実を知ってうろたえる家族たち。

「おまえたちは息子・娘のくせに、お母さんが日頃どこに行っていたのかももわからないのか？」

「お父さんのわからないことを、何で僕たちが知っているんですか？」

家族のなかの誰も、母親が日頃誰と親しくて、どこへよく行っているのかわからなかった。その家族にとって母親はいつも影のように無いものであって、ただその席が存在していたのである。

恥ずかしい告白をしなければならないが、私にとっても、わが母親はそんな存在であった。影のようにいつもその席にある存在のようであった。私はあるときから心のなかで母親を裏切り始めた。絶対に母親のように生きたくないと決心したのである。それこそ「ひどく貧相な」母親の人生をそのままに継いで行く意欲が湧かなかっただけでなく、決してそんなふうになりたくはなかった。

「子どもたちは大きくなっているのに、お母さんはいつもああしろ、こうしろと干渉してくる。お父さんはいつも忙しくて、お母さんとまともに対話をすることもない。家族のために犠牲になっているお母さんには、何も自分の人生がないじゃない…。」

私はそのように充実していない日陰の人生を送るのは、嫌だった。私が勉強に努力したのも、母親のように生きずに、自分の仕事をもって堂々と生きてみたいと思ったからかもしれない。

ところで、そんな私の気持ちを充分にくみ取ってやらなければならないと思った母親は、むしろ私の翼をしきりに拡げようとした。母親は私が勉強することに期待してあらゆる種類の支援をしてくれたのだが、それは少しでも良い花婿候補と出会うための手段でしかなかった。良い花婿と良い大学の看板が一体、何の関係があるのだろう。けれども母親は、その理想的な公式を理解できない私が恨めしかったようだ。私が医師になると決めて医大を志望したとき、母親は、女性が運勢の強い、そんな仕事をすればお嫁にいかれなくなると医大志望に反対した。もちろん私は頑固に医大に入学したのであるが。

母親の生き方が私に与えた、被害者意識、母親のように生きたらダメだという強迫観念。それは今考えてみれば皆、女性であるという理由で差別される社会に生まれ育ったことから来る被害者意識であり、強迫観念であった。『朝鮮日報』の論説委員である李奎泰は、そんな被害者意識についてこのように表現している。

「我々韓国の女性史は、女性を石や木で作る木石化の歴史であった。韓国の女性に従来付与されてきた価値はといえば、息子を産まなければならない男の子の生産工場としての価値、牛一頭の価格で換算する労働力としての価値、そして敢えて違うもうひとつの価値をあげるなら、祭祀のときに哭する発声器としての価値、これで全てということになる」

気が詰まって言葉も出ないような、女性に対する価値の低さ。母親は偉大であり、母親にいつも感謝しなければならないと、社会は私たちにいつも教えてきた。しかし、それは一人の女性が誰かの母親として存在するだけで偉大なのであり、それを少しだけ抜け出したとしても、女性の価値は、李奎泰の言葉以上でも以下でもなかった。どうして女性の価値はその程度にしかならないのだろう？　女子が元来、男子より何か不足しているということでもなく、教育を少なめに受けているということでもないのに……。

私は私の価値をその程度にしか見ない社会をうらんだが、そんな社会のなかに生き残ろうとすれば、子どもを産んだらそれで使命がおしまいと捨てられてしまわないような職業を選ばなければならないと考えた。それで考えて出した答えが、正しく「医師」という職業であった。

その当時といまの社会は、大きく異なっているが、子どもを産み育てる環境は別に変わっていないようである。むしろ状況は、さらに劣悪になったともいうことができる。考えてみてほしい。親戚などが近くで生活しながら子どもを一緒に育て、育児の負担を減らしてやった時代は、今は昔の話である。しかも姑や実の母親でさえ、老後を育児に遊んで使うことなどできないと「独立宣言」している。だからと言って、託児施設や保育制度がよく整備されているということでもない。夫は以前も今も、お金を稼ぐのに忙しく、子どもの教育の責任を妻に任せている。

韓国のすべての時代をひっくるめて、今ほど、何もわからない「一人の女性」が母親であるという理由で、育児を全て担当した時はなかった。「子どもを産んだらみんなで育てられるようになっている」という言葉は、それこそ今では死語なのである。

したがって、どうして今、女性が子どもを産まないのか、産んでも一人だけしか産まないのかは、極めて当然な結果かもしれない。将来も出産率は減り続けるであろう。あえて人口学者などの言葉を引くまでもなく、ヨーロッパやアメリカなどの先進国では、やはり出産率の低下が社会問題になって久しい。たとえばフランスでは、どれほど「子どもを産むこと」を積極的に勧奨し、キャンペーンを展開し、出産と育児に関する福祉政策をアピールしたことだろうか？

ずっと以前の大学時代にフェミニズムについて勉強していたとき、誰かが冗談のようにこう言った。「韓国の女性たちが思いどおりの待遇を得て生きようとするならば、みんなで力を合わせて『子どもを産まない運動（出産ストライキ）』を始めなければならないのではないか。そんなことでもしない限り、この体制はびくともしないのではないかしら。」

その時は、ただ女性が押し込められている現実を糾弾する話のように聞いていたが、今は敢えてそんな運動を始めなくても、自然にそのようになってしまった。2000年の世界の合計特殊出産率を見ると、我が国の数値が世界平均である2.07名にもはるかに届かない1.47名と出ている。むしろ何年か経ったら、「子どもを産む運動」を始めなければならないかもしれないほどである。人間の家庭の大きな義務の一つは子孫を残し、世代を担っていくことであり、それは人間だけでなく、あらゆる生命体の存在理由でもあるのだが、いま女性たちはその義務に背こうとしている。

私はこの現実が本当に歯がゆい。子どもを産まないようにする女性たちの気持ちがよく理解できるからである。そして母親を尊重することはおろか、しきりに母親の意欲を封じ込める大韓民国に対して怒りを覚える。

韓国では、うわべでは「母親は偉大である」と言ってはいるが、母親のような零冷遇を受けている人は他にいない。精一杯ひとりででもやる気を出せば「おばさん」扱いされて低く見られ、それ以外まともな仕事もないくせに子どもたちをダメにしていると悪口を言われる。甚だしきに至っては、金儲けに夢中で富を得た人たちが、自分の息子を一流に育て上げるのに血眼になった利己的な集団が最近の母親たちであり、その母親のためにこの「立派な」大韓民国がめちゃくちゃになっていると糾弾する。しかし、私は問い返したい。「それで母親たちが赤ちゃんを産まなかったらどうするのですか」と。

お隣の国、日本では女性が子どもを持つと、国家で出産祝い金（出産一時金）として３０万円を支給する。それと同時に区役所では母子手帳を妊産婦に発給し、近所の病院で、無料で診療を受けることができる。それだけではない。家から 15 分以内の距離のなかに託児施設や保育施設がすべて備わっている。(訳注：以上の紹介は、著者の伝聞によるもので、日本全国すべて共通ではない) その施設はもちろん、国家と地方自治団体の補助金で運営されている。それでも出産率が少ししか伸びないので、日本政府(厚生省)は「育児に参加しない父親は父親ではない」、「子どもは我々すべてが育てなければならない」などの大々的なキャンペーンまで始めている。現在のように。若い労働人口が減り続け、高齢者の人口だけがどんどん伸びていけば、いつか国家が立ち行かない危険な状況になることを知っているためである。

ところで韓国ではどうだろうか。出産祝い金はおろか、まだ妊娠すれば職場を辞めるか、そうでなければひやひやしなければならない。国家の補助金で運営される施設は期待することもできない。子どもを信頼して預けることのできる民間施設も、不足した実情である。このようなことは、母親になってみなければわからないことである。月給を全て使って注いでもよいから、安心して子どもを預けることのできる所があったならばよいのに、という気持ちが私もしたものである。

母親の役割は、誰もがいつでも心がけひとつでできることでは決してない。それ故、今のこのような状況下では、誰が子どもを産んで母親の役割をしたいと思うだろうか？　もはや子どもをまともに産み育てることのできる母親がどこにいるのだろうか？　それなのにどうしてそんな母親たちを敢えて罵るのだろうか？　母親たちを尊重しない大韓民国には、なおいっそうのこと母親たちをけなす権利がない。

世の中で、影のように生きたい人がどこにいるだろうか。そして影のように生きることを強要する権利は誰にもない。私は、率直に言って、母親たちは、国家を相手どって損害賠償を請求しなければならないと考える。私たち可哀そうな母親たちを、元来の純粋で健康な状態にそっくり戻すようにと。

2　あなたもよい母親コンプレックスに陥っているかもしれない

子どもよりもっと傷ついている母親たち

一日に20名以上の傷ついた子どもたちを診るようになってから10年あまり。診療室のドアを静かに開けながら入ってくる子どもと、その子どもの母親と目が合うと、いつも私の胸は痛くなる。何日間も眠れなかったような疲れた目、そこには子どもを心配する不安と同時に、その母親が辛い思いを耐えてきた挫折と苦痛の傷跡がそっくりそのまま現われている。

あの母親もまた、この間どのくらい、まるで戦争のような日常を耐えてきたのだろうか。その忍耐の中でどれほど自分を攻めたのだろうか。子どもを冷たい病院の診療室に預けることを冷静に決心するまで、その母親の生活は地獄であったに違いない。わずか7、8年前の私が同じ思いをしたように。患者である子どもを診療しながら、このように母親側にそれ以上の神経をつかう理由は、子どもを治すためである。なぜならば、子どもが心の病に掛かった理由は、先天的な場合を除いて、母親にその原因がある割合が非常に高いからである。したがって、実際に小児精神科の医者になるためには、子どもの治療訓練のみではなく、4年間成人治療訓練を受けなければならない。

しかし、母親に問題がある場合の治療は、大概、難航を極める。「子どもがおかしくて」来た母親たちが、自分にも問題がある事実をすぐ認めようとしないからである。

最初の話

小学校一年生の子が学校で暴力事件を起し、外来にやって来たことがある。8歳の子どもたちが日頃、喧嘩する程度を越えた暴力事件だったので、加害者と被害者の子どもの両方に話を聞いてみることになった。加害者の子は、ふだんもクラスの友達の髪の毛を切ったり、殴ったり、他の同年輩の子どもたちの遊びをひどく邪魔していたようだった。

しかし、母親と一緒に入ってきた加害者の子は、友達を殴ったりした「暴れん坊」のような雰囲気は全くないくらい清潔で賢く見えた。ただ、その子の母親の反応が意外だった。

「何でもないことで何故こんなに騒ぎ出すのかわかりません。そうじゃないですか？先生？」

いきなり不快さをさらけ出した彼女は、男の子がその程度（？）の暴力を振うことがなぜ悪いのかわからず、たったこれくらいのことで病院まで来たことが恥ずかしくて気分を害している様子だった。さらに自分の子は勉強もできるし、同年輩の子どもたちを思いのままにする俗称「チャン」なので、他の子と母親たちが嫉妬しているのだと怒っていた。

何かおかしいと思い、母親を外に出して、子どもと話をしてみた。案の定、その子は学校で

一番面白いことが友達にいたずらをすることだと明かした。勉強も全部わかっているから面白くないし、先生も嫌いだった。

「あなたのせいで他の友達が苦しんでいるのに。他人に迷惑をかけたのは失礼じゃないの」

「僕は家で毎日そうなんだけど･･･」

人間はだれでも「攻撃性」という本性は持っている。しかし、その本性をあるがままに出して生きていくのではない。人間社会は一人で暮らす空間ではないので、本来の破壊的な攻撃性は時と場所によって区別されるのが当然である。他人に対しての配慮が攻撃性を控えるのである。ところが、その子にはそんな配慮など全く見られなかった。

子どもに配慮を教えなければならなかった親が、むしろ子どもの攻撃性をあおり出したのだった。だから被害者の親と被害者に殴ってごめんねと謝らなければならないときに、むしろ怒るのではないか。その母親が最後に私に怒りながら言った言葉がいまだに忘れられない。

「いったい何が問題なのですか？私は子どもを立派に育てるためにどれくらい苦労したか･･･」

彼女は女性たちが三々五々集まって、おしゃべりをする様子ほど嫌いなものはないと言った。「あんなにおしゃべりする時間があるのなら、子どものために何をしてやるべきか考えればいいのに」というのが彼女の考えだった。度を越えた出世志向主義者で家庭に無関心な夫の分まで子どもを最高に育てたかった彼女。彼女は家事をお手伝いさんに任せ、自分は子どもの面倒だけみていたが、それでも24時間では足りないくらいだった。200万ウォン（約20万円）あまりの知能啓発関連教材を全てマスターさせたり、英語学院（塾）に通わせたりしたのはもちろんのことであった。

二番目の話

ある子どもに母親の顔を描いてもらったが、その目は両側に一直線に描かれ、閉じた口にドラキュラの歯だけ出ていた。私は一度深呼吸して息を整えて、からその子に聞いた。

「一番悲しいのはいつ？」

「お母さんが私を殴ったりして怒る時です。」

「お父さんは好き？」

言葉では言わずにうなずく子。実際、その子の父親は家にいる時間がほとんど無いくらい忙しい人だった。けれどもその子は父親のことを好きだと言いながら、普通の子たちが一生懸命、綺麗に描いている母親の顔は醜く描いた。私は最後に気を配りながら、その子に尋ねてみた。

「お母さんはどんな人？」

しばらく戸惑っていた末に出てきた子どもの答え。

「いい人。」

怖い母親に対する憎しみを、絵の顔の中に余すところなく描きながらも母親が好きな子。瞬間私は言葉を失った。その子の立場から見ると世の中で頼れる人は母親しかいないのに、その

母親が愛の代わりに怖い顔だけ見せているのでは、どんなか不安だろう。

実はその子の場合、既に小学校に通わせなければならない年齢だった。しかし、普段あらゆる事に反抗的で、ある瞬間、怒り出すと抑えきれなくなるため1年間幼稚園を休んだ。しかし、時間が経てば経つほど、その子は直るどころかもっとひどくなっていた。見兼ねた幼稚園の先生が、母親に1年入学を伸ばしたらどうですかと勧めてみた。すると、その母親はいったい子どもに何の問題があるのかと私を訪ねてきたのである。

その母親は、子どもが描いた自分の顔を見て信じられないと言った。そうして、自分と子どもに問題があることを、その原因が自分から発したことを決して認めようとしなかった。ただ暗い顔で腹が立つのを我慢するのみであった。しばらくして、彼女がいきなり始めた話。

「夫は私が疲れたと言うと『何が疲れてるの？』と冷たくて、夫の実家もどれほどひどいことか。よい事があると自分たちだけで連絡をとり、お金に関係あることとか、必要な時だけ私に連絡をしてきて･･･」

三番目の話

英才判別をして欲しいと6歳の子どもを連れてきた母親がいた。2歳になる以前からハングルもアルファベットもすべて読めていたということが、かなり自慢のようだった。しかし、子どもはとても不安げで母親の傍にくっついて離れようともしなかった。普通5、6歳になると、知らない人ばかりのはじめての場所でも、医者の指示に従う程度にはなっていなければならないが、その子は私がいくら呼んでも来ようともしなかった。絵を描いてみようといっても、おもちゃで遊ぼうといっても、その子が私の言う通りに従わないためで母親は怒り出した。「あなたはどうして言うとおりにしないの？」と言いながら、私の前で怒鳴ってしまった。その瞬間ハプニングが起こった。その子が母親をつねりながら殴ったのだ。

心理発達上、6歳の子が自分の母親を殴ることは、心に深刻な病が無い限りありえないことだった。6歳の時の衝動調節力は、腹が立った時は言葉で調節できる程度にはなってなければならない。怒って母親を殴るほどであれば正常からかなり外れた「病」である。

私が「子どもが殴ったり、つねったりするのはちょっと心配ですね。」と言うと、母親はこの時期の子どもはみな同じではないかと軽く考えていて、子どもの英才判別の検査のみ催促した。

「私は英才判別なんか扱っていませんよ。」と言いつつ違う検査をしてみた。子どもは認知能力が高かったが、社会情緒の領域では問題を見せていた。しかし、母親は検査の結果をしばらく認めなかった。自分がどれほど子どもの教育に完璧であったのかを抗弁しながらありえないと言った。

子どもよりもっと病んでいる母親たち。しかし、自分自身に問題がある事実を認めない母親たち。彼女達は子ども一筋にとても愛していると言う。私は率直にいってその言葉を聞く時が一番恐ろしいと思う。どの母親が自分の分身である子どもを愛さないことがあろうか。しっかり育てたいと思わないことがあろうか。しかし、もどかしいけれど気持ちだけでは上手く発現

できないのが母性なのである。

いくらよい種でも荒涼としている砂畑では芽を咲かすことはできない。種がうまく発芽するためには肥料も十分で、枯れたり腐ったりしないように湿気も適当でなければならない。日照りや大雨のような災害に対処できるように水路も備えなければならないのは勿論である。

母性も同じである。母性と言う貴重で価値のある種を育てるためには、その種が育つような心の畑が健康でなければならない。そうしないと子どもを正しく育てることはおろか、歪曲された母性で母親自身だけではなく、子どもの人生まで壊してしまうからだ。

子どもよりもっと病んでいる母親たち。その母親たちは結局、歪曲された母性で子どもを放置したり、自分勝手に扱い、母親自身は勿論、子どもにまで心の傷を残してしまう。また、自分自身がどんなことをしているのかもわからないまま、無駄な価値ばかり追うことになる。ところで、なぜ子どもよりもっと病んでいる母親たちは、自分が間違った道を歩んでいることに気づかないのか。なぜ傷ついていることを認めようとしないのか。なぜ問題のある子どもに対して問題がないと言い張るのだろうか。

あなたもよい母親コンプレックスに陥っているかもしれない。

あなたはなるべく子どもとたくさん遊んでやろうと心掛けている。子どもがまだ幼ければ、すべてのことを一つ一つ見てあげることは基本である。自分の気分がいくら悪くても、子どもに苛立たないように心掛けている。母親の役割が大事だと思っているあなたは、子どものために自分自身の人生をある程度は犠牲にすることも覚悟している。そんなあなたは口癖のように、あなたがおいしいものを食べなくても、良い服を着なくても、愛する子どもにはよい服を着せたい、おいしい食べ物だけ食べさせたい、とにかく最高に育てたいと言う。そして、子どもがほしがっているものがあれば、気を損ねないように大体買ってやる方である。早期教育も早ければ早いほど良いと思っている。もしかしたら、我が子は英才かもしれないので、何でも一回ずつはためさせてみる。万が一、それだけの経済的な余裕がなかったら、少なくとも他人と見劣りがしない程度には育てたいというのがあなたの率直な気持ちである。

私も理解はできる。私もまた、二人の子を持つ母親ではないか。この世で母親の役目をしている誰もが子どものためなら何でもやってあげたいし、余裕があれば最高に育てたいが、それができなければ最低限の、他人がやっている程度には育てたいものである。けれども母親たちが見逃してはならない重要なことがある。もしや、あなたが立てた母親像が自己満足のための「母親の役割」ではないかという点である。

子どものためなら何でもしてやる完璧な母親でありたい人達もそうである。彼女らはたぶん、自分と離れて一人でいる子どもは、想像できないほどである。しかし、そんな度の過ぎた過保

護は、子どもを愚かにさせる確率が高い。何でも気づいてあらゆることをいつでもやってくれる母親の傍だけにいた子どもは、いざという時、世の中に出て適応ができなく、萎縮する傾向を見せる。子どものためならすべてをやってあげるよい母親になりたいと思ったせいで、むしろ子どもを悪い結果に陥れるのだ。

最低限、人並みには育てたいという母親はどうだろうか。自分自身の確信が無いからどんどん他人を意識するのではないか。少なくとも真ん中ぐらいにはしなくてはと思うが、結局そのような母親たちは他人について行くだけなので右往左往しやすい。こちらがいいというとこちらに行ったり、あちらがいいというとあちらに行ったりするものである。しかし、そんな一貫性のない姿はやはり子どもによくない影響を与える。

私はあなたにもう一度聞きたい。

「あなたの考える母親の役目というのは、本当に子どものためになるのか？」

私がこのような質問をするのは前章でもみたとおり、この世の中では母親の役割を上手くこなすことが難しいからである。母親の役目を果たすことに対してプライドを感じさせないようにさせ、プライドを持とうとしてもそれを援助してくれるシステムが不足しているためである。「家にいるだけなのになにが疲れたというの？」「その子は誰に似て勉強があまりできないのか？」「そんなに疲れるのなら職場を辞めればいいじゃない。だれがそんなに一生懸命に職場に行きなさいと言った？　稼ぎも私より少ないくせに･･･」、「おばさん、むやみに触らないで。怖いから･･･」などなど、今日も母親たちはとてもみすぼらしい扱いをされながら傷ついていく。そのような言葉はいくらよい母親の役割を果たそうと思っても、母親の気持ちを挫くのみである。

一人の母親がいた。遅まきながら堂々と社会的に認めてもらいたくて、任用考試（訳者注：教員採用試験）を控えていた母親だった。しかし、いざ勉強を始めたものの、大変なことが一つや二つではなかった。夫は無駄なお金を使うのではないかと文句ばかり言い、夫の実家では女性が子育てをやめて何をするのと非難した。自分だけがいい暮らしをしたくて勉強するわけではないのに、それを支持してくれないばかりか、理解もしてくれないのかと思ったが、我慢した。

しかし、問題は変なところで起こった。ある日子どもが塾に行こうと慌てた結果、ガスコンロにやかんをかけたまま火を消すのを忘れて出てしまった。幸い、警報装置が鳴り、警備員のおじさんが駆け付けてくれて大事には至らなかった。ただ、その母親が私に言った。

「何かとても申し訳なくて。私がもうちょっと注意をしなければならなかったのに･･･」

その母親は事故を起した者が見せる罪悪感をこえ、夫と夫の実家また子どもに対してもひどい罪悪感を持っていた。そんな人たちは自分が直接過ちを犯さなくても自分と関連付けて考え込む。仕事が上手く進まないと相手の言葉や行動をすべて自分のせいにしてしまうのだ。そのような症状は、自分自身を価値のない人間だと思い込むことからはじまるのである。

自意識が強い者は簡単に心を病まない。自分の言葉と行動、また自分自身に対する堅い確信

を持っているため、心を病むことも相対的に少ない。しかし、自分に対する信頼感と愛が足りない者、すなわち自分をみすぼらしい存在と思う程度が大きい者こそ、他人に自分が批判されたり、断られたりした時の心の傷が大きい。そのような者はどんどん自分の評価を低くし、ひどい劣等感に陥る。劣等感で自己不信が大きくなると相手を無視し、世の中から逃避して門を閉じてしまう。問題はそっくり残したままで。

母親たちの場合、そんなふうに自分がみすぼらしい存在であると思うようになると「よい母親コンプレックス」に陥る確率が高いが、次はその代表的な症状である。

「夫や夫の実家との葛藤が生じることを願わない。なぜならば私の心の傷がもっと大きくなるだけで、それを克服する自信がないからである。自分で自己啓発のために努力しようと思うけれど、実際は何にもできない。一人でいる時間は多いけれど、自分のために何かを考えることはしない。私の考えや感じたことを言わなくなってから長くなった。人に会うと、それとなく、我が子は何でもできるし、賢いとよく言うようになった。なぜか人の前で自分よりも我が子を誉めるようになった。子どもの短所を言いなさいと言われると、どこが短所なのか、一つも挙げられない。もう少し率直に言えば短所を知らない。しかし、子どもが他人の前で馬鹿らしい姿を見せると、まるでわたしが馬鹿になった気がする。子どもが手遅れだと思うと胸がどきどきするし、不安で怯えてくる。」

「よい母親コンプレックス」は、簡単に言うとよい母親にならなければならないという強迫観念を持っていることである。コンプレックスというのは、消化できない精神的な葛藤の固まりである。健康な母親は、葛藤をそのまま放置しないで、どうにかして解こうと努力する。自分自身に対する誇りがあるから「なんでも私のせい」ではなくて「相手のせい」である問題もあると考える。したがって夫と夫の実家、周りの人たちと問題が発生すると能動的に解決していく。彼女たちにはよい母親にならなければならないという強迫観念がない。そうする必要性を感じない。ただ自分ができる範囲で最善を尽くしながら、母親の立場でできることをやるのみである。

しかし、つまらない存在として扱われると、それを乗り越えないで劣等感に陥る母親たちは、葛藤が発生するとなんでも自分のせいにする傾向がある。自分自身を愛せないから自らを保護することができないのだ。すなわち「それは私のせいではない」と言わなければならない場面でも、相手はもしかすると私のせいでそうなったと思っているのではないかと不安に思う。

愛されたいし、堂々としていたいと思う彼女たちは、自分が満足できない欲求を、子どもを通して補おうとする。彼女たちは子どもが愛されることが、すなわち自分が愛されることなのだと誤解してしまう。だから子どもを上手に育てることのできるよい母親にならなければならないという強迫観念を抱くようになる。子どもが愛をたくさん受ければ、自分も愛をたくさん受けることになるからである。よい母親コンプレックスが危険な理由は、まさしくここにある。

よい母親になるのが唯一の人生の目標である彼女たちは、あるがままの子どもが見えない。四角い子を四角いと認めるのではなく、社会が望んでいる丸い子を作るため力を尽くすのだ。

だから「子どもが手遅れだと思うと不安で、子どもが他人の前で醜い姿を見せるとまるで自分が馬鹿になったような」感じがするのである。子どもは他人の前で醜い自分を隠してくれる予防線なのに、子どもがその役割を発揮できなかったせいである。

よい母親コンプレックスに陥っている母親たちが混乱し始めるのは、子どもが自分の声を出しはじめる小学校4、5学年からだ。子どももこの頃になると思春期に入り、母親の行動に対して不満を抱きはじめ、自分のことに干渉しないでと言い、苛立たしくなる。すると母親は凄く戸惑う。自分の手の中にいた子どもがいつの間にか自分の言うことを聞かなくなったからだ。すると子どもに対して怒り出すのである。自分でも知らないうちに「なぜお母さんの言うことを聞かないの？」と怒鳴るのだ。それでも子どもが少しも言うことを聞かないで意地を張り始めると、いきなり母親としての堅実な生き方に動揺を感じ、激しい不安と憂鬱に陥るのだ。

子どもにとってよい母親にならなければならないのは勿論だ。しかし、自分自身をつまらない存在だと思い込んで「よい母親」になることを、人生の唯一の目標にするのは、すなわち「よい母親コンプレックス」に陥るのはいけない。子どもはあなたの言う通りに動いてくれる人形ではないし、子どもは単なる養育の対象でもない。養育とは、子どもと母親がともに主体になる、また違う世界、独特な関係の領域であることを認識しなければならない。

しかし、母親らはいざとなると「よい母親コンプレックス」に陥りやすい。考えてごらんなさい。子どもを一生懸命に育てるよい母親になると言うのに、だれが文句を言うであろうか。だからこうすればいいのだ。夫の実家からなにか用事ができたので来てほしいといって来たら、以前は何の文句もなしに行かなければならなかったけれど、子どもを口実にすれば、「子どもを塾に行かせないといけないから」と堂々と言える。夫に対しての不満も、子どものためということにして、「お金をもっと稼いでくれない？」と自信を持って言うこともできる。子どもの後ろに隠れて子どもを操りながら、子どもよりもっと病んでいる母親たち。その母親たちが自分自身と子どもに問題があることを悟らないのは、まさしくそこに原因がある。

「よい母親コンプレックス」はもっとも危険なものである。表にはすぐ表れにくい。しかし、その破壊力はものすごい。母親たちは憂鬱と不安に陥り、人形にならなければならなかった子どもたちは友達を殴るのが好きだったり、学校に行くことができないくらい衝動の調節力が弱かったり、不安症状を見せるたりなどの深刻な精神的な問題を見せる。

私は子どもよりもっと病んでいる母親たちを数多く診てきた。そして、彼女たちに残っているのは、結局上手くこなせなかった自責感と意図したわけではないがすでに子どもの心に刻まれた傷のみであることをよく知っている。

母親になったからといって、でだれでも母親の役割を上手くこなせるのではない。もしかしたら、あなたもよい母親コンプレックスに陥っているのではないか？　そうしたら、先にあなたの内面を点検してみる必要がある。あなた自身をどれほど価値があると考えているのかということから点検してみてほしい。そうすることで、これ以上歪曲された母性で、あなたと愛する子どものすべてを壊さずにいられる。自分自身が今どうなっているのかもわからない状態に

なった時点で、後悔してもう遅いのだ。

私が精神科の治療を受けながら悟ったこと

キョンモを生んで1年くらい経った頃、病院で疲れる仕事が特に多い日のことだった。提出しなければならない報告書もあったし、患者も特別に多くて、つまらないことで声を荒げることもあった。疲れきった身体で退勤したが、たまたまその日はキョンモもむずかった。疲れて帰ってきてもが休めない状態。12時過ぎまで早く終えようと子どもの世話をしていると、夫がやっと帰宅した。そうして投げかけた一言が…。

「僕まだ夕食食べてないから、晩御飯の仕度してよ。」

腹が立った私が、「あなたが自分で仕度して食べてよ。」と言い返すと、夫婦喧嘩になった。

忙しいという点では、夫も私も同じ状況であった。二人とも勉強と論文のために寝るのは遅かったし、一日中病院の仕事で疲れているのも同じだった。家事をした経験がないという点でも夫と私は同じ立場であった。結婚前までは手を水で濡らしたことがなかった点も同然だった。しかし、夫はいつまでも、一日も欠くことなく夜遅くまで病院に残っていて、先後輩の集まる会がある日は、必ず参加した。その反面、私は毎日病院の仕事を後回しにして、いらいらしながら暮らしていた。

このように不公平なことがどこにあるだろうか。子どもは一緒に作ったのに、子どもの面倒を見る責任は、なぜ私が引き受けなければならないのか。夫は私のことを本当に愛しているのだろうか。私がこんなに疲れているのに、まるで自分とは関係ないことのような他人の振りをするのか。私は私の苦痛を理解しようとも思わない夫を、到底許すことができなかった。

そのことがあってから何日か後、私は心理分析を受けることになった。精神科のレジデントは患者に対してより客観的な心理相談治療をするために、自分自身も分析を受けることになっていたが、ちょうどその時であった。

「占い師と精神科医は、他人の悩みを解決してくれる立場としては似ているが、占い師はその時その時の妙数を教えながら、顧客がどんどん自分に依存するようにさせる。それで苦難にあえばいつも自分のところに来るようにさせる。しかし、精神科医は患者が無意識的な葛藤を悟るようにして自立させる。それで、また苦難にあっても、自ら解決できるような力を与える。」

占い師と精神科医の差異を論じていたとき、ある先輩が言った言葉が甦った。私は治療を受けに入りながら、本当にこの苦痛となっている問題が解決できる糸口でも見つかればそれでいいと思った。私は入った途端に先生に今まで悩んでいたことをしゃべりはじめた。

「その間、随分と悔しい思いをしたね。」

誰かが私の苦痛にこんなに共感してくれるのは初めてのことだった。今まで私を知っている

人たちは、私の学歴と背景、経済力などの理由を上げ、一度も私の苦痛を認めてくれなかった。「あなたは、何が不足なの？　すべてを持っているくせに」というような視線が全てだった。しかし、こんなに共感してもらった瞬間、生まれて初めて心が慰められただけでなく、共感それ自体によって、今まで気づいていなかった自分の姿を自覚することができた。

「私は随分と怒りを溜め込んでいたんだな。」

慰められた私は、今まで私を怒らせ苦しめたことを一気に吐き出した。

その中の一つが、週末ごとに夫に感じていた悔しさだった。普段、子どもと一緒に遊べないことをいつも悪いと思っていた私は、週末には何があっても子どもと楽しい時間を過ごすために努力した。疲れていたけれど、半日間の外出を楽しみにしている子どものために、日曜日の朝はいつも外出の支度をした。

しかし、腹立たしくも夫は、私が隣で支度をするのも我関せずで、横になっていた。今なら私が車を運転して１人で子どもを連れていくが、その時は子どももまだ幼かったし運転免許もない状況だったので、夫なしに出かけることは無理だった。そのことを知りながらも、自分からどこか出かけようとは一度も言ったことが無かった夫が、ものすごく憎らしかった。いつも私が先に支度をしてから夫に頼んで出かけたことが、今考えると悔しくて「子どもは私１人で生んだのか」からはじまり、色々な思いで心が複雑になった。

しばらくの間不満をこぼしていたら、相談の先生が言った。

「それで何が本当の目的だったのでしょうか？」

「子どもと一緒に遊びに行くことです。」

「そうしたら、なぜ最初から一緒に遊びにいこうと表現しなかったのですか。」

それを聞いて私は閉口してしまった。結果的に夫が行かなかったわけでもないのに、ただ誰が先に行こうと言い出したかということに執着しながら、悩んでいたのかと。

相談者の先生は、私に不愉快な思いをさせた夫の行動に対して、本人に直接その理由を聞いてみたらと勧めた。その日の夜、夫とそのようなことで初めて喧嘩ではない対話を交わした。なぜそんなに仕事ばかりしてキョンモの面倒は見てくれないのかと聞いたら、私の問いに対する夫の答えは、全く予想外のものであった。

「自分だけがよければいいと思ってそうしたのではないよ。少し疲れていてもそうすることであなたとキョンモがもっと幸せに暮らせるからだ。」

夫の真意を知った私は、今まで夫を利己主義的だと思い込んでいた自分自身が恥ずかしかった。私一人だけが家族のために「犠牲」を強いられているのではなかった。夫は怒った声で付け加えた。

「それから誰が先に出かけようと言い出したかが、そんなに大事なのか？とにかく一度だって行かなかったことはないじゃないか。それでいいだろう。」

言われてみると夫の言うことが正しいのかもしれない。結局、重要なのは行ったか行かなかったかだ。もちろん、いつも一方の側ばかりが提案するのは、自尊心に傷がつくことだろう。

しかし、自尊心を傷つけることを認めるのはやはり大きな心の傷になった。私はやっと今まで私を悩ませてきた深い傷に気付くことができた。それはすなわち「女性だから」からはじまる劣等感であった。

幼い時、私の母親は娘にも能力を持たせようと教育熱心な人であったが、弟と私に対する態度が違っていた。小学校の時、私と妹がご飯を食べたくないと言うと鞭を先に出したが、弟には鞭の代わりにおいしいカステラを買ってやった。またエネルギーが溢れるくらい活発だった私は、「そんなに女の子が飛び跳ねていたら、お嫁に行くのは難しいかも。」と耳にたこができるくらいよく聞かされた。

母の傍を離れ、ソウルで医者になるために勉強をする時はまたどうだったのか。保守的な集団の中で私が女性であることは、ただハンディキャップであるのみだった。そんなふうだったので、私には「女性」である事実が嫌で嫌で仕方なかった。

「私が男性であったらこんな差別待遇は受けなかったのに、こんなふうに扱われなかったかも･･･」

この世で特に女性として生きていく人たちは、本人が感じられない内に劣等感に陥りやすい。不幸ながら我々女性たちは「劣等な種族」ということを本当か嘘か知らないが、言われながら成長する。女性神学者であるヒョンキョンは「ただ女である理由で」受ける差別を次のように表現していた。

「あまりにもきれいなので、あまりにも醜いので、あまりに個性が強いから、あまりに個性がないから、あまりに太りすぎだから、あまり痩せすぎたから、あまり賢いので、あまりにも馬鹿なので、あまり力が強いから、あまり力が無いから、あまり色っぽいから、あまり色っぽくないから、あまりにも能力があるので、あまりにも無能力だから、とても社交的なので、あまりひどいから、あまり純粋だから、あまりにも幼いから、あまりにも老いているから、聖女のようだから、娼婦のようだから、そうでなかったらあまりに平凡であるとか、あれでもこれでもない、水にお酒を混ぜるのでもなければ、お酒に水を混ぜるのでもないのである。どんな女性も男性も自分の便宜により、気分により、自分達の権力維持のため、好き勝手に作った基準などに完璧に当てはまれはしないのだ。」

ヒョンキョンの言う通り、この世で女に生まれて生きていくこと、それ自体が本当に逃れられない荷物なのである。私はそれでも今まで逞しく耐えてきたし、上手く克服してきたと考えていた。しかし、それは私の錯覚だった。それでも「女だからダメ」という諦めと「女ゆえに私が一層被害を受けるのだ」という被害者意識を完全に無くすことは容易ではなかった。そんな劣等感のせいで発生した怒りは私の心の中に止まりながら、時に全く予想さえしない瞬間に出てくることがあった。私の主張を言わなければならない状況で、表現が上手く出なくて、ただ周りの雰囲気だけに気を使い、結局は全然関係も無いことに腹を立てていたのである。

出かけることにしてもそうであった。考えてみるとそんなにまで傷つき怒ることでもなかったのに。「女性」という劣等感から現実を直視できないで、そのことを過剰に歪曲して受け入れ

たのだ。考えてみるとそれほど悔しいことでもなかったのに。先生の指摘のとおりに私の主張が正しかったら、胸を張って出かけようと言い出せばよかったし、「あなた、今日も忙しいの？キョンモが退屈しているようだけれど…」というように遠まわしに言わなくてもよかったのである。

「先生、これからどうすればいいですか？」

私は、私の患者たちが私に聞いてくるように先生に尋ねた。すると、先生が笑いながらこう答えた。

「申先生も知っているでしょう。問題があることをわかったこと。それだけでもすでに50%は治療されたのですよ。」

先生の言うことは間違いない。私はその後、私の心のどこかに潜んでいた客観的にものを見ることをできなくしていた女性という劣等感の実体がわかり、一つ二つずつ治されていった。夫にも何となく遠慮したり怒ったりしないで、正々堂々と私の主張が言えるようになった。全く変わりようのない状況も、私がどうするかによって変わっていくことを実感した。

答はすでにあなたの中にある

数日前、憂鬱症にかかった主婦が子ども二人を 12 階のベランダから突き落とし、一人が亡くなる事件が起こった。私はその衝撃的なニュースを知り、その母親の憂鬱症がどれくらい深刻だったのかと考えた。いったいその主婦はなぜそのような状況になるまで自分を放置して置いたのか。周りの人はなぜ子どもを殺すくらい深刻だった主婦をそのままにしておいたのか理解できなかった。

その事件をわざわざ例に出さなくても、主婦の憂鬱症が深刻なのは、最近になって始まった事ではない。私は憂鬱症ほど深刻な精神の病はないと思う。憂鬱症は精神的に見ると「学習された無力感 learned helplessness」である。どんな戦略をたてたら問題が解決できるかを悩む前に、まず「できない」と思って、結果が出る前に「よくなるはずがない」といい、前もって諦めてしまう。すなわち全ての問題が絶対に解決できないと思い込み、自分の人生を自分ではない他人のものとして追いやるのである。自分の人生の主人公は自分なのに、主人公の役割を放棄することほど残酷な事がどこにあろうか。

憂鬱症にかかった人たちの自己像は「なんにもできない」、「何の価値もなくて」「ただのバカな」人である。劣等感の極端な姿である「自己嫌悪」は自信感の欠如に繋がり、これは再び学習された無力感をうみ、状況を変えようとも考えずに、ただ運命に従うのみになる。

そのような極端な無力感は、暴力を受ける女性に関する研究でも明らかになっている。研究によると、殴られる女性は、階級と階層・学歴・人種などと関係なく分布しているという。す

なわち決して貧しく学歴の低い女性のみが殴られるのではなく、どんな女性であれ自分自身を何にもできない虫けらよりもつまらない存在だと思い込んでいる、というのだ。だから社会団体で避難所を提供してやり、一人で暮らせるように職業訓練をさせても、結局再び殴る夫の傍に帰る女性が多いのだそうだ。無力感はそれくらい怖しいものである。

私はそのように憂鬱に陥っている人たちを見ると本当に歯がゆい。誰が自分の人生を放棄したいだろうか？彼女達がそのようになるまでにはどれだけ多くの苦痛があり、その苦痛でどれだけ多くの夜を泣き明かしたことだろう。ある時は泣き疲れて寝てしまった時もあるだろうし、またある時は声が枯れるまで大声を出して泣いたかもしれない。

私のところにも憂鬱症にかかった母親たちがよくやって来る。もちろん子どもに問題があってやって来たのだが、相談する時「大変だったでしょう」と言うだけで、母親たちはその間こらえてきた涙をこぼしながら、苦痛を露わにした。ある母親は、一時間ずっと泣き崩れたままで帰ったこともあった。私は十分に彼女達を理解できる。私がその心境をわからないはずがあろうか。私もまた精神科の医師になる前に７キログラムも痩せて、生きることに懐疑を感じた人間なのだから。

しかし、私は厳しく母親たちに言う。あなたの問題を解決できるのはあなただけだと。あなたが解決しないと誰も解決してくれないと。あなたの人生を自ら変えてみてと。私自身がそうやって私の人生を変えた張本人であると。

振り返ってみると、劣等感に陥っている時、私は全ての状況に客観的ではなかった。私だけ犠牲者であるという被害意識をもち、全てを他人のせいにした。夫のせい、子どものせい、夫の実家のせい、親のせい、世の中のせい、いくら言っても尽きることなくどんどん増える一方だった他人のせい。しかし、時間が経つとともに全てが私のせいだとわかってひどい混乱に陥っていった。

そうしてみると、最初に怒りを感じた問題はとても小さなことだったのに、それ以前のことも全部列挙しながら問題を拡散してしまう。すると、夫はブレイクをかけてきて、それがまた我慢できなく、私の声はどんどん高くなっていた。後は喧嘩の元だった原因には関係なく、ただ誰が勝つのかだけで互いを傷つけた。結局、残るのは後悔と傷のみだった。

しかし、劣等感から抜け出し、状況を客観的にみてみようと努力したすえ、私は多くを悟ることができた。まず私がダメだったのでもなく、そのうえ、夫や夫の実家、子どものせいなどにすることもできない社会的な問題もあった。そしてそのような非常に大きなジレンマのせいで喧嘩ばかりしていても、くたびれるのは私のみだった。つまらない消耗戦の連続、それは誰にも役に立たなかった。もちろんその問題は、必ず解決しなければならないのだが、まず私が変えることのできる問題を先に変えてみる。それが私の宿題となった。

「アメリカンヒストリーX」という映画で、黒人教師であるスイニーが次のように言った。青年時代の不遇であった自分の立場について「私の苦痛は誰のせいなのか？」と自分自身に問いかけて、白人と社会と神を批難した。そのようにして長いこと怨みの歳月が流れたが、ある

日突然、「このようなことが私の人生に何の役に立つのか？」と問いを変えてから、生き方が変わったと。私もまさにその通りだった。「私から変えてみよう」と考えたのだ。

まず何があっても私を愛し、私を信じることを呪文のように繰り返し、肝に銘じた。

「イジンちゃん、あなたはいい女性だわ、本当にステキな女性よ」

私はこのように呪文を繰り返しながら、自分自身を本当に尊重しなければならないと思った。そうしてみると夫や子どもをより客観的に見ることができた。彼らも私のように独立した人格として尊重されなければならない人たちだったから･･･。私の立場を離して夫と子ども、その他の人たちの立場も考慮しながら状況をみると、同じ状況でも違って見える問題がとても多かった。私の立場から少し離れて全体を見る「ディ－センタリング de-centering」は、今まで理解できなかったたくさんのことを理解できるようにしてくれた。そしてより肯定的な変化を計画することのできる土台を作ってくれた。

そうすることで私は悟り始めた。母親になることは、けっして私をくたびれさせ、夫を辛くさせ、さらに私の子どもの胸を痛めさせることではないことを。私がどのようにするかによって、母親になることは私の人生を豊かにしてくれ、私の子どもを健康にしてくれ、私の家族と他人まで幸せにしてくれるものであることを悟ったのである。

ただ誰かが救ってくれると願いながら何にもしない状況では絶対によくならない。これ以上、不安と怒り、憂鬱でさらに悪化していくあなたを放って置くのではなく、あなたの人生を積極的に変えてはどうだろうか。

このように言うと、ある母親たちは私に次のように言った。

「先生のような地位だから、そのようなことができるのではないかしら。」

私はそんな言葉を聞くと腹が立つ。「そんなネガティブな思考法が、あなたの人生にどのくらい役に立つのか？」と聞き返したくなる。「私があなたなら、成功（？）した人のノウハウを習ってでも自分の生き方を変えてみるのに。」と言いたくなる。そのような言葉がでないのは、私がもしかすると彼女より環境が少し（？）でも恵まれている側面があることを認めているからかもしれないが、決定的に彼女たちが否定的な思考を固守しているからでもある。自分自身を変えようとする意志を持たなければ、言ってもしかたがないからである。

母親になることを尊重しないで、その価値を無視する社会のせいにすることは誰にでもできる。そして自分自身の人生が誤った方向にいったのもすべて周りのせいだと言うこともできる。しかし、自分が傷ついた全ての問題の原因をどこかに回しても、自分の辛さが消えるわけでは決してない。むしろ、そうすればそうするほど病に陥るのみである。ジャン・ジャック・ルソーはこう言った。

「人間はどこでも拘束されていると同時に、どこでも自由でいられる。一度、起こってしまったことを元に戻すことはできないが、それをどのように受け取るかは、全て我々の意志の問題だ。」

私はその言葉を上手く実践した一人の者を見た。彼は南アフリカでコンサルティング会社を

建てて、著書『80/20 の法則』を書いたリチャード・コーチだ。彼は自分の人生を能動的に生きた。彼は幸せになるために、自分自身が変えられることは全て変えようと努力した。

「私の場合は無意味な官僚主義に遭うと腹が立って仕方なかった。また弁護士を数名以上見るとストレスが溜まった。交通渋滞になると不安になった。太陽を見ないまま、何日間か過ごすと少し憂鬱になる。同じ空間に大勢の人が居るのもいやだ。人々が弁明したり解決方法がない問題を取り上げて話しているのを見ても耐えられない。もしラッシュアワーの通勤者になって、弁護士と一緒に仕事をしながら、スウェーデェンに暮らしたら、私は憂鬱になり、すぐ自殺するかもしれない。

しかし、実用的な範囲でこんな状況を避ける方法を身につけた。私は通勤をしない、ラッシュアワーには交通手段を利用しない、一ヵ月に少なくとも一週間は太陽を見、他の人を雇って官僚組織への対応をさせ、交通渋滞だったら時間がかかっても遠まわりをし、否定的な性格の者からは、報告書を受けることを避け、弁護士が電話をかけてきたら5分過ぎると電話線が切られるようにする。このような行動の結果で、私はずっと幸せになった。」

聞くだけでも愉快になる生き方ではないか。あなたもそうする事ができる。これまではあなたが自分の人生の主人公ではなかったから、そのまま放っておいただけだ。今現在の主人公はまさしくあなた自身だ。だから過去がどうであっても、今のこの瞬間からはあなたがどこに行き、どのような人になるのかは、全てあなたの手にかかっている。人間は幸福になるために生きるのだと言う。あなたも母親になってから諦めた多くのことをもう一度振り返ってみると、その中に無くした幸福を探す事ができるのである。

「よい母親コンプレックス」から解き放たれ、あなたとあなたの子どもが幸せになるための答えは、すでにあなた自身がもっている。

3．よい母親コンプレックス、このように克服せよ

Step1　劣等感から抜け出せ

1 人の母親がいた。彼女は子どもの言うことなら無条件に何でも聞いてやろうと努力しただけでなく、子どもが満 6 歳になるまで「ママ　水　ちょうだい」という 3 単語から成る言葉もできないのに、その子どもを正常だと言った。見ていられないと思った姑が嫁を叱って、孫を診断してくれと連れて来たケースだったが、意外にも当の母親は、なぜ子どもに要らないストレスを与えるのかと怒っていた。

すぐ翌年に小学校に入学しなければならないその子どもは、検査の結果、言語発達のみではなく軽い精神障害を疑うほど知能が遅れていた。それなのに母親は子どもが幼稚園に適応できなくても、友達がその子を仲間外れにしても、ただ子どもが少し遅れているだけだと考え、放っておいたのである。

事情を聞くと、彼女は両親の離婚により母の下で育ち、たくさんの辛さを抱えてきた人だった。愛する子どもに自分が経験したのと同じ辛さを与えないことが、彼女の最大の課題だった。それで子どもをそのまま放っておいた結果、病を大きくしてしまった。

私は子どもの状態を最大限、客観的に説明して、治療を受けることを勧めたが、彼女は子どもに要らないストレスを与えたくないという言葉だけを繰り返し言った。そして結局彼女は私の所には来なかった。

母親だったら誰もが自分が持っていないもの、叶えられなかった夢を子どもを通して叶えようとする心を持っている。そしてそれは必ずしも悪い事ではない。もしかすると、この母親も自分が持っていた心の傷を子どもが持たないことを願ったすえ、子どもをよりよく育てたいという気持ちでそうしたかもしれない。しかし問題は「母の窓枠」に子どもを「無理やり」はめ込んだことにある。

この母親だけではない。小児精神科を訪ねてくる大部分の母親が自分の心の傷と夢を子どもに投影して、代償の満足を感じようとしたが、結局子どもが傷ついて病院を訪れる。勉強がしたくてもできなかった「1 人」の母親は、子どもの希望や能力を考えずに度の過ぎた早期教育を行なう。父母の愛を受けないで育った母親は、子どもを過保護にしやすい。父母の執着がいやだった母親は「もともと子どもは放っておいてもよく育つ」と言いながら子どもを放置する。性的若しくは身体的な虐待を受けて育った母親は、「私は絶対にそうしない」と思いながらも、子どもを愛する方法を知らないため、決定的な瞬間に子どもを無視し、虐待する。全て子どもに母親の夢と心の傷を投影したせいである。

気の毒にもこの程度になると、母の目には子ども以外はない。子どもの一挙手一投足は、母

の夢の代わりに実現されるためだ。受験生の子どもが学校にいっている間、時計を見ながら「学校のお昼時間だ」と言いながらご飯を食べて、自律学習時間には同じく書斎に入って聖書を読んだというある母親がまさにこの典型である。本当に子どもは、母のこんな心を見たままに、素直にありがたいと受け取る事ができるだろうか。

数日前のこと、入隊を控え、父親と祖母を殺害したある大学生は、父親が自分に過度な期待をかけ、それに到達できないと自分を無視したので、その腹いせにこのような事件を起したと言った。

父母はたぶん、子どものためにやったと思うかもしれないが、本当のところは、子どもを通して自分の夢を叶えたいという歪んだ父母の欲望とその夢を過度に投影されたかわいそうな子どもがいるのみだ。

父母の「叶えられなかった夢」、それは父母が持っている劣等感なのだ。この劣等感は何かを達成できなかっただけではなく、容姿、性格、友達関係など色々な側面であらわれる。子どもの容姿に気を使う母親は、容姿に劣等感を持っていて、子どもに役に立つ友達を作ってあげることに熱心な母親は、友達関係に劣等感を持っている。

事実、人間であれば誰もが少しずつ劣等感を持っている。全ての面で優れている人間がどこにいようか。しかし、劣等感というのは単純にある面で他人より劣っている能力に対するものではない。

他人がみて、それくらいならキレイなのに過度にダイエットする人がいるとしよう。この人は体重に劣等感を持っているのか、そうではないのか。体重が 45 キログラムでも自分の身体に対して否定的な自己像を持っていたら、その人は劣等感でがんじがらめになっている。「否定的な自己像」の総体が劣等感なのだ。

だから学歴がいいから、大金持ちだから、劣等感がないのではない。金持ちでも外見に劣等感をもつことはありえるし、一流大学を卒業したとしても、もっと勉強のできる一人の兄弟がいれば、そのせいで自分を恥ずかしく思ったりする。各自が生きてきた過程とそれを受け取る個人の感情の状態が異なるせいで、「あなたは、なぜそんなことに劣等感を持っているの？」と聞いても意味がない。

しかし母親であれば最低限、歪んだ投影のせいで子どもを壊したくない母親ならば最低限、「私はどんな劣等感を持っているのか？」を必ず自問すべきである。

そのためには劣等感がいったい自分の内部でどんな事を起しているのかを考える事だ。特に、葛藤の状況で私の劣等感のせいでどんなことが起こっているのか考えないといけない。夫の実家や夫とぶつかった時、どこまでが夫の実家と夫の問題で、どこまでがあなたの劣等感のせいなのか冷静に分析してみなければならない。

腹が立ったら「なぜ」腹が立ったのかを尋ねてみる。そしてあなたが「なぜ」そんな行動をしたのか説得させる理由を探し出すといい。「なぜ」あなたが子どもに１00 万ウォン(10 万円)もするハングル教具を買ってあげたのか。「なぜ」子どもに高い服を着せるのか。「な

ぜ」子どもが面倒臭いのか。「なぜ」夫が憎いのか。それが本当に他人のせいなのか。あなたのせいなのか。少しの私心もなく客観化させると、劣等感の実体が少しずつ明らかになる。

劣等感は投影を生み、母の誤った投影は子どもを壊す。劣等感を克服することができなければ、親子関係だけではなく、どんな関係も堂々と結ぶことはできない。よい母親コンプレックスから抜け出して、病んでいない母親、真っ直ぐな母親になるための最初の段階は、やはり「劣等感から抜け出せ」ということになる。

本当に不思議なのは、劣等感は「私には劣等感がある」と認めた瞬間から軽くなるということだ。劣等感の実体があらわれたその瞬間、子どもに自分自身の劣等感を投影している自分を透かして見て、その気の毒な姿を自ら慰めるだけでも劣等感から抜け出すことにもう立派に成功している。

しかし、そこまで行く道はけっして簡単ではない。「自分を愛する」という今まで一度もやった事が無いことをしなければならないからだ。醜い私、お腹が出た私、学歴がない私、性格が悪い私、家事ができない私、無能力な私、話が上手くない私、勉強ができなかった私などの「私」のあらゆる姿を認めて愛せば、子どもに向かう歪んだ投影をその時はじめて止める事ができる。

Step2　自らを愛そう

数日前の休暇の時、何気なくテレビをつけてみてびっくりした。ホームショッピングのチャンネルがあまりにも多くて、空中波チャンネルを探すのが大変なくらいだった。いったい何を売っているのかというしばらくチャンネルを止めて見ていると、ショッピングホストは品物一つ一つに対してこの機会を逃すと大変な損をし、その品物がない生活は無意味だと言わんばかりに「案内」していた。何分か見ていた私も、「ああ、あんなものがあったんだ。一つ買ってみようかな？」と思ってしまうほどだった。

ふと、ホームショッピング中毒症の患者達が理解できた。ああ、これだったんだ。それにしても退屈な生活の中で、自分が何か重要な決定を下す感覚と、その品物自体が与える充足感をホームショッピングのチャンネルが与えているとは。新聞で「ホームショッピングを見て品物を注文することが生きている楽しみ」だとか、「一日でもホームショッピングを見ないと頭痛と悪寒、憂鬱症に陥る」という事例を深刻に扱っていたが、このショッピングで自己を喪失する「中毒性」であったのかと気づかされた。

「中毒（依存症）」は 2002 年現在、母親たちが置かれている状態を特徴づけるある一つのキーワードになっているようだ。母親たちはホームショッピングの他に、インターネットのチャット、男性のみの領域であったアルコール中毒にいたるまで中毒の領域を次第に広げている。

それが何であっても、中毒は深刻な病である。完全に捨てられた自我の代わりにある対象が

その席を奪ったのが、中毒である。中毒になった人は、その対象を調節することができない。ホームショッピング、インターネットのチャット、アルコールが「私」の主人になったのである。したがって、中毒がキーワードになっているということは、母親たちの自我が集団で捨てられているという悲惨な話とかわりない。

母親たちが子どもを育てながら感じている辛さの中の一つは「自我喪失」である。子どもと夫の面倒をみている「私」ではなく、本当の私はどこにいるのかという疑問が母たちを悩ませる。しかし、より大きな問題は、自分自身の自我が喪失されたことにも気づかない場合だ。

「私は誰とも付き合わないの」と口癖のようにいう一人の母親がいた。同じアパートに住んでいる友達もいないし、小中高時代の同窓の友達もいないこの母親は、口を開けば不平と癇癪ばかりで、10 分一緒にいるだけで隣にいる人は息が詰まるような感じを受けるほどである。だから周囲の人たちもわざわざ付き合おうともしないし、何と家族の間でものけ者にされていた。その母親はそんな自分を不幸だと思い、その原因を夫の実家と夫のせいにしていた。夫が「あなたはなぜ口を開けば、他人のせいにするの？」と文句をいったが、その母親はそれにすら癇癪を起こしていた。

この母親をどうすべきか。このような状況で「あなた自身が問題なのです」と話をしても効果があるだろうか、と悩んだ末、結局は尋ねてみた。

「それでは、ご主人やご主人の実家のよくない状況を解決するために、あなたは何をしてみたのですか？」

「やるわけないでしょ。私が。」

彼女がとても受動的だったので唖然とした。ミミズも触ると動くのと同じように、どのような生物だって辛いことがあるとどうにかして生きようと努力するのに。足を組んで腕組みをしたまま座って「いったい何をしようというのかしら？」というような顔で私を見ている彼女が、どうしてこんなふうになってしまったのか、痛々しい気がした。自分の自我がどこに行ったのかと悩んでいる人は、この母に比べるとずっと増しなレベルだった。この母親は各種の劣等感によって、自分自身の尊い自我がどこに捨てられているのかも気づかないまま、極度に受動的で否定的な態度でこの世を生きてきたのだった。

元来、子どもの問題で尋ねてきたその母親は、「あなたが変わらなくては絶対に子どもはよくならない」という私の脅しにも似た処方で自分自身の問題を悟り始めた。

私がこのような母親たちに提示する一段階は、今まで自分が嫌だと感じた「具体的な」状況と嫌な理由を書くことである。その母親の根本的な問題は、「劣等感による自我喪失」だったが、その抽象的な問題が日常でどのように現れたのか、自ら気づいたものを一つ一つ書かせた。

「夫が靴を磨いてくれと言ったとき、気分を害した。なぜかというと、その口調が命令するような抑揚だったからだ。」

「隣に住んでいるある母親が、自分の子は既にハングルを全部読めると自慢した時、おもし

ろくなかった。うちの子はまだ読めないから。」

このように具体的に書けば書くほど、解決策を探しやすくなる。そうやってこの作業を何回か繰り返すと、母親たちは普段、不満を持っていた問題に対して自分自身が何にもしないで不満ばかり言っていたことがわかった。そして少しずつ代案を探しながら、私が変わると状況がよくなるかもしれない、という希望を持ち始めた。

例えば靴を磨いてくれという口調で、気を悪くしてしまうなら、その問題を解決するために夫に優しい言い方をしてくれるように頼んだり、前もってそんな状況にならないように靴を磨いておくという解決策がある。ハングルを覚えた隣の子のせいで気分が悪い場合は、「ハングルを教える」とか「隣の女性を無視する」という解決策が出せる。

しかし、多くの場合、解決策を探さなければならないこの段階でつまづいてしまう。いざ、代案を探そうとするといくら考えても出てこない。だからといって恥ずかしく思う必要はない。長い間、人と衝突した状況のとき、何で気分を害してしまうのかを体系的に分析せずに感情的に受け止めてきたのだから、この過程を難しく感じるのは当然である。

このように自ら変わるための代案を探すのに苦労をする人達に、私は「詩集を読むこと」、「新聞を読んで関心がある記事を選んで討論すること」などを勧める。特に日記を書くことは、内的な省察をするのによい方法である。どんなことで私が怒ったのか、どんなことが私を憂鬱させるのか、日記を書きながらじっくり分析してみることができるからだ。

とにかくこの水準までくると、私は 50%以上よくなったと見る。ともかくも、自分がまず変わらなくてはと思う気持ちになったからだ。子ども達も母親の肯定的な影響を受け、段々よくなり、母親も段々と辛さが軽くなる。

自分の問題と立場を比較的に客観的に見てきた母親たちは、大体、最後は「自己実現をしたい」という。すなわち、「家庭で何にも成就できない「私」とはどんな人間なのか？」と自問しながら、「世間と私はどんな関係なのか？」に対する答えを探そうとするのだ。

そういうとき私は、「あなたができる範囲でやりたいこと」を順番どおりに書いてもらう。人生でやりたいことを順次書きながら、母親たちは大体自ら解答を発見して、現実的な条件に合わせ、何かを始めようと決心する。

ある母親はパートタイムでアルバイトを始め、ある母親は社会奉仕団体で自分のように辛い立場に置かれている母親の援助活動に参加したり、子どもの教育の問題が深刻だった母親は教育に対して体系的に学びたいと大学院に入学したりする。以前、聖堂や教会に通っていた母親は、「勉強」を兼ねて再び行く場合もある。どれほど創意的なたくさんのアイディアが出てくることか、こんなに多様な花を咲かせる種をどこに隠してこれまで暮らしてきたのか、と驚くことが多い。

ここからは「感情をむき出しにしないで自分の意志を貫徹すること」が可能な段階だ。自分が望むことが何か、目標を正確に設定し、自尊心や恥ずかしさのような感情は遠い所に捨てて、相手を説得したり、回遊（！）したりしながら願いを成就する段階にいたると、いつの間にか

問題のほとんど解決されたのを悟ることができる。

自分が誰なのか、なぜ腹が立つのかもわからなかった前述の母親も、一年余り治療を継続した後、子どもと自分のためにパン作りの技術を習うことにした。家中にパンを焼くにおいのする一家団欒の家庭になり、それ以降、誰も彼女と一緒にいることをいやがらなくなった。そして、彼女は自分の長所短所をあるがままに受け止め、子ども達に優しい、本当に愛される母親に生まれ変わったのである。

自らを愛していない母親のもとで、子ども達は「愛する方法」を学べない。母親が違うところに自分の居場所を求めている姿を見て育った子ども達が、コンピュータ中毒、ゲーム中毒に陥るのは当然なことである。あなたが誰で、どんな長短所があり、好き嫌いは何で、したいことが何か、絶えず自問しなさい。この質問に少しの虚飾もなく素直に答えられたら、あなたを悩ませた「自己喪失」に対する怖さはいつの間にか消えてしまっているだろう。そして、その場所にいるありのままの自分、ありのままの子どもを大切にするあなたがそこに立っているだろう。

Step3　体力をつけよう

年を取ってから苦労して産み育てた子があまりにも反抗的に育ったといって、私を訪ねてきた母親がいた。その母親の話では、はじめは子どもがただ可愛くてよかったが、だんだん子どもの面倒を見るのに疲れ、子どもに憎しみを感じるほどになったと言った。特に夜中に何度も起きて駄駄をこねるのをそのまま受け止めることがひどく疲れると言った。その母は子どもをかわいがっているが、一緒に遊んでやる体力がなくて子どもに十分、共感できない状態だった。共感できないのでその愛を伝える事が出来ないし、愛を受け取れない子どもはもう限界で、母親を殴ったり苛立たせるほどにまでなっていた。

母親の子育てには肉体的、精神的に大量のエネルギーが必要である。年をとってエネルギーが不足すると、母性のあるべき姿について、頭と心ではわかっていても体が付いていかない。身体が健康ならば子どもが厄介でも笑って受け止められる。挫折しそうな事が起きた時、それをそのまま受け止めて耐えられる、言わば「挫折耐性」の根本は体力であるということだ。

精神的なエネルギーも豊富でなければならない。子どもを育てる時は恋愛の千倍以上の熱いエネルギーが要求されると考えればよい。絶対に別れられない存在との命がけの情熱の恋愛、子どもに絶え間ない関心を見せながら自分の眼線を低くして子どもが願うことをテキパキと把握できる能力は、精神的なエネルギーが充満していなければ出てこないものである。

母親たちに「初めての子」の意味が格別な理由は、初めての子に、若い時特有の沸いてくるような情熱とエネルギーがそのまま注がれているからである。私も現在キョンモを見ると、私がキョンモと一緒に送ったその情熱的な時間が思い出され懐かしくなる。その情熱は確かに若

い時の疲れを知らない体力をもとに咲いた花だろう。

したがって病弱な母親の下では、子どもが確実に多くの損害を受けることになる。母親が少し動いただけでも息が苦しくて体がだるくなるとしたら、子どもと遊んであげることができないだけでなく、子どもの世話をすることも十分にできない。

特に、小児リューマチや自己免疫性疾患にかかった子どもなど、普通の子どもよりもっと世話が必要な子ども達は、母親の体力が不足すると治療そのものが不可能なだけでなく、日常の生活さえできなくなる。母親になった以上、身体もすでに自分一人のものではない。母の具合が悪いと家中が上手く回らないだけではなく、家族の生存（？）が危機になる可能性が高いのである。

事実、出産をして子どもを育てるのは、大変な体力を要することである。男性達は女性なら誰でも全てをテキパキできると思うかもしれないが、子どもを産んでから身体のどの部分にも変調のない女性などいない。産後の後遺症で腰が痛むのが慢性的な疾患になってから久しいが、産後、養生する際に、たまたま冷たい風にでも当たった部位は天気が曇ったり悪くなったりするとずきずきするのは当たり前のようである。家庭の財テク管理からこまごまとした家事までやることから来る頭痛は、一粒の鎮痛剤では治まらないくらいで、年中行事や法事を終えた後は必ず一日か二日は床につくのが現在の母親達の姿である。しかし、どうすることもできない。母親達が体を動かさなければ上手く家事が回らないのが現実なのだから。

母親があまりにも体が細く弱くて、元気一杯遊びまくる子どもに応えてやれない場合、子どもは欲求不満となって精神的な問題を起す場合もある。たまに、病院でそのような母親に会うと、私は「ご飯を４回食べたらいけないなんてことないから、１回増やしてみなさい」と処方してやる。母親は自分の身体がスマートで誉められているので笑っているが、私はそれが笑ってごまかすことではなく、ひどく深刻な問題であることを真面目な顔でもう一度言ってやる。

本当によい母親になるためには、もっと積極的に自分の体力を向上させなければならない。特別な病気があるのでなければ、体力は管理次第である。規則的に食べて、積極的に運動して、睡眠をとると大体体力は向上する。我が国のサッカーチームがワールドカップで疲れない体力を自慢できたのは、ヒディング監督が提示した３ヶ月間の体力強化訓練のおかげである。体力も開発するとよくなる話である。

人によっては、体力を強化するより休息がもっと必要である場合もある。その時は思い切って家事や育児をしばらく他人に任せて、積極的に休息時間をとった方がよい。「状況が許さなくて」と言わないで、母親自らがそのような状況を作っていかなければならない。一番重要なのは、子どもを支えてやる母親の体力が落ちないようにしなければならないことである。

もう一つ忘れてはならないことは、体の調子が悪い時、それがもしかすると心が病んでいる信号ではないかを点検する必要性である。

知らない内に心が傷ついたり欲求が抑えられたりした時、それが身体的な症状に現れる可能性がある。韓国の母親に多いと言われる「怒りの病」がそのケースである。「感情」を心の中

に押し込めたすえ、結局は血圧が高くなったり脈拍が不規則になったりする「身体的な症状」に現れる怒りの病は、血圧や心臓の薬を飲むことでは、すぐによくならない。心が傷つけられて起きた病気は、心が慰められなければ治らない。

だから、「理由無し」に具合の悪い時は、何か肉体的な症状の下に隠れている心の葛藤を探し出してそれをなくさなければならない。

体も心も病んでいる母親のそばにいる子どもは孤独で悲しい。母親の身体が丈夫なら子どもは幸せで健康である。

子どもが母親を挫折させても、悲しんだり、怒ったりしない力、子どもに逞しい大人の像を植え付けてやりたいものだ。その根本は、母の体力にあることを肝に銘じておいてほしい。

Step4　子どもの権利を認めよう

最近、離婚が頻繁に起こり、誰でも周囲を見渡せば、離婚経験者をすぐ見つけることができるようになった。しかし、興味深いのは、離婚後遺症は女性よりも男性に重く感じられているという事実である。私の男性の後輩も何年か前に離婚したが、初めは別れた事実を堂々と言っていたものの、日が経つとともに生活は滅茶苦茶になり、離婚理由やそれと関係した事については一切口をつぐんでしまった。何日か前にやっと心の傷が治まったのか、離婚以後、生きてきた過程について少しずつ口を開いてくれた。

その後輩の話は、次のとおりである。離婚が自分自身の意志とは関係なく起きたせいで、しばらくは何の考えも無かったが、いつの間にか「自分は何者であるのか」を問うに到った。ところが、その結果がとんでもなかったと言う。後輩は自分なりにいい人であると思いながら３０年余りを生きてきたが、今になって考えてみると、自分は怠け者で、日常生活の処理能力も非常に不足している人間であったことに気がついたと言った。

それでも、その後輩は自らを反省する能力があり、自分の「無能さ」を知ることができたが、無能で社会への適応力がなくても、その事実を直視できない「人」が大勢いるのではないか。ご飯どころかラーメンも作れないから、誰かの手を借りないとご飯も食べられないという男性は、それでもかわいい方だ。自分の過ちはまるで考えもせずに、少しでも自分の言う通りにならないと大声を出す幼児的な精神水準を持っている人も少なくない。

そんな人たちは、幼い時に何かしらの理由で母親と密着しすぎていた確率が高い。

この頃、ママガール、ママボーイがひどく増えている。ママガール、ママボーイとは、全ての決定を母親に依存する子どもたちのことである。自我が充分に発達していないので自らはどんなことに対しても判断ができない子ども達。この子ども達は、成長の過程で自分自身のことを思いのままに調整しようとする母親に激しい怒りを見せたりもするが、結局は母親の元を離

れられない。

したがって、ママボーイ、ママガールは結婚生活でも多くの問題を見せる。ママボーイは母親のように全てのことをやってくれた上で、自分の自律性をも認めてくれる女性を好み、ママガールは男性を無視し、屈伏させようとする。

特に「ママボーイ夫と姑」は女性達のおしゃべりに常連で登場するキャラクターで、大抵おしゃべりの結論は、ママボーイの責任は姑側にあることになる。しかし、そんなあなたこそ、もしかしたら子どもをそのように育てているのかもしれない。　子どもをママボーイ、ママガールに育てる母親は、だれも自分の息子や娘がママボーイ、ママガールだとは考えていない。ただ、自分は子どもに最善を尽くしただけであるという。

このような母親の問題は、子どもをあるがままの「自然人」として見るのではなく、完全に自分の影響力の下にある対象としてみていることである。母親が全てをわかってやらないと、子どもは見ることも、習うことも、感じることも出来ない存在であるというのがこの人たちの頑固な主張である。

しかし、本当にそうであろうか？　子どもには、固有な人格があって、自ら学習する能力があることを否定する教育学者は一人もいない。母親は、子どもは生まれる時から独自性と固有な潜在能力を付与されていることを認めなければならない。もちろん母親が提供する経験によって、子どもの知的発達に差が出ることがある。しかし、その差は子どもが持って生まれる本性の差に比べると如何ほどにも満たない。

実際、子どもが持っている独自性と権利を母が認めることはそう簡単なことではない。元々、子どもと母親は身体の中で一つであったからだ。それ故、母親が子どもと「健康に」分離する作業は簡単ではなく、母親の大変な努力がなければならないし、子どもも苦痛な時間を過ごさなければならない。母のお腹の中でドキンドキンと響いていた心音を聞きながら、完璧な一体感を持って生まれた子どもが、自分が母とは完全に独立した存在であることを受け入れるまで、約３年かかると言われる。

その時、母親が子どもにしてやらないといけないことは、もちろん分離された存在ではあるものの、子どもが必要であれば、いつでも走っていき守ってやることを信じさせてやることだ。和解の時期を過ごさなければいけないということである。もし、和解の期間に、母親がいつも居る場所にいなかったり、子どもが１人でできることを手伝ってやったり、母親自身に抑えきれない感情の波があったりすると、子どもは安心して母親と離れることが難しくなる。

それ故、子どもが母親から分離するのに成功するか否かは、全て母親の手にかかっている。母親がどうするのかによって、子どもが独立的で健康的な自我像を持つことができるか、できないかが決まるのである。

この前、児童に問題行動があるかないかをテストしてみる設問紙を母親に配った。ところが幼稚園児を持った母親はみな「子どもに問題がない」と答えた。質問があまり抽象的すぎたの

かと思い、日常生活での具体的な行動がどうであるかを尋ねる問題に変えてみたが結果は同じだった。幼稚園児の内、何人かは幼稚園の先生を通してすでに行動に問題があると病院に報告された子ども達だった。

もちろん、自分の子どもに問題があるにもかかわらず、それを認めたくないのが普通の母親の心情である。しかし、そのような母親の熱い感情と子どもの客観的な状態は、全然違う問題である。問題がある子どもをそうでないとみる母親は、子どもの問題と自分の問題を混同している。「子どもにあれこれの問題があるから助けてください」と言えないで、まるで自分自身が子どもを間違って育てたと批難されたかのように「我が子はそんなことするわけがない」と話している。

私は母親の役割の中で、特に重きをおいて学ばなければいけないのは、子どもと自分の関係が近くて遠い間柄であることを理解して、子どもが持っている固有の天性を尊重することだと思う。賢明な母性を持っている母親は、子どもと距離を置いて、子どもが感じて眺めている姿を先に見る。赤色を見せるか青色を見せるかで悩むのではなく、先に子どもがどんな色を見ているのかを観察すると言うことだ。

母が見せてくれる世界が全てではない。子どもは自分の天性によって取捨選択して世の中を見ながら受け入れる。だから、もうその事実を認めて、子どもの権利を尊重することだ。

Step5　先生の役までしないで

遊び場で三歳ぐらいの子ども二人が走りながら遊んでいた。小さい階段の上に鳩が飛んできてとまると、子どもたちはトコトコと走って上がろうとしたがガタンと倒れ、泣き始めた。遊び場のどこかから二人の母親が息を切らして駆けつける。

「だからお母さんが高い所に上っちゃダメって言ったでしょ！」

一人の母親が子どもを捕まえてお尻を叩きながら怒っている。母親に叩かれた子どもはありったけの大声を出してずっと泣きわめいていた。

「泣くのを止めなさい。止めて！早く！」

母親にどやしつけられて呆然としながらやっと泣くのを止めた子ども。

しかし、もう一人の母親の態度はこれとは対照的だった。

「大丈夫よ。転んで痛かったね。アラムちゃんは鳩にあいさつしようとしたのね。そうでしょう？　それなのに鳩は空に飛んでいっちゃったね。あそこを見て。」

子どもが何故痛い思いをしたのか、その理由を母親の口から話してやり、子どもがそれ以上、泣かなくてもいいように子どもの関心をそらしてやった。母親の前で子どもはいつの間にか泣くのを止めて聞いた。

「お母さん、鳩はどこに行ったの？」

この二人の母親の差は何だろう。二人の子どもを泣き止めさせるという目標は同じだった。しかし、一人の母親は「泣かないで」と命令形で指示し、もう一人の母親は子どもの気持ちを素早くわかってやり、関心を他所にそらせた。もちろん二人の子どもはともに泣き止んではいるが、中身が全く異なった。一人の子どもは、自分の行動を拒否された挫折感に陥っており、もう一人の子どもは、母に慰められた後、さらに世の中に対する好奇心を育てていく。

二人の母親の最も大きな差は、子どもが今何をしようとするのかを理解して、子どもと共感し合えるか否かにあった。子どもを怒った母親には、子どもが自分の言う事を聞かないで高い所に上った事実、そのことが重要であった。子どもが何故あそこに上っていったのか、落ちてしまった今、どんな気持ちでいるのかということには関心はないように思われる。おそらく、その母親は子どもに「何でそこに上ったの？」と聞いて、子どもが「鳩を見に」と答えたら、「そんな鳩なんか何が大事なの。鳩はあそこにたくさんいるじゃないの」とどやしつけるのは明らかである。

二人の子どもの内、どちらがより精神的に健康であるかは、この場面だけ見てもすぐわかるだろう。子どもだけではなく母親の精神の健康にも差がある。怒った母親は子どもが自分の指示に従わないで高い所に上がった事にくやしくなって、やりきれなくて、腹を立てている。その反面、子どもを慰めた母親は、子どもがすぐに泣くのを止め、続けて鳩に関心を寄せる様子を見てよかったと思っている。

将来的にみても、子どもを叱った母親は、これからもたぶん知能開発や英語・ハングルなどの早期教育に熱心になる確率が高い。なぜなら、この母親にとって「子どもを育てること」は、すなわち「しつけをし、勉強をさせる」のと同じだからである。

誰が高いものを建てたのかを競争でもしているかのように、ぎっしりと建てられたマンション。今日もその中で、子どもの問題で悩んでいる数千の母親達がうめいている。子どもの早期教育の問題で見えない競争をしている彼女たち。彼女たちが憂鬱な理由は、何故このような目に見えない競争をしなければならないのか、そして、こんな競争が本当に子どもを幸福にさせるのか、確信が無いからかもしれない。それでもこう考える。

「でも、よその子達はみんなやっているのに、うちの子だけやらせないのもちょっとおかしいのでは。他人より裕福に育てられないのはいいとしても、見劣りがするのはよくない。」

母親達はどんどん子どもに何かを見せて、何かを教えなければならないという強迫観念に包まれていく。そうなると、子どもの観点に立って、子どもの行動を理解しようとする心がけは後回しになる。

「母性＝教育」、これが最近の母親の役割の基本公式になってしまった。しかし、そのなかに、私たちみんなが忘れているものがある。それは「共感」である。本当の母性は、教育ではない。少なくとも子どもが 3～4 歳になるなで、母親に大事なのは子どもと一緒にいながら子どもに共感することだ。すなわち、「母性＝感性」で、それは子どもと一緒にいることを意味

する。しつけをし、知識を教えるのは、その次の問題だ。

子どもに教えることばかり一生懸命な母親は、「子どもと一緒にすること」の大切さを知らない。子どもの心を共感すること、感情を一緒に分かち合い喜び合うのが先である。教えるのはその次の話だ。考えてごらんなさい。その人が私を認めてくれないのに、その人の教えを100%認めることが可能だろうか。

私があるものを作ったとして、それがいくらつまらないものでも「本当によく作ったね」と言われると、やる気が出てその次の段階に進んでいける。でも「何よ、これ」と言われると、いくらそれが当たっている言葉だとしても、その後少しでもよい方向に動くエネルギーを失ってしまう。それがすなわち共感の力である。子どもがもし砂を見て喜ぶのなら、「砂遊びよりブロック遊びのほうが、清潔でもっといいわよ」と教えるのではなく、「わあー、砂遊びすると本当に楽しいかもね」と言わないといけない。子どもの知的能力が高ければ高いなりに、低ければ低いなりに、その子どもの目の高さに立って共感してあげること。これが今の母親に一番必要なことである。

もちろん、ただ教え込もうとする母親、そして少しでも早く何でも教えなければならないという強迫観念に包まれている母親の心情をわからないのではない。しかし、私は子どもが私のように、勉強は退屈で嫌いなものという、歯ぎしりするほど嫌な記憶を持ってほしくない。学ぶことの喜びほど人生において大きな喜びはないというのに。そして、人生は元々、一生、勉強なのだから少しぐらい始めの方で遅れてもいいのではないだろうか。そして、勉強が少しぐらいできなくてもいいではないか。

さらに、あなたは母親であって先生ではない。あなたじゃなくても子どもを教えようとする人は大勢いる。しかし、完全に子どもの味方になって共感してくれる人はあなたしかいない。子どもが何か少しぐらい間違っていても「この世の中で一番上手」という自信を与えてやり、徹底的に子どもの味方になってやれる人は、あなたしかいないとうことだ。

一度、想像してみてほしい。あなたの夫が会社から帰ってきて、あなたに新しい何かを教えようとする光景を。夫はそれを最優先のことだと思っている。先生は子どもの動機が大事ではなく、お話を読む時間になれば、子どもが何をしていても止めて静かに話を聞くように命じる。それであなたは望もうが望むまいが、一晩中何かを新たに習わなければならないとしたら、どうだろうか。あなたは子どもにとってそのような存在になることを願うだろうか?

もしあなたが、子どもが関心を持っていないのに何かを無理やりに教え込もうとするなら、それは先生とどこが違うだろうか。そして、そんなふうに理性的で意図的に何かをどんどん教え込もうとするならば、子どもに伝達されるのは、情緒の欠如と冷淡さのみである。

したがって、母親の役割を先生の役割と混同する人の子どもは、心に多くの傷を受ける。特に自尊心を多く傷つけられ「私はできの悪い子どもなんだ」と思い込む。実際のところ、子どもたちは普通、小学校 2〜3 年になると、母親からのの評価より先生と友達からの評価にさらに神経をつかっている。それ故、母親が教えなければならないという強迫観念に陥って、子ど

もをさらに客観的に評価して傷つける理由はない。むしろ何かうまくいかなくても上手だといって喜んであげると、子ども達は自信を得て母親を好きになる。そうすると自然に母親の期待に外れないようにと努力するようになるのである。

また、子ども達は彼らが知っていることの大部分を親との相互作用によって学ぶのであって、形式的で教授的な関係によって学習するのではない。日々起きる事件、すなわち犬を追っかけている隣のネコ、お湯で溶けるコーヒー、いつの間にか育って花を咲かせている草花、大人の解釈を必要とする事件などから子ども達は学ぶ。それらが子ども達の真の興味と関心の対象であり、子ども達は母親が同じ関心を持ってくれることを願っているのだ。

子どもに対する母親の責任は限りない。でも、あなたは先生ではない事実を忘れないで。だから、子どもの知能を高くするために高いおもちゃを買ってあげるより、そんな時間に子どもが新しい何かを発見した時、１人の力で砂の城をつくった時、初めて母の顔を描いた時、子どもが感じる喜びと楽しみをそのまま一緒に感じながら共感してみてほしい。あなたは、その子にとってこの世で唯一の母親なのだから。

Step6　父親に居場所を作ってあげよう

よい母親コンプレックスの解消のために努力してきたあなた、あなたが今の時期に考えなければならないのは、夫の居場所である。もし「夫なしでもうまくこなせる」という傲慢で不遜な考えを持っているとしたら、すぐに捨てなさい。いくら母親の子育てがうまくても、子どもの父親だけができる固有の領域がある。また、夫との関係がうまくいっていない母親は、結局どのような形にしても傷つけられ、その傷跡はそのまま子どもに伝えられる。

人一倍自己主張のできない小心者だという理由で息子を連れてきた母親がいた。描画の検査をしてみると子どもが描いたのは全て女の子で、男の子はうまく描けなかった。その子は普段もままごとやバービー人形など、主に女の子が遊ぶおもちゃだけを持って遊び、姉の後ろを付いて歩きながら姉がやっていることを真似し、スカートを履くのも好きだそうである。子どもが両性的な趣向を見せるのはよくあることだが、この場合は程度がひどい。

普段子どもの日課はどうなのか、あまり詰め込みすぎているのではないかと聞いた。

「ええ、子ども二人を朝から起こして、学院（塾）に送り迎えするだけでもどれほど疲れるか、おわかりになりますか。私は子どものために座る暇もないくらいです。」

子どもがあっちこっちの学院に休む暇もなく連れて行かれることよりも、自分が忙しいと言っている母親。子どもの立場と母親の立場を区別していなかった。

「お父さんは子どもの教育に対して何と言っていますか。」

「子どもの父親なんて何も知りませんよ。外の仕事で忙しいのに、こんな事まで神経を使わせるわけにはいかないでしょう。わが家では私が全てを任せられています。」

父親が忙しいと言うのは口実で、何となく父親を無視すると同時に、家庭の中での自分の位置をさりげなく高く言うこの母親は、子どもの教育に対する全ての権利を握り、無意識的に父親を育児から除外していた。子どもが父親と話をして遊ぶ機会を剥奪していたのだ。

父親と子どもの関係は、必ずしも一緒に過ごす時間と比例するわけではない。父親が長期出張中とか単身赴任していても、父親と子どもの関係が深い家庭も多い。母親が子どもと父親の間に情緒的な関係を作ってやるよう努力している場合がそうである。

しかし、この母親にとって子どもの父親は、「お金を稼いでくれるし」、「能力があって」、「いい家で暮らせるようにしてくれるし」…などのような現実的な欲求を満足させてくれる存在にすぎなかった。夫を決してお互いの心の分かち合える人生のパートナとして考えていなかった。外側から見ると円満に見えたが、夫婦の関係が形式的になってから長かった。面白かったのは、「何故、今まで旦那さんが家庭の事に関与しなかったのですか」と聞いた時、「夫があまりにも忙しいので、私がこのように一人で家事の全てをこなしているのではないですか」と自分自身でも悔しがっていることだった。

情緒的に父親を家庭から追い出した心理の底には、基本的に母親自身の傷跡が潜んでいた。だから、夫との関係を健全にしようとする努力を最初から諦める。時にはそのように感じている喪失感を満たすために、家庭で夫との見えない権力闘争（？）もしなければならなかった。ひどい時は子どもを自分に密着させ、家で父親の居場所を無くそうとする場合もあった。すると結局、残るのは父親が去勢された非家庭的な家庭、誰もがその中で幸福を感じられない乾燥しすぎた家庭のみである。

わが国の夫婦の配偶者に対する満足度を、結婚の年数ごとに測定したら、多分、最初の子ども出産後 1～3 年の間が最も低いだろう。極端に言えば、おそらくこの期間に「離婚」を考えたことのない大韓民国の女性はいないのではないだろうか。出産後 1～3 年は、子どもを産んだ母親たちにとって地獄といってもいいほどの時期である。専業主婦であれ、就業主婦であれ、家事と子どもの教育という重い負担の中で、20 年余り持っていた自分の価値観・生活習慣・趣向・性格などが全て壊される経験をする。

したがって、二重三重の苦痛に耐えている彼女を誰よりもよく理解して、助けてくれなければならないはずの夫が、全然手伝ってくれないと感じる時、その怒りは口では言えないほど大きくなる。

「一体、誰のために私がこんな苦労をしているの？」から始まり、「誰が子どもを育ててみたかったの？何故全然手伝ってくれないの？」、「あの男とこれから先、どうやってずっと一緒に生きていったらいいの？」に至るまで、夫に対する感情は止まるところを知らないほどだ。

女性がこのように「夫と一緒に暮らすか暮らせないか」の分かれ道にいる時、男性達は一体

どんな考えで家庭を後回しにしたまま、外回りだけしているのだろうか。最初の子どもの出産前後、夫たちのライフサイクルは大体 20 代後半から 30 台前半の、社会に参入してから長くても 3〜4 年の時期である。この時期の男性達は、企業組織というジャングルで安定した地位を確保するために、死ぬか生きるかの勢いで戦っている。そうしないと妻と子どもを持った家長としての役割を果たせないと信じているからだ。充実した家庭生活をいますぐに送れないことくらい、この時期の男達にとって重要な問題ではない。今ここで倒れると、家族全員が没落するという緊迫感が彼らにはある。

私の夫も私が職場と家事、育児を並行するのに頭を抱えていた頃、夜 11 時に帰ってきてはまた書斎に入って、日曜日まで返上して研究と仕事に没頭していた。私は初め、それが夫の野望と出世のためだけだと思い腹が立っていた。それで一度真剣に聞いてみた。

「あなた、何故そんなに仕事ばかりしているの？　私は優しい旦那がいいのにな。」

「当たり前じゃない。仕事を熱心にしなくちゃ！」

「何が当たり前なの？　私とキョンモが家にいるのを知ってて、どうして自分の勉強ばかりして帰ってくるの？　あまりにも利己的じゃないの？　その勉強、私もしたいんだけど。」

「私が熱心にやらなかったら、きみとキョンモはどうやって生きていくの？誰だって好き好んでやっているんじゃないよ。」

「そうしたらあなたがそんなに熱心に仕事するのは、私と我が子の未来のためだって言うのね？　ほんとうに私のためなら、そうやって自分一人だけ勉強するんじゃなくて子育てで寝れない私を助けてくれればいいじゃない。」

「子育てはきみ一人で十分だよ。私までそうやって地位が上がらなかったら、きみとキョンモはどうやって生きていったらいいの？」

唖然とした。夫は家長として最大の課題を成し遂げた父親、成功した夫になるのだと思った。それが夫の立場としては家庭のための最善の行動であった。「そうだったんだ。だからあの人があんなに仕事と勉強に励んだのか」と考えるとやっと夫が少し理解できた。そして夫が少し可哀想だった。子育ての楽しさも妻と楽しく暮らす楽しさも全て返上したまま仕事ばかり考えている人に、何の楽しみがあるのか。

40 代の半ばになった現在、社会である程度の地位を持った夫は、やっと家庭の大事さに気づいている。外での成功で幸福を感じるのには、限界があることをやっとわかったのだ。死ぬか生きるかで上がってみたけれど何にもないという事実を、振り返ってみたら結局根を下ろす所は妻と子どもがいる家庭しかないという事実を悟るのに 10 年余りもかかったのだ。

母親達が子どもと家で戦争をしている間、男たちもやはり生存をかけたサバイバルのゲームをしている。それが理解できれば、夫に対する怨望と憎しみを少し減らすことができる。猟に出たオスのライオンを待っているメスのライオンのように、夫のライフサイクルを理解して待ってやる知恵が必要である。夫の生き方が正しくなかったとしてもである。理解して待ってあげながら、少しずつ変化させて、私の立場を説明することで私の辛さも少なくなるし、夫にも

父性の芽生えとなる機会を提供することにもなる。

「私一人でも子どもを育てることができる」と考えている母親は、子どもを育てるのに父親の役割は思っている以上に大きい事実を自覚しなければならない。特に、母親から情緒的に離れて、自ら独立した個性として確立されなければならない思春期の子どもに、父親は、「ああ、あんなふうに生きていけばいいのか」という「人生のロールモデル」になる。子ども達は父親を通して父母の傍から離れ、人生をどのように生きていこうかを描いてみることができる。母親は幼い時から子どもとあまりにも密着しているので、父親のように客観的な対象にはなりかねる。

男性達が父性を持つ時期は、母親達が母性を持つ時期と異なる。男性達の父性は、子どもが成長しながらどんどん姿を現す。赤ちゃんを見ながら「この子、笑い方が昨日と少し違うんじゃない？」と聞く男性はほとんどいない。男性達は、子どもの小さな変化に気づかなければならず、繰り返し世話しなければならない育児の仕事を、女性よりももっと大変な仕事のように見る。それは同時に深い考えができず、一度で結論が出ない、仕事が苦手な男性達の認知的特性のせいでもある。

しかし、子ども達が成長して意思疎通ができるようになると夫達は徐々に父性に目覚め始める。子どもの面倒を見るより、子どもと一緒に遊ぶか、教えながら、「この子が私の子なんだ」という実感をもつ。そのため、妻が待つことが必要なのである。

最近、夫は我が家で「最後の裁判官」だ。女の子なら母親が口で慰めるのもいいかもしれないが、母親を怖がらない思春期の入り口に差し掛かった男の子を私一人で面倒を見るのは本当に疲れる。だから、考えた末、父親を最後の裁判官に仕立てて、三回話しても聞かないと父親に電話をするといって怖がらせる方法を使う。

子どもを育てるには、溢れるほどの愛情も注がなければいけないし、正しい道に導くようにもしなければならない。しかし、それを母親一人でするのは疲れる。父親を排除して子どもを育てる母親は、優しい母親と怖い母親の岐路に立った時、「怖い母親」になる道を選んでしまう。そして、それが、母親が「当然やるべき仕事」であると考える。そんな場合、子どもを無条件に抱きしめて理解してあげる役割をする者がいなくなる。

子どもの教育で父親を最後の裁判官にすると、訓育と面倒見の二匹のウサギを両方捕まえることができる。特に、息子を育てる母親達は、父親をこのような面で 100%活用する必要がある。男の子達は本能的に体格が大きくて力の強い人に威圧感を持っている。

そして母親が苛立たって怒りながら何回も叩くより、父親が大きな声で叱って一回叩く方が効果的だ。子ども達にとっても、母親に 1 時間くらい怒られるよりも、父親に 10 分くらい怒られる方がましなのだ。

新米の母親時代、私は夫に、一対一に平等であることを主張した。母親と父親の役割、また

男と女の役割というのは社会的に形成されたものなのだから、「男性であるあなたもやればできる。女性だけがやるという法がどこにあるの？」と考えた。今も基本的にその考えには変わりない。

しかし、夫のスケジュールがある時、「今すぐスケジュールをキャンセルして」と言ったり、「私も出かけなくちゃ」とは言わない。目には目、歯には歯というやり方で接近しないで、少しは余裕を持つことだ。夫が男性であることを認め、男性達のライフサイクルを理解しているためでもあるが、それよりも私まで出かけてしまうと、その狭間にいる子ども達が傷付くのではないかと心配になるからだ。

ある友達は、「夫と子どもはしつけ次第」というが、しつけをしようとして子どもをダメにしてしまうこともある。無条件の一対一を主張して譲らず、喧嘩をすることは、いいことではない。家庭はレスリングのリングではないからだ。誰かが勝つまで戦う場所ではなく、お互いが勝利できる努力をしなければ維持ができない場所ということだ。

私は、母親達が夫との関係をもう少し余裕を持って賢明に考えてほしいと思っている。夫はあなたの敵ではない。敵のようであっても、見方同士になるために頑張らなければならない人である。あなたも母親の役割、父親の役割を両方一緒にこなそうとすると疲れるだけだし、子どもにも母性と父性の両方が必要なのである。だから、夫との関係がうまくいかなければ、子ども・父親・母親みんなが幸福になれない。

夫のライフサイクルを理解して、夫が自ら父性を感じられるように手伝ってあげながら、待ってみてほしい。それを悔しいこととは考えないで、男性と女性が生物学的に、社会的にまだまだ違いが多いからだと受け止めてみるのだ。あなたに夫の居場所を無くす権利はない。あなたが本当に母親の役割をうまくこなしたいならば、むしろ父親の役割をうまく果たせずにさまよう夫のために、その居場所を作ってあげて、慰めて上げる必要がある。そんなことをしても夫は変わらないという考えを捨てて、あなたの方から先に変わってみて。誰も傷付けないで幸福になれる道がそこにはあるのだから。

Step7　何も怖がらないで

最初の話

魅力的な女優であるジュリア・ロバーツが、3 人の子どもを持つ逞しい離婚女性として出演した映画「エリン・ブロコビッチ」を記憶していますか。実際にあったことを映画化したことで話題になった作品だった。

主人公は紆余曲折の末、弁護士事務所で働くことになるが、ある大企業が毒物を無断で放流したという話をつかんで、それを最後まで追及し、真実を明らかにして世界で最高の保証金を得る。

その映画が私のなかでずっと記憶に残っている理由は、主人公がみんなから下品でみっともないと悪口を言われても「服は服、仕事は仕事」と言いながら、ミニスカートと胸が出る服を「果敢に」着こなす姿と、職場を捜し求めなければならない立場であるにもかかわらず、自分は三人の子を育てるのに最低限いくら必要であるかを堂々と要求する姿のためだった。

父親のちがう子ども達を一人で育てながら全く弱気にならないで、外見と口調で人を評価する世の中を「フン」と鼻で笑いながら生きていく姿が本当にすばらしかった。

二番目の話

数ヶ月前にある雑誌で、外国で女性学と英文学の修・博士号まで取った人が、専業主婦を「選択」したという記事を見た。カンシンジュ、彼女は、自分を専業主婦ではなく「ホームメイカー」であると呼んだ。

「私に学位が何個あるかというのは、やりたい勉強をいくつやったのか程度の意味だけ、博士の学位が私のタイトルにはならないでしょう。私は私の能力を腐らせるのが嫌だから専業主婦を選んだのです」と語るこの母親は、自分は「プロフェッショナルな母親」だから朝起きるやいなや母親という肩書きに合わせて、髪型を整え、化粧をした後、きれいな服を選んで着て、勤務に臨むそうである。

育児は得意だが、家事は苦手だと「堂々」と言うこの母親は、履歴書を書いた時、ふと結婚後の 5 年間、専業主婦として生きていた時が空白であることに驚いたと言った。人生で一番忙しく生活していた時は、すなわち家事をしながら子育てをしたその期間だったが、実際履歴書を書こうとすると書くものがなかった。博士などよりもっと高度の創意力と思考力が必要だった「ホームメイカー」の仕事を、社会がこんなに冷遇しているとは。その期間を空白に残しておくことを到底納得できなかった彼女は、履歴書の職業の欄に「ホームメイカー」と書き、作品として夫と子どもを記入したと言う。

告白するが、私はわずか 3～4 年前まで教授室に子どもの写真を堂々と（?）置くことができなかった。写真はもちろん、病院で子どもの話をするのも意図的に避けていた。

人々、特に男性達が「あの先生は一日中子どもの顔を見て、口を開くと子どもの話ばかりする」という考えであることを知ったからだ。子どもの母親という事実を一度も恥ずかしく思ったことがないが、私に小さな落ち度でもあると、すぐに私が子持ちの母親である事実が攻撃されると思ったので、そのような隙を見せない方がいいと思ったからである。

しかし、面白いのは育児への参与度が私の 20%にも満たない夫が、自分の部屋の壁に子ども達の写真を「誇らしげ」に飾っていることである。

ある瞬間、私は、私の中にいまも恐怖心がたくさん残っていることに気づいた。

「この殺伐とした現実のなかで、子どもを育てながら職場の生活をしているのだから、この程度のことは当然でしょ？」と堂々と声を張り上げて言っても足りないくらいなのに、自分で

わかって自重しているのを、果たして誰が「わかって」、私を「大事にして」くれただろうか。

自分のなかの恐怖心に気づいた後に、やっと私は子ども達の写真を部屋の壁にかけて、私がキョンモ、チョンモの母親である事実を堂々と話し始めた。しかし、世の中が変わったのか、それまでの私の被害者意識が強すぎたのか、悪影響は思っていたほどになかった。

コンプレックスが怖いのは、完全に克服するのが難しいことにある。「三つ子の魂百まで」と言うことわざがあるように、一度固まったことを直すことは難しい。しかし直す気があるのなら、母親の役割をあまり完璧にしようとしないで、与えられた状況で最善を尽くそうと考えたらどうだろう。何にも怖がらないで…。

この世で最も怖い敵は誰だかわかるだろうか。それは自分自身である。私が怖がるといくらよいことも、私のものにならない。それだからといって試しもしなければあまりにも悔しいではないか。

面白いのは、私が経験したように試してみると、その結果が案外つまらないものが多いことである。コンプレックスに陥って、私一人が被害者意識に駆られていたのを知って、私が一人笑いする結果が多いということだ。そして、結果がよくなかったら？七転八起の精神でまた起きてぶつかればいい。

世の中で一番辛いと言われる出産の苦痛にも耐えてきたし、疲れてもとにかく今まで家事労働と育児も熱心にこなしてきたあなたである。あなたは思ってみれば、できないことはない。ただ準備なしに耐えられない状況にぶつかり、しばらく「よい母親コンプレッスクス」に侵されているだけだ。しかし、今やあなたは知っている。「よい母親コンプレックス」がこれ以上安全な避難所（？）になれないことを…。

多分、私がそうであったように、あなたがこれからもぶつからなければならない一番大きな敵は、すなわちあなた自身だろう。だから、母親の役割をするあなたが、自分で自覚して世話をし始めれば、これ以上怖れるものはない。あなたも十分に第二のエリン・ブロコビッチになることができる。

期待してみようではないか。何にも怖れないあなたが新しく描いていく世の中が、あなたと子どもの未来が･･･今日から始まる。今日が正しく、あなたが幸せな第二の人生をスタートする日なのである。

4．ひょっとするとあなたが見落としている本当に大事なこと

あなたは何のために生きているのか

「シンイジン、こっちへ出てこい！」

「なぜ私が叱られなければいけないのですか？」

「まったくこいつは･･･」

私の学生時代は気の滅入る時が多かった。設問の主旨さっぱりわからないテスト問題について質問すると、答える必要なし、と無視され、みたところたしかに答えが二つになる問題を指摘すると、解明してくれるどころか先生に歯向かうなと叱られることが日常茶飯事だった。「考えること（thinking）」が大切だと言われ、悩み悩んだ末に答えると、ほめられるどころか叱られてばかり。それでも若い先生たちは私を理解しようとしたが、年老いた先生たちは私の言うことであれば、すべてダメダメと首を横に振った。

それは、私が自ら間違ったと納得できるまでは屈服しないしつこい学生であったからである。実力もないくせに権威ばかり押し立てる先生に対しては、私の攻撃はさらに強くなった。ひどい場合には前日に質問の材料を探しておいて、それに関する内容の本をすべて読み漁る用意周到さまで見せた。私がそんなことをよくしたので、友人たちは私にそのような兆しが見えるとすぐ気づき、ぐっと緊張した。もしかしたらその火花が自分たちの方に飛んでくるのではないかと心配して。

私は年老いた人達が嫌いだった。政治家もそうだし学校の先生もそうだが、年齢相応の価値を見出せないほど惰性に浸っていて、自分が無条件に正しいと主張するおかしな人が多かった。それで私は、心底決心した。

「私はそんな生き方をするより、40歳になったら自ら命を絶とう。」

そのときの私は自殺を軽く考えるほど、命の尊さを知らなかった。私自身が生かされるようなものがなかったからかも知れない。それで生きる理由を探そうと努力した。耐え難い存在の軽さが私を悩ませていた。虚無な人生をただ一日一日延命するのが嫌だったから。無意味に生き、消えてしまうことが怖かった。しかし、その理由はたやすく探すことはできず、何ということのない歳月ばかりが流れていった。

アメリカ留学時代、私はある瞬間、運転をする必要性を切実に感じるようになった。アメリカはどんなに広いか。私が、免許がないと言うと、まわりの人達がおかしな目で見るのも無理のないことであった。これ以上、延ばしてはいられないと考え、夫の協力を得て一生懸命に運転免許の試験準備に取り組んだ。

しかし、試験の当日、メキシコ出身の試験監督官の英語を聞き間違え、コースを回ることもできないまま途中で脱落してしまった。その瞬間、本当に苛立たしかった。これまで辛くても敢えて無視するように努めてきた留学生活の苦労が、一気に脳裏をかすめていった。わざわざ時間を割いて運転を教えてくれた夫にも申し訳なかった。

何がそんなに悔しかったのか、目から涙がぽろぽろ流れた。試験場から家までどうやって帰ってきたのか記憶もない。すぐに倒れるようにアパートのドアを開けて中に入ると、暖かい日ざしを浴びながらベランダに座って何かに熱中している息子の後姿が私の目に入った。涙を拭いてチョンモに近づいていき聞いた。

「チョンモくん、何をしているの。」

「お母さん、これ見て。」

チョンモはベランダの窓格子の間にフォークを用心深く入れながら、私にこっちに来て見てよと言う。この世界でこんなにおもしろいことはないというように、小さな隙間にフォークを落としている姿を見て微笑みが出てきた。自分の手よりも大きなフォークを持って、一日中遊んでいたらしいチョンモの様子がおもしろく、けなげだったので笑いが止まらなかった。

私は下の階に降りていき、諒解を得てその家のベランダに落ちたフォークを拾ってきた。フォークを持って玄関に入ったとたん、私に走ってきて抱かれるチョンモ。私の膝に顔をこすりながら甘えた。いつもなら、くたびれた心でしばらく抱っこしてあげたあと離したはずだが、その時は心から強くチョンモを抱いてやった。

その瞬間の充足感は、言葉では言い表すことができない。運転免許試験に落ちたことが何であろう。これまで異国で感じた辛さまでもが、その時だけはとてもささいなことのように思えた。私には「お母さんが一番好きだ」といって胸に抱かれているチョンモがいるではないか。

私がもう一つ思い出すのは、長く時間が経った後、アメリカ留学生活を終えて帰って来た忙しい頃のことである。午後遅く一本の電話がかかってきた。

「ニュース聞いた？」

同期生の落ち込んだ声が何か普通ではなかった。

「あの先輩、自殺したの。」

信じられなかった。その先輩は非常に優秀で、早くから多くの人々の間でスポットライトを浴びてきた人だったからだ。ところが、手術が失敗して訴訟にかけられ、その罪責感と苦痛に耐えることができずに、自殺したという。

病院というところは、人の命を扱っているだけに、患者家族との間で死なせた・助けたとか、訴訟を起こす・起こさないということがよく起こる。私にも唖然とすることが多かった。

しかし、私は一度も死を思い浮かべたことはない。ところが、彼女は一度の失敗に耐えられず空しくこの世を去ってしまった。この世には彼女を支えてくれるものが何にもなかったのか。自分が築き上げた社会的な名声・学問的な成就・経済的な豊かさなど何にも役に立たなかった

ようだ。

「あなたは生きていて幸せ？」

そのことが起きる以前のある日、その先輩は私に聞いた。いきなり真剣にそのような質問を投げかけるのがおかしかったが、結果がこんなことになるなんて･･･。

私は椅子にぺたりと座り込んだ。信じ難い先輩の死。落ち込んだ心境を立てなおそうとしているとき、チョンモが私の胸に抱かれてきたときのことが思い出されてきた。そうすると、私は自分でも気づかない安堵感と感謝の気持ちに胸をなでおろすことができた。

振り返ってみると、子どもを産んだ後「なぜ生きるのか」という問いかけをしていなかったようだ。「生きることがなんでこんなに潤いがないのかな」という思いはあったが、死を浮かべるほど人生が虚無だという思いはしなかった。唖然としたことに当たっても、子どもを考えると私がこんなに弱くてはいけないと心を新たにした。

アントン・チェーホフ（Anton Pavlovich Chekhov）の短編小説で読んだ中に、とくに私の心に残っている場面がある。ある若い鉄道技師が線路で街灯をみながら言う。

「人生は空しいものですね。」

その言葉を聞いた年老いた技師が言う。

「それは階段の下の方から上を見ながら、上の方へ行ってもろくなことはないと言うことと同じなんだ。行ってみたこともないくせに空しいなんて言わないで。階段を一段一段上ったこともないのに、どうして上の方で見渡した世界の話をすることができるのかい。」

階段の下でいくら階段の上でみる世界を想像しても直接階段の上に上がらなくてはその風景を知ることはできない。そしてその経験は、どんな想像よりも濃いのだ。

「あなたは何で生きているのですか？」

誰かが私にそのように聞くなら、私はニッコリしながらこのように答えるつもりである。

「なぜそんな質問をされるのですか？」

冗談のように聞こえるかも知れないが、冗談ではない。もともと孤独で寂しいものといわれる人生。ところが、子ども達はそのような問いを発することのできるほど私をのんびり（？）させてくれない。そして何より私には想像に根ざした不安の代わりに、現実に根ざした強さがあるので空しさを感じる暇などないのである。

「信じるもの」が与える力は思う以上に強い

論文準備で徹夜をしたのももう五日目。風邪気味で眠ってしまった私がびっくりして目を覚ますと、時計の針は既に午前７時を過ぎていた。急がなければ、キョンモ、夫、私みんな遅刻だ。疲れを感じるひまもなく夫を起こして、子どもの部屋に走っていく。

「キョンモ、チョンモ、起きて。」

これから始まる戦争。キョンモは私が呼ぶ声を聞いたのかどうか、まだ夢の中をさまよい、チョンモは昨日忘れた学校の準備物を用意しなければならないと私の腕を引っ張って騒いだ。その拍子に居間では着ていくスーツがないと夫も一役（？）買う。

風邪気味なのか朝ごはんを拒否するキョンモ。それを見過ごす私ではない。なだめてスプーンを持たせた後、茶碗がきれいになったのを確認してからキョンモを離してやる。

ところが、キョンモを自分の部屋に行かせたか行かせないかのうちに、今度はチョンモが事故を起こす。しばらく目を離していた隙に、大きな割れ音とともにやかんが食卓に引っくり返され、ガラスコップが二つに割れていた。母親がいま、掃除をするためにやってくる一歩直前であることを知ってか知らずか、チョンモは逃げ込んでしまった。割れたガラスを箒で掃いているのに、また夫が急かす。

「急がなきゃ病院へ送れないよ。今朝、重要な会議があるんだから。」

「それならチョンモが学校に持っていくものを用意してあげてちょうだい。」

夫はわかったと言ったが、これでいいとか、あれがないとか、父子間でけんかする声がして結局は私が後始末をする。一回目の戦争が終わった後、やっとほっとして家を出るが、何か悪いと思ってか、一言、言う夫、

「我が家では、きみがいないと何ひとつできないんだよ。」

「いま頃わかったの。」

少し照れ臭くてこのように言いながら、私は心のなかで考える。

「私がこんなに偉い人だとは、私も知らなかったのよ。」

キョンモとチョンモを育てながら、予想していなかった事故に遭うたびにもう慣れたためだろうか。ある日、ふと独り言を言っている自分に気づいて、私はびっくりした。

「まあ、この程度なら何でもない。」

本当に子ども二人（当然、夫まで合わせると三人）も育てていたら、ある程度厄介なことでも、今ではそんなに大したことではないように思える。以前ならどうしよう？　ちゃんとできるだろうか？　失敗しないだろうか？　一千万回悩んでさらに悩んだはずである。迫って来ることがあってもできるし、また12年間もそのように生きてきた。今はそんなふうに考える。

「人間は完璧ではない。失敗をしないように最大限努力するが、失敗したからといってどうだろう。再度失敗しなければそれでよい。」

いつの間にかこのように変わっていく私の在り方を整理してくれたのは、いつも私と一緒にいた仲間たちであった。

「以前から話したかったけど、この頃すごく余裕があるように見えるわ。」

私はその話を聞きながら大声で笑った。何を言おうとするのか気づいたからである。以前の私は、すべてのことを少しの誤差もなく完璧にしないと満足できなかった。未婚のときのあだ名は「ナイフ」であった。もともと性格が鋭敏なせいもあっただろうが、失敗を受け入れるこ

とができなかったためだ。自分の欠点も耐えられないのに、他人の欠点を認めることはできなかった。

しかし、完璧であろうとすればするほど、私の欠点を自分で耐えねばならなくて辛いのは自分自身だ。相手の表情がよくないと、嫌なことでもあったかなと考える以前に、私が何か失敗をしたかなと後ろめたさがあったくらいだったから。不要な自責感で苦痛の時間を過ごしながらも、私はそれから逃れる脱出口を探すことができなかった。そのような私に、余裕なんかあるはずがなかった。

「お母さん、お母さん」

チョンモがスケッチブックをもって私のところに走ってくる。

「今日お母さんの顔を描いたよ、これ見て。」

お化粧もあまりしない自分の母親の顔にマスカラを塗り、まつげも長くきれいに描いてある。

「お母さん、こんなにきれいなの？」

「もちろん。世界で僕のお母さんが一番きれいだよ。」

目のあたりにしわができ、潤いのない皮膚が歳をとっていくことも隠せないのにこんな母親のどこがきれいだろうか。子ども達の催眠術（？）のおかげで以前にはなかった病気ができた。お姫様病。これは本当に醜い姿までもきれいだと言ってくれる子ども達のおかげだ。

「信じること」。正にそうである。私がいくら奈落に落ちても、私を「お母さん」と呼びながら世界に二人とない存在としてみてくれる子ども達。そんな信じるところがあるためだろうか。以前は決して容認することができなかった私の二段腹も許すことができ、お腹がすいたら太ることも気にせず寝る前に砂糖を入れて牛乳を飲む。おいしいチーズケーキが一切れでも残っていたらためらわず口に運んでいく。夫がこの頃は見るに見かねて私のお姫様病にたまにブレーキをかける。

「あまりにも厚かましいんじゃない？」

そうしてみると私は本当に厚かましくなった。あるビール広告に「世界よ、かかって来い。私はあなたが怖くないから･･･」という文句があった。本当に私の心構えが正しくそうである。

私は子ども達によって、その深さを測れないほどの充足感で満たされている。この子達は、私が完璧でなくてもあるがままの私を愛してくれる。今、私は失敗をしても以前のように自分を責めたりはしない。そうして私自身と他人に、必要以上に厳格に執着することがなくなっている。思うように早く成果が現れなくても、自責のかわりに余裕をもって待ち、他人の欠点に対しても寛容に受容するようになった。

精神科専門医として自らを診断してみると、確かに子どもを産んでからの私は‘セルフ　コンフィデンス（self confidence）、すなわち自己信頼感が高くなった。今私は誰が何と言っても関係なく、私が正しいと信じるところまで進めてゆく。他人の非難や忠告を不愉快にならずに、学ぶべきことだけ選んで私のものにする。私に対する悪口に動揺したりしないし、褒められた

からといってすぐに浮わついたりしない。子ども達によって私ははじめて、どんな風にも揺れない健やかな木になることができた。

このような変化が可能であるように助けてくれた子ども達には感謝するのみである。子ども達がいなかったら、私はこのような高次元の精神発達を遂げることはできなかっただろう。それで、私の厚かましさを叱る夫をわかったようでわからないような微笑で眺めながら、心から言う。

「あなたも信じられるものを一度もってみなさいよ。」

子ども達が私にくれた予想外のプレゼント

あなたもプレゼントをもらいながら、申し訳ない気持ちになったことがあるだろうか。

私はある瞬間から、私がキョンモとチョンモにあげるものより受け取るものがもっと多いということをぼんやりと感じるようになった。この感じはとても意外だった。私が誰なのか。与えることが惜しくて、罪もない子どもを罪人扱いしながら憎んだ人間ではなかったのか。

しかし、子ども達は何度もプレゼントを渡してくれる。予想できなかった場所で予想できなかったプレゼントをいきなり出してくれる。感謝しながらも、心の隅では申し訳なさが蓄積されていく。もしかしたら、今、私がこの本を書いているのも、将来、我が子達がこの文を読みながら母がそのプレゼントをすべて記憶していることを知ってくれることを願っているからかもしれない。そうすれば、少しはこの申し訳ないと思う気持ちを減らすことができるように思うから。

笑い

夫が言う。子ども達がいないと笑うことがないと。それは正しい。歳をとればとるほど笑うことがなくなる。愛情映画をみてももう感動がなく、コメディーを見ても大笑いすることがあまりない。でも子どものために笑って生きる。

何日か前、お父さんとお風呂に行ったチョンモが静かな声で言ったそうだ。

「お父さん、ぼくには心にも口があるみたいだよ。」

「それはどんな意味？」

「何かと言うと、僕は口で言うこと以外に心の中にも考えがたくさんあるから、心にも口があるみたいだっていうことだよ。」

「ええっ？」

チョンモの可愛らしい話に夫は大声で笑い、その日一日中、口元に微笑を浮かべていた。私はチョンモの話よりも夫が笑うのをみて、一緒になって随分笑った。笑いの絶えない家庭を作ろうと思っていたが、かえって子ども達が私達に笑いを与えてくれる。

鏡

咸錫憲（ハム・ソクホン）先生の詩「あなたにはそんな人がいるか？」の中にこのような一節がある。

「その人のためならこの世の多くの人に同調することなく静かにノーが言え、その顔を思い浮かべただけで、あらゆる誘惑を追い払うことのできる、そんな人があなたにはいますか。」

私はためらうことなく言える。愛するキョンモとチョンモが私に誘惑を追い払うようにしてくれる。行き当たりばったりの暮らしをしてはいけないと考えさせる。慌てたあげく横断歩道ではないところで渡ろうとしたが、子ども達のことを考えて立ち止まる。私が子ども達に横断歩道で渡るように教えているのに、私がそれを守らないといけないから。夫と夫婦喧嘩をしてもすぐ仲直りする。子ども達に友達と仲良く過ごすように言ったのに、私が声を荒げて夫と喧嘩をしてはならないから。私の子ども達がプレゼントしてくれた「鏡」の前で、私は絶対悪い心になれない。むしろ、今よりもっとすばらしい善の生き方をするために努めるようになる。

和　解

稲は成熟すると首を垂れると言われるが、私は大きくなればなるほど常に母と言い争った。母は主に「しないように」と言ったが、私は「する」と主張した。一度したいと思ったら最後までやり通す私のため、母は心でたくさん泣いたはずだ。そうしてはならないと決心しても、母の前に立つと口をとがらせることになった。それでも私は、母がいつも私のために存在しなければならないと考えた。それで私は上の子を産んだとき、当たり前のように母に子どもの面倒をみてくれと堂々と頼んだ。

ところが母は、今からは自分のための人生を生きたいと言った。当然なのに、母にその権利が十分にあったのに、その時はなぜあんなに恨めしかったのか…。

そんな私は下の子を産んだ後、母の思いがわかってベッドでワァーワァー泣いた。下の子を産んでから、私は母がこのような苦痛を四回も経験したのだと、自分の人生を私達にすべて捧げたのだと、そのときになってやっとありがたくてすまない気持ちになった。チョンモが私と母を和解させてくれたのである。

夫の実家とも同じである。お姫様から下女に急降下する気持ちにさせる夫の実家が初めは憎かった。ただ、怒りを爆発させるのが怖くて、その気持ちを外に表さなかっただけである。

ところが、二人の子どもを育てながら舅と姑にそうしてはならないという思いがした。私にとって子どもがこんなに大事であるように、彼らにも自分の息子が大事だったのであろう。そして歳をとっていく舅と姑をみると、憐憫の情がこみあげてくる。今回も、二人の子どもが夫の実家と私を和解させてくれた。

親になってから自分の親と和解ができた。二人の子どもがなかったならば、私はまだ愚かな人間であっただろう。親達は歳をとりながら得た知恵を聞かせてくれ、私はそれを注意深く聞

く。聞いてみると、とてもすばらしくて賢明な忠告ばかりである。

追　憶

結婚 17 年目の私たち夫婦。この頃は対話の 80%が子ども達の話である。それで夫は笑いながら「子ども達がいなかったら、私達は何の話をしながら生きていたんだろうね？」という。私にしても、大人になってから後のもっともいとおしい思い出は、すべて子ども達を育てながらできたのだ。アメリカ留学時代、ある学生が老教授に聞いた。

「老人になったら何を楽しみに生きるのですか？」

彼の答えは次のようであった。

「一日中、以前に良かった思い出を繰り返し考えていたら、退屈な時間はないよ。」

その時は子どもがまだ幼く、すべきことも山積していたので、私にはそれがどんな意味だかよくわからなかった。私は一日一日を生きることだけでも大変なのに、その歳になって思い出として残るものなんて何があるだろうかと思っていた。

ところが、そうではなかった。苦痛も思い出になる。我達夫婦は、過去に幼稚なことでひどいけんかをしたことを思い出し、今は笑いながら、苦痛に耐えられるようにしてくれたその時のエネルギーと情熱を殊勝に思う。子ども達の話は、一晩話しても足りないほどである。私は細かいことまでよく覚えているタイプなので、話はおもに私が提供することから、得意になるおもしろさもある。歳をとりながら私は子ども達が私にくれる思い出がさらに多くなることを感じる。そしてこのような思い出は、歳をとるほど価値を発するであろう。そして老年の私の人生は、その思い出で輝くだろう。

幸　福

私は経済的に豊かな家で育てられた。そして私がしたいことができなかった覚えはほとんどなく、お金が大事であることを知らずに成長した。私が自らお金を稼ぎ始めてからは、自分のためにお金を使うことを惜しまなかった。10 万ウォンが私の手もとにあると、映画を見、服を買い、おいしいものを食べた。ところが、いつも何かが空しく幸せではなかった。

権力、地位も重要であった。医科大学では他の学生より少しでも高い点数を得ることが重要で、認められるためにいつも戦々恐々としていた。その結果、専門家として成功し、他人も羨ましがった。一時はそのような成就感が与える快感を楽しむこともあった。ところが、結局「それが何になるの？」という思いを消すことはできなかった。

今は、お金を使わなくても幸せである。少々遅れてもまったく不安ではない。子ども達はお金、権力、地位がなくても幸せになれることを私に教えてくれた。「成功」という冷たい灰色の都市を向かって走っていく爆走機関車から降り、「幸福」の庭園で家族と顔を合わせながら感じる生き方は、とても暖かいものだ。

羅針盤

「トム・ソーヤの冒険」に熱中していたキョンモがある日、私のところにきて「自由」の意味について聞いてきた。トム・ソーヤの自由な生き方を羨ましいと思いながらも何の干渉も受けないで生きるその姿が寂しく見えるとのこと。何でもないように言うキョンモだったが、私はある瞬間、胸がジンとした。キョンモがその本で感じた「自由」は30余年ほど前、キョンモの歳頃に私が感じた疑問と同じものだったからである。

「私が歩んできた跡をこの子も慣れない歩みで追ってきているんだな。」

私はそのとき、はじめて私が流れる歴史の中に存在していることを実感した。人間として世代をつなげていく責任ある者として私を生まれ変わらせたのである。私の母親から私に、またキョンモに歴史は流れる。その歴史が果たしてどのような歴史になっていくのか。その方向に私も寄与する。そのささいな歴史が集まって巨大な歴史の筋をつくる･･･。それは私に再び人生をよく生きねばならないとの思いを抱かせた。

ただ流れるまま身を任せてはならない。どこへどんな姿で流れるべきかを知らせてくれたキョンモは、私の人生の羅針盤である。

私が夫をみて笑わずにいられない理由

去年の冬休み、思春期に入ってきたキョンモが徐々に母親の統制権外へ行っていると思った私は、冬休みが始まってから特効薬の処方をくだすことになった。夫に支援要請をしたのである。ふだん席について勉強することを極端に嫌っていたキョンモは、特に数学で思考力を要する図形分野が出ると、まったくお手上げという状況になった。励ましてみてもキョンモの態度に変化はない。

ついにときが来たと感じた私は、夫を呼んで静かに言った。

「これからはあなたの出番よ。これまでは私がなんとかしてきたけど、これからはあなたの助けがなければダメなの。」

ところが、それが夫を偉くしたようである。

「そうか。それなら僕が出ていってみるか。」

姿勢を正した夫は、その後何かを決心したようで、忙しい時でも毎週時間を決めてキョンモと数学の勉強をはじめた。しかし、子どもを勉強させることが親の思い通りになるであろうか。最初は優しい父親のシンボルであるかのように柔らかな声でキョンモに接していた夫がついに声を荒げはじめた。

「まだこれもわからないの？　お父さんがさっき教えただろう。お父さんを怒らせようと思ってわざとやってるんじゃないの？」

「お父さん何でそんなに腹を立てるの。本当に分からないんだ。これをやめてサッカーでも

しようよ。」

それはどうみても漫才のようだ。隣で見ている私の目には大きな子ども二人がけんかをしているように見えた。ところが、最後になっていつも興奮して騒ぐのは夫の方であった。何か仲裁が必要だったが、私は知らないふりをした。夫の初めての試みではないか。

案の定、はじめてから何日も経たないうちに夫は疲れ切って、白旗を挙げるようになった。子どもと共感を分かち合うのが父母と子どもとの基本であるのに、歩くこともできない夫が走ろうと頑張っているのだから、ちゃんとできるはずがない。

「塾でも行かせようかな･･･」

独り言を言ったら、夫が強く反対した。

「何を言っているんだ。父親になってこの程度もできなかったら、これからどうする？　ちょっと待ってみて。僕の息子なら絶対これで終わることはない。暫くの間そっと見ていて。」

その後も何日も孤軍奮闘していた夫が、ついに少しずつ要領をつかみ始めた。無条件に進めてばかりだったのが、いよいよ子どもの立場で考える方法を習得したのである。説明を一度してあげた後、キョンモが理解できないようだったら、その前段階のある部分からひとつひとつ繰り返して説明してあげるようになり、集中力が落ちるようだったら適当に休ませながらやる気を喚起させたりした。

そうすること一ヶ月。とうとう私は、一度始めると一時間以上は続く数学の勉強に、夫とキョンモが時間の経つのも忘れて熱中する姿をみることになった。夫の涙ぐましい努力で、キョンモの数学の実力は目に見えるほど向上した。

しかし、それより良かったのは、ふだん夫が無愛想なので疎遠に見えていた父子間に何か密な繋がりができたことである。

「お母さんはあっちに行ってよ。これはお父さんと僕が解決する問題だよ」と、キョンモが厳粛な表情をしたりした。

そんなある日、長い休みが終わる頃だったが、休み中の宿題を終えて友達と遊ぶために慌てて出かけていくキョンモの後ろ姿をみていた夫が、突然こう言った。

「僕は今、キョンモの気持ちをすべて理解することができるようだよ。」

何の話かと聞く私をみる夫の目が真剣であった。

「僕はこれまでキョンモが何を考えているのか、まるで分からなかった。とんでもないことばかりしていたから判断ができなかったが、今はあの子の心をちゃんと読めそうだ。」

夫には申し訳ないが、その話を聞いたとき、私は込み上げてくる笑いを飲み込むのに本当に大変だった。やっと心を落ち着けて、どうしてそう考えるようになったかと知らないふりをして聞いてみた。夫はキョンモの数学の学習帳を見せながらこう言った。

「これがキョンモと僕の心が通じた跡だ。」

その話を聞いた瞬間、夫が感じた気分がどんなものであるか、ほかの説明を聞かなくてもわかるようだった。子どもの立場で世界を眺めて感じないと、絶対子どもを理解することができ

ないだけでなく、ちゃんとした関係が形成できないということを10年以上体験してきた私ではないか。自分が話したことに感動を受けたようで胸いっぱいになった夫は、好奇心のある表情でこのように言った。

「きみがこれまでどんな心構えで子ども達に接してきたのか、わかるような気がするんだ。僕もこれからは、ちゃんと一緒に参加できそうだ。」

その話を聞いて私は、ひとりでニッコリ笑った。夫が子どもとの交感を深めるということが一方ではとても嬉しかったが、それは私が経験してきた、またこれから経験する交感とは比べにならないものであることがよくわかったからである。夫は自分が体験した交感の時間が、子どもとの関係をなすすべてであるように浮かれていた。私は心から言った。

「それは氷山の一角なのよ。」

率直に言っていくら共感したとしても、お腹のなかで10ヶ月間一つの身となって生き、生死苦楽の出産の現場をともにし、その後一時も精神的紐帯感を失ったことのないそんな関係を、夫がいかにすべて理解し、共感できるだろう。

キョンモが小さかったとき、夫と私は交代で子どもの面倒をみた。ところが、夫は夜中に子どもが泣いても、絶対目を覚ますことができなかった。となりの部屋の私が起きて子どもをあやした。朝になって起きた夫は、私に誇らしげに言っていた。

「キョンモは夜一回も泣かずによく寝たじゃないか。」

子どもが少し大きくなって童話を読んであげる時期でも同じであった。夫は子どもが同じ本を4回も読んでくれとせがむと腹を立てて「おまえ馬鹿じゃないの？」と子どもとけんかをした。子どもは一度関心をもつと、興味がなくなるまで絶えず反復するということを夫はわかっていなかった。それこそ共感と体験を通じてこそ悟ることになる。その時、私はさっと夫の手から童話の本をとり「キョンモがおもしろがるところは、ここよ。このために続けて読んでほしがるの。」と言いながら代わりに本を読んでやったりした。

それだけではない。盲腸の手術を受けた自分の兄に私が消毒薬をぬってあげるのをみて、チョンモが自分のお腹を出して泣きわめく理由も夫は理解できなかった。夫はそのとき、兄が痛がっているのにそれもわからずに駄々をこねる、とチンォモを叱った。そばにいた私がすぐ痛くもないチョンモのお腹に消毒薬をぬってあげるのをみても、それが兄に対する嫉妬心をなだめるためであることが理解できない夫であった。

それは決して夫が何か間違ったからではない。言葉では言い表せない、この世のすべての母親と子ども間の同質感であると言えようか。神様が女性を繊細で鋭敏な包容力のある存在につくった理由がここにあるかもしれない。

私は今もキョンモとチョンモがお腹の中にいたときの記憶を忘れられない。夜寝ている母親のなかで身をすくめていた子が、母親が目覚める瞬間、自分も起きて伸びをするその感じ。起きようとするとサッカーをするように、お腹の一方からどんどんと足を動かして蹴るような感じが今も生々しい。

それだけではない。まるまると太った0歳のキョンモが真夏に袖なしの服を着て、自分の母親をわかっているかのようにニコニコしていた姿、その感じをどのような言葉で表現できるだろうか。片手のなかにポコンと入るような小さな足と魚の鱗のように柔らかいつめがついていた指を見たときの感じをどのような言葉で表現できるだろうか。「母」と呼ばれる人たちだけが感じる、その驚異的で感動的な感情は、断言するが、神様が与えてくれた祝福に間違いない。

キョンモが大きくなり、チョンモも幼さから脱皮しようとしている今、私の頬から伝わってきたそのしなやかな子ども肌の感じが懐かしくて、夫が知ったらびっくりするだろうが、たまには子どもをもうひとり産もうかと真剣に悩んだりする。この前、夫がこう言った。

「まだキョンモとチョンモがそんなにかわいい？もう大きくなったからそうでもないんじゃない？」

もちろん小さい時に感じた驚異的で感動的な感じは、もうないことは事実だ。でも母親にとって子どもという存在は大きくなればなったで、またそれなりの経験を与えてくれる。小さい時には目に見える身体的な変化を経験させてくれたとすれば、大きくなってからは、精神的成長をともにするのではないか。もしかすると、それは目に見えないため、さらに神秘的で感動的なものかもしれない。

自分ではない他人に完全に感情移入ができる関係は、母子関係しかない。いくら愛する関係であっても私が完全にその人の代弁者となり、もっぱらその立場で世界を眺めることはできない。もしその境地に至るとしても、その関係は長くは続かない。人間の属性上、時間があまり経たないうちにこれを拘束と思って諦めるか、仕方なく耐える関係として残るほかないからである。

しかし、母子関係はいくら否定しても諦めることのできない関係ではないか。それで、ある人は母子を指して「極度の愛憎関係」とまでいった。愛しながらも極度の絶望感を与えたり受けたりし、それでも一筋にお互いを見つめるそんな関係だということだ。

私はそれで、今日も絶えることなくあれこれのことで私の頭を悩ませる二人の息子と触れ合うことが嬉しい。それがこの世の何ものにも変えがたい感動と喜びをもって接近してくることを、そしてそれが夫には絶対感じることのできない、母親という名をもった人達だけに与えられた祝福だということを、よく知っているからである。

夫には自分がそのようなことを言うたびに、私がなぜニッコリしてしまうのか、わかるだろうか。

「共に生きること」を学ぶ母親たち

「どうしよう？　イジン。このことをどうすればいいかしら？」

「お姉さんどうしたの？　何のこと？」

私に差し迫った声で電話をしてきた彼女は、キョンモと親しい友達の母親である。「アメリカに住んでいる同じ韓国人同士」という理由だけでも私達はすぐ親しくなり、私はいつの間にか彼女をお姉さんと呼びながら、頼り合っていたところだった。

半泣きのお姉さんをやっと落ち着かせ、事の顛末をたずねた。聞いてみるとお姉さんの息子が学校で懲戒を受ける危機に直面しているという。何日か前、お姉さんの息子がスクールバスに乗って登校するときに起きた事件の全貌は、こうであった。

スクールバスで現地の友達が、お姉さんの息子に英語ができないといじめた。英語ができない息子は友達に "Don't do that! Don't do that!" と繰り返し頼んだ。ところが、その友達はやめるどころかしつこくいじめたので、息子が耐えられなく頭を一回叩いた。その場面を偶然バスの運転手が目撃したのである。

問題はその後で起こった。バスの運転手はすぐ学校懲戒委員会に行ってお姉さんの息子を、暴力を振るったと報告してしまった。そのまま傍観していたらお姉さんの息子は懲戒を受ける立場になってしまう状況であった。

お姉さんはとうとう、泣いてしまった。悔しいけれど何をどうすればよいかわからないとのこと。ただ「どうする？うちの子をどうすればいいの？」ばかりを連発した。私は方法がわかっていた。学校の懲戒委員会に出席し、悔しさを明らかにすればいいことだった。しかし、お姉さんが慣れない白人たちの中で震えて弁明もちゃんとできないことは目に見えていた。学校相手に立ち向かうことは、お姉さんには無理であった。

私は自ら翌日お姉さんの代わりに懲戒委員会に出席した。予想通りにお姉さんの息子に懲戒を与えるべきだとの意見が支配的であった。私は小児精神科の専門医であることを強調しながら、子どもの正当性を主張したが、状況は悪くなるばかりだった。

「それではスクールバスにビデオカメラを設置するのはどうですか。その後もその子が同じ行動をとるなら、そのときに懲戒しても遅くはないと思います。当時の状況がどうであったのか、本当に何の理由もなくその子が暴力を振るったのか、よくわからないではないですか？」

幸い、私の提案は受け入れられ、数日後、スクールバスにビデオカメラを設置することになったが、何の問題も起きなかったので一件落着となった。お姉さんは私に有り難くて仕方のない様子だった。

「お姉さん、そんなにしないでください。それはお姉さんの息子さんだけの問題ではないじゃないですか。キョンモもそんなことに遭わないという保証はないんですよ。だからこれは私の問題でもあります。」

事実だった。本当は私が敢えて出ていかなくてもよい状況であった。冷静に言えば我が子の問題ではないから「それは困ったわね。どうすればいいかしら？」というように慰めるだけでも、私が悪口をいわれる状況ではなかった。でも我が子がやられる可能性もあった。お姉さんの息子が運悪く引っ掛かっただけだった。だからそれはお姉さんだけの問題ではなく、私の問題でもあったのである。

母親の役割をしながら、私はいつの間にか闘鶏のようになっていくことを感じる。もちろん昔から私は闘鶏役をよくしてきたが、そのときは他人のことまでは干渉しなかった。私が非難されても他人のことはあくまでも他人のことだから、気を遣う理由がまったくなかった。

ところが、母親になってみたらそれでは済まない。もう他人事というのはない。どうして知らないふりをして無視することができるだろうか。我が子がいつか向かい合って立たねばならないことかもしれないのに･･･。

これまでは、もっぱら自分だけのために、極めて個人的な人生を生きてきた私であった。見たくなければ見なくてよく、見ても見ていないふりをすればそれでよかった。ただ、私に直接に関連することにだけ神経を尖らせていればよかった。「私が口を出したとしても変わる社会ではないじゃないか。」自分でそのように自嘲すればそれまでだったから。

しかし、母親になった私は人生により大きな杭をさし込んで、その真価と向き合わなければならなかった。我が子が大事であればあるほど、他の子も大事だし、我が子が大事であればあるほど、この世のすべてのことが重要になったのである。できないとしても、闘えるところまでは闘わねばならないと考えるようになったのである。

なぜなら私一人で子どもを保護しようとしても、それは明らかに限界があるからだ。我が子をどこにも行かせず、家に閉じ込めておけるはずはないなら。子どもを育てるには、まるごと村ひとつが必要だということがなぜ思い浮かんだのであろうか。

それでそんな気持ちになるのは私だけではない様子であった。

５年前、私のところに満５歳になる幼稚園児を連れて、ある母親が診察に訪れた。言うことをよく聞いていた子どもが、いきなり幼稚園へ行かないとヒステリックな発作を起こすようになったということだった。わざとそのようにしているのかと思い、厳しく叱って行かせたのも数日間。でも少しもよくならず小水に血が混ざったり、人形の首を絞めるなど、もっとおかしな行動をとるようになったということで私を訪ねてきたのである。産婦人科に行ったところ、性的虐待を受けたという診断が出たという。でもその母親はそれが誤診であることを願っていた。

しかし診断結果からは、その子どもが性的虐待を受けたことが明らかであった。その話を聞いた母親の姿は、私がもらい泣きしてしまうほど悲惨であった。母親として我が子を守ることができなかったという自責感、子どもの状態もわからないで強制的に幼稚園へ行かせ、このような結果になったという自責感のため、まともな精神状態ではなかった。

治療は、母子がともに受けねばならなかった。治療期間中、ずっと彼女は子どもに起きたことを隠したがっていた。自分が恥ずかしいのは二の次で、性的虐待を受けた事実が他人の噂になると、子どもがまた大きな心の傷を受けるのではないかと思ったからである。

９ヶ月余の治療が終わる頃、外見からは平穏な日常を取り戻していたある日、彼女は私に爆

弾（?）宣言をした。

「私がこれをこのまま問題にしないで捨て置いたら、ほかの子ども達も同じことをやられるかもしれないのに、それをそのまま見捨てて置くことはできません。また、私の娘が悪かったのではないことを明らかにしたいのです。そうしたら私の娘も堂々と生きることができるんじゃないでしょうか。どうか先生も手伝ってください。」

個人的に同じ立場の母親として、彼女がそんなにも痛ましい傷をどのように克服していくかを見守っていた私は、びっくりした。そんなに驚くべき力が隠れていたなんて。精神的な傷はそうしてこそ完全に克服できる。しかし、社会的弱者になるしかない母子が自分の傷を公開して闘うことは、普通の勇気でできることではない。

このようにして始まった幼稚園長との闘いは簡単には終わらなかった。「娘ひとり管理することもできないくせに･･･おばさん、ありのままに生きろ！」という非難から「知られても、損になるのはあなただけです。」という忠告（?）まで世間の視線はそんなに好くなかった。

しかし彼女は決して退かなかった。むしろ彼女はもっと強くなっていった。裁判に必要な証拠収集のためにあちこち走り回り、ほかの性的虐待被害児童の親を助けることにも先頭に立った。彼女の努力は、甲斐があった。

言論は性的虐待被害児童の実態に関する記事を扱いながら関心を見せはじめたし、机上の空論ばかりしていた官公署の官僚達は、「性的虐待被害児童」というものがいったい何者かと調べはじめた。驚くべきことはさらに続けられた。彼女は児童虐待根絶のための家族の集まりを作ったのである。自分の経験を分かち合いたいと、いつどこで起きるかも知れないこの地の児童性的虐待を根本からなくしたいと、自分の実名と経験を公開した。

誰がこのような母親達を、家族利己主義に陥っていると非難できるだろうか。他の子どもを自分の子どものことのように考えて涙ぐむ母親、子ども達にもっとよい世界を残してやりたいと献身する母親、自分の辛さと力を快く分かち合える母親達に私は真の希望を見る。その母親達は、ともに生きることの大切さを知っている。個人的なことだけに没頭していた多くの母親に、その母親達の「連帯」はともに生きることの価値を知らせたに違いない。

不思議なものだ。ともに生きることに私のもっている微々たる力を加えたいという思いがするこの頃、私は生きることが楽しくなった。以前は他者に分け与えると私の分が減ってしまうようだったが、むしろそれによってもっと多くのことが得られることがわかったのだ。分かち合いの喜びを知るようになると、私と我が子の未来に対してもより多くの夢をもつことになった。私に万が一、予期することもできないような悔しいことが起こるとしても、もう怖くはない。ともに生きることを希望する母親達が私のそばにいるからである。

魯迅の言葉だったろうか。希望というのは本来あるとも言えるし、ないとも言える、それは地上の道とも同じであると。本来地上には道がなかったが、歩いていく人が多くなるとそれが道になるのだと。

振り返ってみると、私は母親になってから得たものは本当に多い。しかし、それが大切であると悟ってからは、そんなに長くなっていない。むしろ、私はそれを得るために捨てねばならないものを握りしめて、恨めしがっていた。捨てることがもどかしくて。失うものがあれば、それだけ得るものがあるというが、それは、得たものの価値を自ら悟ったときに可能な話である。いくら得るものがあっても、得たということに気づかないなら、それが何の役に立つだろう。

誰かが私のところに来て手をさしのべてくれないと恨むことはない。あなたが辛くても辛いと言っていないなら、誰があなたの手を取ってくれるだろうか。「辛い」と言い、「助けて」と言おう。子どもを育てるのに一つの村が必要であることを知っている母親達が、あなたの手を快くつないでくれるから。申し訳ない、などと思う必要はない。あなたには他人と手をつないであげる余裕がまだないだけなのだ。あなたが元気になったら元気になっただけ、ほかの人の手を暖かくつないであげることができるのだから。

あなたが子どもに与えることのできる最も大きな遺産

山奥に住んでいる77歳のお婆さんが、娘がしばらくの間預けた7歳の孫のサンウとともに暮らすなかで起きる話を映画にした「家へ･･･」。

夫はほかの映画をみようと私を熱心に誘ったが、努めて無視した。もう「家へ･･･」という題目の後ろに付いた「･･･」が何となく私の胸を揺るがせた後だったからである。

映画の中で都市生活に慣れた孫のサンウは、ゲーム機とコーラを手に、みすぼらしくて言葉も話せないお婆さんをあざ笑う。お婆さんのことを「馬鹿」といじめ、ゴム靴を隠し、尿瓶を足で蹴って割る。またゲーム機のバッテリーを買うためにお婆さんの銀のカンザシを盗み、靴下を縫うお婆さんのそばでぐるぐるとローラーブレイドで動き回る。

それだけではない。フライドチキンを食べたいと言ったのにチキンスープを作ったお婆さんを責めつける。スープをつくるため不自由な足で雨に濡れながら市場へ行って鶏を買ってきたお婆さんの誠意は関係なく･･･その夜お婆さんは寝込んでしまう。

そんなことをすれば、ふつうなら悪い子だとお尻を叩くはずなのに、お婆さんは手で胸に円をかきながらすまながるだけだ。怒って口をつぐんでいる孫にキムチをちぎってごはんにのせてあげ、便所の前に座り込んで孫の用便が終わるのを待つ。一日中かぼちゃと山ハブを売ってできたお金で、孫に運動靴とチョコパイを買ってやる。でも自分はお金がなくなり、家まで遠い道を歩いて帰る。

いわゆる悪いことばかりする子どもにひたすら施しながらも、すまなく思う心、その中には母性愛があるだろう。

もちろんお婆さんの愛と母性愛は少し異なるが、与えても与えても少しも惜しむことなく、

もっと与えたいという愛はこの世に一つ、母性愛しかないからである。

考えてもみてほしい。母親が赤ん坊を愛するのは、子どもがある特別な条件や期待を充足させてくれるからではなく、ただその子が彼女の子どもであるからだ。

子どもが母親に何かを恩返しする義務はない。ただ子どもは受けるだけでよい。ウンチをすると拭いてあげ、何かを吐き出すとかわりに拾って食べ、泣くと抱っこしてあげるなど、何をしても母は自分を愛してくれるから。何の恩返しも望まず、ただ施してあげる、こんな絶対的な愛が、母性愛以外にあるだろうか。

母と子どもの関係は本質的に不平等な関係であり、この関係では一方はすべて助けを要求し、もう一方はすべて助けてやる。母性愛が最大の愛であり、すべての感情的紐帯のうちで一番尊い紐帯と考えられてきたのは、このような利他的で非利己的な性質のためである。

それで心理学者エーリッヒ・フロムは、いくら偉大な男女の愛も兄弟愛も母性愛には比べものにならないと言った。

ある本で読んだが、母親は子どもを4万6720回抱っこしてあげ、1万7520回キスし、11万6800回トントンしてあげる。また子どもに最低でも2万1900回「愛しているよ」と言う。しかも、そのような愛を施しながらも、何の条件も出しはしない。

このような親の無条件の愛は、独特なエネルギーであるに違いない。子どもが母親の愛で満たされ、何が起きても母親に慰めと力と理解を求めることができることがわかれば、子どもはどんな世の荒波にも揺れ動かない自己の中心を持ち、強くて、愛に溢れる大人として成長することになる。母親が子どもに、条件なしで支えてあげるほど、子どもの潜在能力を啓発する可能性も大きくなる。自分にどんな短所があるにしても、変わることなく支持してくれる母親のおかげで、子ども達は本来の自分を愛しながら、自分のもつ無限大の力を発揮する勇気を得るのである。

一部の学者は、このように完全な愛と支援は、子どもを弱くさせると主張するが、私はこれに同意しない。むしろ私は、母性愛こそ母親が子ども達に残す一番大きな遺産であると思う。

現代経営学の偉大なる父、ピーター・ドラッカー(Peter Ferdinand Drucker)は、「ネクスト　ソサイエティー（next society)」は、知識が強調される社会だという。いわゆる「知識社会」の根幹になる「知識」は、相続することもできないし、誰もが最初から白紙状態から始めるため、未来社会は身分制社会や産業社会より相乗移動がしやすくなるという。

しかし、成功確率が高いほど、失敗確率も高い。競争が激しくなればなるほど体験する挫折が多くなるはずで、心理的圧迫と精神的傷が今より大きくなるしかない。もし知識労働者として成功するとしても、ある瞬間仕事しか残るものがないなら、それもやはり絶望的なことである。

したがって、未来社会を生きる子ども達には、点数を何点多くもらえるかということよりも、そのような無数の挫折を踏み越えて、立ち上がることのできる力を育ててやることがさらに重要である。

私は講義をするたびに「IQが100以上であれば、性格のよい人のほうが、勉強がよくできる」という話をよくする。友達問題、試験問題など些細な障害に挫折していらいらする子どもと、「その程度なら」と軽く乗り越える子どもとでは、どちらが早く挫折を蹴飛ばして起き上がることができるだろうか。その差は、母親がつくる。

挫折に耐えられる力は、感情調節力がどれぐらい発達しているかによる。これは3－4歳のとき、感情調節を担当する脳の「辺縁系（limbic system）」で完成されるが、情緒的交感をよくしてあげ、子どもの好奇心を満たしてあげ、怒らずに許容的態度をとるほどよく発達する。

このとき、母親が子どもを信じて愛するという肯定的な情緒を植えつけてやると、母親がこれ以上保護できない思春期以降にも、衝動的であるとか極端な感情に振り回されることなく、自己調節をよくしていくことができる。これが、挫折に耐える力になる。

子ども達がいくら悪いところをみせても、母親の変わらない愛をみせてやること。これが子ども達にとって「どんな状態であっても、私を愛してくれる人がいる」という自信と、どんな挫折にも揺れ動かない自尊感情として残る。それで挫折の中でも「私はダメだ」の代わりに「私はできる」という勇気を抱き、また何かを試すことができるようになる。

日本の「松下」は周知の通り、世界的な企業である。昔、日本最高の工科大学を優秀な成績で卒業したある学生が、数多くの会社からのお呼びを拒んで、松下に応募したことがある。しかし彼は合格できなかった。最終合格者名簿に自分が入っていないのを知って、恥ずかしさと怒りに苦しんだ彼は、多量の睡眠薬を飲んで自殺してしまった。翌日、一通の電報が届いた。それは皮肉にも電算処理に問題が起きて合格者名簿から漏れてしまったが、彼が首席で合格したということの通知だった。

人々はそのことを聞いて同情を禁じ得なかった。しかし、松下グループの松下幸之助の反応は意外なものだった。

「彼が若い歳でこの世を去ったことは、本当に哀惜の念に堪えません。しかし、我々の会社が彼を受け入れられなくなったのは、大きな幸運です。」

彼は次のような理由をあげたという。「その程度の挫折を乗り越えられなかったことからみて、この学生の心理的資質は取るに足らない。このような心理的資質で会社の重要なポジションで挫折に出くわす場合、自殺を選択したことからわかるように、多分衝動的で悲劇的な方法で仕事をし、会社に莫大な損害を与えることが明らかだ。」

母親達よ、どんなときも子どもを十分に愛しなさい。あなたが完全に子どもを愛した経験は、あなたの子どもが大きくなったとき、その子どもを見守る大きな遺産になることを心に深く刻みつけておきなさい。見えないだろうか。世の中がいくらあなたの子どもをけなし、くたびれさせても、あなたの愛を記憶しながら、子どもが世の嵐を切り抜けていく姿が。

神様、許してください

今日の仕事をすべて終えることができませんでした。
でも今朝子どもが
ヨチヨチ歩いてきて
「お母さん遊ぼう」と言ったとき
いやだと答えることはできませんでした。
パズルとおもちゃのトラックとブッロクと人形と
古い帽子と絵本と笑いの中から
私たちは千の秘密と
百の希望と夢と抱擁を分かち合いました。
今日寝床に入ってお祈りをするとき
子どもは両手を合わせてつぶやきました。
「神様、お母さんとお父さんと
おもちゃとお菓子をくださってありがとうございます。
でも何より
お母さんといっしょに遊べるように
してくださってありがとうございます。」
そのとき私は今日一日、よい無駄遣いをしたことがわかりました。
神様もこのような私を理解してくださることと思います。

—ゼイン・ジョーダン・ペラー氏の「よい無駄遣いをした一日」—

5. こんなにも病んでいる母親はいない

絶対に性本能を無視するな

大学に合格した後、釜山からソウルに上京し、一人暮らしをしていた頃のことである。住む家を探して引越しをし、ある程度整理が済んだ後、両親だけ釜山に帰ることになった。その時、父は私にたった一言、「訓戒」を言った。

「ソウルでハンサムな男たちはみな浮気者で、話が上手なやつはみんな詐欺師だ。絶対に、誰彼かまわずに会ったりするんじゃないぞ。」

中学、高等学校と初恋は言うまでもなく、男性に会ったこともない私に、このような「訓戒」を言われたが、「恋愛」に対する憧れや期待どころか、「恋愛」というのは不必要で、してはいけないことであると考えていた私にとっても、そんなことは当然であった。

私のことが好きで追いかけて来る男性がいても、その人と積極的に会って感情を膨らませようとはせずに、ただ避けることばかり考えていた。

「勉強するのに邪魔になるかもしれない。父に言われた通りに、変な奴だったらどうしよう」と先に思ってしまうからである。

そればかりか女性だからしてはいけないことがたくさんありすぎ、ただでさえ萎縮しているのに、恋愛問題まで「下品なこと」として取り扱われたので、自然に性的本能をタブー視するようになっていた。

頭では「女性も自分の本能を尊重しなければならない」と考えながらも、実際に私の性的本能を尊重するためなら、どんな行動をとってもよいかというと、それは不可能であった。

しかし、結婚してみると性的なことが即ち生活であった。何か上手くいかないとき、その理由がどうしてかというと性的なことに帰結された。

お腹が空いた時の解決策はご飯を食べることしかなく、排泄したい本能は排泄をしなければ解決がつかないように、性的本能もとにかく発散させ、道を誤らないようにしなければならない事実を、私は勉強しながら悟った。それをただ、自己修養を通じて内的省察に変える人たちが成人君子で、絵や音楽もしくは文学で表現する人たちが芸術家なのである。

でも、大部分の人たちは自分の性的本能を抑圧する。何故かというとそれを表出すると危険だと考えられるからだ。私も例外ではない。率直にいって私は結婚をしても、性の本能を表出することをすごく拒んだ。しかし、ある瞬間にその重要性を知り、私から変えてみようと思った。

久しぶりの休日の夜、子どもたちを寝かせテレビを見ていた。その番組には私が見てもきれいな女性タレントが出ていた。横目で夫を見ると、彼もやはりその女性を気に入っている様子だった。夫に聞いた。

「あなた、いまでも私はきれいかしら。」

夫は急に慌ててテレビの画面から目を反らした。

「もう、うんざり。またその話？」

故意に、いや、ためらわずにさっと投げた言葉が無愛想に出てきた。聞き方によっては気分を害することにもなる言葉である。しかし、私は無視しながらくさびを差すように言葉を続ける。

「私があの女性より魅力的でなかったら、いつでも正直に言ってくださいね。」

こうなると夫もきれいだと言わざるを得ない。

「ああ、君の方がきれいだよ。でも、もし僕がきれいじゃないって言ったらどうするの。」

「私の努力が足りなかったって反省して、一生懸命、きれいになるようにがんばるの。愛する夫を他の女性に取られるわけにはいかないからね。」

この程度のことをいうと、夫はすぐに「そうか、最近ちょっと妻の相手をしていなかったなぁ」と気が付く。そうなると、その翌日から電話もよくするし、Eメールも送るし、何の用事もなければ、なるべく早く帰宅しようと努力もする。私がそんな話をする時は、ただ文句ばかりを言っているのではなく、夫婦関係、家族関係に赤信号を感じていることを知っているからである。夫がこのようになるまでには、正に16年の歳月が必要であった。

夫と一緒に暮らすうちには、ちょっと疎遠にされた気分になる時もある。大部分の夫婦はそのまま知らん振りをして、その時をやり過ごす。「言っても仕方ない」という考えでそうする場合もあるし、先に話しかけると自尊心が傷つくからそうする時もある。しかし、「夫が先に気を使ってくれるだろう」と待っていたら、結局は外見だけの夫婦になってしまったというケースが意外に多い。

夫と性的なトラブルがある妻の満たされない性的エネルギーは、全て子どものほうに移る。子どもに行き過ぎたスキンシップをしたり、子どもの頬を撫でたり、キスしたり、子どもの行動に一々統制をかける母親は、不満足な性的エネルギーを子どもに向けているのである。そんな母親のそばで育てられた子どもは、マザコンになり、成長して結婚しても母と妻を同一視しやすく、性的な関係に問題が生じる可能性が高い。医学的には、勃起不全症は、その深層心理にある母親との密着の過多から来ると診断されている。

私の抑圧された性本能が、ひょっとして私の息子の勃起不全症の原因になりうるなんて。これは悲惨で、怖しいことである。

外来患者の子どもの治療が終わる頃になると私が必ず母親に言う言葉がある。

「二番目のお子さんはお作りになりますか？　それがこの子のためにはいいのです

が。」

すると多くの母親が、「そうですね…。私は夫に似た子どもをまた産みたくはないのですが…」と答える。そうすると私は、「ああ、この母親もよければいい式の暮らしをしているな」と考え、もう少し深い質問、たとえば、夫婦関係をどのくらい持ちますか、まで尋ねる。

女性の性的関係を見ると、その女性の結婚生活の本質がわかる。セックスを意図的に回避することで夫を困らせるタイプもいれば、義務的にはするが、する度に屈辱的だと思う人もいる。セックスレスの夫婦や義務防御戦の人たちは、普通は「セックスをしないと、何か問題あるのですか？」というように反問するが、夫婦の間にこれ以上に大事なことはない。

性関係を持とうとするには、とても深い親密感が必要である。逆に言うと、嫌いであれば性関係を持つのは、難しいということである。それ故、夫婦仲がよくないと、真っ先にセックスを拒んだりし、そうしたとしても屈辱的に感じるようになるのである。

夫との性関係の重要性を知らないで、いつまでも忌避する母親たちに、私は次の処方を下す。

「あなたのせいかもしれないですよ。あなたのご主人が薄情で冷淡に見えるのは、あなたが開発させてくれなかったから、そうなったのです。」そうすると、母親たちは「えっ？何ですって？先生までそのようにおっしゃらないでください。同じ女性なのにどうしてそんなふうにおっしゃるのですか？」とものすごく悔しそうにする。

しかし、よく考えてみよう。「どうして女が･･･」と考えるところには、自尊心も何にもない。無意識的に自ら男に縛られていると考えているから、性的本能をどう解決するかを考えずに、自分が愛されていないことばかり、悔しい感情についてばかり、話すのである。

性関係が上手になるためには、夫との精神的な親密度がベースになければならない。しかし、世の中、努力なしに得られるものは一つもない。親密度も同様である。

私はm親密度を高めるための最初のボタンは、夫を自分とフィーリングが通じる人にすることだと考えている。それは夫に格好いい洋服を着せるなどの外的な装いとは縁遠い。女性はなぜ外見がステキな男性より、お茶を一杯一緒に飲みたくなる雰囲気ある男性に惹かれるのかを理解させなければならない。

親族の紹介で会った夫とはじめて恋愛をした時、一緒に「パリ-テキサス」という映画を観に行ったことがあった。私はお互いに相通じることのできない孤立した人間像が悲しくて涙が出たが、夫はいびきをかきながら寝ていたので唖然とした。

「本当に変わった人だ。」

ところが、夫は今も戦争やアクション映画でないと映画を観ようとしない。特に、メロドラマはいやがっている。しかし、私はメロドラマが好きで、芸術映画も好きな方だ。「夫は夫、私は私」と諦めることもできるが、私は絶対に諦めない。代わりに、夫の趣向と私

の趣向の中間にある映画を選ぶ。

この前、「チィファソン」という映画の前売りチケットを購入した後、「チケットが惜しいから一緒に行ってみようよ」と夫を誘った。幸いその映画は、私も夫も満足しながら鑑賞した。お互いのフィーリングが通じたのだ。

お互いに何かを共有しあい、気持ちが通じることほど親密感が高められることが、他にあるだろうか。夫妻で趣向が違うから、各自に楽しもうという考えで諦めると、その分二人で共有できるのも少なくなる。そうすると、お互いに一番近くいながらも一番遠い人になってしまう。夫と、子どもかお金のこと以外に共有できる話のもとを広げていくことが、重要な理由はそのためである。

宗教生活を一緒にしたり、スポーツを一緒にしたり、我々の夫婦のように映画を一緒に観たりすると話をする機会が増える。このように話し合うことで、性生活に対する不満も自然に話すことができる。

そのような不満を話すチャンスをつかんだら、夫に自分が感じていること、感じたいことを積極的に説明しなければならない。背中をみせている夫を隣に置いたまま、辛い思いをしたり泣いたりするより、むしろ一言でも話しかけるのがよい。そして、夫と常に性的な緊張感を維持させながら必要に応じては、性生活も積極的にしなければならない。

我々女性たちは「どうして女性から…」という考えで、自分の性を先に主張することに非常に恥を感じるように育てられた。その事実を認めなければならない。感情と欲望に率直になれば、性生活の楽しみもわかるようになるし、喜びもわかるようになるし、欲望があることも実感できるようになる。

夫たちが白馬に乗った王子様のように、妻が欲することを真っ先にわかってくれることを期待しないで。男性たちは生まれつき女性よりも感性が鈍いので、絶対に女性の繊細な感情はわからない。特に韓国の男性は、感情的になってはいけないと抑圧されながら育てられ、感性は大体鈍く無知である。だから、女性たちがより積極的にならなければならないのである。

生活を共にしていると、よその男性が自分の夫よりステキに見える時がある。しかし、そのことで悩んだり、あわてたりする必要はない。ただ、自分の夫を変化させるための信号なんだと気づけばよい。

私も周辺に男性が多くいて、たまにそのような気分になることがある。しかし、私は他の人がより格好よく見えるのを、私の心の中で夫に満足できなかった部分がある信号として受け入れる。そしてそれが何かを深く考え、解決しようとする。私の感情を夫に正直に話し、要求することは要求する。

大勢の女性は、夫との関係が上手くいかないとそれを我慢し、問題をなくそうとするが、私はそれよりも二人で力を合わせながら、お互いに幸福に生きていくための方法を探した

方がよいと思う。そうすれば子どもを順調に育てることができる。家庭を守るためには一方的に我慢し犠牲になるより、葛藤を解決しながら究極的に二人一緒に幸せになる方がよいのではないか。

セックスも同じだ。他の問題、例えばお互いに疲れているとか、忙しいとか、そういうこともないのにセックスするのがいやだとしたら、赤信号だと受け入れ、夫との関係の改善のために努力しなさい。もともと老いても減らないのが性的欲望である。それを抑えないで。抑えながら性的欲望がないと自分にうそをつかないで。

子どもの最高の性教育の教科書は「本能を充実させた父母」である

「ママ、ママ。チンコに毛が四本生えるためには、中学校の2年生にならなければならないの？」

久しぶりに父親と一緒に銭湯に行ってきたキョンモが尋ねた。

「どうして？僕も早くチンコに毛が生えてほしい？」

「うん。パパのように毛がたくさん生えると、大人になるから。」

小学校5年生のキョンモは、この頃、性に対する好奇心が旺盛である。銭湯で他の人の身体をじっくり見てきてから、ママの腋毛を見せてというくらいだ。他の人が聞くと可笑しく思われるくらい、性に対する具体的な質問も全く平気にする方だ。私たち夫婦は子どもたちが性的好奇心を十分に表現できるように自然な雰囲気を作るように気を配っている。

子どもを、特に息子を育てる母親たちは、男の子の性の好奇心をどう扱えばよいかという問題に一度くらいはぶつかる。満3歳になっていない子どもがチンコを触りながら変な表情になって遊ぶのを見て戸惑いを感じ、小学校に入ってから何かの本を見たのか、赤ちゃんが生まれる過程をあまりにも具体的に聞かれることで、困った時もある。子どもがチンコに手を当てる程度でも驚く母親さえいる。

キョンモも幼い時、少しチンコに触ることに夢中になったことがあった。触るとチンコが段々大きくなり、性的な興奮が感じられるからだろう。私はその時「キョンモ、チンコが怒ってるね。どうしてかな？」と聞きながら、その状況を冗談で免れた。他の人に見せると恥ずかしいから他の人の前ではしてはいけないと注意をし、そのエネルギーが他の所に発散できるように新たな関心を提供した。

子どもが性に対する話をする時の、父母の反応はとても大切である。チンコを触ると不思議にいい気持ちになるのに、母に「それはしてはいけないことなの」と叱られると、子どもが起す内的葛藤はどれほど大きいだろうか。チンコを触る息子に対して、自分でも知らないうちに敏感な反応を見せたり、興奮したり戸惑いを感じたりする母親は、自分が性的な抑圧の状態に陥されているのかもしれない。

性教育は、性的な抑圧のない父母のもとで育てられたら、わざわざ受ける必要もなく、自然にできることだ。性本能を抑圧した父母のもとで育てられた男の子は、余計な好奇心

を働かせ淫乱物を探したりするし、女の子なら純潔のコンプレックスを抱き人生を送るのに大きな足かせになったりする。夫婦が抱きあったり、キスしたりする姿を自然に子どもに見せることだ。そうすれば子どもの性教育に悩む必要は絶対にない。

子どもに最高の性教育の教科書は、本能を充実させた父母であることを覚えておこう。

おしゃべり、これほどよいことはない

子どもを出産してから1年。私は当時、人生って空しいなと思いながら辛い日々を送っていた。子どもと職場を同時にやりくりすることは、こんなに難しいことなのか。全てを止めたいと思った時が何度もある。

すると、ふと他の人たちはこんな状況をどんなふうに耐えながら生きているのか疑問に思うようになった。特に男性たちでさえ生き残れない医科大学に通いながら、結婚もして、子どもも産み、職業を持っている女性の先輩たちは、何か特別なことでもあるのかなと思った。

私より 10 歳上の先輩を訪ね、ぶしつけにも自分の身の上について愚痴をこぼした。子どものせいで大変で、夫は全く手伝ってくれないし、さらに病院で子持ちの女性が働くことがどれほど他人の顔色を気にしなければならないか、こんなことならむしろ止めた方がいいのではないか…などを取り止めもなく喋った。気難しいと言えば気難しい相手なのに、そこは私のこと、感情がたかぶっていたせいで、そうしたらしい。先輩は口元に微笑みを浮かべながら暖かい視線で私の話を聞いてくれたあと、決定的なアドバイスをした。

「シン先生、それって一生背負っていくものではないでしょ？長くても3年よ。3年だけ死んだつもりで我慢してみて。いったん我慢したら、その後は『あの時は、よくもこなせたなあ』と考えられるようになるかもよ。」

その話を聞いた途端、いきなり憂鬱であった現実に一つの希望の光が差したようであった。長くても 3 年か、先が見えないくらいずっと続くだろうと思っていたこの状況に、3年たったら終わりがある、という言葉に勇気をもらった。3 年だけ我慢すれば、子どもの傍に母が付き添いながら育つことはおしまいで、子どもの面倒を見ることも楽になるという。その程度ならば出来そうであった。

そして、先輩は自分の話を聞かせてくれたが、呆れるほど大変だったらしい。夫の両親と一緒に暮らしていたが、伝統的な価値を尊重する人たちだったので、朝食を取るための仕度をきちんとしなければならなかった。女中を雇うということは考えられなかったし、夫が仕事を手伝ってくれないのは、あまりにも「当然」のことであった。

しかしながら、その先輩は全ての仕事を受容しながら堪え、今は自分の居場所をきちんと確保していたのだ。

先輩との話が済んだあと、帰りながら私は自分が本当に慰められた感じがした。そして、「しゃべってよかった」と思うようになった。私の話を明らかにすることで私も私の現実を客観的に見ることができ、先輩が生きてきた今までの話を聞きながら「私だけがこんなふうに苦しんでいるんじゃない」という心情的な連帯感を持つことができた。そして、結論として「絶対に一人で悩んではだめだ」という生き方のノウハウまでわかったのだから。

精神科に来る母親たちをじっくり見ていると、友達がいない人が結構多い。大体、自分の問題があまりにも深刻で、友達を作る余裕がないのである。そのような母たちに私は友達を作ることを勧めている。友達を作り、自分の苦しい事情などを打ち解けて訴えることが精神の健康に役に立つ。

ある世論調査によると、重要な問題を相談できる友達が５名以上いるという人が「とても幸せだ」と言う確率は60パーセントを上回るそうだ。私が知っているある専業主婦は、１ヶ月に１度か２度くらいは友達に電話をかけ、１～２時間ずつ自分の話をさらけ出す。そして、「フウー、やっと生きられる」という。その母親はストレス解消の手段として、おしゃべりをうまく利用しているのだ。

おばさんたちのおしゃべりは、母になることの辛さを緩和させてくれる装置なのだ。昔のおばさんたちが村の井戸や共同の洗濯場に集まり、笑ったり、騒いだりする健康な姿は、どこにいったのだろうか。夫の実家の悪口、夫の悪口、子どもの悪口をいいながら、深刻なことも一つのハプニングのように解消して家に戻ったら、再び辛いことがあっても乗り越えられるのではないのか。

面白い話だが、子どもを育てるという理由一つで、母親たちはよその土地でも母親同士、すぐに親しくなれる。男性たちが集まると軍隊での話、サッカーの話で盛り上がるように、女性には子育ての話がそうである。私は外国で言葉の通じない女性たちと育児の問題で２時間も喋ったことがある。国籍と人種を問わず、子どもを育てるということは、女性にはかなり特別な関心事なのだ。

婦人たちのおしゃべりを「つまらない子ども自慢」であると断言する人もあるが、決してそうではない。子どもの話を他の人たちと交わしながら、裏面では「私がこのように初めて経験することを、あなたも繰り返しているのね」ということを確認したいだけなのである。

育児の経験は、面白くて楽しいことだけではない。特に最初の子を育てる時は、知らないことも多いし、疑問に思うことも多く、私がやっていることが正しいかどうか、このようにしてもいいのか、絶えず確認したくなる。私が小児精神科医で、夫が小児科医である我が家でも、子どもが少しでもおかしいと父母や友達に「これで大丈夫かしら？」と聞いている。

憂鬱に陥り、ささやかなことで悩んでいる母親たちをみると、大体の場合、子どもを育

てる過程を誰かと共有していなく、内向的な性格をしている。育児経験を喋りながら歩き回っているような母親の子どもは、大部分が健康である。彼女たちはその分、育児の妙味と変化などを体験し、そこにはまっているという意味だ。それもまた、育児に没入する過程なのである。

その場合、どんなつまらない話をしても重要な話のように聞いてくれ、うなずいてくれる友がいれば最高だ。同じ経験を共有できるならもっと良いだろう。そうすると喜びが2倍になり、悲しみと辛さは半分に減るだろう。子どもを育てる独特な経験を共有できる他の母親たちとのよい関係が結ばれることは、そのために大事なのである。

友達を作って自分なりのコミュニティを形成している母親は、大きな挫折でもないかぎり、すぐ憂鬱にはならない。基本的に他の人も大して変わらないという事実を知っていて、少し気分を害したことなどは、すぐに解消できてしまうからだ。

一つ気をつけないといけないのは、おしゃべりの相手は、よく心が通じた人で、自分の噂を他所に撒き散らさない、自分におって有益な人を選べということだ。ちょっとした不平を言ったのをオーバーに膨らませて宣伝したり、我田引水のように解釈したりする人だったら、おしゃべりでストレスを解消するどころか、ひどい目にあうかもしれない。

早期教育の強迫観念に陥っていた母親がいたが、その原因は性格の変わった隣に住んでいる夫人であった。子ども同士が親しく自然に出入りするようになったが、時間が経つとともに、自分の子の自慢と他の子どもの教育に対する干渉が限界を超えるほどひどくなった。その夫人は、他者が自分の生き方と違うようだと、「いったい何を考えているのかしらねえ？」とか、「子どもをどう育てるつもりでそうしているの？」といい、まるで姑のように叱るというのだ。

問題はその母親の心が弱かったため、相手の行動が正しくないと思いながらも、ついつい一緒に付き合っていたことである。その母親に私が提示した解決策はただ一つである。

「もうこれ以上一緒に行動しないで、いやだと言うことですよ。」

そうして私は、その母親に隣の夫人と付き合わない口実を積極的に作ることをすすめた。姑が来ているとか、子どもの具合が悪くてとか、外出しないといけないなど、口実は探せばいくらでもあるではないか。もし、隣の夫人が「どうしてなの、つき合いが悪いじゃない」と言って来ても構ってはいけない。そんことをして再びその夫人と一緒に行動し、子どもを台無しにするわけにはいかないからだ。

人間というのは、誰でも他の人と同質感と連帯感を持つことで、安定した楽しみを探すことができる。しかし、「なぜ同質感を持たなければならないのか」を知ることが先だ。間違った道であることを知りながら、他の人が行くから「仕方なく」ついていく必要はない。

隣の夫人との関係こそ、よく使えば薬で、間違って使えば毒なのだ。それをどう使うかは母親自身に任せることだ。

しかし、それでも母親たちにとって、おしゃべりは最高の感情の排出口であり、情報の

宝庫である。自己信頼感と明確な育児観があれば、なるべく隣人女性の長所をみながら一緒に行動する方がよい。隣同士で親しくなり、共同育児を始めたという新聞に掲載された人たちを羨ましく思うだけではなく、自ら心を開き、近寄っていく積極的な姿こそ必要なのだ。

「おしゃべり、これほどよいことはない」と言う言葉はうそではない。特に子どもを育てている母親たちは、この言葉の威力を実感することが多いと思う。私は今日もおしゃべりを懸命にする。おしゃべり上手なおばさんだねとからかわれても気にしない。私はむしろおしゃべりが下手なおばさんが心配だ。本当に。

２番目を産むのも一つの方法である

グゥォン。

台所の掃除でしばらく忙しくしていると、リビングルームの方からすごい物音がした。何が起きたのかしらと思いながら息を切らせて駆けつけると、大人のこぶし二つ分の大きさの石が投げられ、床が窪んでいた。子どもの面倒をみてやると言っていた夫も書斎から駆けつけて来たところをみると、しばらく子どもを放って、自分の仕事をしていたのは明らかだった。私たちはどちらが先にと言うこともなく叫んだ。

「ホン・キョンモ君！」

しかし、事件現場の傍には驚いたことにキョンモではなく、チョンモが立っていた。キョンモが行ったりきったりしながらベランダに集めておいた石ころの中で大きい石を床に投げたようだ。それまでこのような行動はキョンモの専売特許だったのに。チョンモは常に母親と父親の言うことをよく聞く、素直でやさしい子だった。しかし、とうとうチョンモが我々を裏切ったのだ。

面白いのは夫の反応であった。キョンモの時は「はあ。全く」と言いながら書斎にもどったが、チョンモを捕まえて「チョンモくん、君は、何故いたずらをするの？」から始まり「君がやったことがどれくらい悪いことなのかわかっているのかい？」まで、目を赤くしながらの説教が始まった。それを見ていたら、キョンモのする行動の一つ一つに泣き笑いしていた何年かの前の私の様子が、ちょうどあんなふうだったのかなと思い、妙な気分になった。

「大変だ。チョンモがなぜあんなに乱暴になったのだろう？」

「乱暴なんて。子どもはみんなそうでしょう。最近、チョンモは何かいたずらをしてみたくなったのかも。」

「全く、チョンモまであんなに言うことを聞いてくれないとどうする？ずっとあんな調子だったらどうするの。」

「心配しないでよ。しばらく経つとすぐよくなるから。キョンモもよくなったじゃない。」

そうだ。もし昔、キョンモがそんなことをしたら、私は夫よりもっと子どもを叱ったかもしれない、いや何日も布団の中で塞ぎ込んでいたかもしれない。そして、何故子どもが言うことを聞かないで同じ行動を繰り返すのか、私が子どもを間違って育てたのかしらと考えて落ちこんでいたかもしれない。

しかし、チョンモが事件を起こしたときには、焦る気持ちより「そういうこともあるさ」という大らかな考えが先に浮かんだ。私は夫に「子どもが環境から受けるストレスが、自分の容量を超えると全く見えなかった退行行動を見せるのよ。急にウンチを我慢できずに漏らしてしまったり、今までうそをつかなかったのにうそをついたりするし。そして、それは子どもの本性ではなく、しばらくすると通過していく成長期の熱病みたいなものなの。大丈夫。すぐよくなるから、」という説明を長くしながら、「私はキョンモを育てたことで結構色々と学んだな」という気分になった。

しかし、もし二番目を産んでいなかったら私がこのように余裕のある母性を持つことができたのか？答えは100パーセント、NOである。

実際、チョンモは私一人で家族計画を立てた結果だった。上の子のように無計画に作ったのではなく、本気で私が願って意図的に作ったのだ。何よりもキョンモのためであった。一人っ子で寂しく成長するキョンモをみながら、ある日突然、下の子どもを作らなくてはと思い始めた。キョンモを育てるうちに身についた母性は、私をそのように変化させた。

もちろんチョンモを産む前に葛藤がなかったわけではない。大きく私を悩ませた問題は二つあった。一つは育児という、懲り懲りした日常にもう一度耐えられるのかということと、もう一つは二番目を産むとこれから夫とは縁を切ろうとしても切れない立場になり、本当にこの男ともう一度縁の糸を結び、末永く生きられるかという問題だった。

しかし、本当に不思議に思うが、辛いだろうと覚悟していたその懲り懲りの日常が思ったほど辛くなかった。キョンモを通して山千海千になり、さらに空中戦まで嘗め尽くしたせいなのか。キョンモを育てる時は、息をする音が違っても体温計を持って走り出した私だったが、チョンモの時はただ辛くて感じられなかった育児の喜びをたっぷり味わえる機会が作られた。上の子の時は毎日新しく訪れる大小の経験をただ解決していくのに精一杯だったが、二番目の時はこれをゆっくり、しみじみと味わうことができたのだ。

そして、キョンモ一人だけを育てていた時は、私の全ての関心がキョンモにいくしかなかった。子どもの立場からは、適当に父母の目のないところで遊ぶ面白さもあった方がいいのに、常に父母の全ての関心が自分に注がれるから、キョンモは無意識的に負担になったり不安だったりしただろう。私は私でキョンモが少しでも期待に外れることがあると震えたが、チョンモを産んだ後は、一番目にいく関心が二つに分かれることで、子どもの過ちに寛大になっていくと同時に、確実に育児が楽になった。二人になったら、心配が増え

るだろうと思ったが、むしろ半分に減ったのだ。

「夫と末永くそいとげなければ」という悲壮さも、やはり二番目を産むことで、すぐ解決された。呆れたことに、チョンモを産んで初めて抱いた時、一番頭に浮かんだことが「夫に強壮剤でも飲ませないと」ということだった。子どもがキョンモ一人だった時、私は想像のなかで逸脱（離婚）を夢見ていた。夫とトラブルが生じると、知らないうちに、「あなたが居なくても私一人でキョンモを上手く育てながら生きていける」という考えが、急に込み上げてきた。どうせキョンモを育てるのに役に立たない夫だったし、私の生活力で子ども一人を育てるくらいはそんなに難しくないと思った。

しかしチョンモが生まれてから、全ての状況が完全に変わった。私一人で上手く成し遂げられるといった自信はいつのまにか「私一人でこの二人をどうやって･･･」に変わったし、すぐに夫の存在が今までと違って、大きくて大事なものとして刻印されたのだ。卑俗な言い方をすると「この人が私より早く死んだらどうしよう」ということまで考えた。子どもには父親が居なければならないという、そんな社会的な固定観念ではなくて、本当に現実的な、危機感がひしひしと感じられた。

最初は、そんな私の気持ちが恥ずかしくプライドが傷ついた。そのような心を夫に気づかれないようにと頑張った。

しかし、時間が経つとともに、何となく重たかった気持ちがだんだんと、真心に変わった。以前とちがって夫に関心がいき、以前なら皮相的にしか見ていなかった夫の行動の一つ一つから気持ちを読み取ることができるようになって、その中にいる夫という人間を素直に理解しながら受け入れられるきっかけが、一つ二つと増え始めたからであった。

夫は今でも気づいていないに違いないが、結局、チョンモの誕生をきっかけに、私たち夫婦はやっと精神的な連帯感を持った。言葉だけの夫婦ではなく、真心でお互いのために慈しみ合うそんな関係になったのである。

そして、その変化は自然と夫婦中心だった家族の文化を、子ども中心に変えることに繋がった。子どもが二人になってから私たち夫婦、特に夫は、やっと子どものために自分の生活パターンを完全に変え始めた。それだけでなく、夫婦が気楽に外出できる機会もなくなった。ベビーシッターのおばあさんがいてくれるが、じっとしていられない子ども二人を預けたまま、その時間を楽しむ気持ちがなくなった。子ども一人を仕方なく連れていた昔とは、次元の異なる生活が始まったのだ。

物質的であれ精神的であれ、自分自身に投資されていたことが全て二人の子どもに移るようになった。要するにキョンモ一人の時は、予想外のお金が手に入ると子どもを預けて夫婦で映画を観にいったが、チョンモが生まれてからは、家族揃っての外出をしたり、二人の子どもが遊ぶおもちゃを買いに行ったりするようになった。

しかも、そのような新たな経験をすることは決して悪いことではなかった。面倒で神経を使う仕事が増えたにもかかわらず、夫婦二人の暮らしや子ども一人と暮らしていた時よ

りずっと楽しく愉快であった。

毎回、同じ場所に出かけても二人の子どもはいつも新たな様子を見せてくれたし、その様子を見るだけでも、以前とは違う喜びを味わうことができた。

病院に訪れる母親たちを見ていると、言わなくても子どもが一人か二人か見当がつく。子どもの面倒見が違い、私が何かを言う時、それを受容する態度も違う。何よりも二番目を育てている母たちは、子どものために大変だとか辛いとか言っても、子どもと一緒にいる時間に没入しそれを楽しんでいるという感じを受ける。夫が憎いといいながらも、彼が一生の同伴者である事実を否定しない。彼女たちが夢見る未来の青写真には、常に幸福な家族の姿がある。

だから、私は子どもを育てる問題に苦労していて、夫との関係が円満でない辛い母親たちに「二番目を産むこともひとつの方法」であるとアドバイスをしてやる。多くの人たちは「一人でもいい」というが、私はためらいなしに「二人に較べることはできない」と思うからだ。明確な解決策が見えない時は、正面突破が最善の方法である。そして、その方法は地獄を天国に変えられる魔法の妙薬となるかもしれない。

２番目を計画する時、これだけは銘記しなさい

1　年子は避けること

出産後、身体が正常に戻るためには、最低限１年はかかる。３～４年空けるのが一番よい。年子を育てる母親は、一番目を育てながら学ぶことによって母性が成熟する前なので、二番目を産むメリットが非常に減ってしまう。

2　一番目を失った場合、６ヶ月の「哀悼の期間」を過ごすこと

初めの子どもを死産したり、生まれて１ヶ月以内に世を去った場合、少なくとも６ヶ月以上の「哀悼の期間」を過ごした後、二番目の子どもを産まなければならない。そうしないと、二番目の子どもを一番目の代わりにし、過保護にしてしまう確率が高い。

3　夫が正しい「父性」を育てることができるように助けること

最初の子どもは、夫にとってもあなたにとっても負担であり、義務である。二番目は最初の子どもと確実に違ってかわいくて仕方ない。二番目のみ噛んだり、撫でたりする夫が意外に多いのはそんな理由である。それをみて子どもを愛する夫がありがたく感じるかもしれないが、夫が二番目のみ「差別待遇」して愛するのは危険だ。故に、夫に一番目と二番目を均等に愛することが正しい父性であることを知らせる必要がある。

「ストレス」という敵を相手にする方法

たまには　ほんとうに　たまには
私が　私を　慰める必要があるよ

大事ではなくても　世の中が
終わりのような感じを味わう時

人にはまだ晒されていない　私の過ちと
弱点が　私を眠らせないから
だれにも　顔を見せたくない
恥ずかしさに　扉を閉じて　隠れたい時

大丈夫　大丈夫、がんばって
これから　よくやったらいいよ
少し照れくさいけれど　私が私を慰めながら
静かに　鏡の前に　立つ時があるね

私が　私に　もうちょっと　暖かく寛大になる
丸い心、にっこり笑ってくれる心
他人に　してあげる前に　私が　私に
先にあげる　慰めの贈り物

―李海仁の＜私を慰める日＞―

夢中になって母親の仕事、妻の仕事、医者の仕事をしていて、ある瞬間ふと「ああ、疲れた」と感じた時、読んでみる李海仁シスターの詩である。この詩を読んでいると、ひどくいたずらばかりしている子どもと、妻の辛さを分かってくれない夫、忙しい病院の仕事のせいでぼろぼろになっている心、が多少は慰められる。そして、私が今まであまりにもあたふたと走ってきたことを反省しながら、もう限界だなと感じる。私自身を顧みながら、自らを慰めながら、エネルギーを充電させる時なのだ。

そういうとき、私は一日を空け、何の約束もしないで、携帯電話と電話はしばらく電源を切ったまま私の部屋に一人で閉じこもる。そして、好きなクラシック音楽を聴く。目を閉じて椅子に身体を任せながら今自分の問題が何なのか。何故鋭く神経質になっているの

か、一つ一つ分析してみる。身体的な問題なのか、他人との関係からくる問題なのか、私の心中の劣等感と恥辱感から生じた問題なのか、をじっくり考えると、「ああ、だから私がこんなふうに憂鬱なのか」という判断ができる。それと同時に「それならば、ああしなくては、こうしなくては」という解決策も浮かび上がる。

ストレスというのは、外部から過度にくる刺激の総体なのだ。お酒を飲みながら遊ぶことは他の種類の刺戟を受けて、沈んでいた気分をよくすることには役に立つが、問題の解決には別に役に立たない。問題を解決するためには、問題そのものと問題から発生した感情を分離することが必要である。

だから一人でいる時間が必要なのだ。一人でいることで嫌な気分からしばらく抜け出す必要がある。中国のある小さな村では毎日時間を決めずに鐘が鳴る。すると、老若男女みな仕事の手を休めて、何分か続くその静かな時間に、人々は静かに心の音に耳を傾けるのである。敢えてこのような機会を作らなくても、いくらでも自分自身を省みることはできる。人間の実存と疎外に関する作品で有名なカフカも「部屋を去る必要はない。そのままテーブルに座り、耳を傾けなさい。静寂に学んで。」と言ったではないか。

「一人で居る」時間を終えると、沈んでいる感情を高めるための多様な戦略を動員するタイミングだ。一番簡単な方法はもちろん友達とのおしゃべり。一時間も二時間も久しぶりに会った友達に夫の悪口、育児の問題、夫の父母の問題などをあれやこれやしゃべる内に自然にストレス解消になる。私の問題を曝け出しながら、感情を噴出させ、友達はどのような問題で悩んでいるのか、どんな解決策を持っているのかを聞きながら、現実の問題と戦う力をもらえる。

そうした後は、私自身に娯楽を提供する。その時々で、私の心を慰めてくれる本を探して読んだり、印象の良かったオペラやミュージカルの音楽をもう一度聴いたりする。

この前、『没入の楽しみ』という本を面白く読んだ。退屈な日常の生活から喜びを探したほうが幸福になることができる、というのがこの本のテーマだが、私は特に「どれぐらいストレスを感じているのかは、私たちに実際に起きた事件よりも、私たちがその事件への関心をどのように治めたかに左右される」という言説に膝を叩きながら共感した。

実際、ある状況に対する客観的で絶対的なストレスの強度はない。10 万円で満足できる者がいれば、1000 万円でも足りないと感じる者がいるように、同じ挫折の状況でもある者はすぐ立ち直り、ある者は傷が深く立ち直れない。それは体質的に生まれつきの感情の調節能力が異なるからだが、普段、ストレスを積極的に管理してきた者とそうでなかった者との差もある。

ストレスは受けたらすぐに解消して、溜まらないように管理しなければならない。急スピードで回転する 21 世紀の現代人たちが、ストレスを避けることはどの道できない。そして、ある程度のストレスが、一定の力を提供する場合もある。問題は、ストレスが続けて溜まる状況だ。蓄積されたストレスが人体に害になる多物質を分泌して集中力を落とし、

頭痛を起し、癇癪を起すということは誰もが知っている常識である。

特に母親が全ての仕事からストレスを受け、癇癪を起し、憂鬱になったら、その影響はそっくりそのまま子どもに移る。生きていることが退屈で面白くないという子どもは、情緒的に問題があるか、もしくは母のストレスをそのまま受け継いだと思えばよい。

この頃、私は、夫婦一緒にスポーツダンスを楽しんでいる人たちが一番羨ましい。主婦が受けるストレスの半分以上は、夫に起因するのだから、スポーツダンスのように夫との身体的な接触が必ずなければならない運動ならば、ストレス解消はもちろんのこと、夫との情緒的な連帯も一層高められるからだ。

若い母親たちがジャズダンスやヨガ、テニス、バドミントン、水泳など体をたくさん動かす運動を通して、積極的に自分のストレスを解消してしまい、体力管理もしているのをみると、自分を管理する面では旧時代より確実に賢明だと考えられる。ある若い母親は、生理の十日前くらいになると癇癪が増え、憂鬱症がひどくなると自ら診断しながら、抗鬱剤を処方してくださいと堂々と話す。(参考までに、最近の抗鬱剤は副作用がほとんどない。)

私はそのような母親が絶対に意気地がなく無謀だとは思わない。むしろ自分の悲しみに陥り、子どもと一緒に憂鬱の日々を送るより、百倍は賢明であると思い、拍手を送る。若い世代のそんな自己愛にただ驚くばかりだ。

「ストレス」という敵は、そう簡単な相手ではない。しかし、主婦のストレス、夫の父母のストレス、子どもの教育のストレス、夫のストレスのように、名前も多様で各種のストレスを上手く解消し、自分を慰める方法を積極的に探せば、思いもしなかった「生きる面白さ」を味わう幸福を享受することができる。

私のストレス解消法

幼い時から本を読むことでストレスを解消してきた私は、いまだに読書が一番効果的なストレスの解消策である。今感じているのは女性だから受けるストレスだと思うと、『ヒゥロリの選択』、女性学者朴ヘラン氏の著作『生の女性学』、『変更からの一年』、『信じるほど成長する子どもたち』、『年を取ることについて』のシリーズを読む。朴ヘラン氏はいつか必ず一度は会ってみたいと思うほど、私が慰められている著者である。本を読む度に彼女の率直さと堂々とした態度に頭が下がる。株で不動産に投資し、儲けている他人をみて、自分が出来ないのが悔しくなるような時は、『金持ち父さん、貧乏父さん』、『富んだ奴隷』を読むし、悲しい時は、金ヨンランの詩を読む。今も「泣いて血を吐き、吐いた血をそのまま飲み込む」という詩句が思い出されるが、私は本当にその詩句が表現しているほど絶望的だろうかと反省する。生活にくたびれて日常が貧弱になったと思う時は、中国の昔の名詩集『古文真宝』や林語堂の『生活の発見』を読む。

さらに、私を慰めてくれるのは音楽である。私は強く見えるけれど臆病で、神経質な方である。列車の青龍号も乗れないし、暴走族が「ウィーン」という音を立てながらビュン

と通っていくだけでも、しばらくは動けなくてじっと立ったままでいる。だから理由なしに憂鬱になる時も多い。

しかし、音楽は否定的な心を肯定的に変えてくれる大きな力を持っているようだ。映画「ショセンク脱出」をみると、モーツアルトのアリアを聴いて囚人たちが幸せを感じる場面が出てくる。私は音楽はそのように無味乾燥で退屈な日常に希望を与えてくれると思う。ショパン、モーツアルト、バッハ、みんな好きだが旋律が美しく、だれをも暖かく迎えてくれるようなバッハの音楽が最も好きである。「私は悲しくない」と無理やりに涙をこらえても、音楽を聴くとその悲しい感情が洗い流され、泣き出してしまう。私は音楽療法の効果を信じている。

しかし、読書もそうであり、音楽を聴くこともそうだが、体を少ししか動かさないので、体力も補充するため水泳、ランニングなど体を動かす方法に変えてみようと思うが私には無理である。やはり各自に合ったストレスの解消法は、それぞれのようである。

夫のことが嫌だったら、こんなふうに変えてみては

最近、私の日課に以前にはなかった仕事が一つ増えた。それは夕食が済んだ後、大体ある程度家事を終えた夜 10 時ごろから一時間、夫と一緒に延世大学の校庭を歩くことである。今年に入ってから、目立つほどにお腹の出たことを気にしていた夫が、やっと固い決心をし、真夜中に運動を始めたのだが、何日間かは続いたものの、一人では到底に無理だと言いながら私にこうねだった。

「きみねえ、お腹が出た夫じゃいやでしょう？　僕が出っ張ったお腹でよろよろ歩いたら、恥ずかしいよね？」

正直なところ、それに付き合う時間があるならもっと寝たいが、夫の迫力と愛嬌に結局私は負けてしまった。夫はそんな私に悪いと思ったのか、運動に行く時間になると私の顔色をうかがいながら、キョンモとチョンモに必ず一言、言う。

「パパはママとデートしてくるね。羨ましいだろう？」

夫は、私と一緒に木の香りを嗅ぎながら大学の校庭を歩く時間が気に入っているといい、ずっとにこにこしている。一人で遠い所まで走ったあと、私の所に戻ってきて照れくさそうに笑っている姿は、長男のキョンモとそっくりだ。

最近、夫の甘え方が前よりひどくなった。自分をわかってくれる人は、やはり私しかいないなどとお世辞を言う。また、私が週末に東大門市場のショピングタウンでも行こうとすると、誘わなくてもついて来ようとする。若い頃、ショピングに行くのが世の中で一番嫌いだと言っていた夫が、今は私が市場やデパートに行くと必ず付き添ってくる。

「あなたちょっとどいてよ。わずらわしい。一人で行かせてもらえないかしら？」

「一緒に行きたいんだ。僕は引越しする時も、荷物を積んだトラックの運転席の隣に座るからね。」

いきなり、真面目な顔をしてこのように話す夫を見ると、私は笑うしかなかった。まるで母親が子どもを置いて一人でどこかに行くのではないかと、苛々している子どものような夫だが、16年間あれほど私に心配をかけた、無神経な男と同一人物かしらと疑いたくなるほどである。早く帰宅するように頼んでいたのも遠い昔のことのようだ。いつの間にか私の傍についてくるなんて、本当に変われば変わるものである。しかし、今だから告白するが、夫の変化のかげには、目をつぶれることには目をつぶって、言うべきことは確実に言ってきた用意周到な私の「夫操縦戦略」が潜んでいたのである。

状況を客観的にみて、変えられることと変えられないことを明確に区別しなさい

精神科の治療を受けながら、私は劣等感を克服したが、それ以外にもう一つ得たものがある。それは状況を客観的にみて理解するための努力をするようになったことである。結婚当初、私は夫に腹を立てるばかりで、本当の問題の実態を正確に把握し、葛藤を解決していこうとは考えていなかった。

たとえば、夜中の 12 時に夫からご飯の支度をしてくれと頼まれたとすれば、それはだれが考えても無理な要求だ。しかし、私はそのような要求を聞くとそれを「客観的に無理な要求」だと考えずに「結婚したら言われた通りに仕度しなければならないのか？これをやらないと悪妻だと言われるのか？」とすぐに怒り出した。しかし今は違う。状況を客観的に見つめ「何故この男はこんな無理な要求を出してくるのか？」、「私は何故怒っているのか？」を先に考える。そうすれば解決の方法がみえてくる。

いくらやっても夫が変わらない部分は諦めて、代案があれば言ってみる。私がどうしても諦めたくないと思っていると、次第に腹が立ってくる。夫と私の状況を客観視できるようになってから、問題の原因は私にあるのか、夫にあるのかが判断でき、腹を立てずにすむようになった。

変えられないと思われることは、いやでも一旦受け入れる。恋人同士はお互いのよいところだけを見ることができるが、夫婦はいやなところも見なければならない。それだから、前世で最悪の因縁は現生では夫婦になり、最もよい関係は現生では恋人同士になれると言われるのではないか。

明け方5時。昨日から新しく住み込みで家事を手伝ってもらっているおばあさんを起す。ちょっと悪いなと思いながら、夕方には私が到底時間を出せないので、今知らせないといけないことがあるからだ。

「おばあさん、これが我が家で普段食べているものです。キョンモのパパは、他の魚類は食べるけれどサバ塩は食べません。モヤシのスープには必ず赤唐辛子の粉をたっぷり入

れてください。タラを干してちぎったブッゴのスープには絶対に卵を入れないで大根をたくさん入れてください。キョンモはほうれん草は好きじゃないので、細かく刻んでからハンバーグのように小さくして焼いてくれれば食べます。豆も特に好きではないのですが、えんどう豆は食べるから一週間に一度ぐらいはえんどう豆ご飯を炊いてください。そして･･･」

おばあさんが我が家の食習慣を全て知るためには、少なくとも一ヶ月は教えなければならない。私がこのようにするのは子どものためでもあるが、ご飯が口に合わないのを嫌がるキョンモの父親のためである方が大きい。

夫は、子どもの時から韓国の伝統食ばかり食べて成長したので、「ご飯」ではない食べ物は好きではない。そして、自分の口に少しでも合わないと本当に苦しむ。会食をしてから帰宅しても、家でキムチとご飯を食べなければならない、本当に伝説の中に出てくるような人物が夫なのだ。会食の席で中華料理や洋食が出た日には、食べないで帰ってくる。最初は会食で食べないで家に帰って、ご飯を仕度してくれという夫が情けなく、喧嘩ばかりしたが、今では当たり前のように仕度をするようになった。

真夜中、一人でご飯を食べながら、夫は私が隣に座って付き添うことを願っている。誰もいない食卓で、一人でご飯を食べることほど世の中でさみしいことはないそうだ。キョンモが幼い頃はそうする余裕もなく、「あなたがご飯を食べる時、付き添う時間が一体どこにあるの？」とすねながら放っておいたが、子どもが成長した後は、夫をじっくり見ていると一人でご飯を食べながら受ける心の傷がけっこう深刻であることに気がついた。その時、初めて「かわいそう」という気持ちになり、これは無視したり、理性で抑えたりすることではないと思えたのだ。

意外にも夫のように「食べること」に敏感な男性は多い。その原因は、母親が息子が言う通りに口に合うものばかり食べさせたからだが、問題は、そのことが１、２回の喧嘩や理性による説得では解決されないということだ。食事の問題は男性にとっては切実な問題になりがちだ。

夫にできないことをどうか要求しないでほしい。つまらない感情の喧嘩をしてお互いに疲れるよりも、かわいそうだと思い、言う通りにやった方がよい。変えられる問題と変えられない問題を正確に分けてみよう。絶対に直らないような「本能」の領域にある問題群。たとえば、朝寝坊するタイプ、スープを必ず飲まないとダメなタイプ、暑がりやなどの問題は100パーセント夫を理解すること。そして、やろうと思ったら徹底的に熱意と誠意を込めて、「面倒を見ると」必ず恩返しがある。状況を客観的にみて、夫が変えられる部分と変えられない部分を区別すること。それが「夫操縦」の初段階なのだ。

小さいものを上げて、大きなものを得よう

何日か前、釜山にある夫の実家に行く用事があったので子どもを連れて私が先に行った

ことがある。夫は日程が合わなくて一人で来ることになった。

しかし、その日台風で飛行機が欠航になり、結局は来ることができず、ソウルに残された。空港で飛行機が離陸するのだけを待っていたが、あきらめて家に戻った夫から電話があった。ぶっきらぼうに、

「ラーメンはどうやって作るの？」

「あなたがラーメンを自分で作って食べるの？　変わったわね。水を３カップ弱入れて沸騰したら、麺と粉末スープを一緒に入れて、もう一度沸騰させる。最後に卵を入れてね」

いい年をして一人でラーメンも作れないの？という文句がのどまで出かかったが、私はもう慣れているかのように私の感情を抑えながら「情報」を与えた。そして、最後の一言も忘れなかった。

「ラーメンを一人で食べるなんて可哀そうね。私が帰ったらおいしい物を作ってあげるわ。」

他の人たちは、私が家でこのように夫を「支えている」ことを知らない。たぶんフェミニズムの立場からすれば、私を家父長的な性役割を擁護する女性であると思われるかもしれない。しかし、私は私の夫に台所の仕事をさせたら、夫自身が恥辱感を感じて憤慨することを知っている。姑は夫を「男は絶対に台所に入ってはいけない」という信条で育てた。その姑の下で育てられた夫に刻まれた思考方式は、精神治療や説得ですぐ変えることはできない。それはまさに「きみはどうしてそんなに背が小さいの？」と非難するのと同じことなのだ。喧嘩して夫に台所の仕事を手伝ってもらっても、その代償の心の傷が大きいということだ。

だから私は「ラーメンを作ってくれ」、「水をくれ」というような世話は何の心の葛藤もなしにやって上げる。もちろん、最初からやさしいことではなかったが、上手くできない人間を手伝って上げると考えれば、簡単なことだ。夫もまた自分なりにどのくらい不便であろうか。間違って育てられ、水一杯くめず、ラーメンさえ作って食べられない立場も、絶対に楽ではないことを私はよく知っている。

「小貪大失」という言葉がある。小さいものを得ようとして、大きいものを失うという言葉である。私が夫を私の好みに合うように変えるためには、その程度のことは大目に見てやらなければならない。私の体を動かして小さいことをやって上げ、決定的に重要なことを確実に手に入れればよい。

私が夫のややこしいご飯の支度を文句なしに世話をすると、夫も私に対して悪いと思う。でも食器洗いのような台所仕事を手伝うことはやりたくないから、代わりに自分が出来る別のことを探す。それが大抵、子どもと一緒に遊んでくれることになる。自分から子どもに「バドミントンしに行こう」、「家の後ろにある山に登ろう」と言い出すのは、私がそれを望んでいることを知っているからなのだ。

また、私を手伝えることがあれば徹底的に、確実に支援してくれる。会食が長引き、タクシーも拾えないから電話をすると、寝ていても起きていても、夜中の1時でも2時でも構わず迎えに来てくれる。「外で待ってないないで中で待っていて」という温かい配慮の言葉も言えるようになった。自分がいくら疲れていても、何か外部の力から女性を保護することは、男性である自分がやるのが当たり前のように考えているからだ。

小さなことだけれど、夫がやるには疲れる仕事に対して一々神経質に悩む必要はない。妻が上手く出来る仕事は単純に「私できるから」と言いながらやってしまい、その他の違う仕事の中で、夫が出来そうで好きだろうと思われる仕事はそちらに誘導するほうが得策だ。短い時間に効率的に夫を変化させるには、その方法しかない。

正しいと思うことなら、周到綿密に志を貫徹しなさい

子どもの試験が終わって最初の週末の朝、ちょうど私もその間、大変だった論文も仕上げたし、気楽な気持ちで久しぶりに子どもと遊びに行くことで胸が一杯であった。「エバーランドに行こうか？」そうでなかったら「清平の辺りでもドライブしてみようか？」と一人で色々と思案しながら、夫をじっと見ると何だか元気がない。そういえば、昨日も研究で遅く帰ってきて夜遅くまで書斎で本を読んでいた。夫も疲れているだろうが、今日だけは絶対に譲れない。もう3週間も外出できなかったから何があっても今日は行かなければならない。一度、夫の状態を把握する方が先である。

「あなた、昨日遅く寝たの？」

「ああ、ちょっと疲れてる。学会発表の日は迫ってくるし、原稿はなかなか書けないし。」

ここで第1段階の目標の修正。あの状態にいる夫を連れてエバーランドや清平に行くことは無理だ。ちょっと近いロッテワールドやソウル大公園は可能だろうか？

「病院の仕事も忙しいだろうし、学会の仕事も大変でしょうね。でもあなただからやっていけるのよ。私だったら考えられない。子どもを連れてちょっと外に出て気分転換をした方がいいんじゃない？」

「そうか？　裏山にでも行ってこようか？」

少しお世辞をいって夫がどの程度の状態であるかを確かめてみたが、夫が考えているのはただ後ろの山くらいだった。第2段階の目標の修正。ロッテワールドやソウル大公園も断念。しかし、今日のような日にいつも行っている裏山に登るわけにはいかない。もうちょっと近くていい所はないだろうか？　頭を使って出てきた答え。

「この前、新聞を見ていたら上岩洞のワールドカップ競技場の前の難地島が公園に変わったんだって。私の隣の部屋の先生が行ってきたけれど、ここから行っても 10 分ほどしかかからないし、オリンピック公園とは比べ物にならないくらいよく造られているんだって。そこに行ってみない？子どもたちもワールドカップ競技場を見に行くからというと喜ぶだろうし。」

「そうしようか？10分しかかからないの？それだったら行ってみようか？」

私は心の中で勝利のＶサインをした。夫は夫なりに無理ではない範囲で家族にメンツが立つからいいだろうし、私は私なりに子どもと一緒に変わった外出が楽しめてこれこそよいことはなかった。

新婚当初からひどく腹が立っていたのと同じ状況なのに、「劣等感の克服」という悟りをへて、状況の客観化ができ、夫の操縦に励んだ結果、全く違う結果をもたらしたのだ。大きな目標と小さな目標を区別し、狐のように状況に合わせて戦術を変えれば、このように楽に解決されることを知るのに、何故こんなにも長い時間が費やされたのだろう。

今私は、仕事中毒の水準の夫をもう少し家族中心的な人に変える為、最後の工作中である。その間、家族中心の価値を夫と分かち合うために私がやった大小の作業は、数え切れないほど多い。子どもから父親にどこか外出しようよとねだらせるくらいはほんの序の口で、家族と過ごす時間が少ないことを強調するために一ヶ月の間ずっとカレンダーに毎日の帰宅時間を書いたりもした。家庭の行事をたくさん作り、帰宅してからもう一度出なければならないことがあっても、家族と一緒に夕食後に行くようにした。仕事ばかりやるのがどのくらい空しいことであるかを知らせるために、トイレに『富裕な奴隷』のような本を置いた後、読んだのかどうかを試してみたりした。

なんと 6～7年の私の執拗な努力のおかげで、やっと夫は家族の重要さが分かり、家族と一緒にいることに多くの価値を置き始めている。

夫に何かを要求したくなる時は、最初からあまり強く「主張」をすると上手く行かない確率が高い。怒らないで、問い詰めないで、いつ洗濯物を濡らしたのかわからない春雨のように、小さいことから執拗に努力しなさい。ずっと打たれて耐えた後にＫＯで逆転させる戦略は女性には合わないゲーム方式だ。目標を細分化して順序だてながら、絶対諦めない「最後の線」を決めておき、その線が許容する範囲内で頻繁にジャブを打ちなさい。そして最後の線を侵さない限り、何でも受け入れるという心構えを持っていると、少なくとも目標の 80 パーセントは十分に達成することができる。しかも残りの 20 パーセントは思い通りにいくらでも詰められる部分だから、いつでも夫の行動を 100 パーセント願い通りに変えられることができるという話である。

勝率 80 パーセントのあっさりしたゲームができれば、夫を都合よく変化させる武器ははすでに妻が握っているようなものだ。ただ、その前に過去のうんざりする感情の消耗戦の記憶を妻がきれいに忘れ去ることができれば、だが。要するに、正しいと思ったらその志を貫徹させ、周到綿密に攻めてみよう。そうすれば夫を変化させることができる。

専業主婦たちに

良妻賢母になるのが夢だった彼女。彼女は夫と子どもの面倒を見ることに全力を尽くし、彼らの成果に泣いたり笑ったりしている。夫の昇進が自分の階級昇進だと思い、子どもの成績を自分の自尊心だと思っていた。彼女は子どもを託児所に預ける専業主婦の悪口を言い、夫の朝食の支度ができない専業主婦に舌打ちをする。専業主婦を無視する世の中には憤慨しながら、心の中ではこのように言っている。「待ってなさい。私がどのくらい子どもを立派に育てるかを…」。歴史がシンサイムダンに「立派な母親」という称号を与え功績を称えたように、ひたすら夫と子どもをよく支えていけば自分もそうなると信じていた。

しかし、それは彼女が「シンサイムダン」についてあまりにも知らないからそのように言うのである。私たちはシンサイムダンを「良妻賢母」の象徴と考えている。もちろんサイムダンが育てた7兄弟はユルコク、イイをはじめ、みな学問と芸術に卓越した成果を上げていたため、立派な母親であったということは疑いのない事実である。しかし、一人の力でそのように育てたということでは絶対にない。

研究によると、シンサイムダンは結婚した後も約6年間、実家で暮らしていたと伝えられている。すなわち実家からの支援を長時間受けながら7兄弟を育てたのである。しかもシンサイムダン一人で家事をしたのではなく、女中もいたはずだ。だから家事と育児をひとりでする現代の母親のモデルにはなれない。シンサイムダンが良妻賢母であることは事実であるが、あなたより恵まれた環境に居たからこそ可能なことだった。

そして、シンサイムダンが崇め奉られる理由は、決して彼女が朝鮮時代に子どもを大学者にするほどの教育をしたからではないと私は思う。彼女はハイレベルの絵と文を数多く残した、朝鮮後期を代表する女流芸術家だ。大関嶺に立ち、母親に思い焦がれる心を書いた詩は、叙情性が豊かな名作と言われるし、彼女の絵は繊細ながらも躍動感に溢れていると賞賛されている。

もし、シンサイムダンに芸術的な成果がなかったなら、歴史が彼女を崇め奉るまでしたであろうか？　朝鮮時代の両班家の妻ならだれでもシンサイムダンに負けないくらい献身的に真心こめて子どもを育てたはずなのに、特にシンサイムダンがよい母親の「象徴」になった理由は、夫と子どもを通してではなく、他人に堂々と評価される彼女自身の価値があったからではないだろうか。

シンサイムダンの自己実現の異なる面には、社会に広がっていた家父長的な通念を、何の無理もせず自己の生き方によって変えた賢明さが存在する。そのようなわけで専業主婦がシンサイムダンに学ばなければならないのは、彼女の子女教育の成功談と内助の功ではなく、むしろ自分を守るために彼女が遂行した静かな「反乱」の成功談であるはずだ。

休む時間を先に配分しなさい

普通の人たちにとって家庭は楽な安息の地であるが、専業主婦たちは家庭が仕事場であり、休む場所である。それ故、専業主婦たちは意外に休めない。仕事場で休もうとしても楽に休むことができないのである。それはちょっと目を向けると厨房のシンク台には洗い物がたくさんあり、洗濯しなければならない洋服も山積みだからである。

したがって、専業主婦たちの場合、休み時間を先に配分しておくことが、絶対的に必要である。仕事場と休む場所が区別できない所で 24 時間、365 日、休んでいるのか休んでいないのか分からないまま過ごしてはいけない。休み時間を配分してその時間だけは意図的に家事と育児のストレスから解放されよう。外に出かける状況ではなかったら、他の所に遊びに行っている振りを自分でしなさい。たまには夫に子どもを任せて家事をさせ、一人での外出をするのもよい。元々、上手に遊ぶことのできる者が仕事も上手なものだ。そして、遊ぶことによって、仕事のやる気が出るのも当たり前のことである。

子どもを塾に通わせるための「仕事」はしない

韓国の人たちは経済的な問題さえなかったなら、なるべく仕事はやらない方がいいと思っている。しかし、私は職業の貴賤と関係なく、労働は生きることの一部であり、生命と健康を維持させる道具であると考えている。仕事をして身体を動かせば、別に運動は必要なく、健康にもよく、私を必要とする所があるのは精神的にもよいのは当然であるから。

しかし、それは自分がやりたかった仕事の場合に該当するかもしれないが、無理にする仕事の場合、その中には「食べる」ため、仕方なくしなければならないための苦渋が潜んでいる。

しかし、韓国の専業主婦たちにこの頃、おかしな流行がみられる。食べるためではなく子どもを「塾」に通わせるために働いているのである。

何故そうしなければならないのか？子どもに最高の条件を与えたい気持ちは理解できるが、そうすることができない環境ならば、出来ない状況を十分に理解させることが先である。無条件に言うことを聞いてやらないといけないという強迫観念に陥り、無理にパートタイムの仕事を求めることなどは急務ではないのである。

無分別な最高主義は子どもを傲慢にさせるのみだ。子どもはある瞬間、母が自分の願うことを全てやってくれるのが当然だと思い、最高でなければ見向きもしなくなる。そして、いやな仕事を子どものために無理にやると母はその分、子どもにもっと期待するようになる。子どもに命がけの母になってしまうのだ。

子どもを塾に通わせるために無理に仕事をしているのだとしたら、是非ともすぐ止めてほしい。塾に通わせないことを悲しまないで欲しい。そのような時間があったらあなたが本当にやりたい仕事を探すのに時間を費やして欲しい。黄金のような時間は、そのように愚かなことをするために与えられたのでは決してないから。

社会化の絆を作りなさい

専業主婦とインターネットというと、人々はいつも「不倫の温床」を連想する。しかし、私は専業主婦にとってインターネットの出現は喜ぶべき事だと思う。今まで専業主婦は社会とつながる絆を探し出せず、家庭の中に閉じ込められている場合が多かった。もちろん、最近では自己啓発と運動、ボランティア活動などを通じて、社会活動を活発にする主婦が増えたが、インターネットはそういったことが苦手で消極的な主婦たちまでを社会的な場に引き出す立派な役割を果たしている。

家の中に閉じ込もっていた主婦たちはインターネットを通して、他の主婦と多くの対話を交わす。見えないという利点で、生きることに疲れた自分の様子や心の中にある劣等感を告白し、他の主婦の経験談を聞きながら慰められたり、ネットワークを形成したり、情報を交換したりしながら、社会的な連帯を広げていっている。

社会的なネットワークを広げることは大変重要である。これまで専業主婦たちは子どもがいじめられると、言い争うことはせずにこっそり転校させていた。社会との絆を断絶したまま過ごしていたために、戦う勇気がなかったのである。しかし、今はインターネットを通して悩みを打ち明け、戦う力を得ることができる。力になってくれる者と戦う方法を得ることができるのだ。

水は流れないと腐るのは当たり前で、腐った水は周囲に悪臭を放つ。この頃、深刻になっている「私の家族だけ」、「私の子どもだけ」の家族利己主義。それは孤立している専業主婦たちにひどい自己不安があることの証明だと思われる。

だから、私は専業主婦が自己実現や社会のボランティアや誰かの相談役など、何でもいいから社会的な存在であることを自覚し、社会的な存在として生きていくために悩み始めることが重要だと思う。それはすなわち、自分の子どもを上手に育てるためには、他人の子どもも上手に育てなければならないという、そのような世の中を作り上げることで可能になることを知ることができたからだ。

職場をもつ母親たちに

女性の後輩と一緒だった昼食時間。大変だった勉強の話で愚痴をこぼしたり、嘆いたりなどの会話を交わすうちに、いつのまにか話題が結婚と子どもの問題に移った。仲間には結婚した者も、未婚のままの者もいたが、異口同音で意見がまとまる部分があった。韓国という国で、働く女性が子どもを育てることは、家庭と自己実現の間を行ったり来たりする危険な綱渡りであるということだ。それに対して何故そう感じることが多いのか、各自一言ずつ思いを吐き出した。「そうね、簡単なことではないよね…」とじっくり聞いている

と、いつの間にかみんなの視線は一斉に私に浴びせられた。そして口を揃えて聞いてくる。

「先輩はどうやってその仕事を全てこなしたのですか？」

「…あの時は、死ぬか生きるか、という感じだったわね…」

呆れた顔の後輩たちを見ながら、私は笑いながら一言加えた。

「私のように暮らさない方がもっといいのよ。肩肘張って暮らさないで」

この頃、「家に帰るのが怖い」という働らく女性が徐々に増えているそうだ。昔は40代以上の男性が経験するのが当たり前だった「帰宅忌避症候群」が女性にも現れているらしい。特に13歳未満の子どもを持った常勤の女性の場合、ストレスを非常に多く受けている。どのくらいかというと、アメリカの研究機関であるローパースターチ・ワールドワイドが30ヶ国から1000名ずつを対象に実施した質問紙調査の結果、約24パーセントがほとんど毎日ストレスに悩んでいるというような結果が現われた。

仕事か育児か。この問題は女性が子どもを産む限り世界的、歴史的に継続する永遠の命題である。必ずフルタイムで働かなくても、人間としての自己実現のためには職場の生活、言い換えると「母ではない一人の人間として認めてもらえる時間」が必要なのだ。しかし、子どもを立派に育てるためには、やはり「子どもと一緒に過ごさなければならない絶対的な時間」も必ず必要なのだ。全ての就業主婦と就業を夢見る専業主婦のジレンマがここにある。

すでに専門職に就いている後輩たちに、肩肘張って暮らさないでと話した理由は、彼女らが望んでいることがあまりにも多くの犠牲を払うからであった。

結婚して子どもも上手く育ち、家事も上手くこなしながら、男性のように社会的な野望まで成し遂げることは決してたやすいことではない。真剣にその二つを望むのなら、自分の健康と能力がどの程度なのか、「死ぬか生きるか」のように努力する覚悟が出来ているのか、冷静に振り返ってみなければならない。その程度の能力や努力する覚悟がないのならば、子どもと家庭、何よりも自分自身のために職場の生活にかける野望を少し落とすことを、私は率直に心をこめてアドバイスする。

スーパーウーマンのコンプレックスを捨てなさい

アメリカでは、アジア系の学生の成績は優秀であることが知られている。そこでアジア系の学生自らが感じている自負心を調べてみると、それほど優秀な成績ではない他の少数の民族の自負心より低いのだそうだ。アジア系の学生たちの目標が、普通の人では達成できないくらいに高いということがその理由だった。

では、子どもを持ったフルタイム職の女性、パートタイム職の女性、一週間に数時間だけ働く女性のうち、誰が最も自負心が高いのかというと、驚くことに仕事を一番多くしている女性の自負心が一番低く、仕事の量が一番少ない女性の自負心が最も高いそうだ。フ

ルタイム職の女性の自負心が落ちる理由は、仕事ができないからではなく、自分の能力を超える過度な期待値を持っているからである。就業主婦たちの３つの悩みは、仕事の推進力が落ちること、再充電する時間が不足すること、育児と仕事の両方を上手にこなすための強迫観念だそうだが、私はこの全てのことが「高い期待値」という一つの根から出ていると思う。

子どもを持った母親が仕事をしながら、職場の全ての集会と会食の席に参加することはできないし、そうする必要もないと思う。子どもがいない時に 100 をやったとしたら 80 しかできないのは当たり前のことである。それをすべてこなそうと思えば、育児と家事の負担を分けてくれる支援勢力が豊富でなければならない。

だから、全てを完璧にこなそうという「欲張り」を捨て、子どもを持った母親なので職場の生活が以前と同じ様にはいかないことを堂々と受け入れよう。「子どもを育てながら仕事をして」と言われたら、この世でそれを完璧にこなせる女性も男性も決していないと自らを慰めてもかまわない。それくらい難しいことであるからだ。

私は、職場と育児の全てが非常に切実であったため、寝ないで、個人的な楽しみを全部犠牲にしながらスーパーウーマンになろうとしたため、子どもの方が損害を受けた側面があった。

キョンモは短時間に何かをしろと攻めると他の子よりストレスを多く受けるタイプだ。朝目覚まし時計が鳴ると、ある子はベルの音が鳴った途端に起きるが、ある子は寝ながら目覚まし時計を止めてそのまま寝る。キョンモがそうなのだ。朝起きるのも大変だし、目が覚めても眠い状態がしばらく続く。もともと生物学的な睡眠のメカニズムは個人個人の差があるが、キョンモはそれが独特なタイプなのだ。前日早く寝る、寝ない等の問題ではない。だから、キョンモに最も配慮するやり方は、ひたすらキョンモが自ら成熟するまで待つことしかない。

そんなキョンモにとって、私のようなフルタイム職の就業主婦である母親は、薬ではなく毒だったかもしれない。私がいくら「ゆっくり育てて、子どもを待つ方法」の威力を知っていて、それを守るために努力しようとしても、時間に追われる専門職の就業主婦の現実から完全に自由になることはできない。

おそらく、ある瞬間、私は子どもに焦る姿を見せたはずだ。朝 8 時 30 分の登校時間に間に合うようにキョンモを学校に行かせるためであったり、退勤後 1・2 時間ぐらいしかキョンモの面倒をみることができないという理由で、短時間内に宿題を終わらせるためであったり。もしも私がもう少し自由な仕事をしていたら、今の私がキョンモのような子どもを持つ母親たちに処方するのと同じように、子どもを学校まで見送ってやったかもしれない。

だから仕事か育児かで悩んでいる人たちに、私の答えは明瞭である。子どもを持った母親ならば、そして、その仕事のせいで子どもが損害を受けていると判断されたら（特に、

子どもが母を最も必要としている0〜3歳頃)、仕事の達成度を少し低く設定する方がよい。もちろん子どもが上手く適応し、母も仕事と家庭の間でそれほど揺れなかったら、職場に通うことが母のみではなく、子どもにもよいということは言うまでもない。

今、私が職場を止めない理由は、職場の生活が与えてくれる肯定的な効果がまだ大きいからである。子どものせいでひどく挫折を感じる時、職場は束の間の脱出口としての有用性を持つ。いくら失望し、挫折したとしても、病院にいって傷ついた子どもたちの診察をしていると、再び平常心に戻り、子どもに対する肯定的な期待がよみがえる。だから、いまも私は毎朝、家を出るのだ。

しかし、私が職場をもった生活をしているために、子どもを待ってやれなかったことが、キョンモの人格的な成熟に大きな障害になるならば、仕事を減らすことを考慮してみる。小児精神科医としての私は、子どもに問題が生じてから、収拾するよりは、予防するほうがいいと確信し、それは社会のなかで成し遂げるほかの成就よりも、ずっと価値があると信じているからだ。

職場と家庭を混同しないで

夫がまた靴下をベッドの下に置く。それをそのまま放っておくか、洗濯物入れに私が入れようか、小言を言いながら責めるか…もう何回もそうするのを我慢していた。素早く頭を回転させたあとの結論は、「かわいく愚痴をこぼす」であった。

靴下を拾って洗濯物入れに入れながら、愛嬌のある声で、

「あ〜あ、私の星回り。子育てが大変で疲れているのに、どうしてあなたまでが私に辛い思いをさせるのかしら。本当にやんなっちゃう。一昨日はまた連絡もなしに遅く帰ってきて心配をかけたし。一度も靴下を洗濯したこともないくせに、こうやって靴下を投げ捨てるなんて。私はいったいどうすればいいのぉ、いったい？」

いきなり呆然とする夫の顔。あっけらかんと文句を言っている私を見ながら、彼は、ぼそっと言った。

「わかったよ、これからはしないから…」

もし、私が夫に「あなたが靴下をそこに置いたのは過ちですよ。それはよくないことなので、早く洗濯物入れに持っていってくださいよ」と「理性的に」話したら、どうだったろう？　いうまでもなく、聞こえなかった振りをするだけだ。

家庭で夫に「論理的に」話をするのはあまり効果的でない時が多い。職場が理性を優先する所であれば、家庭は感性に相通じる所である。それなのに職場で「論理」の洪水の中にいた夫が家に帰ってきてから、再び是々非々を裁くために突っかかると、どの夫も「そうだ。私が本当に悪かった」とは言わない。夫が家庭で妻に期待するのは、感性的な慰めだから。

だから、むしろ「非理性」的ではあるけれど、涙を出す真似をすることのほうがこの問

題を早急に解決する秘法なのである。

家庭内で幸福な家庭を築くための原則と、職場で有能な者になるための原則は異なる。職場では何が間違っているのかを几帳面に詰めて、間違ったことはすばやく是正しなければならない。そうすることで有能な者として扱われる。むしろ職場で起きる全ての出来事を感情的に、個人的に受け取らないように努力しなければならない。

しかし、家庭では、会社でやっているように過ちを指摘し、「是正措置」を言うと、子育てが思う通りにならないし、夫と喧嘩ばかりするようになる。家でも、会社でやっているように子どもを叱る母親たちは、資本主義の組織の論理をそのまま家庭に持ち込む過ちを犯しているのだ。「あなたが間違ったのだから、これをこのようにしなくちゃ。」という原則を持っている母親の家庭は、安らかで楽しくはなりにくい。

就業主婦は社会でのモードと家庭でのモードをすばやく切り変えなければならない。このようにすることは、決して会社の仕事を家に持ち込まないで、家では絶対に会社の仕事を考えないでという話ではない。

家で会社の仕事をすることもできるし、思い出すことだってある（なるべく避けたほうがよいが）。しかし、職場で自分が先生の立場、上司の立場に置かれているからといって、家でも君臨しようとするのはよくない。反対に、職場では上司の指示がなければ行動しなかったとしても、家では主導的に、創造的に家庭をリードすることができなければならない。間違ったことを見ても、やさしく見なかった振りをしなければならないし、たまには甘えをそのまま受けいれてやる。子どもと夫に限りない水のように染み込む役割と、会社で資本主義の組織の論理に従って働く仕事は感情の水準と戦略が違うのが当然である。家での対人関係は、より精密な作業である。詰めて分析するより先に理解し、包容するのが優先なのだ。

だから職場を持っている女性たちは、職場と家庭を混同しないように気をつけてほしい。理性と非理性、詰めと包容力、詰めることと広げることの境を自由自在に行ったり来たりしなければならない。そうすると、家庭と仕事という二兎を両方とも逃してしまう過ちを犯さないですむ。もちろんこのことは夫たちの心にも刻む必要がある。

専業主婦と友達になりなさい

年中行事と誕生日、祭事など、心に留めておかなければならない親族の大小行事は多いが、その中で私が必ず記憶するのは兄嫁、義理のお姉さん、おばさんなどの親戚の専業主婦の誕生日である。必ず誕生日ではなくても、時々、本やお花、洋服などささやかなプレゼントを贈りながら、私は「彼女たちのみの領域」に入り、情報を得るために努力する。

私が彼女たちから得ようとしている情報は、いつ、どこで何を安売りするのか、子どもに安心して食べさせられる物は何か、小学校５年生の数学の教材は何がいいのか、など実生活に本当に必要なことである。私がいくら時間を出して勉強しても専業主婦たちの経験

から出る実質的で、有用なノウハウをつかむことはやさしいことではない。

だから就業主婦は、家事と育児に通じた専業主婦の友達がいれば本当に役に立つ。何故かというと家事と育児において絶対的に不足している時間と経験から生じる問題を、その友達が解決してくれるからだ。

しかし、その恩返しはどうすればいいのか？　専業主婦たちは労働の価値を認めてもらえない、ある意味辛い人生を送っている。その人生を真実に理解し共感することだ。もうこれからはいじけないように、前向の勇気を奮い立たせてあげればよりよいのだ。たまには仕事と関連してあなたは彼女たちを手助けすることもできる。私の場合は病院で働いているので、友人の家族の中で病気の人がいれば、実質的に相談にのることができる。

だからつまらない自尊心の喧嘩で関係を疎遠にする理由は全くない。専業主婦と就業主婦はお互いに敵ではなく、姉妹愛で一丸とならなければならない同士なのだ。

就業主婦さん、忘れないで。専業主婦の友達は、あなたが職場と育児を併行できるように誰にも負けないくらいの支援勢力になってくれる。あなたが先入観を捨て、真に心を開いて近寄れば･･･。

婚家のことで悩む母親たちに

いわゆる「家柄」がよく、財力もある家に嫁いだ母親がいた。義理の父の兄弟はもちろん、義理の母・義理の姉・義理の弟まで一流の大学を卒業した専門家で、「家柄」に対するプライドが高い家だった。その母親の場合、家柄がそれほど良いというわけではなかったが裕福で、一流の大学とはいえないけれど人並みの大学を卒業した後、すぐに結婚したケースだった。夫の実家では最初からその母親を気に食わなかった。学歴が低いという理由だった。しかも、子どもが生まれてからは面前で無視し始めた。

子どもを見ると「この子は何故こんな鈍いの？　あなたに似てそうなのね。我が家にはそんな子はいなかった。」といって皮肉るだけではなく、子どもが少しでも過ちを犯すと、「あなたがしっかりしないから子どもがこうなのよ」と責めつける。そして、いつも親戚の子どもと比較しながら「誰々さんは英語も上手なのに、この子はまだ出来ないの？」と罵る。それでも、その母親は、自分させ我慢すれば問題ないと思い、一言も言わずにその瞬間だけ耐えることにした。

しかし、時間が経つにつれ、それが自分だけ耐えれば済む問題ではないことに気づいた。その家は家族の会でご飯を食べる時、3～4歳の子どもでもきちんと座っていなければならない家風だった。他の子どもたちはある程度我慢しているのに、活発でエネルギー溢れるその子はじっとしていられなかった。その度に姑は大勢の親戚がいる前で、子どもを叱るのはもちろんのこと、母親のしつけが悪いから子どもがこうなのだとひどく怒鳴った。そ

うでなくてもすっかり萎縮している子どもは、時間が経つにつれ夫の実家には行きたがらなくなった。行ったら叱られる所に、誰が行きたがるだろうか。

この場合は母親がいくらがんばっても解決できない。もともと、孫というのは全てを与えても惜しくないくらいかわいい存在である。しかし、そのかわいい孫が動くだけでも目障りだというのなら、夫の実家には問題がある。しかし、そのような場合、多くの母親は子どものせいにして殴ったり、子どもに堪えられないほど多くのしつけをしたり、これ以上、弱点をみせないようにしむけたりする。けれども、それは子どものための正しい行動ではない。

そこで、私はその母親の夫を呼び、妻と子どもを助けたいなら、あなたが賢明に行動したほうがいいとアドバイスをした。なるべく夫の実家には行かなくてもいいように、間に入ってその役割を上手にすることだった。その場合は、なるべく会わない方がよい。夫の実家の集まりに参加する回数を減らせば、その代わりの苦痛があるかもしれないが、その方が母親と子どものためにはよい。

しかし、普通の夫の実家の場合、嫁のことを気が合わずに憎らしいと思っても、孫たちはかわいがる。だから上の例のように子どもにまで悪影響を及ぼさなければ、夫の実家との関係を上手に結んだ方がよい。おばあさん、おじいさんの愛を受ける機会を子どもから奪わないでほしい。

いくら優しい人でも、結婚すると「シ」（訳注：夫の実家のことを韓国ではシデッという）の字のつくシグンチ（ほうれん草）やシレギ（大根の葉っぱを干したもの）は見ようともしなくなるという笑い話がある。それくらい結婚した女性にとって、夫の実家との関係は難題なのだ。無条件に尽くすには重苦しく、距離を置くのも楽ではない、夫の実家の法事や年中行事の時、私の全ての仕事を放って置いて、夫の実家の仕事をするのも、それは夫の両親に仕える本音の気持ちからではなく、建前として「嫁」という立場がそうしなければならないことを義務的にしているだけなのである。家族というのは会う度にお互いの情を尽くし、しきりと会いたくなるものであるが、夫の実家とは権利と義務のみで結ばれた関係である。少なくとも、子どもを産む前の私の考えはそうであった。

だから、私はその頃、どうすれば夫の家族に会わないで済むか、夫の実家に行く回数を一回でも減らすためあれこれの手段を選んだ。夫の実家に行っても、早く帰るために努力したのは言うまでもない。子どもが生まれてからもしばらくは同様であった。しかし、時間が経つとともに夫の実家と私の間に共通の喜びができた。姑は、私たちが夫の実家に行くとキョンモに精を込めて尽くしてくれた。姑が我が子をあんなにもかわいがってくれるのに、どうして姑を憎むことができるだろうか。いつだったか、姑がキョンモの面倒を見る様子をじっくり見る機会があった。

ところが、私の面倒の見方と似ていながらも多くの点で違っていた。後でわかったこと

だが、祖母の愛には、子どもの一次的責任を負う母の愛と異なり、無限の許容がある。祖母は子どもを教育しなければならない義務感から一歩下がっているので、子ども本来の姿をあるがまま受け入れて認めているのだ。それ故、祖母は子どもを束縛せずに、純粋な無条件の愛を与えることができるのである。母とはまた異なる成熟した母性の発現なので、その愛を受ける子どもたちは、情緒的にかなりの安定感を経験する。

子どもが自分自身の存在を100パーセント受け入れてくれる祖母と愛着関係を結ぶことができれば、母としてはそれに越したことはない。子どもには愛着を持っている人がたくさんいればいるほどよいからだ。

ケンブリッチ大学が、弟を迎えた学齢前の児童を研究した結果、母親のみとの排他的な愛着が形成されていた子どもは、他の成人とも愛着を持っていた子どもに較べ、弟に一層、否定的だった。弟に対する憎さが何年間も続く場合もあった。この研究の結果は、多くの大人がいる所で育てられた子どもの方が、社会的にずっと上手く適応することができることを表わしていた。

したがって、夫の実家のことで辛くても、子どもが祖母の愛を受ける機会は十分に提供したほうがよい。母親のせいで、祖母の愛を充分に受けられない子どもにならないようにしてほしい。しかし、前の例のように夫の実家との関係が子どもにまで悪影響を及ぼす段階ならば、その時は断固たる立場の整理をし、分離の線を引いたほうがよい。もしそうすることができずに、あなたが曖昧に夫の実家に行ったりすると、それはあなただけではなく子どもにとっても致命傷になる可能性があることを覚えておいてほしい。

病気を抱えている子どもを持った母親たちに

小学校5年生のミョンス（仮名）は、最近、うきうきしている。この前、とうとう一人で靴下を履くことに成功したからだ。ミョンスの母親はミョンスがどのくらい嬉しいのか、表情を見ただけでもわかる。ミョンスは5歳の時、重い精神肢体不自由の判定を受けた子どもで、やっと一単語を話せる水準であった。ミョンスの知能指数は 50 である。ご飯を食べること、手や顔を洗うこと、着替えなど何一つ、一人でできるものがなく、一生、誰かに日常の生活を頼らなければならなかった。ミョンスは病が早期に発見され、治療を早めに受けたため、最初よりほんの少しはよくなっていたが。

母親はミョンスがよくなることが嬉しいが、絶対に普通の子のようになれない事実を思い出す瞬間ごとに辛い思いに耐えてきた。しばらくは「大丈夫でしょう。」という言葉が聞きたくて、病院をあっちこっち移動しながら再診断を受けていたミョンスの母親は、今になってミョンスをありのまま、素直に受け入れているところである。そうしながら新しい願いが叶うようにと祈っている。

「神様、どうかミョンスよりたった一日だけでも長く生きられるようにしてください。」

不治の病に掛かっている子ども、障害を持っている子どもをもつ母親たちを見ると、私は本当に心の中で深く敬意を表す。

喘息の子どもを持った母親は、子どもの呼吸を助ける道具を頻繁に取り替えてやり、脳性麻痺の子どもを持った母親は、物理治療法を覚えて運動をさせてやる。しかし、いくら努力しても治る当てはなく、いつ終わるという約束もないことを承知しているので、その全ての仕事はまるで悟りを得るための修道者の苦行と同様である。

一日一日、子どもの成長する姿をみることが母親にとって大きな喜びであることは、母親にならない限り絶対にわからない。しかし、その母親たちは他の母親のように、そのような喜びを絶対に味わえない。むしろ、彼女たちはミョンスの母のように子どもがこれ以上悪くならないことだけ願い、子どもより一日でも長く生きられることばかり願っている。

キョンモが生まれた直後、最も大変だった時、不眠症で悩んでいる小児白血病の子どもに処方するために入院棟に行ったことがある。抗癌剤治療のせいで髪の毛が抜け落ち、眠れないために目はボコンとへこんで元気がなく、免疫機能が落ちて、90歳の年寄りのように座っている子ども。見るだけでも胸が苦しいが、母親は子どもを暖かい目で見ながら顔や指などを一つ一つ撫でてやっている。のみならず、その母親は周辺の小児白血病の患者たちと多くの情報を交換しながら、他人の事でもまるで自分の子どものことのように積極的に、面倒を見てくれた。

この時私は、急に自分が恥ずかしく思われた。私はこの母親たちに較べると一つも大変なことはないのに、疲れた、疲れたと文句ばかり言っていたのでは。何とか慰めて上げたい気持ちでその母親に声をかけた。

「大変でしょう？」

「いいえ、最近は色々考えます。何で私がこのような苦しい目に遭わなければならないのかから始まり、この暗鬱な現実から私の存在理由が何なのかまで、本当に色々考えますよ。人間の力って本当に弱いですね。そうでしょう？　これから教会や聖堂にでも行ってみようかと思っています。子どもが逆に私を正しい道へと導いてくれています。」

断言するが、この世で見られる、最も大きくきれいなかたちの母性が、病気を抱えている子どもを持つ母親の母性であろう。一日が辛いけど、それでも子どもが死ぬよりはよいことを認める境地、辛さがなくなったら子どもの存在がなくなるから、その辛さをそのまま受け入れることがむしろ喜びになる境地、そして、子どもを通して自ら人格的な成熟に達する境地は母性そのものなのである。

同時間を生きていてもみんなが同じ人生を生きるのではない。自己の成熟度によってある者は乞食のように生きるし、ある者は仏様のように生きられる。病気を抱えている子どもを持つ母親たちは、希望が見えないほど、自ら仏様になる道を歩くことが、自分が生き

られる道だと知っていた。

私は努力してなくなる辛さは辛さではないと思う。欲張りを減らし、寝る時間を減らし、代わりに面倒を見る時間を増やし、少しでもよくなれる辛さだったら、真の辛さではないという事実を、私は病気を抱えている子どもを持つ母親たちを見ながら学んだ。

このように不治の病にかかっていたり、見かけでは確実に障害がなかったりしても、母親を辛くさせる心に障害をもった子どもがいる。感情の調節が出来なく暴力性をさらけ出す情緒障害や注意散漫で衝動的な「注意欠陥多動性障害（ADHD）」がそうである。この子どもの母親たちは、上で述べた母親たちとは異なる辛さをもっている。

まず、彼女たちは周りの支持はおろか非難を覚悟しなければならない困難を抱えている。夫と夫の実家など周辺では、子どもがひどく出たがりやで注意散漫な様子を見て、母親がどのような子育てをしたのかと非難する。また、「子どもの家」（オリニチップ：保育施設）や幼稚園、学校の先生たちも子どもの面倒を見ようとするのではなく「行儀見習」の問題だけ取り上げる。

いくら教えてもその時だけで全く直らないから挫折し、恥ずかしさのせいで布団の中に潜り込んで泣いている母親たち。その母親たちにとって最も辛いのは、罪悪感である。子どもの問題を抱えて「私が悪かったのね。」を繰り返しながら罪責感に陥るのである。そして「君はどうして他の子のように出来ないの。」と子どもを責めながら憎んだりする。しかし、それは自ら泥沼に陥るのと同じことだ。

辛さを減らすためにはまず自分自身の問題と子どもの問題を確実に分離しなければならない。子どもがそうなったのが私の過ちではないと判断をし、子どもの問題を客観的に見なければ方法がない。何故かというと情緒障害、ADHDの子どもは絶対に叱ったり罰を与えたりしても良くならないからだ。

キョンモが私を悩ませた時、最も難しかったのが子どもを「客観的」に見ることであった。子どもを見ると辛くなるが、その心を抑え、子どもの行動を一つ一つ持続的に観察しながら面倒を見るということは決してやさしいことではなかった。感情的にならないで現実的に面倒を見ながら絶対に催促しないで待ってあげること、それは子どもに対する肯定的な期待をする母親でないと難しい美徳である。

それでもADHDや情緒障害の子どもたちは、自閉児や精神遅滞児よりは確かによい。希望を持ち上手く育てることによって成長すると良くなるし、普通の人たちと問題なく仲間になって生きられる。そうするためには母親の面倒が必須条件である。社会の物差しで見る目を捨てて、子どもの目の高さで世界を見なければならない。その物差しに至らなかったことで母が泣いたところで役に立たない。夫と夫の実家の親戚が非難したら、馬の耳に念仏のような余裕を持たなければならないし、幼稚園の先生が子どもの問題で大変だった

ら、子どものために先生に子どもの状態を頻繁に話し、説得して理解させなければならない。他人が何を言っても何が自分の子どものために最善であるかを考え、行動しなければならない。

何よりも母親が子どもの面倒を確実に見ることができるという自己信頼感とともに、強い自意識を持たなければならない。「私がこの子の母親なのだから、私でなければ誰が面倒を見るのか」という強い心を持たなければならない。

考えてみると大韓民国は社会から個人、特に子どもたちに要求する平均値があまりにも高い国である。マンションを建てるために子どもが遊べる空間をなくしたのに、子どもが家でふざけて跳び上がったりすると変な子ども扱いするのが、韓国の大人たちだ。

世の中には人々が注目し羨ましがるような成功した人より、上手く行かなくて挫折している弱者の方がもっと多い。低い所を見なければならない。そうすると子どもが社会的な平均より少し劣っていることを前もって心配をすることが、どれほどの浪費であるかがわかる。たとえ一流の大学を卒業したからといって、みんなが幸福だったり成功したりするわけではないだろう。

人生は長く正直である。子どもが他の子よりぬきん出ていなくても、人生をその子ならではの生き方でおもしろく生きることができれば、それでよい。子どもが先頭に立たなくてもいいではないか。後ろからでも人々とともに充分、笑いながら生きられるなら、それが幸福なのである。

離婚を考えている母親たちに

不倫と離婚を扱ったドラマが多かった今年の春。一人の後輩の夫が後輩に冗談でこのように言ったそうだ。

「おい、僕たち異常かも」

私はその話を聞いて笑えなかった。何の問題もなく結婚生活をしている人たちまで不安に思わせる不倫と離婚が、他人事ではない時代になったことが悲しい。しかし、私も以前は離婚を考えていたことがあるから、この心情がわかる。

しかし、私は最近、離婚の相談をしに来る人たちになるべく離婚を避けてほしいと言う。愛情が3年以上長く続けられないとしたら、新たな愛に遭ったとしても必ず空しくなる瞬間が訪れるし、妻と夫が賢明に行動すれば十分に良い方向に変化される余地があると思うからである。

しかし、私の思いどおりに行かないのが人の世で、いくら努力してもうまくいかない例、どうにも「仕方ない」状況が起きる。それはいわゆる「非常識的な」人たちのせいである。

愛想がよく、暖かい心を持っている一人の母親がいた。夫は大学教授で、雰囲気は礼儀正しく、有能で、ユーモアがあり、親切に見えた。しかし、実際はひどい妄想症にかかっていて、偏執的な人格障害を持っている人で、妻と息子に対する暴力が度を越えていた。自分の職場の同僚を招いた引越し祝いの会で、妻が「他人である」男の人に親切にしたといって、灰皿を投げたり、5 歳になった息子を殴ったり、バイオリンを教えたところ、その子どもがバイオリンを見ただけでも吐くような状態になったりなど、「非常識的な」事例がたくさんあった。

そして、その母親はいつしか離婚を考え始めていた。そうすること何千何万回。夫のことを考えると震え、今すぐにも離婚したくなるが、いざと離婚しようと思っても経済力もなく、息子と一緒に暮らす日々が暗く感じられた。息子が「父親のいない子」になることも胸が痛かった。だから結局は「私だけ耐えれば大丈夫だ」、「離婚するよりましだ」と考えながら日々、我慢していた。

しかし、その結果がどうだったかというと、その母親が 20 年余りの歳月をかけて夫を変えようと努力したところ、直ったのはただ一つ、怒った時、何かを投げる癖のみだった。その息子は成長して今は 25 歳になったが、精神年齢はいまだに思春期に止まっていて、父親に対する憎悪で、父親が駐車場に車を止める音を聞いただけでも胸が潰れるほどの恐怖におののく。

最近になってこの母親は、社会に適応できず、常に不安に怯える息子を見ながら罪悪感をもっている。自分だけ耐えれば全ての問題がなくなると思っていたが、結局息子に被害を与えてしまったからだ。こうなることがわかっていたら、離婚した方がむしろよかったと後悔しても後の祭りであった。

誰でも行ってみることのできない未来はわからないのが当然である。だから人々は離婚を考えながら、どちらを選んでもそれが最善の選択であればそれでよいという。後で後悔するかも知れないけど。その母親も同じだろう。問題は離婚をすることについて息子より自分の立場ばかりを考えたことである。

息子を父親のいない子にしたくなかったのであるが、それはあくまでも母親の考えである。息子が父親から受ける辛さを考えてみなさい。愛情を求めるはずの父親からそのようなひどい目にあうことが、「父親のいない子」と言われることの辛さと何が異なるのか。むしろ父親から受ける肉体的で精神的な暴力は、他人から受けるよりもっと辛いはずである。他人は無視してしまえばそれでよい。しかし、父をどう無視することができるのか。また、無視すれば無視されるのか。

その母親を理解しながらも、必ずしもそうしなければならなかったのかと切ない気持ちになる。本当に離婚が出来なかったのは「バツイチ」と言われることに対する怖さ、経済的な能力の無さから生じる不安のせいなのに、息子のために私が我慢しているという理由に言い換えたのではないか。本当に息子のための気持ちがあったのら、今はしんどくても

離婚を選択する方が正しかったのではないか？

何ヶ月か前、あるテレビの時事番組をみていると、ある離婚した夫婦の育児の話が出ていた。私は彼らを見ながら胸が熱くなった。彼らは親として、親のすべき事が何か、子どものためにすることが何かを感動的に見せてくれた。

子どもが生まれた後、夫との性格の差を克服できずに離婚したが、妻は子どものために週末になると、夫が家に来て子どもに自由に会えるようにした。もちろん離婚直後には夫に対する感情が残り、顔を見るのも辛かった。しかし、子どもの立場から状況を考えてみると、自分自身が子どもから父親の存在を奪う権利はないことに気が付いた。だから、子どもの父親と「子ども」の立場で議論した末、このような方法を選んだのだ。

おかげで、子どもは母親と父親が離婚してから３年になるのに、父親のいない部分を全く感じさせず幸福に育っていた。一週間に一度会う父親は離婚前と違って、子どもの面倒を誠心誠意、見てくれて、離婚前よりむしろ関係がよくなり、彼ら夫婦もやはり友達のように過ごしていた。

現実的に離婚を目前にしたり、離婚を考えたりしている親に、私はこの夫婦の事例を真似するようにと言いたい。彼らは離婚を自分自身だけの問題として取り上げなかった。子どもが望むことが何か。子どもに必要なのが何かをも、一緒に十分に考慮した。だから、彼らは離婚をしても家族の中の誰も傷づかない最善の選択が出来たのだ。その子は親が離婚した事実を知っていたが、その事実を恥だと思ったり、弱みだと思ったりしないでむしろ親の立場を理解する事ができたのだ。

子どもにとって父親と母親が別れて暮らすことは、胸に深く刻まれる傷である。自分たちの感情のせいで「合理的な」選択の機会を逃してしまうと、子どもが克服しなければならない傷はもっと深く隠れてしまう。仕方なく離婚をしたら、子どものための最後の配慮の絆を捨てないこと、そこに「離婚後の育児」を解決するソロモンの知恵が潜んでいるかもしれない。

著者略歴

1964年釜山生まれ。

延世大医大卒業後、同大学院で修士号と博士号を取得。

1996－1997年 アメリカコロラド大学に留学。

現在、延世大医大小児精神科教授。

新村セブランス病院小児精神科専門医。

主要著書

《賢い父母はこどもをゆっくり育てる》

《ゆっくり学習法》

子どもより辛い母親たち

初版1刷 発行 2002年9月2日
著者／申宜真
発行所／中央M＆B出版（株）
住所／ソウル市中区スンファ洞1-170　エイスタワー6階
編集チーム電話／６３６０－５１６６
販売チーム電話／６３６０－５１５０

第　2　部

早期教育に関する研究成果と
幼児教育改革への政策提言

韓国における早期教育の実態と現況

韓国「学父母」の教育熱分析研究

幼児のための公教育・保育　ー何が問題なのかー

韓国における早期教育の実態と現況

『創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新』(2001.12) 第Ⅲ章

李基淑（梨花女子大学校）、張英姫（聖信女子大学校）、
鄭美羅（暻園大学校）、洪勇姫（梨花女子大学校）
翻訳　片 成 男

Ⅰ．私立幼稚園での早期・特技教育実態調査

本章は、幼稚園での特別活動実施に関する現状と、これに対する教師の認識を調べることを目的としている。研究のために、全国にある私立幼稚園の中から 1300 所を選定し、それぞれの幼稚園から一名の教師に質問紙を依頼した。そのうち、1116 部が回収され、回収された質問紙の分析結果は次のとおりである。

1．　研究対象の一般背景

教師の経歴に関連しては、6年以上の教育経歴をもつ教師が 407 人（36.5%）で最も多く、3年以上6年未満が 294 人（26.3%）、1年以上3年未満が 277 人（24.8%）、1年未満が 134 人（12.0%）の順であった。

教師の学歴は、専門大学卒が 736 人（65.9%）で一番多く、4年制大学卒が 275 人（24.6%）、大学院卒が 66 人（5.9%）であった。

研究対象幼稚園の地域別分布は、ソウル特別市をはじめとする広域市が全部で 600 人（54.3%）で一番多くを占めており、その他に中・小都市が 356 人（32.2%）、町村地域が 149 人（13.5%）の順であった。

幼稚園の規模においては、3、4クラスの幼稚園が 348 ヶ所（31.2%）で一番多く、5、6クラスが 334 ヶ所（29.9%）、1、2クラスが 227 ヶ所（20.3%）、7、8クラスが 100 ヶ所（9.0%）、9クラス以上が 97 ヶ所（8.7%）の順で現れた。

（表Ⅲ－1）応答教師及び幼稚園の背景

変数		区分	頻度	割合
応答教師の背景	教育経歴	1年未満	134	12.0%
		1年以上—3年未満	277	24.8%
		3年以上－6年未満	294	26.3%
		6年以上	407	36.5%
		回答なし	4	0.4%
	学歴	専門大学卒	736	65.9%
		4年制大学卒	275	24.6%
		大学院卒	66	5.9%
		その他	32	2.9%
		回答なし	7	0.6%
幼稚園の背景	地域別分布	特別（広域市）	600	54.3%
		中・小都市	356	32.2%
		町村地域	149	13.5%
		回答なし	11	1.0%
	規模（クラス数）	1、2クラス	227	20.3%
		3、4クラス	348	31.2%
		5、6クラス	334	29.9%
		7、8クラス	100	9.0%

9クラス以上	97	8.7%
回答なし	10	0.9%

2．幼稚園での特別活動の実施状況

(1) 特別活動実施の有無と種類の数

幼稚園での特別活動実施の有無を調べた結果、研究対象となった幼稚園中88%以上が実施していて、幼稚園での特別活動実施が相当普遍化していることが分かった。また、特別活動の種類を見てみると、3－4 種類を実施している幼稚園が一番多く（34.8%）、1－2 種類（30.1%）、5－6 種類（16.0%）、そして7種類以上（7.5%）を実施する幼稚園もあった。全体でみると、3－4種類以上を実施する幼稚園が58.3%に達しており、実施の有無だけでなく、一つの幼稚園で実施する特別活動の種類においても相当の数の活動を実施していることが伺える。

〈表Ⅲ－2〉特別活動実施の有無と種類数

実施の有無／種類数	頻度	割合（%）
実施しない	129	11.6
1－2種類実施	336	30.1
3－4種類実施	388	34.8
5－6種類実施	179	16.0
7種類以上	84	7.5
計	1116	100

〈表Ⅲ－3〉特別活動プログラム数の地域別分布

種類数	特別市／広域市		中・小都市		町・村地域	
	頻度	割合（%）	頻度	割合（%）	頻度	割合（%）
実施しない	51	8.5	43	12.1	32	21.5
1－2種類実施	156	26.1	115	32.3	64	43.0
3－4種類実施	243	40.7	104	29.2	36	24.2
5－6種類実施	111	18.6	54	15.2	9	6.0
7種類以上	36	6.0	40	11.2	8	5.4
計	597	100	356	100	149	100

地域別に実施している特別活動の種類数をみると、特別市／広域市は 3－4 種類行うところ（40.7%）が最も多く、中・小都市（32.3%）と町・村地域（43.0%）は1－2種類行うところが最も多いことが分かった。一方、特別活動を実施しない幼稚園は、特別市／広域市（8.5%）、中・小都市（12.1%）に比べ町・村地域（21.5%）が多く、地域差を示していた。これらの結果は、都市地域が町・村地域より多様な特別活動を実施していることを表している。

(2) 特別活動種類及び週当たり実施回数

幼稚園で実施している特別活動中最も多いのは、英語(64.3%)、美術(50.9%)、体育(48.1%)などで、この3種類の活動は、研究対象幼稚園の中ほぼ過半数の幼稚園が実施していた。特に、幼稚園での特別活動中、英語が最も高い頻度で現れるのは、早期英語教育に対する親の関心が大いに反映されているとみることができる。そのほか、楽器演奏(39.2%)、折り紙(22.5%)、コンピュータ(16.7%)、科学(17.7%)、学習紙(15.9%)、童話口演(12.7%)などが多く実施されている活動の種類に入っていた。これを順位別に見てみると〈表Ⅲ－4〉に示したとおりである。

〈表Ⅲ－4〉 特別活動種類別順位

N=1116(100)： 複数回答

順位	特別活動種類	頻度	割合(%)
1	英語	717	64.3
2	美術	568	50.9
3	体育	537	48.1
4	楽器演奏	437	39.2
5	折り紙	251	22.5
6	コンピュータ	209	18.7
7	科学	197	17.65
8	学習紙	177	15.9
9	童話口演	142	12.7
10	水泳	102	9.1
その他	その他	141	12.6

週当たりの実施回数は、特別活動の種類によって異なり、最も多く実施している英語の場合、週当たり2回が最多で、体育、水泳、コンピュータ、科学、楽器演奏、折り紙などは週1回実施が最も多かった。

〈表Ⅲ－5〉 特別活動種類及び週当たり実施回数　　単位：園数（%）

課目＼週当たり回数	1回	2回	3回	4回	5回	合計
英語	142(19.80)	361(50.35)	151(21.06)	28(3.91)	35(5)	717(100)
体育	463(86.22)	59(10.99)	4(0.74)	1(0.19)	10(2)	537(100)
美術	152(26.76)	155(27.29)	123(21.65)	42(7.39)	96(17)	568(100)
童話口演	71(50.00)	31(21.83)	25(17.61)	7(4.93)	8(6)	142(100)
水泳	49(48.04)	24(23.53)	10(9.80)	1(0.98)	18(18)	102(100)
学習紙	23(12.99)	49(27.68)	43(24.29)	16(9.04)	46(26)	177(100)
コンピュータ	91(43.54)	77(36.84)	23(11.00)	5(2.39)	13(6)	209(100)
科学	163(82.74)	24(12.18)	2(1.02)	0(0.00)	8(4)	197(100)
楽器演奏	282(64.53)	73(16.70)	19(4.35)	10(2.29)	53(12)	437(100)
折り紙	168(66.93)	62(24.70)	12(4.78)	3(1.20)	6(2)	251(100)
その他	91(64.54)	27(19.15)	2(1.42)	4(2.84)	17(12)	141(100)

〈表Ⅲ－6〉 特別活動種類の地域別分布

＊多重分析、無回答 11 人除外

地域別分布	特別市／広域市		中・小都市		町・村地域	
	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
英語	444	74.0	216	60.7	54	36.2
体育	335	55.8	173	48.6	28	18.8
美術	341	56.8	162	45.5	64	43.0
童話口演	68	11.3	62	17.4	9	6.0
水泳	54	9.0	42	11.8	6	4.0
学習紙	81	13.5	69	19.4	33	22.2
コンピュータ	132	22.0	52	14.6	24	16.1
科学	95	15.8	82	23.0	17	11.4
楽器演奏	242	40.3	146	41.0	45	30.2
折り紙	89	14.8	110	30.9	52	34.9
その他	99	16.5	34	9.6	9	6.0
回答者数	600	100	356	100	149	100

特別活動の種類による地域別分布を見てみると、特別市／広域市及び中・小都市地域の場合英語を最も多く実施しており、町・村地域の場合は美術活動を最も多く実施していることが分かる。その外の活動は地域の間で比較的均一に分布されていた。

(3) 特別活動実施方法

特別活動は主に幼稚園の正規授業時間中に実施するところが(43.4%)最も多く、授業中と授業が終わった後並行して実施するところが(22.8%)その次に多く、大体正規授業中に特別活動を行うことになっていた。即ち、研究対象となった幼稚園のうち66.2%の幼稚園が正規授業時間に特別活動を実施していた。正規の授業時間に特別活動を実施すると、活動時間前後に相当な転換時間を必要とし、これによって幼稚園での日常的な教育活動が妨害されやすい点が問題に成りうる。また、幼稚園での日課計画及び運営の基本原理を考慮する場合、日課運営の一貫性、関連性、融通性などの面で、相互関係性を保ちながら運営することに困難があり得る。

〈表Ⅲ－7〉特別活動実施方法

N=1116(100)：複数回答

実施方法	頻度	割合(%)
授業中	484	43.4
放課後	185	16.6
授業中と放課後	255	22.8
全日制クラス（午後）	107	9.6
実施しない	117	10.5
計	1148	100

(4) 特別活動担当者

特別活動担当者は、その分野の専門家を招聘する場合(38.8%)と、専門団体の派遣者(32.6%)が担当することが多かった。つまり、外部から招聘して講師が授業を担当する場合が71.4%で、このような授業で教師は補助者として参加する場合も、全く授業に参加しない場合もあり、幼児指導における一貫性と関連性に問題が生じ得る。また個別的な幼児の要求や状況などが、特別活動によって正規授業が中断される状況で、どのように配慮されていくかも問題点としてあげられる。

また教師たちが直接特別活動を担当する場合も29.2%で、これに対して学生の父母などボランティアが特別活動を担当する場合(1.6%)はとても少なかった。

〈表Ⅲ－8〉特別活動担当者

N=1116(100)：複数回答

担当者	頻度	割合(%)
幼稚園教師	326	29.2
機関団体派遣者	364	32.6
分野別専門家	433	38.8
ボランティア	18	1.6
その他	29	2.6
計	1170	100

一方、幼稚園教師が特別活動プログラムを担当する場合を除き、特別活動実施中の教師の役割と関連した質問調査の結果、教師の役割は特別活動が授業時間中に行なわれる場合と放課後プログラムとして進行される場合に分けてみることができた。

まず授業時間中に実施する特別活動プログラムでの担任教師の役割は‘補助教師として参与する’が731人(72.4%)で最も多く、‘クラスを分けて他の活動を行う’が131人(13.0%)、‘参与しない’が99人(9.8%)、その他が49人(4.9%)の順で現れた。この結果からみるように、特別活動のためのプログラム担当者が別にいる場合、担任教師は主に補助教師としての役割を果たしていることが分かる。

放課後行なわれる特別活動プログラムでの担任教師の役割は‘参与しない’が 378 人(47.2%)、‘補助教師として参与する’が 218 人(27.2%)、‘クラスを分けて他の活動を行う’が 76 人(9.5%)、その他が 129 人(16.1%)となっていた。

〈表Ⅲ－9〉 授業時間中に実施するプログラムでの担任の役割

授業中の役割	参与しない	補助教師として参与	クラスを分けて他の活動を行う	その他	計
頻度	99	731	131	49	1010
割合(%)	9.80	72.38	12.97	4.85	100

〈表Ⅲ－10〉 放課後プログラムでの担任の役割

放課後の役割	参与しない	補助教師として参与	クラスを分けて他の活動を行う	その他	計
頻度	378	218	76	129	801
割合(%)	47.19	27.22	9.49	16.10	100

(5) 特別活動の集団構成方法

特別活動を実施する時の集団構成方法は、大体大集団で実施していた。英語(87.0%)、体育(92.1%)などは、ほとんど大集団で構成されていた。小集団と個別的指導方法を最も多くとっているコンピュータ活動の場合にも、小集団(53.2%)、大集団(28.1%)、個別(18.7%)の順に現れた。このような結果からみると、幼稚園で実施している特別活動は、特別活動担当者が幼稚園を訪問して授業をする場合、大勢の幼児を対象に大集団授業をするためにこのような結果が現れたとみることができる。したがって、それぞれの活動によって適切な集団構成と相互作用が必要とされる幼児にとって、各幼児当たりの活動時間及び相互作用機会がかなり不足しているおそれがある。

〈表Ⅲ－11〉 特別活動集団構成方法

種類別	集団構成						合計	
	大集団		小集団		個別幼児			
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
英語	621	87.0	91	12.8	2	0.3	714	100
体育	488	92.1	39	7.4	3	0.6	530	100
美術	304	55.1	218	39.5	30	5.4	552	100
童話口演	78	55.3	50	35.5	13	9.2	141	100
水泳	81	81.8	15	15.2	3	3.0	99	100
学習紙	81	45.3	62	34.5	36	20.1	179	100
コンピュータ	57	28.1	108	53.2	38	18.7	203	100
科学	101	53.7	82	43.6	5	2.7	188	100
楽器・国楽	229	55.9	140	34.2	48	11.7	417	100
折り紙	109	44.9	111	45.7	23	9.5	243	100
その他	79	57.3	53	38.4	6	4.4	138	100

(6) 特別活動プログラムの対象幼児及び1回平均教育時間

特別活動プログラムの対象幼児と関連した質問紙調査の結果、全ての種類のプログラムが幼児全体を対象にする場合が多いことが分かった。特別活動を選択した幼児を対象にするプログラムは童話口演(37.4%)、美術(36.4%)などが比較的に高い割合で現れ、全日制クラス幼児を対象にした特別活動プログラムは学習紙(25.3%)、美術(17.8%)、折り紙(17.6%)を除き、全ての種類で 5%ぐらいの低い割合を示した。これは大部分のプログラムが全体幼児を対象に実施されていることを示し、特別活動プログラムの種類別 1 回平均教育時間はほとんど 30－40 分間で、比較的に均一な分布を示していた。これらの結果は〈表Ⅲ－12〉に示したとおりである。

〈表Ⅲ－12〉特別活動プログラムの対象幼児及び平均教育時間

種類別	平均教育時間(分)	全体幼児		対象幼児 選択幼児		対象幼児 全日制クラス幼児		合計	
		頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
英語	26.2	612	86.3	77	10.9	20	2.8	709	100
体育	32.8	490	93.9	22	4.2	10	1.9	522	100
美術	44.5	254	45.8	202	36.4	99	17.8	555	100
童話口演	36.9	79	56.8	52	37.4	8	5.8	139	100
水泳	39.4	82	83.7	14	14.3	2	2.0	98	100
学習紙	33.4	109	59.9	27	14.9	46	25.3	182	100
コンピュータ	30.6	154	77.4	31	15.6	14	7.0	199	100
科学	36.1	126	67.7	50	26.9	10	5.4	186	100
楽器・国楽	33.5	273	67.0	114	27.8	23	5.6	410	100
折り紙	33.4	158	64.8	43	17.6	43	17.6	244	100
その他	41.0	76	55.9	54	39.7	6	4.4	136	100

(7) 特別活動の費用

特別活動の費用負担は、正規授業中に実施するかそれとも放課後に実施するかによって、その負担方法は異なるのが一般的であった。正規授業で実施する場合は幼稚園教育費で、放課後に行なう活動である場合には親が負担するという答えが最も多く(35.2%)、教育費とは別途に特別活動費を課するところも多かった(30.5%)。

〈表Ⅲ－13〉特別活動の費用

支出方法	頻　度	割合(%)
教育費	278	27.3
特別活動費を徴収	311	30.5
正規授業中(通常の授業料の一部) 放課後(特別活動費の徴収)	359	35.2
親自身が運営	36	3.5
その他	36	3.5
計	1020	100

(8) 特別活動の実施理由

幼稚園で特別活動を実施する理由を三つずつあげる質問項目で、大体 1－3 種類以内の複数回答をもとに、それぞれに対する頻度と割合を計算したのが〈表Ⅲ－14〉である。

幼稚園で特別活動を実施する理由として、園児募集(65.6%)、潜在能力の早期開発(49.3%)、終日プログラム実施による多様なプログラムの必要性(43.7%)などがあげられた。

私立幼稚園の場合、親たちの選択に幼稚園運営の成敗がかかっている状況で、'園児募集'は親たちが望むため特別活動を実施する最も重要な理由になり得る。即ち、特別活動が教育的に価値あるものかという問題よりは、幼稚園運営の面で最も切実な理由である'園児募集'が最も主たる理由になっている。この意味で、私立幼稚園を公教育機関から支援して、教育の方向を正しく設定し、思う存分運営活動をしていけるように支援するべきである。教育的要素によってではなく、教育外の要素によってプログラムが選択され、運営される状況はとても深刻な問題点としてあげられる。

〈表Ⅲ－14〉特別活動の実施理由

N＝1116(100)：複数回答

実施の理由	頻度(%)
1.親たちが望み、園児募集に役立つから	735(65.86)
2.特別活動は当該の専門家が行なうべきだから	388(34.76)

3.終日制幼児のために多様なプログラムが必要だから	488(43.72)
4.幼児たちが別途に学院に通わなくても済むから	473(42.38)
5.幼児たちの潜在能力を早期に開発することができるから	550(49.28)
6.他の幼稚園でも特別活動をするから	186(16.66)
7.幼稚園にとって経済的な助けとなるから	87(7.79)
8.クラス分けを通じて集団の大きさを縮小できるから	101(9.05)
9.その他	19(1.70)
総応答者	1116(100)

(9) 特別活動実施の問題点

特別活動実施による問題点を三つずつ指摘する質問項目で、1－3種類以内の複数回答資料をもとに、頻度と割合を計算して‘特別活動実施の問題点’を分析したのが〈表Ⅲ－15〉である。幼稚園教師が認識している特別活動実施による問題点の中には、担当教師の資質問題が最も深刻な問題として考えられていた。特に、特別活動の内容より、幼児の発達的特徴とか要求に対する理解の方が優先されるべきであるという点で、幼児教師資格証を持っていない非専攻者たちが授業を担当している問題(50.8%)が最も大きな問題点として指摘された。また幼児たちが感じる過重なストレス(36.9%)、正規授業準備及び進行上の問題点(34.2%)なども提起された。

〈表Ⅲ－15〉特別活動実施の問題点

複数回答

特別活動実施の問題点	頻度(%)
1.幼稚園の教育活動に妨げになるから	345(30.9)
2.幼稚園の教育活動プログラムだけで十分だから	299(26.8)
3.費用が負担になるから	359(32.2)
4.関連専門家を探すのが難しいから	352(31.5)
5.担当が幼児教育専攻者でないため幼児指導に問題があって	567(50.8)
6.幼児たちに過重なストレスを与えるようになるから	412(36.9)
7.幼児たちに適切な活動でないから	98(8.8)
8.授業準備の時間が不足するから(帰宅指導及び放課後の教室使用により)	382(34.2)
9.特別活動をする子どもたちだけで親しくなるから	61(8.5)
10.その他	9(0.9)
合　計	1116(100)

3．特別活動に対する教師の認識

特別活動に対する教師の認識は、4段階評定尺度を用いて、「特別活動指導者の資質と関連した内容(1,2 項)」、「特別活動を実施することで幼稚園教育活動にどのような影響があるかに関する内容(3,4 項)」、「幼稚園で特別活動を実施することで幼児が受ける影響に関する内容(5,6,7 項)」、「親の要求と負担に関する内容(8,9 項)」、「特別活動教師と幼稚園教師の賃金問題(10 項)」などに分けて考察した。

幼稚園教師たちは、特別活動を担当する教師達が必ず幼児教師資格証を持つべき(3.35)と認識している。このような認識の背景には、特別活動指導者は大体幼児教育に対する理解が不足する(2.80)と考え、その細部内容としては、「幼児の発達と要求に対する理解が不足し、個別的な幼児の気質、状況などに対する理解が不足するため、幼児教師としての資質に問題点がある」という意見を提示した。ここからは、幼稚園で教師と特別活動の担当教師との間に相当な葛藤があっただろうと考えることができる。

〈表Ⅲ－16〉特別活動に対する教師の認識

内　　容	評定尺度平均 1　2　3　4
1. 幼児教育をする人はどんな分野であっても必ず幼児教師資格証を持つべきだ。	3.35
2. 特別活動指導者は大体幼児教育に対する理解が不足している	2.80
3. 幼稚園で特別活動を正規授業時間にするのは教育課程運営に妨げになる。	2.76
4. 幼稚園での特別活動は幼児を観察し指導するための時間を奪う。	2.50
5. 幼児たちが受けている特別活動の種類が多すぎる。	2.68
6. 幼児期に特別活動を実施するのは早すぎると思う。	2.42
7. 特別活動から幼児が受けるストレスは深刻である。	2.54
8. 親の要求があっても幼稚園の正規の教育活動だけで実施すべきである。	2.74
9. 特別活動による親の負担が大きい。	2.59
10. 特別活動指導者の人件費に比べて、幼稚園教師の賃金が低すぎる。	3.04
全　体　平　均	2.75

特別活動を実施することで幼稚園の教育活動にどのような影響があるかに対する認識は、「幼児観察及び指導のための時間を取られる(2.50)」、「特別活動の種類が多すぎる(2.68)」と認識していた。これらの問題点と関連して、授業時間中に特別活動が実施されたりその種類が多くなることで、「教室の雰囲気が散漫となったり、授業の一貫性と関連性が途絶える」など授業の妨げとなったり、時間浪費の要素が多いことなどが意見として提示された。特別活動に対する親の要求に関しては、親の要求があっても、幼稚園教育の正常化が重要だと考えていた。また「特別活動担当者の人件費に比べて、教師の賃金が低すぎる」という項目でとても高い反応を示しており、教師としての専門性と自尊心に対する対策が必要であると思われる。

Ⅱ. 家庭での早期・特技教育

本章では、全国私立幼稚園に幼児を送っている親 2,600 人を対象に、特別活動実施現状に関する質問紙調査結果を示し、その分析を試みる。親用質問紙の場合、配られた 2,600 部の中 2,279 部(87.7%)が回収され、この内ありのままに答えていなかったり子どもの年齢が本研究対象範囲を越えたりしたケースを除いた、計 2,159 部が分析に用いられた。

1. 研究対象の一般背景

親の年齢は父親の 31%、母親の 85%が 30 代で、最も多かった。学歴は父親の場合 4 年制大学卒が最も多く(50%)、母親は高卒以下が最も多かった(40%)。家庭の月収は 100－200 万ウォンが 36%、200－300 万ウォンが 35%を占め、300－400 万ウォンも 17%を占めていた。親の職業中、父親は事務職が 41%で最も多く、その次が専門職(16%)、サービス職(15%)の順で現れた。母親は専業主婦が 62%を占めており、就業している母親（以下、就業母という）は 35%で、就業母のうち事務職(19%)が最も多く、その次に多いのがサービス職(6%)であった。

幼児の性別を見てみると、男児が全体の 51%を占めており、女児はそれよりやや少ない 48%で大体同じ割合だった。幼児の年齢は 3 歳から 6 歳までの幼児が全体の 91%を占めており、幼児の年齢別分布は 5 歳児(41%)が最も多く、次が 6 歳児(25%)、4 歳児(20%)の順だった。

〈表Ⅲ－17〉 対象となった親の一般背景

変数		区分	頻度	割合
幼児	性別	男子	1,092	51%
		女子	1,029	48%
		無回答	38	2%
	年齢	2歳以下	22	1%
		3歳	118	5%
		4歳	437	20%
		5歳	876	41%
		6歳	535	25%
		7歳以上	102	5%
		無回答	69	3%
親の職業	父	無職	8	0%
		勤労者	253	12%
		サービス業	322	15%
		事務職	894	41%
		行政職	100	5%
		専門職	336	16%
		その他	197	9%
		無回答	49	2%
	母	専業主婦	1,348	62%
		就業母	756	35%
		無回答	55	3%
家計平均月収		100万ウォン未満	30	1%
		100～200万ウォン未満	781	36%
		200～300万ウォン未満	758	35%
		300～400万ウォン未満	371	17%
		400～500万ウォン未満	110	5%
		500万ウォン以上	76	4%
		無回答	33	2%

2．早期・特技教育実施の現状

(1) 早期・特技教育実施の有無

〈表Ⅲ－18〉にみるように、研究対象のうち、早期・特技教育を受けたことがあるかまたは現在受けている幼児は86%で、大部分の幼児たちが幼稚園教育以外に早期・特技教育を受けていることが明らかとなった。

〈表Ⅲ－18〉 早期・特技教育実施の有無

実施の有無	頻度	割合
実施する	1,847	86%
実施しない	312	14%
計	2,159	100%

〈表Ⅲ－19〉で早期・特技教育を受ける幼児を性別と年齢にしたがって分析してみると、男児の84%、女児の87%が特技教育を受けていること、男児より女児の早期・特技教育を受ける割合が若干高いこと、が分かる。幼児の年齢によって分析すると、7歳以上の幼児の92%が早期・特技教育を受けており、他の年齢段階と比べて特技教育を受けている割合が最も高い結果となった。その次に早期・特技教育の割合が高いのは6歳児(89%)で、5歳児(88%)、2歳以下(86%)の順で現れ、幼児の年齢が上がるほど特技教育を受ける割合が高いことが分かる。本調査対象中、2歳以下の子どもの場合は86%が特技教育を受けており、3歳と4歳の幼児よりも高い割合であるが、2歳以下の幼児数が他の年齢の子どもに比べて圧倒的に少ないため、そのまま解釈することには無理があるよ

うに思われる。これについては改めて調査しなおす必要がある。

〈表Ⅲ－19〉幼児の性別、年齢による特技教育実施の現状　　頻度(%)

変数	区分	実施する	実施しない	計
性別	男児	919(84)	173(16)	1,092(100)
	女児	899(87)	130(13)	1,029(100)
	無回答	29(76)	9(24)	38(100)
年齢	2歳以下	19(86)	3(14)	22(100)
	3歳	88(75)	30(25)	118(100)
	4歳	342(78)	95(22)	437(100)
	5歳	771(88)	105(12)	876(100)
	6歳	477(89)	58(11)	535(100)
	7歳以上	94(92)	8(8)	102(100)
	無回答	56(81)	13(19)	69(100)

(2)　早期・特技教育の種類数

早期・特技教育を受けている幼児たちを対象に、現在実施している早期・特技教育の種類数を分析した結果は〈表Ⅲ－20〉に示した通りである。2種類の早期・特技教育を受けている幼児が30%で最も多く、1種類を受けている幼児が28.8%、3種類の幼児が20.6%となった。調査対象中、特技教育を10種類以上受ける幼児も8人おり、最多で12種類までやる幼児もいた。

〈表Ⅲ－20〉早期・特技教育の種類数

早期・特技教育の種類数	頻度	割合
1種類	532	28.8%
2種類	555	30.0%
3種類	380	20.6%
4種類	219	11.9%
5種類	100	5.4%
6種類以上	61	3.3%
計	1,847	100%

現在幼児が受けている早期・特技教育の種類数が幼児の性別と年齢によってどのようになっているかを分析した結果は、〈表Ⅲ－21〉、〈表Ⅲ－22〉に示した通りである。

〈表Ⅲ－21〉幼児の性別による学習の種類数　　頻度(%)

学習の種類数	男児	女児
1種類	267(29)	248(28)
2種類	292(32)	258(29)
3種類	178(19)	194(22)
4種類	105(11)	107(12)
5種類	40(4)	62(7)
6種類以上	38(4)	30(3)
計	920(100)	899(100)

〈表Ⅲ－21〉によると、男児・女児全てが早期・特技教育を2種類受けているケースがそれぞれ22%、29%で最も多く、その次が1種類（それぞれ29%、28%）となっている。しかし、3種類以上の早期・特技教育を受けるケースは女児が44%であるのに対して男児は38%で、女児が男児より3種類以上の早期・特技教育を受ける割合が高いことが分かる。

〈表Ⅲ－22〉幼児の年齢による学習の種類数　　頻度(%)

	2歳以下	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳以上
1種類	13(68)	54(61)	131(38)	195(25)	103(22)	12(13)
2種類	4(21)	22(25)	113(33)	249(32)	123(26)	27(29)
3種類	1(5)	8(9)	57(17)	175(23)	109(23)	15(16)
4種類	0(0)	2(2)	22(6)	92(12)	79(17)	18(19)
5種類	1(5)	1(1)	13(4)	38(5)	35(7)	12(13)
6種類以上	0(0)	1(1)	6(2)	23(3)	28(6)	10(11)
計	19(100)	88(100)	342(100)	771(100)	477(100)	94(100)

〈表Ⅲ－22〉によると、2歳未満と3歳幼児はその過半数が1種類の早期・特技教育を受けていることが分かり、4歳と5歳の幼児は1種類と2種類の早期・特技教育を受ける幼児の人数がほぼ同じ割合で現れている。これに対して、5歳以上の幼児たちは早期・特技教育を2種類受けている幼児の人数が最も多く、また3種類受けている幼児の人数も増えている。

結果的には、幼児の年齢が上がれば上がるほど受けている早期・特技教育の種類数も多くなる傾向が見られる。特に3種類以上の早期・特技教育を受けている幼児の割合を年齢別で比較すると、3歳は13%、4歳は29%、5歳は43%、6歳は53%、そして7歳以上の場合に59%の割合を占めており、幼児の年齢が上がるにつれ早期・特技教育を3種類以上受ける幼児の割合も持続的に増加している。

幼児たちが受けている早期・特技教育の種類数、が母親の就業の有無によってどのような傾向を示すか分析した結果は、〈表Ⅲ－23〉に示した通りである。

〈表Ⅲ－23〉母親の職業の有無による学習の種類数　　頻度(%)

	就業母	非就業母	計
1種類	223(33)	302(26)	525(28)
2種類	195(29)	358(30)	553(30)
3種類	124(18)	254(22)	378(20)
4種類	74(11)	145(12)	219(12)
5種類	29(4)	74(6)	103(6)
6種類以上	29(4)	40(3)	69(4)
計	674(100)	1,173(100)	1,847(100)

就業母の場合、子どもに早期・特技教育を1種類受けさせるケースが33%で最も多く、その次が2種類(29%)と3種類(18%)の順で表れた。これに対して、非就業母の場合に早期・特技教育を2種類受けさせるケースが最も多く(31%)、その次が1種類(26%)、3種類(22%)の順で表れた。これは、非就業母が就業母より子どもに早期・特技教育をより多く受けさせていることを示している。また子どもに早期・特技教育を3種類以上受けさせるケースは、就業母が37%であるのに対して、非就業母は43%となり、非就業母が就業母に比べて子どもに早期・特技教育を3種類以上受けさせる割合も高いことを示している。

(3) 早期・特技教育の種類

本研究で調査した27種類の特技教育中、幼児たちが多く受けている上位の10種類を対象に課目の種類とその現状を〈表Ⅲ－24〉に示した。

幼児たちが最も多く受けている特技教育は、ハングル／文字書きの教育で、本研究の調査対象2,159人の49%に達する1,054人がハングル教育を受けていた。その次に多い特技教育は数学(32%)、英語(28%)、ピアノ(28%)、美術(22%)、総合学習紙(11%)の順で表れた。しかし、総合学習紙の大部分がハングルと数学、英語のためであることを考えると、調査対象の幼児たちが最も多く受けて

いる早期・特技教育はハングルと数学、英語であることが分かる。

〈表Ⅲ－24〉 早期・特技教育の種類別順位　　N＝2159：複数回答

順位	早期・特技教育	頻度(%)	回答者数
1	ハングル／文字書き	1,054(49)	2,159(100)
2	数学	696(32)	
3	英語	606(28)	
4	ピアノ	594(28)	
5	美術	478(22)	
6	総合学習紙	234(11)	
7	テクォンド	117(5)	
8	フレーベル玩具	107(5)	
9	舞踊	68(3)	
10	漢字	62(3)	

小中学生とは違って、今まで幼児の場合早期・特技教育とは主に早期才能教育と理解されてきた。幼児教育辞典（韓国幼児教育学会、1997）によると、早期才能教育というのは通常の学校教育の枠外で行われている英才教育、早期教育、芸術・体育等の教育を総称しており、韓国の場合、様々な学院を中心とした雄弁術・テクォンド・美術・書道などのことであると定義している。つまり、今まで幼児のための早期・特技教育は主に芸術・体育分野の補充教育として考えられていた。

しかし、本研究で現れた結果からは、だんだん社会における幼児早期・特技教育の内容が芸術・体育に限られず、早期知能開発や小学校での学習準備のためのものとして拡張しており、むしろこのような内容が最近はもっと強調されていることが分かる。

幼児たちが受けている早期・特技教育の種類は、幼児の年齢によってどのような傾向が見られるか分析した結果は、〈表Ⅲ－25〉に示した通りである。

〈表Ⅲ－25〉 幼児の年齢による早期・特技教育の種類　　頻度（%）

	満2歳以下	満3歳	満4歳	満5歳	満6歳	満7歳以上
ハングル	12(63)	59(67)	199(58)	453(59)	271(57)	41(44)
数学	2(11)	10(11)	92(27)	321(42)	218(46)	38(40)
英語	2(11)	17(19)	94(27)	243(32)	180(38)	48(51)
ピアノ	2(11)	6(7)	52(15)	241(31)	220(46)	58(62)
美術	2(11)	11(13)	82(24)	204(26)	145(30)	20(21)
総合学習紙	4(21)	13(15)	45(13)	103(13)	52(11)	12(13)
テクォンド	0	0	16(5)	42(5)	44(9)	11(12)
フレーベル玩具	1(5)	9(10)	24(7)	42(5)	24(5)	6(6)
舞踊	1(5)	2(2)	16(5)	24(3)	15(3)	8(8)
漢字	0	0	6(2)	19(2)	26(5)	12(13)
回答者数	19(100)	88(100)	342(100)	771(100)	477(100)	94(100)

2歳以下の赤ちゃんの場合には、ハングルをする場合が63%で一番多く、次が総合学習紙（21%）でハングルと総合学習紙を合わせると 84%に達した。満3歳の幼児の場合にも、ハングルをする幼児が67%で一番多く、次が英語（19%）、総合学習紙（15%）、美術（13%）の順で現れた。満4歳の幼児はハングルをする場合が58%で一番多いことは2・3歳幼児と同じであるが、次が英語と数学（それぞれ27%）、美術（24%）、ピアノ（15%）の順に現れた。満5歳の幼児はハングル、数学、英語、ピアノ、美術の順であり、満6歳児でハングルが一番多いことは他の年齢の幼児たちと同じであるが、その次がピアノ、数学、英語、美術の順で現れた。これに対して満7歳以上の幼児が一番多く受けている早期・特技教育はピアノ（62%）で、次が英語、ハングル、数学、美術として表れ、それまでの年齢の幼児とは異なる様相がうかがえた。

以上の結果を通じて、早期・特技教育の種類は幼児の年齢が幼いほどハングルと総合学習紙中心の教育を多く受けており、年齢が上がるほどハングルや総合学習紙以外の数学、英語、ピアノ、美術などほかの種類の教育を受ける比率が高いことが分かった。このような結果は、幼児の年齢が上がるほどハングルを習得した割合が高いためでもあるが、親たちの一次的な関心がハングルと小学校での学習のための準備にあり、このような能力が形成されたと思う時、芸能・特技教育の領域に関心をもつためだと考えられる。また、最近社会で強調されている外国語学習や幼児の脳開発に関する研究の影響で、親たちがだんだん幼児の知能開発と学校での学習準備に関心をもっているためだと説明できる。

結局のところ、韓国の親たちは小学校の教育が始まるずっと前の満2歳未満または3歳から既に幼児のハングル勉強に関心を持ち、小学校に進学する6歳になると数学、ピアノ、英語、美術などの教育に関心を向けており、正規の学校教育が始まる前にあらかじめ子女に次の段階の教育を準備し、実施している傾向があることを示している。

幼児の性別によって受けている早期・特技教育の種類がどうかを分析した結果は〈表Ⅲ－26〉に示した通りである。

〈表Ⅲ－26〉幼児の性別による早期・特技教育の種類　　頻度（%）

	男児	女児
ハングル	540(59)	202(22)
数学	344(37)	343(38)
英語	316(34)	280(31)
ピアノ	191(21)	397(44)
美術	232(25)	236(26)
総合学習紙	111(12)	119(13)
テクォンド	106(12)	11(1)
フレーベル玩具	53(6)	53(6)
舞踊	5(1)	61(7)
漢字	36(4)	26(3)
回答者数	919(100)	899(100)

男児の場合多く受けている早期・特技教育は、ハングル（59%）、数学（37%）、英語（34%）、美術（25%）、ピアノ（21%）の順で現れた。これに対して、女児はピアノ（44%）が一番多くて、次が数学（38%）、英語（31%）、美術（26%）、ハングル（22%）の順に現れ、男児の場合と違いを示した。ハングルとテクォンドを習うケースは、男児が女児よりはるかに多く、女児は男児に比べてピアノを習う場合が多かった。

（4）特技教育の平均開始年齢、持続時間、教育回数、一回教育時間

特技教育の平均開始年齢を分析した結果、全体的に総合学習紙（43.3ヶ月）を始める年齢が一番早く、次がハングル（47.6ヶ月）となっていた（〈表Ⅲ－27〉参照）。調査の対象となった幼児たちは平均満4歳以前から総合学習紙とハングルを始めており、フレーベル玩具（49.1ヶ月）も開始年齢が早いものとして現れた。

調査対象の幼児の中で特技教育を始める最小年齢は、生後3ヶ月で、この時期に英語を始めたケースがあった。これは、早期英語教育に対する親たちの関心が大きいことを反映しているが、3ヶ月の幼児に英語を教えることは、最近わが社会で広まっているグローバリゼーションの意味を間違って理解しただけでなく、一部の親たちの間に起きている超早期外国語教育のブームによるものであることが分かる。つまり、外国語は早く習うほど効果があり、幼児がハングルを身につけてからだと英語の勉強に干渉するので、ハングルを習う前に英語を始めるべきだという間違った考えが社

会に蔓延しているためである。

特技教育を始めてからやめるまでの持続期間を分析した結果、種類別の平均持続期間が長いのは総合学習紙、玩具、ハングルの順で、平均開始年齢が早い科目の種類と類似した傾向があった。その反面、持続期間が一番短かったのは漢字（平均3ヶ月）で、次がピアノ（5.9ヶ月）と舞踊（7.1ヶ月）の順だった。

〈表Ⅲ－27〉特技教育の開始年齢、持続期間、週当教育回数、教育時間

科目	平均開始年齢（ヶ月）	持続期間（月）	週当たり教育（回数）	一回教育時間（分）
ハングル	47.6	10.6	1.50	21.99
英語	55.0	8.8	1.87	31.07
数学	55.6	9.3	1.38	18.39
美術	54.6	8.9	3.19	55.88
ピアノ	59.6	5.9	4.27	48.70
舞踊	55.9	7.1	2.28	57.06
テクォンド	60.3	8.5	4.46	53.46
漢字	66.6	3.0	1.73	16.24
総合学習紙	43.3	14.5	2.24	17.76
フレーベル玩具	49.1	11.9	1.15	46.78

週当たり特技教育を受ける回数を調べてみた結果、テクォンドとピアノが平均4回以上で一番多く、次が美術と暗算、囲碁、雄弁術などで週3回以上実施していた。一回の平均教育時間が長いのは舞踊（57.06分）、美術（55.88分）の順で、逆に短いのは漢字（16.24分）、総合学習紙（17.76分）、数学（18.39分）、ハングル（21.99分）の順だった。この外、幼児が受けている早期・特技教育の中で一回の平均教育時間が一番長いのは、囲碁（1時間10分）と水泳（1時間7分）だった。一回の平均教育時間は、主に学習形態と関連したもので学習紙や訪問教師を通じて実施する場合、一回の教育時間が短いのに対して、学院や個人指導を通じて実施している科目は、その時間が長いことが分かった。

（5）特技教育の学習形態

学院、学習紙、個人指導、グループ指導など、どのような形態で早期・特技教育を実施しているかは、〈表Ⅲ－28〉、〈表Ⅲ－29〉に示した。全体的に学習紙が40%で一番多く、次は学院が27%、個人指導が21%、グループ指導が12%として現れた。

〈表Ⅲ－28〉特技教育の学習形態

学習形態態	学習紙	学院	個人指導	グループ指導	計
頻度（割合）	1,703（40%）	995（27%）	784（21%）	327（12%）	3,809（100%）

早期・特技教育の内容によって学習形態がどうかを分析した結果、幼児たちが多く受けているハングル（70%）、数学（73%）は主に学習紙を通じて実施している場合が多く、反対に美術（54%）、ピアノ（69%）、テクォンド（79%）、舞踊（54%）などは学院で習う場合が多く、フレーベル玩具（73%）は個人指導が多かった。英語も学習紙を通じて習う場合が33%として一番多く、次が個人指導（27%）と学院（21%）として現れ、早期外国語教育に対する親たちの関心は大きいが、正しい教育方法に対する認識はそれほどでもないことが分かる。

このような結果からは、現在韓国の幼児たちは、学校での学習のための基礎能力や技術を学ぶためのものは、主に学習紙を利用するか家庭訪問教師などを通じて習い、体育や美術などを学ぶ場合は、主に学院で習う場合が多いことが分かる。

〈表Ⅲ－29〉特技教育の種類による学習形態　　頻度（%）

学習形態 / 種類	学院	学習紙	個人指導	グループ指導	無回答	計
ハングル／字書き	42(4)	783(70)	232(22)	21(2)	21(2)	1,054(100)
数学	21(3)	508(73)	139(20)	7(1)	21(3)	696(100)
英語	127(21)	200(33)	164(27)	97(16)	18(3)	606(100)
ピアノ	410(69)	6(1)	101(17)	24(4)	53(9)	594(100)
美術	258(54)	5(1)	43(9)	134(28)	38(8)	478(100)
総合学習紙	5(2)	206(88)	9(4)	0(0)	14(6)	234(100)
テクォント	92(79)	0(0)	0(0)	14(12)	11(9)	117(100)
フレーベル玩具	0(0)	5(5)	78(73)	7(7)	16(15)	107(100)
舞踊	37(54)	1(1)	2(3)	22(32)	7(10)	68(100)
漢字	3(5)	(55)	(26)	(2)	(12)	(100)
計	995(27)	1,703(40)	784(21)	327(12)		

幼児たちは実生活の脈絡の中で自分が興味を持ったときに一番よく学習する。従って、具体的な実際経験を伴わず、机上で紙と鉛筆だけで行われる学習紙は、幼児の発達の特性からみて適切な教育方法や媒体とはいえない。にもかかわらず、早期に学習紙などの方法で教育を受けされるとすれば、幼児たちが他人とうまく付き合うことよりも人に勝つことが大事だという考えを持つようになる可能性がある。また正解探しや語彙の習得などが主流になる学習紙の特性によって、開放的、創造的、自律的な思考や行動を培うよりも幼児期から閉鎖的で他律的な思考を強化するので、とても危険である。

（6）月あたりの私教育費

親たちが幼児の早期・特技教育に支出している教育費の現状を調べた結果は、〈表Ⅲ－30〉に示した通りである。早期・特技教育に支出する月平均費用は、子女1人当たり12万6千ウォンだった。調査対象のうち、月10万ウォン未満の教育費を支出しているのは935家庭（54.6%）で、子女1人当月30万ウォン以上の私教育費を支出する家庭も全体の11.2%を占めていた。本研究の対象となった家庭の中で、私教育費を一番多く支出しているケースは月105万ウォンまで支出する家庭であった。

〈表Ⅲ－30〉一世帯当りの月別早期・特技教育の費用　　頻度（%）

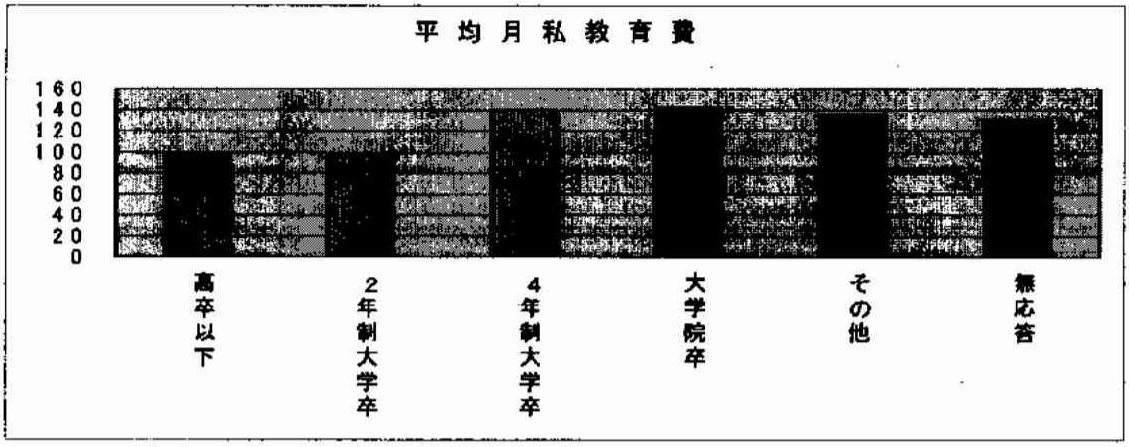
月私教育費	頻度	百分率
10万ウォン未満	935	54.6%
10~20万ウォン未満	586	34.2%
20~30万ウォン未満	132	7.7%
30~40万ウォン未満	28	1.6%
40~50万ウォン未満	18	1.1%
50万ウォン以上	13	0.85%
計	1,712	100.0%

子女の早期・特技教育のための月私教育費支出を、父親の学歴、職業、収入などの変数にしたがって分析した結果は〈図Ⅲ－1〉、〈図Ⅲ－2〉、〈図Ⅲ－3〉に示した通りである。一般的に言うと、父親の学歴が高いほど、そして月収が多いほど子女に支出する月教育費が増加しており、父親が行政職の家庭が月平均私教育費を一番多く支出していた。

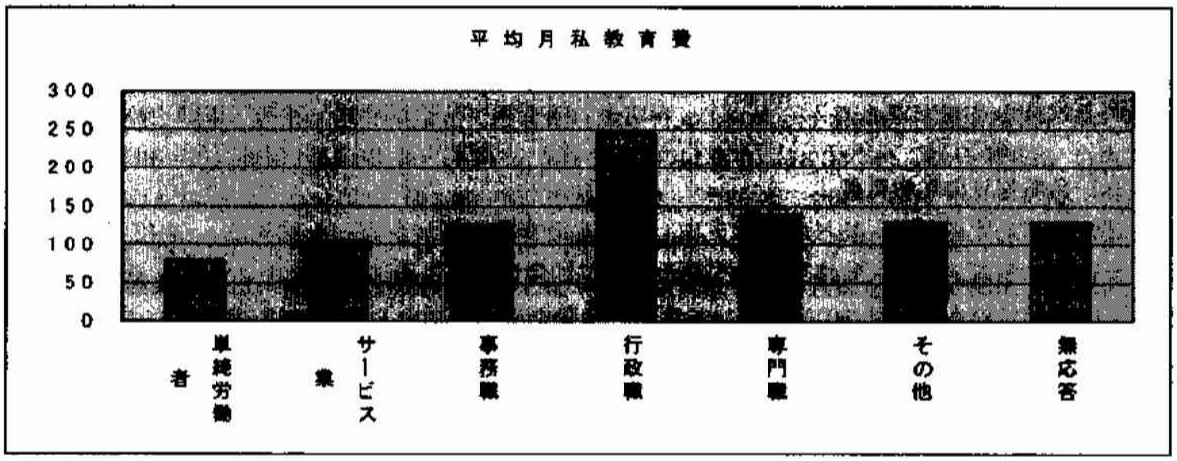
月平均私教育費を世帯の所得レベル別に比較した時、<図Ⅲ－3>から分かるように月200－300万ウォン未満の所得家庭の私教育費の支出が、月所得が300－400万ウォン未満、400－500万ウォン未満の家庭よりむしろやや高めという結果となった。結局、世帯の平均月所得レベルと関係なしに一定の費用を幼児の早期・特技教育に支出されている費用の構造は、子女の月当たり私教育費の

支出を世帯の所得レベルに比例した時、月所得が 200－300 万ウォン未満の家庭にとっての家計負担がより大きいことが指摘できる。

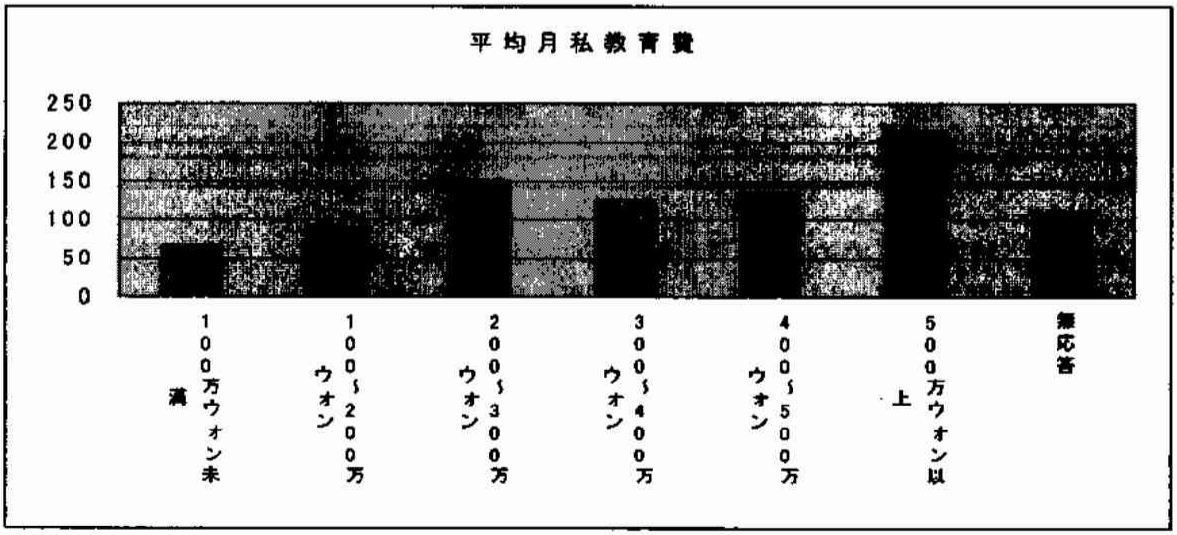
〈図Ⅲ－1〉　父親の学歴による月あたり私教育費



〈図Ⅲ－2〉　父親の職業による私教育費



〈図Ⅲ－3〉月収による私教育費



3．早期・特技教育に対する親たちの認識

（1） 早期・特技教育の必要性

早期・特技教育の必要性及び時期、費用に対する親たちの認識を調べた結果は、次の〈表Ⅲ－31〉、〈表Ⅲ－32〉、〈表Ⅲ－33〉に示した通りである。

〈表Ⅲ－31〉から分かるように、幼児期の子女に早期・特技教育を実施するのは必要だと答えた親は1,519人で、全体の調査対象の70.3%を占めており、逆に必要ではないと答えた親は331人で15.3%に過ぎない。これは、現在社会的な早期教育の雰囲気とその過熱現象をよく反映したものとして見ることができる。

〈表Ⅲ－31〉 早期・特技教育の必要性

必要性程度	頻度	百分率
全然必要がない	48	2.2%
あまり必要がない	283	13.1%
まあまあである	283	13.1%
ある程度必要である	1,423	65.9%
とても必要である	96	4.4%
無回答	26	1.2%
計	2,159	100%

（2）早期・特技教育の時期、種類、費用に対する認識

幼児期の子女の早期・特技教育の時期に対しては、〈表Ⅲ－32〉、〈表Ⅲ－33〉から分かるように全体の73.5%の親たちが早いと認識しており、88.7%の親たちはその種類が多いと認識していた。結局、大部分の親たちは早期・特技教育の必要性を認めているが、現在の社会において幼児たちが受けている教育の時期や種類は多すぎると思っていた。早期・特技教育の費用についても、89.5%親が多いと認識しており、これは現在の幼児早期・特技教育に対して家計や経済的側面から多くの親たちが否定的な認識をもっているとみることができる。

このような結果が現れる理由として、幼児早期・特技教育を進める社会の全般的な雰囲気と幼児教育産業の影響で、他の子どもたちに比べて遅れたり被害を受けるのではないかという心配から、その時期が早いと認めながらも子女に特技教育を実施していると説明できる。

〈表Ⅲ－32〉 早期・特技教育の時期 頻度（%）

時 期	頻 度（%）
早過ぎる	550(25.5)
早い	1,036(48.0)
適切だ	495(22.9)
遅い	46(2.1)
遅すぎる	6(0.3)
無回答	26(1.2)
計	2,159(100)

〈表Ⅲ－33〉 早期・特技教育の種類及び費用 頻度（%）

区分	種類	費用
多すぎる	921(42.7)	824(38.2)
多い	994(46.0)	1,107(51.3)
適切だ	184(8.5)	198(9.2)
少ない	36(1.7)	6(0.3)
少なすぎる	2(0.1)	0(0)
無回答	22(1.0)	24(1.1)
計	2,159(100)	2,159(100)

（3）特技教育をさせる理由と問題点

親たちが子女に特技教育をさせる理由について調べた結果、〈表Ⅲ－34〉に示したように「子女の知能開発のため」（74%）が一番重要な理由として現れ、次は「小学校の準備のため」（64%）、「子女が願い素質がありそうで」（60%）、「人がさせているから不安で」（28%）の順に現れた。ほかの意見としては「多様な経験を積むため」（15人）、「子どもの発達段階によって必要性を感じたから」（10人）が多かった。

多くの親たちが、子女の適性や素質にあわせるよりは、知能開発や小学校での学習準備のために早期教育をさせていることが分かった。幼児の要求や才能を育てるなどの幼児の内的要因よりも、外的要因－「学校での勉強の準備」や「他の人がさせているから」、「遊ぶ友達がいなくて」などのために早期・特技教育を急ぐ傾向のあることがわかった。特に、マスメディアやセールス員の勧誘によって、子女に早期・特技教育をさせる人の割合が 6%にもなる点を考慮した時、近年社会で急速に増加している幼児教育産業の質的レベルや科学的効果などに関する綿密な検討と適切な介入が必要だと思われる。特に、他の国で効果がないことが明らかになった教育や教材、または韓国の子どもに適用することの適切性の検討もなされていない状態で、虚偽または誇大な宣伝によって販売されている製品や会社に対しては、国家社会全体の次元での厳格な統制と介入が必要だろう。

〈表Ⅲ－34〉　特技教育をさせる理由　（複数回答）

順位	内容	頻度（%）	総回答者数
1	知能開発のため	1,599(74)	2,159 (100)
2	小学校の準備のため	1,382(64)	
3	子女が願っており、素質がありそうだから	1,293(60)	
4	人がさせているから不安に思って	595(28)	
5	放課後家で面倒を見てくれる人がいなくて	227(11)	
6	一緒に遊ぶ友達がいなくて	211(10)	
7	自分が小さい時に習いたかったが、できなかったことだから	188(9)	
8	大衆媒体を通じた広告や外商員たちの勧誘で	122(6)	
9	ほか	103(5)	

早期・特技教育をやめる理由は、〈表Ⅲ－35〉のように「子女が嫌がって」（58%）が一番多く、「習う内容と方法が気に入らない」（40%）、「経済的に負担となる」（29%）の順で現れた。その他の意見のうち多かったのは「時間が合わないから」、「体力的に疲れたので」などがあった。ここで注目すべき点は、二つあり、一つは子女に早期・特技教育をさせる理由とやめさせる理由の順位がほとんど一致しないという点で、もう一つは早期・特技教育をやめる理由として教育の効果や担当指導者の資質に関する内容が多いことである。

親たちが子女の早期・特技教育をやめさせる理由として「習う内容とか方法が気に入らない」、「知能開発にあまり助けにならないようで」、「特技教育指導者の資質が足りない」とか「交替が頻繁だから」、「小学校の準備にあまり助けにならないから」など、早期・特技教育の効果や指導者の資質問題のためにやめる場合が多いことにも注目する必要がある。これは、早期・特技教育に対する親たちの期待とその効果が異なるため、または教育の質的レベルが低いためであると見なすことができ、親たちが早期・特技教育の特性や効果、子女に適切であるかどうかに対して予め正確に把握することなく、子女にその教育を受けさせたためだと説明することができる。

〈表Ⅲ－35〉特技教育をやめた理由　複数回答

順位	内　容	頻度	総回答者数

1	子どもが嫌がるから	1,255(58)	
2	習う内容と方法が気に入らなくて	862(40)	
3	経済的に負担になるから	625(29)	
4	知能開発にあまり助けにならないようだから	450(21)	
5	素質がないようだから	372(17)	
6	特技教育指導者の資質が足りないか頻繁な交替のため	353(16)	2,159 (100%)
7	幼稚園生活に支障があるから	181(8)	
8	小学校の準備にあまり助けにならないようだから	133(6)	
9	その他	70(3)	
10	友達関係に問題があるようだから	50(2)	
11	放課後、家で面倒を見てくれる人ができたから	45(2)	

一般的には、親が子どもに早期・特技教育をさせる理由は、主に「知能開発」とか「小学校での勉強のための準備」など認知的分野にあるのだが、やめさせる理由は主に「幼児が嫌がるから」と「経済的な負担」、「素質が無いから」など個人的な理由として現れた。このような結果は、親が子どもに認知面での発達を期待して早期・特技教育を受けさせるが、その効果を判断できる方法がないため、早期・特技教育をやめる理由を幼児の興味とか関心の不在、経済的負担などからあげていると理解することができる。

韓国の幼児の早期・特技教育についてその問題点を自由記述してもらった結果、多くの親たちは、社会の多様な問題点を指摘してくれた（〈表Ⅲ－36〉参照）。一番多い意見は、幼児特技・早期教育に対する過度なブームと社会雰囲気を改善するべきだという意見であった。多くの親は、早期特技教育が子女にはもちろん、親自身にも経済的側面から負担になっていることを認めながらも、他の親がするのを見て不安になり、親の意志からではなく早くから教育を受けさせる傾向にあることを指摘し、全般的な社会雰囲気の改善を求めていた。知的教育だけを強調するのではなく、子女の素質と適性、意欲にしたがって教育すべきであるにも構わず、我が国の強い進学圧力のもとで入試対策をメインとする課外教育が、幼児期に導入されていて、そのような創造性と個性を抹殺する画一的な教育は、止揚されるべきであることを主張していた。

〈表Ⅲ－36〉特技教育の実態に対する親たちの意見

その他の意見	頻度数
・早期教育ブームの社会雰囲気を改善 早期教育ブームの社会雰囲気が改善されるべきである。他の親がするのを見て不安になり、親のはっきりした意志もなく、人がやるからといってあまりにも早くから教育を受けさせる傾向がある。	198
・子女の素質と適性に合う教育が必要 知的な面だけを強調しないで、子女の素質と適性、望みにしたがって教育すべきである。入試をメインとする課外教育に反対し、創造性や個性を抹殺する画一的な教育は止揚されるべきである。	185
・教育政策の問題 教育制度と政策に関連した問題として、教育制度が早く変わり過ぎる。私教育費の過度支出に対する政府の政策が必要であり、幼児教育及び親教育に対する国家政策、政府の支援が必要だ。体系的な公教育が必要で、幼児教育は公教育化されるべきである。	158
・多過ぎる私教育費 私教育費がかかり過ぎである。周りの人がするから自分もするしかないが、教育費に比べて効果が少ない。	145

親たちは子女の早期・特技教育による私教育費の負担を訴えており、私教育費の過度の支出に対する政府の積極的な政策を要請する人も多く、幼児教育及び親教育に対する国家レベルの施策、政府の支援が必要だと指摘する意見も多かった。また、幼児期から始まる体系的な公教育が必要で、幼児教育が公教育化されるべきだという意見もあった。

Ⅲ．早期特技教育の問題

１．教師の観点

幼稚園で行われている特別活動の問題点として教師たちが指摘したのは、幼稚園教育プログラムの質の低下、幼児の負担の加重及び仲間関係の断絶、担任教師の負担の加重及びやる気の低下、特別活動を担当する教師の専門性の不足など大きく四つに整理することが出来る。

(1) 幼稚園教育プログラムの質の低下

教師たちが幼稚園で行われている特別活動について深刻な問題点として指摘したのは、国家が告示した幼稚園の教育課程がまともに運営できず、授業が妨害されているということである。一日の日課で、特別活動のために授業を中断し、特別活動が終わったらまた幼稚園の授業を始めなければいけないので、全体的な流れに多くの支障が出るとした。

特別活動の担当教師が時間を厳格に守ってくれないため、授業の邪魔になり、時間の無駄も多くなる。そうなると、授業にすれ違いがあっても、その時間を教師の計画なしに過ごしてしまうので、子どもたちに申し訳ないと思う。とにかく特別活動には反対だ。

特別活動は、本当に特別であるべきなのに、時々幼稚園の正規授業よりも重視される場合が多い。我が幼稚園では茶道をやっているが、授業途中に「茶道室に来てください」というアナウンスが流れると、やっていることを途中で止めて、子どもを 10 人ずつ一日中茶道室に送らなければならない。幼児たちは移動することを楽しみにしているようだが、私はどうも授業がめちゃくちゃになったような気分である。

教師は特別活動をその日の計画の中に入れて授業を進めているため、流れが途切れて、幼児たちの注意力がだんだん散漫となり、授業がやりにくい。その反面、幼児たちは授業中に行われている様々な特別活動の授業をもっと待ち望んでおり、面白がって、興味を示したりもする。

特別活動をした後、教室に入るととても慌しくて、散漫な雰囲気となり、改めて何かの活動をするにはその準備時間がかかるようになって、大変である。

幼稚園の教師たちは、特別活動が正規のプログラムを蚕食していき、幼稚園の教育課程はバランスを失っていることを大いに憂慮していた。残念なことに、幼稚園のほうが様々な特技教育を揃えている私設学院に変貌していくのだ。教師たちは、特別活動が幼児教育のプログラムにただマイナスの影響を及ぼすばかりでなく、幼稚園教育の質に破滅的な深刻な影響をもたらしていると評価している。

我が幼稚園は放課後特別活動を実施してから開園以来 11 年になる。その当時は１－２（美術、英語）種類程度だったが、３－４年前から種類が多様になってきた。そのため、幼稚園は子どものためのプログラムを研究するより、特別活動をメインとした授業に転落しているような気がする。幼稚園教師という専門職として、幼児を教育するという使命感に燃える時、学校で習った専門知識がそのまま眠ってしまうという思いもあり、幼稚園の教師を続けるか辞めるべきか悩んでいる。

多くの幼稚園では幼児たちの人間性教育に力を入れるより、園児募集のための広報用として水泳、バレエ、英語など特別活動を教える幼稚園になってしまった。幼稚園のプログラムだけでも真の教育の目的を達成するのには一日の時間が足りないぐらいであるのに、様々な特別活動のため子どもたちの情緒が乏しくなり、疲れるだろうと思われる。しかし、幼稚園の立場からは特別活動をしないと園児募集ができないので心配になるのだ。

多くの幼稚園ではその幼稚園の広報で、第6回幼稚園教育課程よりも特技教育をメインに親たちに伝えている。教育課程を充実に運営している幼稚園は、まるで何の教育も果たしてないように思われている。併設幼稚園の教師として、特技の適性教育がすべてであるかのように、また外国のプログラムをとりいれた教育が最高であるかのように騒いでいる幼稚園をみると、教育部から出た緑色の教育課程の本を胸に抱えて悲しい気分になる。最高の教育課程は、幼稚園の教育課程である。私は子どもを幼稚園に通わせている親でもある。毎月幼稚園で特技の適性教育費として告知される請求書は、科学活動が月 22,000 ウォン、伝統教育が月 10,000 ウォンである。いったい教師はいつ正規の授業を行っているのか疑わしい。

教師の中、相当数の人は、自分たちの授業時間が短縮されるからといって特別活動を歓迎しているそうだ。こうなると遅かれ早かれ自分の居場所をとられてしまうという事実を分かっていないのだ。英語、体育、美術、科学、国語、数の教育などその全部を、教科専門家が特別活動として行うようになったら幼稚園の教師がすることは何だろう？　幼稚園もまた学院との違いがなくなるのだ。全人教育を目的としている幼稚園では幼児教育課程を実施すべきである。学院で幼児教育を実施するところも多いが、大きな問題である。

特別活動に関する間違った認識によって、幼稚園が学院化していくのではないか心配になる。私は幼稚園で正しい人間性教育をするのがもっと大事だと思っている。

教師たちは、特別活動の担当教師が教育内容・教材及び教具・教授方法の適合性を考慮しながらその特別活動を行っているかどうかに疑問を抱いていた。教師たちが観察したところによると、幼児期に適合した教育内容であるかも疑わしく、学習紙の形で行われる特別活動が多いとする。また幼児たちの経験、興味、能力に対する理解がない特別活動の担当教師たちによって大集団で運営されていることも問題として指摘した。教師たちは、幼児たちに望ましい特技教育に関する研究を通じて正しい教育の方向を提示してくれることを要求した。

全般的には大集団で授業を進めているため、集中力が落ち、何人かの幼児はずっと座っているだけである。そして全日制クラスの幼児たちの特別活動は、その教育費の負担からやってみようと思うことも出来ないのが実情である。

特別活動のプログラムの中に英語活動がある。大部分の幼稚園で英語活動を実施しているが、かかる費用に比べて教育効果は小さい。なぜかといえば、始まって終わるまで 20 分から 25 分以内なので、活動が中心であるとはいえ、どんな状況で話す言葉かも分からないまま、ただ真似をさせるのだ。言語の基本は、状況によって適切な表現法を覚えることだと思うのに、実際には教師の発音や擬声語を真似するだけで終わるのだ。

幼児の発達にふさわしい特別活動のプログラムをしているのか疑問を提示したい。個別の幼児の才能を早期に発見するためには、内容が一律的でありすぎる。本当にこんな内容が効果的かという疑問と本当に幼児期にふさわしい特別活動プログラムが適切に構成されているかという心配もある。正規課程および正規授業の内容さえ実践して運営するためには、多くの内容と多くの時間、努力、研究が必要であるのに、幼児たちを家庭から外に追い出すような形の特別活動は、子どもたちに多くの負担とストレスを与えると思う。もちろん親の経済的負担もあるが、人がやっているからとか、家では面倒を見てくれる人がいないという理由で、本当に大事な時期の幼児たちを外の学院にしか行かせないことはとても心配である。幼児期に適切な特別活動プログラムに対する研究とプログラムの運営に対する正しい方向が提示されなければならない。そして経済的負担で困っている僻地の村以下の地域で、正規授業以外に特別活動（全日制クラス運営の一環として）まで運営する先生たちに対する配慮と補償もしなければならない。

(2) 幼児の負担の加重および仲間関係の断絶

教師たちは幼稚園で行われている特別活動が幼児たちに負担を与えるだけでなく、仲間関係の形成にマイナスの影響を与えると指摘した。まず、教師たちは、幼児たちは様々な特別活動に参加するのを喜んでいるようにみえるが、実際は多くの精神的・身体的・心理的負担を感じていると思っていた。幼児たちは、幼稚園で教師の指導と励ましを受けながら遊びを通じて探索し・発見し・表現するなど、仲間たちと自由な時間を送りながら学習すべきであるのに、特別活動が導入されてからは、時間に追われながら指導を受けるため、心身ともにくたびれる一日を送っている。

幼児の個人差あるいは趣味とは関係なく、全体で一緒に特別活動のプログラムを実施しているため、幼児たちがストレスを感じ、そのために幼稚園自体を嫌がるケースもある。

放課後に特別活動プログラムが行われているが、親たちは子どもが疲れて、しんどい思いをしていることに同情しながらも、他の子どもがやっているのでうちもやらないと不安になり、うちの子だけが取り残されるという不安から無条件的にさせているようだ。もちろん好きで興味を示す子どもには特別活動も遊びの形式で負担にならないように実施してもいいが、親の不安感を解消するとか満足感をえるために無理にさせることは本当に無くすべきだと思う。

幼稚園で特別活動を実施する場合、幼児がストレスや疲労を感じていることが教師としてとても痛々しい。正規授業が14時30分に終わるのも子どもにとっては負担になるのに、さらに幼稚園で1−2時間を過ごすのは、子どもたちに精神的、肉体的負担になる。幼児期の特別活動が必ずしも必要だとは思わない。

二番目に、教師たちは特別活動が「仲間関係にマイナスな影響を与える原因である」と指摘した。教師たちは特別活動をしている幼児たちは散漫で集中力が足りなくて、学級の問題児になることもあるし、これは友達を作るのに障害となる。また、特別活動をする幼児としない幼児との間に溝を作ってしまう。

特別活動のため、幼児たちがしなければならない活動が多すぎてストレスが深刻である。特別活動を多くする子どもは散漫で集中力が足りないほうである。

各クラスには特別講義の申請者と申請していない幼児がいて、帰宅時間にもばらつきがあり、ま

た仲間関係にも影響があるように見える。

授業後に別途に午後実施する特別活動プログラムの場合には、する幼児としない幼児の間に距離感が生じる。

幼児期に仲間関係を形成し、維持し、発展させる経験は、社会性発達の基礎になる。幼児期の社会的能力はその後の青少年期、成人期の円満な社会生活と密接な関係があるという研究結果を考えるとき、特別活動の問題性を深刻に再考しなければならない。

(3) 担任教師の負担の加重およびやる気の低下

幼稚園で行われている特別活動によって教師たちに生じる深刻な問題は、担任教師の負担の加重及びやる気の低下である。担任教師が特別授業を兼ねる場合、ほとんど人件費を支給しないのが実情である。したがって、教師は重過ぎる業務によってストレスが増え、授業準備に必要な時間が足りないため、きちんと準備ができなくなり、幼児たちの帰宅が遅くなるため学級管理を充分に行なうことができず、関連の研修に必要な費用と時間の負担も大きい。

講師料も高いので特別活動教師を別に持たず、担任教師が放課後に指導する場合、翌日の授業準備に妨げとなり、教師が重過ぎる業務でストレスを受けたら結局園児に不利益になる。

担任教師が担当する活動の人件費は支給しない。正規教育のプログラム準備だけでも時間に追われているのに、放課後活動まで準備しなければならない負担とストレスが大きい。幼児たちの帰宅が遅くなるため、教師の業務が多くなり、整理整頓や授業準備の時間がない。

幼児たちが様々な活動に接してみて、参加の機会や潜在能力を開発できるのは望ましいことである。しかし、子どもの教育が主たる目的ではなく、幼稚園の利益が目的となる場合、問題は深刻だと感じる。幼稚園の教師だとも言えないし、学院の先生だとも言えないほどの幼稚園も多いそうだ。特別活動のため、全体の幼児の教育に支障が出ることは、もっと許せないことである。教師たちも自分なりに準備し、勉強し、休む時間が必要なのに今の状況はそうではない。再充電する時期である休み期間は、子どもたちの特別授業で研修のチャンスも奪われるし、退勤後何かを習おうとしてもあれこれ用事が多くて、仕方なく家と幼稚園の間を行き来するだけだ。教師たちが教育に専念できるよう、勤務環境が変わることを望んでいる。私達はスーパーウーマンではない。

専門家と教師を合わせて、週５回の特別活動を実施しているが、教師のストレスと業務が重すぎる。また関連の研修のために必要な費用と時間の負担がある。特別活動の内容を年末に発表会で発表しているが、特別活動の根本的な趣旨とは異なるような見せるための展示用教育（活動）が行われている。

特別活動を指導する教師が来る場合、もっと多くの問題が生じると教師たちは指摘した。幼児たちの帰宅時間が遅くなり、したがって教師の整理時間、車輌指導時間、退勤時間が遅くなるのだ。毎月特別活動を申請する幼児が異なってくるので、車輌指導の運行が大変である。教師たちは車輌指導や整理などに時間がかかるため、結果的には授業準備にかかる時間を減らすしかない。特別活動の教師が責任感を持って幼児たちを管理してくれないため、幼児たちが残っていると教師はずっと気を配り、授業の準備は出来ない状態である。特に、特別活動の教師は短い時間働いて給料がも

っと高いため、担任教師のやる気が低下するのは当たり前だ。

授業が終わり、放課後に行う特別活動の場合、毎月の申請者が異なるので、それに合わせて車の運行コースが変わる。車輌指導をする教師は、多くの時間を道で費やさなければならない。翌日の授業準備をする時間的余裕がその分減るので、様々な苦労がある。

放課後（13 時 30 分）特別活動を全部終えると（15 時 10 分）、それから教師は掃除もし、授業準備もできるが、退勤時間（18 時）通りに退勤したことはほとんどない。特別活動で終わるのではなく、車輌指導まで教師の仕事なので、決まった時間に退勤するのはとても不可能である。

教師は正規の授業が終わっても、自分のクラスの子どもが特別活動プログラムをしていると、終わってちゃんと帰るまでは安心できない。特別活動の授業中に発生する様々な問題点について親との相談を担任教師が行なうので問題になる。幼稚園で場所を提供すると毎月の教育費が安くなるメリットはあるが、うちのクラスの子どもが授業をうけていると、いろいろ安心できないのは事実である。

学習紙の教師など特別活動の担当教師は週に 1—2 回しか来ないのに給料が高いという話を聞いた。とにかく幼児教育機関に来て、もらうお金に差があるので、幼稚園教師たちのやる気がなくなる。

(4) 特別活動担当教師の専門性の不足

幼稚園で行われている特別活動の問題点として教師たちが最後に指摘したのは、特別活動担当教師の専門性の不足だった。教師たちは、特別活動教師の資質に問題があり、専門性を備えた同僚教師として認めることができないと主張した。特別活動担当教師たちには、時々幼児に不適切な発言と行動があり、授業の進め方も不慣れである。これは幼児の発達と学習の特性に対する専門知識と理解が不足し、個別の幼児の性格、特性、経験などに対する理解がないためだとみていた。また、特別活動の担当教師たちは、教師としての責任感がとても不足しているという。授業中、幼児たちに対する管理が不足し、欠勤したり、授業時間を守らないケースも多い。従って、教師たちは特別活動担当教師たちも、幼児教員養成教育を履修しなければならないと主張した。

特別活動担当教師たちは幼児たちの性格をよく把握していないため、子どもを傷つけたりもする。消極的な児童が大きな自信を持って活動に参加したが、特別活動の教師は褒めるところか、ただもっと上達することばかり要求するため、余計に消極的な子どもにしてしまう。彼らも各幼稚園児の性格をよく把握し、名前を覚え、関心を持つように努力しなければならない。

特別活動担当教師たちは幼稚園の教師たちと違って、責任感が不足し、授業時間に遅れたり、欠講する場合も時々ある。

教育内容が専門的で体系的かもしれないが、それぞれの幼児のレベルと性格などに対する理解の不足と、授業中に難しい用語を使ったりして、幼児たちが理解するのに苦労する問題点がある。それで、特別活動担当教師たちも幼児教育に関する教育課程を履修する必要があると思う。

特別活動用教室がないため、教室を譲らなければならない。担任教師が教室で作業する時間が足りないし、他のクラスの園児が入ってきて教具や教材を壊す場合がある。特別活動担当教師は専門家ではあるが、幼児教師資格証のない教師がほとんどで、園児たちの言葉や発達状況などを正しく理解できず、逆効果が生じることもある。

昨年、特別活動のプログラムに関する調査で論文を書いた。その時は特別活動担当教師としての科目を専攻した人もいいかなと思ったが(多くの親たちが望んでいるため)、現場で実際に教育を行う立場になってみると、それではないと思うようになった。まず、特別活動の担当講師たちは幼児たちの発達状況をよく分からないし、授業の準備もその日その日大雑把にやっているようである。何よりも一番の問題は、責任感の不足である。

うちのクラスでやっていた美術活動を例にすると、美術教師は幼児たちが来るか来ないか関係なしに授業を進めていくし、途中で幼児たちが消えても無関心で気付かないのだ。そして家に帰るときも、道を渡るとか車に乗るとかの手伝いをしてくれないのだ。ある日、美術教師が車両担当をする日（特別活動をする園児を対象）だったが、うちのクラスの子どもは英語が終わってもう家に着く時間だったのにまだ家に着いてないと言われた。美術教師に確認してみたら車に乗っていなかったそうだ。それで二時間以上あちこち探していたが、最後にバスの運転手から電話がかかってきて車の中に子どもがいるという話だった。子どもは車の中で眠っていたが、運転手さんは運転で確認できなかったと言った。とにかく美術教師はまるで何の自責の念もなさそうだった。そして、美術の授業が終わってから何も整理しないまま帰ってしまうのだ。掃除が済んだ教室で特別活動の授業が終わったら、また掃除しなければならないので、いつも仕事が遅くまで延びて不便なことが多い。何よりも幼児教育を良く知るための研修でも受けた教師が特別活動を担当してくれたらいいと思う。また親たちとも連絡を取りながら授業を進める方がもっとよさそうだ。

専門講師とはいえ、幼児教育専攻者ではないため、発言や行動、授業の進行面で幼児たちにふさわしくない、教育に適切でないところがとても多い。幼稚園での特別活動プログラム実施による問題点の中で一番大きい問題がこれだと思う。

美術の授業を受けるはずの子どもが砂遊びをしていても、特別活動担当教師は子どもを探すとか確認することがない。担当教師は特別活動の時間にも一人ずつ全部チェックしなければならない。万が一、事故でも起きたら親との相談は担任教師がしなげればならない。

授業時間内の幼稚園教育課程に不適切な活動が浸透され、一貫性がない。特に、教師の姿勢や発言、行動が幼児のレベルに不適切で、幼児発達を全般的に理解できてないようである。英語や科学などは学習紙の形態の教材が基本教材となり、学習紙が不適切な教具、教材として使われているのが気の毒だと思う。

以上で、教師たちが幼稚園で行われている特別活動の問題点として指摘した4つの問題点を項目別に考察してみた。教師たちが指摘した特別活動の問題点は、幼児・教師・親・機関などすべてに被害を与える。しかし、何より困るのは、幼児たちが精神的・身体的・心理的に多くの被害を受けることである。幼稚園教育の正常化のために解決方案を探さなければならない。

２．親の観点

親たちは家庭での早期特技教育について、問題点だけではなく、幼児期の子女に特別活動をさせる理由と自分たちの要求に関しても多くの意見を提示した。まず、親の観点から家庭での早期特技教育の問題点を考察し、早期特技教育をさせる理由と親たちの要求についてもあわせて考察する。

(1) 家庭での早期の特技教育の問題点

① 幼児の遊び時間が不足

親は、家庭での早期特技教育の問題点として、幼児の遊び時間が絶対的に不足していることを心配していた。親の世代では、子どもの頃幼稚園とか学校から帰って来ると、家や町で友達と遊ぶ経験が多かったためか、子どもがまだ小さいのに遊ぶこともできず、学院を転々とする姿に対してとても痛々しく思っていた。

子どもたちが安心して仲間たちと遊べる時間、空間が絶対的に不足しており、仲間たちとの遊び方さえ分からない問題のある子どもになっていくような気がしてとてもかわいそうである。

子どもを見るとかわいそうでしょうがない。遊び時間がない。学院に通う車の中で、その合間に遊ぶしかない。学院に行かないと友達さえもいない。

うちの子は幼稚園が終わるとピアノ教室に行き、５時ごろに家に帰ってくる。家に帰ったら学習紙の勉強をする。時には本当にかわいそうだなと思う。最近の子どもは、うちの子も人の子も同じだが、みんな遊ぶ時間がない。来年は小学校に入る子どもを考えると、心は痛むが休ませられない。

② 幼児の特性を考慮しない家庭での早期特技教育

親たちは、特技教育と言いながら幼児の特性については慎重に考えず、無理やりさせる家庭での早期特技教育に問題点があるとみていた。親たちの立場からしても、幼児の素質・才能・興味・要求などを観察して適切な特技教育をさせるべきだと信じていた。そうでない場合、幼児を受け身にさせるばかりでなく、創造性も低下し、幼児期にその才能を滅ぼしてしまう結果を生むだろうと主張した。

教育を受けさせるのもいいけれど、韓国はあまりにも早くから早期特技教育が行われているようだ。誰の子どもはどこの学院に通っているのに、うちの子だけが取り残されているようだから、とりあえず学院に通わせることがある。こんなことを考えないということはうそだろう。子どもをもっと自由で自律的に育てるのもいい方法だと思う。うちの子は何が好きで、どんな趣味を持っているか、それを習って本当にいいものを得られるかなどを子どもの立場からもう一度真剣に考えてあげるのもいい方法だと思う。

今の時代が求めている全人教育とは何か、英才教育とは何か、創造的な人間とは何かを聞いてみたい。どこか偏った社会の全体的な教育の流れに合わせなければならないのか？親たちは、子どもたちの絶えない質問、好奇心に満ちた視線、常に経験してみたがる欲求などをどれぐらい素直に受け入れ、相互作用をしているだろうか？親の偏った教育欲求が、子どもを能動性の欠けた人にして

しまうようで、私自身とても心が痛む。

多様な早期特技教育をするためには種類が限られており、親の欲求によって幼児の発達を無視した、賞をもらうための技能教育に偏ったところが多い。課外活動を行う学院の連合で大会を主催し、最近は無責任な‘賞’を濫発している。

学院がびっくりするほど多いが、私はこれらの学院が子どもたちに体系的にうまく教えているとは思わない。子どもが学院で時間だけ過ごしてくるか、それともきちんと勉強してくるのか、親の立場からは分からない。先生たちはただ良くできていると言うが、教師に実力のない学院が多い。そんな学院はなくなるべきだと思う。

親たちがまず自分の子どもの特性を理解するよりも、他人を意識して受けさせる場合がある。様々な方面から教育するよりも、子どもの特性に合う部分を一つ抜粋して、育ててあげたほうがいいと思う。

最近親たちは一貫性がなく、子女教育を周りの流行や風潮に乗って行うことが多いようである。高価な学習道具を気軽に買ってやり、また一人の子に 2−3 種類の教育をさせるべきだという義務感さえ持っている。そうしないと自分の子は取り残されると思う。これは決して望ましい現象ではない。子女の個別的な適性と特性の違いを認め、すべての子どもが画一的に育つのを防げる社会環境が、政策的に支えられるべきだと思う。

③ 幼児の負担の加重

子女の好き嫌いは構わず、また子どもが疲れていても、とにかく多くのものを早期に教えて勉強させようと欲張る親がいる。多様な早期特技教育に参加するのを喜んでいる幼児も少なくはない。しかし、大部分の幼児たちは自分が好きでやるのではなく、親がさせる通りにしなければならないと思うか、親の愛情を失うことを恐れて親の要求に無条件で服従している。アンケートに答えた親たちはこのような現象を分かっており、幼児たちが感じているだろうと思われる負担について心配していた。

家庭での早期特技教育をあまりにも競争的にやらせているため、子どもの能力もあがらないし、親の教育費も負担になる。小さい時から勉強に対するストレスも大きく、これによる親の劣等感も大きい。

早期教育という名の下で、上の子が 20 ヶ月のごろから何か教えようと教育を受けさせた。しかし、あまりにも早い教育が子どもには知らないうちにストレスを与えていたのではないかと思ったりする。

子どもの素質と才能には関係なく、親が代理満足のために子どもを酷使させていると思う。

本当にお金持ちの家では、学院の費用が月に 70 万ウォンを超えていることを知っている。それを見て本当に教育熱心な家だなと思うよりも、その子が本当に願っていて学院に通わせているのか知りたくなった。子どもの適性とその子に役立つ教育をさせなければならないのだ。

最近の子どもたちはとても気の毒でかわいそうだと思う。特別課外教育が、もちろん子女が願っておりまた素質があったらいいのだが、それとは別に知能開発のためとか、または人がやっているから不安だとか、小学校の準備のためにという現実には、ちょっと悲しく思う。

④ 親の教育費負担の加重

親たちは、幼児期の子女の早期特技教育にかかる私教育費は家庭の経済状況に大きな負担を与えると答えた。

英語幼稚園の毎月の教育費が80－100万ウォンなのにも、幼稚園毎に待機者が100人ぐらいはいるという記事をどこかの雑誌で読んだことがある。100万ウォンだったら普通の家庭の一ヶ月の生活費に当たるのではないか。最近は家庭の経済規模を超えている教育の形態などをよく見ることができる。何人かの主婦たちが子どもの学院費用を稼ぐために遊興業に足を踏み入れ、売春まですることをTVで見て悲しくなった。そこまでやって私教育をさせなければいけないのか？しかし、人に負けないように、自分の子だけは最高に育てるために親たちは必死である。

家庭での私教育費負担は、親にとってその分家計の負担となっている。ふたりの子どもがいる大部分の家庭では、全体の家計の３分の１から５０％を教育費として支出する。これが私個人の知っている韓国の教育の実態である。教育改善策が出ない以上、今後さらに深刻になるだろう。この資料がいい参考になって、いい解決策が出ることを望んでいる。

幼稚園や小学校ぐらいは、その内部で子どもの特技を思い存分生かせるように低い費用でグループ指導を行うようなプログラムがあってほしい。親たちの負担も少ないし、子どもたちも疲れないと思うが、最近の社会雰囲気ではただ人に追い付くようなやり方ではないか！　欲は限りないが、私教育費が負担になる。昔のように、ただ趣味の範囲で課外活動の必要性を考えればいいのに、させなかったら自分の子だけがバカになるのではないかと思ったりする。

うちの子は小学校３年生、７歳である。収入の半分が子どもの早期特技教育費にかかる。正直に言って、負担になる金額であるが、人がやっているから、うちの子だけがやらないと不安だから、いろいろさせている。

⑤ アンバランスに運営されている幼稚園の教育課程

親たちはまた、幼稚園が正規幼稚園教育課程を充分に運営するより、各種の特別活動で一日の日課を埋め、アンバランスな運営をしていることを問題点として指摘した。

親や社会が早期特技教育に熱心となり、正規の教育を見過ごしているようだ。子どもが勉強の面で優れているよりも、統合的な知的能力を育てる教育がもっと原則的に行われなければならない。しかし、幼稚園は商売に偏よりすぎて、多くの広告と乱発する教材などで直接または間接的にストレスを与える。小学校でももうハングルや芸術・体育の出来る子を当然視して受け入れ、適宜の時期に教育する機能を喪失しているため、教育はかなりアンバランスになっているようである。また移民などをしない限り、韓国での教育現実に適応しなければ子どもたちは生き残ることが出来ない。

外国の場合、子どもの頃からだに行くべきエネルギーが頭に行くのを防ぐために、コンピュータ教育も中学校から実施している国もある。しかし、今の入試制度と学校教育の下ではやりたくなくてもやるしかないのが現実だ。学校で特技や課外教育の大部分を吸収し、親たちも自然と本を通じて子どもを育てられる教育風土が出来上がらないと、子どもたちは早くからつらい人生を味わうようになる。この渦の中に子どもたちを巻き込むのは、実はとても残酷で、堪えられないことである。

あるTV番組で「私は外国人になりたい」という子どもの話を聞いてびっくりした。私も同年齢の子どもをもつ親として複雑な心境だった。私も子どもに韓国人としての誇りを伝えず、英語だけが固有のある民族言語であるかのように歪曲して教えていなかったか、反省するようになった。自分の言葉は後回しにし、外国語だけを強調しすぎたのではないか、自分のことも正しく理解せず、自分の根っこもわからないまま流行の先に立ち、頭と口だけが達者なものになるようにしむけてはいないか疑問さえ持つようになった。人のものを無条件的に排斥する時代ではないが、まず大事なのは「私たちと自分」を探すことではないかと思う。「とにかく早く」がすべてではなさそうだ。子どもが育つにつれ、その子にふさわしい器を広げてあげるのがほんとの親。とにかくいいものだからといって注入してもそれが全部入るわけではないと思う。注入することよりも、器がもっと大きくなるように育てていつかは、全部受け入れられるようにしなければならない。それが本当に愛する我が子のためにやってあげられる何かであるだろう。しかし、痛切な現実はいつも思っていることより遥かに遠い向うにあるので、とても惜しいと思うばかりである。

親は家庭での早期特技教育に対して特別活動の問題点だけではなく、特別活動をさせる理由と親たちの要求についても多くの意見を提示した。まず親たちの観点からみた家庭での早期特技教育の問題点を考察し、早期特技教育をさせる理由と親たちの要求をも一緒に調べてみることにする。

(2) 親たちが早期特技教育をさせる理由

親たちは幼児期の子女に早期特技教育をさせる理由について、能力ある人間が優遇される社会的雰囲気が親たちにそうするように追い詰めており、また小学校の教育課程についていくためには幼児期に早期特技教育を通じて多方面の基礎能力と素養を身につけなければならないという説があるためだと答えた。

最近周りを見ると昔と違って、子女が一人か二人だ。それで我が子を最高に育てなければいけないという思いで、人よりもっとたくさん教えてやりたい気持ちを当然もつ。マスコミもそれをあおり、24ヶ月になった子が本を読めるし、英語もきれいにできると宣伝する。これを見たとき、親たちは、やっぱり早期教育に投資した分、得るものがあると思わされる。また現在、小学校で教えるレベルが昔と違うそうだ。このような多くの要因から、親たちは無理をしてでも、子どもにいろいろ教えてやりたがるのだ。

幼児教育を専門的に勉強したことはないが、'早期教育'という名目で親たちは子どもたちをあまりにも虐待しているようだ。その理由をあげると、1）人がさせているから私も：2）学院にでも行かせてやっと親としての責任を果たしたと思うから：3）私ができなかったことをさせたいという補償心理的な代理満足。私も子どもを育てているが、何が正しい子女教育であるかは正確には言いにくい。いずれにしても今の親たちの教育態度ではないようだ。本当に小さいごろに植え付けて

あげるべき愛はほとんど一回用（食品もインスタントで）にしておきながら、学院だけを人に負けないように増やして自己満足をしていると思う。幼児期には、昔の母の愛情（例えばサツマイモやとうもろこしなどを煮ておいて子どもが帰るのを待ち、その話を熱心に聞いてやるような姿勢）の方がもっとふさわしい。もちろん最近は共働き夫婦が多いから、このような話はただ思い出の中の絵のようなものだと思うが、子どもたちをもっと解放してやる余裕が必要である。

韓国全体が私教育費のために負担を感じたり、教育のため移民する場合も多い。人がみんなやっているからうちの子だけさせないと不安だし、それで全般的な社会雰囲気についていくようである。ピアノ、美術は必須と言うが、学校では特別に指導しないで学院を勧めているそうだ。親が間違っているか学校教育が間違っているか……芸術や体育の才能教育は親の力ではできないから学院に通わせるというが、他の一般的な課外教育はやりすぎというほど周りでたくさんさせているようだ。このような社会的雰囲気は早く変わらなければならない。

朝令暮改した大学の入試制度、いい大学をでないといい待遇を受けられない社会風潮と、我が子だけはもうちょっと特別であることを願う親たちの考えが、夢の多き童心に傷を付けているのではないか？何よりも注入式の教育の問題点を補完したという現在の小学校教育において、早期教育のブームは冷めないだろう。課外教育を受けないととてもついていけないのが現在の小学校教育だという話を聞いた。小学校の教育基礎を幼児期に課外で対応せざるを得ない親たち、さらに経済的負担も一緒に背負っているのが今の親たちである。もうちょっと全人格的で、一貫性のある教育制度で特技の扉も広げて、幼児期ぐらいはきれいな童心を育ててやれたらいいなと望んでいる。

(3) 親たちの要求

親たちは家庭での早期特技教育が招く多くの問題点などを解決するために、また問題点を知っていながらも子女を学院に通わせ、学習紙の問題を解かせるしかない理由などを吐露しながら、親なりに問題を解決する方案として幾つかの要求を提示した。親たちは、幼児期の子女をもつ親に幼児教育のガイドを普及することと幼稚園の公教育化を提案した。

① 幼児教育ガイドブックの普及

親たちは、幼児期の子どもに望ましい幼児教育に関する情報を得られるようなガイドブックを普及してくれることを要求した。質的に優秀な幼児教育がどんなものであるかよくわからないので、子女を学院に送ることで安心しているが、これは学院が教育の死角地帯であることを知らないためである。

もうちょっと具体的で正確な幼稚園児（未就学の児童）に対する教育方針や教育形態に関する資料が必要だと思う。実際に親たちはこの教育が本当に我が子に必要であるかという疑問をたくさん持ちながらも、不安の心理でどうしようもなく教育を受けさせている状況である。そして公共機関でもっと関心を持って、子どもたちのための教育や空間を提供するサービスが必要だと思う。

② 幼稚園の公教育化

親たちは韓国の幼児たちが全人的な発達を遂げ、正しく、健やかに成長できるように、国家次元の積極的な関心と行・財政的支援が必要であることを主張した。幼稚園の公教育化が実現されたら

特別活動を指導する学院とは明らかに異なってくるだろう。幼稚園では国家で告示した正規幼稚園教育課程を実践するだろうし、これを指導・監督・評価することで、幼稚園の教育がアンバランスに行われなくなると親たちは思っていた。

幼稚園の公教育化で、もっと中身のある幼児期教育が行われることを切実に願う。

全人教育のための多様な教育的経験が必要だと思うし、それを個人的な負担ではなく国家的次元から社会福祉で成し遂げるべきであるだろう。この前、TV で韓国の私教育費がかかりすぎて移民する人が増えているというが、これは韓国の私教育費の実態を端的に表していると思う。

韓国の教育熱は世界的にも有名である。この高い教育熱は子女に対する過度な期待と重なって、公教育より私教育に依存する結果をもたらすようだ。周りで早期教育をさせるのを見て、度を越えすぎのではと心配しながらも我が子だけが取り残されるような気がして、一つでも受けさせるようになる。政府の頻繁な教育政策の変化、過熱する教育ブーム、先生を無視する学生の態度など、韓国の教育現実が心配である。政府は私教育費が韓国の経済規模に占める割合をみて、ほかのどの分野よりもまず教育に投資すべきだし、公教育が正常化されるべきである。公教育が正常化されてからこそ、子ども達がいい環境で勉強し、多様な経験を積みながら楽しく遊べる社会になるだろう。

以上、親たちが考える家庭での早期特技教育の問題点、幼児期の子女に特別活動をさせる理由、そして親たちの要求に対して順番に考察した。親たちは、現幼児教育の問題点、家庭での早期特技教育の問題点についてそれぞれの判断をしているだけでなく、幼い子どもたちの辛くて不幸な生活の束縛を軽減してやることを望んでいた。親たちは、このようなことは個人の努力で成し遂げられるのではなく、望ましい幼児教育に対する国家次元での積極的な関心と財政的・行政的支援が必要で、幼稚園の公教育化を通じて、実現できるのだと信じていた。

〔編者注：以上の調査の全体像と、ケーススタディ部分については、本科研の第１資料集『韓国における早期教育の現状と課題　－資料と解説－』（平成 15 年 3 月）をあわせてご覧いただきたい。〕

付　録

幼児早期教育の実態調査

ー教師用質問紙ー

本質問紙は、幼稚園での特別活動の実態及び教師の認識について調べるためのものです。

◆ 該当するところにチェック（✓）を入れてください。

1、先生の教育経歴は？
___①1年未満　___②1年以上～3年未満
___③3年以上～6年未満　___④6年以上

2、先生の学歴は？
___①専門大学卒　___②4年制大学卒
___③大学院卒　___④その他＿＿＿＿＿＿＿＿

3、先生の勤める幼稚園のクラス数と園児の全体数は？
（　　）クラス　（　　）人

4、先生の担当するクラスの幼児年齢と幼児数は？
（　　）歳　（　　）人

5、先生の勤める幼稚園は次のどの地域に属していますか？
___①特別市／広域市　___②中・小都市　___③町・村地域

1、貴幼稚園では特別活動プログラムをどのように実施していますか？
___①授業中に実施する。
___②授業が終わった後、別途に午後実施する。
___③授業中と授業が終わった後に実施する。
___④全日制のクラスの幼児を対象に午後実施する。
___⑤実施しない。

2、もし幼稚園で特別活動プログラムを実施するならば、その理由は何だと思われますか？もっとも適切な理由を三つだけ選んで、順番通り1．2．3．を記入してください。
___①親たちが願っており、園児募集に助けになるから
___②特別活動は該当専門家がしなくてはならないから
___③終日制幼児のために多様なプログラムが必要だから
___④幼児達が別途に学院に通わなくてもいいから
___⑤幼児達の潜在能力を早期に開発できるから
___⑥他の幼稚園でも全部特別活動をするから
___⑦幼稚園にとっては経済的に助けとなるから
___⑧クラス分けを通じて集団の大きさを小さくできるから
その他：（　　）

3、幼稚園で特別活動を実施する時の問題点は何ですか？もっとも問題になる点を三つだけ選んで、順番通りに1．2．3．を記入してください。
___①幼稚園教育活動にとって妨げになるから
___②幼稚園教育プログラムだけで充分だから
___③費用が負担になるから

___④関連専門家を探しにくいから
___⑤幼児教育専門者でないため幼児指導に問題があるから
___⑥幼児達に過度なストレスを与えるようになるから
___⑦幼児達に適切な活動ではないから
___⑧授業準備をする時間が減るから（帰宅指導及び放課後教室の使用など）
___⑨特別活動をする子ども同士だけで親しくなるから
その他：（　　）

4、幼稚園でかつて特別活動プログラムとして実施したか、または現在実施しているプログラムの種類と週当たり教育回数、1回教育時間、集団構成と対象幼児に関する情報を調べようとします。次の例を見て、該当するプログラムに全部記入してください。

☞例

プログラムの種類	実施の有無	週当たり教育回数	1回教育時間	集団構成			対象幼児		
				大集団	小集団	個別幼児	全体幼児	特別活動選択幼児	全日制クラス幼児
英語	✓	3回	40分	✓			✓		

プログラムの種類	実施の有無	週当たり教育回数	1回教育時間	集団構成			対象幼児		
				大集団	小集団	個別幼児	全体幼児	特別活動選択幼児	全日制クラス幼児
英語									
体育									
美術									
童話口演									
水泳									
学習紙									
コンピューター									
科学									
楽器									
国樂									
折り紙									
その他									

5、特別活動プログラムはだれが担当しますか？
___①幼稚園教師が正規授業と一緒に担当する。
___②専門団体で派遣した人が担当する。
___③その分野の専門家を招聘する。
___④親などのボランティアが担当する。
その他：（　　）

6、授業時間中に実施する特別活動プログラムで、担任教師の役割は何ですか？
___①参与しない。
___②補助教師として参与する。
___③クラスを分けて他の活動を行う。
その他：（　　）

7、放課後に実施する特別活動プログラムで、担任教師の役割は何ですか？
___①参与しない。
___②補助教師として参与する。
___③クラスを分けて他の活動を行う。
その他：(　　)

8、特別活動プログラムの実施費用は、どのように支出しますか？
___①正規幼稚園教育費で支出する。
___②特別活動費を別途に賦課して支出する。
___③正規授業時間中にする費用は幼稚園教育費から、放課後に行なう費用は親が負担する。
___④幼稚園で関与せず、親たちが別途に運営する。
その他：(　　)

9、次は幼稚園での特別活動実施の有無に関係なく、特別活動に対する先生方の認識を調べるためのものです。各項目に対する先生方の考えを該当する番号にチェック（✓）してください。

① 全くそうでない　② そうでない　③ そうである　④ 全くそうである

9−1. 幼児を教育する人は、どの分野であっても必ず幼児教師資格証を所持するべきである。	① ② ③ ④
9−2. 特別活動指導者は大体幼児教育に対する理解が不足している。	① ② ③ ④
9−3. 幼稚園での特別活動を正規授業時間内に行なうのは教育課程運営の妨げになる。	① ② ③ ④
9−4. 幼稚園での特別活動は、幼児観察及び指導のための時間を取ってしまう。	① ② ③ ④
9−5. 幼児達が受けている特別活動の種類が多すぎる。	① ② ③ ④
9−6. 幼児期に特別活動を実施するのは早すぎると思う。	① ② ③ ④
9−7. 特別活動によって、幼児が受けているストレスは深刻である。	① ② ③ ④
9-8. 親の要求があるとしても、幼稚園教育は正規教育活動だけ行うべきである。	① ② ③ ④
9-9. 特別活動による親の負担が大きい。	① ② ③ ④
9-10. 特別活動指導者の人件費に比べて、幼稚園教師の賃金が少なすぎる。	① ② ③ ④

１０、この外、幼稚園での特別活動プログラム実施による問題点とか考えまたは具体的な事例などを自由に記述してください。

誠にありがとうございます。

ー親用質問紙ー

＊一人以上のお子さんいる方は、一人の子どもだけを選択して質問に答えてください。

	性別	生年月日
子ども	男（　）　女（　）	年　月　日生

☞親の年齢に該当する番号にチェック（✓）をしてください。

年齢	お父さん	お母さん
①20歳以上25歳未満	①____	①____
②25歳以上30歳未満	②____	②____
③30歳以上35歳未満	③____	③____
④35歳以上40歳未満	④____	④____
⑤40歳以上45歳未満	⑤____	⑤____
⑥45歳以上50歳未満	⑥____	⑥____

☞親の学歴に該当する番号にチェック（✓）をしてください。

学　歴	お父さん	お母さん
①中学校卒業	①____	①____
②高校卒業	②____	②____
③2年制大学卒業	③____	③____
④4年制大学卒業	④____	④____
⑤大学院卒業	⑤____	⑤____
⑥その他（　　）	⑥____	⑥____

☞お宅の平均月収に該当する番号にチェック（✓）をしてください。

_①100万ウォン未満　_②100万ウォン以上～200万ウォン未満
_③200万ウォン以上～300万ウォン未満　_④300万ウォン以上～400万ウォン未満
_⑤400万ウォン以上～500万ウォン未満　_⑥500万ウォン以上

☞親の職業に該当するところにチェック（✓）をしてください。

年齢	お父さん	お母さん
①専業家庭主婦	①____	①____
②無職	②____	②____
③単純労働者（家政婦、清掃業、行商、警備）	③____	③____
④勤労者（熟練技能工、運転手、大工、理・美容師、ボイラー工、工場職員、調理師）	④____	④____
⑤サービス業（商人、店員、仲介人、販売員、飲食宿泊業者）		
⑥事務職（教師、警察、一般公務員、会社員、銀行マン、尉官級軍人）	⑤____	⑤____
⑦行政事務職（大企業課長級以上、5級以上公務員、領官級軍人）	⑥____	⑥____
⑧専門技術職（医師、法曹人、研究者、会計士、教授、エンジニアー、高級公務員、芸人、大規模農場経営）	⑦____	⑦____
⑨その他（　　）	⑧____	⑧____
	⑨____	⑨____

1、あなたの子どもは、家庭用学習紙や学院などを現在何種類登録していますか？

1）学院　（　　）種類
2）学習紙　（　　）種類
3）個人指導　（　　）種類
4）グループ指導　（　　）種類

2、あなたのお子さんが以前やったことがあるか、または現在受けている学習があるなら、次の例を見て同じやり方で記入してください。

☞例

種類	開始年齢	現在状態		1週教育回数	1回教育時間	月教育費	学習形態			
		継続中	やめた年齢				学院	学習紙	個人指導	グループ指導
総合学習紙	4歳	✓		3回	30分	5万ウォン		✓		

種類	開始年齢	現在状態		1週教育回数	1回教育時間	月教育費	学習形態			
		継続中	やめた年齢				学院	学習紙	個人指導	グループ指導
文字書き／ハングル／国語										
英語										
数学										
英才教育										
暗算										
美術										
折り紙										
ピアノ										
バイオリン										
国樂										
歌										
ジムボリー										
水泳										
スケート										
舞踊										
テクォンド										
漢字										
雄弁術										
童話口演										
コンピューター										
囲碁										
総合学習紙										
シチダ										
フレーベル玩具										
モンテッソーリ										
オルダ										
色塗り勉強										
その他										

（‘その他’のところには種類を直接記入してください。）

3、お子さんに特技／課外教育をさせる理由は何ですか？もっとも重要なものを三つだけ選んで、順番通りに1、2、3.で記入してください。

___①子どもが望んでおり、素質がありそうだから

___②人がさせているから不安になって
___③知能開発のために
___④小学校の準備のために
___⑤私が小さい頃習いたかったが、習えなかったことだから
___⑥一緒に遊ぶ友達がいないから
___⑦放課後家で面倒を見てくれる人がいないから
___⑧マスコミを通じた広告や外商員の勧誘で
その他：(　　)

4、お子さんが特技／課外教育をやめたがった、あるいはやめたことがあったなら、その理由は何ですか？もっとも重要なものを三つだけ選んで、順番通りに1、2、3. を記入してください。
___①子どもが嫌がるから
___②素質がないようだから
___③経済的に負担になるから
___④知能開発に特に効果がないようだから
___⑤習う内容と方法が気に入らないから
___⑥小学校の準備に特に助けにならないようだから
___⑦幼稚園生活の妨げになるから
___⑧友達関係に問題があるようだから
___⑨放課後家で面倒を見てくれる人ができたから
___⑩特技／課外教育指導者の資質が不足していたり、頻繁な交替のために
その他：(　　)

＊次の各質問項目について、あなたの意見を一番よく表していると思われる番号にチェック（✓）をしてください。

5、早くから子どもに特技／課外教育をさせることは必要だと思われますか？

①	②	③	④	⑤
全く必要ない	あまり必要ない	まあまあである	ある程度必要である	とても必要である

6、現在わが国の親たちが幼児期の子どもにさせている特技／課外教育について、あなたはどのように思われますか？

6−1. 時期について：

①	②	③	④	⑤
早過ぎる	早い	適切である	遅い	遅すぎる

6−2. 種類について：

①	②	③	④	⑤
多すぎる	多い	適切である	少ない	少なすぎる

6−3. 費用について：

①	②	③	④	⑤
多すぎる	多い	適切である	少ない	少なすぎる

7、わが国の特技／課外教育の実態について、あなたの考えを自由に記入してください。

誠にありがとうございます。

韓国「学父母」の教育熱分析研究

A Study on the Educational Fever of Korean Parents

（韓国教育開発院、2003年12月）

研究責任者　ヒョンジュ
共同研究者　イチェブン
イヘヨン
翻訳　丹羽　孝

研究の概要

本研究は、韓国「学父母」（学生を持つ親のこと・・・訳者注、以下このまま使用）教育熱の実情を総合的に把握しようと遂行された、学父母の教育熱現象の背景と教育熱、そして学父母教育熱の影響だとみられる学生の学業に関連した行動特性を、学父母の社会的背景に即して分析することに主たる目的を置いている。

このような研究目的を達成するために教育熱関連の先行研究の検討と、専門家との協議を経て研究の方向と教育熱分析の枠組を設定した。また、本研究ではアメリカ、日本、中国、イスラエル等の外国の教育熱を分析することで、韓国の教育熱現象の普遍性と特殊性を同時に理解して、教育熱問題を解決する正しい対策を探そうとした。本研究の主要研究問題である韓国学父母の教育熱の総合的分析のために質問紙調査を実施した。学父母と学生を対象として行った深層面談と先行研究の検討に基づいて、研究に必要な質問紙を製作して全国の81箇所の幼、小、中、普通高・実業高の学生1,852名とその学父母2,368名を対象に質問紙調査を実施した。先行研究検討と専門家協議の結果、次のような示唆を得ることができた。

第１、教育熱を子女教育に対する期待や実態行為にだけ焦点を置くよりは、子女教育と社会に関する学父母の認識的側面から接近する必要性がある。

第２、父母の教育熱が子女の心理的負担、学習態度等にどのような影響を与えるかに対する分析が必要である。

第３、教育熱に関する客観的で中立的な視角からの研究が必要である。

第４、父母の過度の教育熱を抑制しようとする努力よりは、教育熱の肯定的、否定的な特性を把握して、子女教育に役立つような研究が必要である。

外国の教育熱の事例分析の結果、入試競争の形態で表出される教育熱は学校の序列化と密接に関連していた。中国と日本の場合、大学だけではなく中・高校まで序列化されていて、選抜も試験にだけ依存しているために、進学のための教育熱現象が相当多く現れている。アメリカやイスラエルの学校は序列化されているけれど、特性化されていて、私たちとはかなり異なっ

た方式で国民の教育熱が表出されている。韓国の状況と比較してみるとき、西洋では教育熱が一部の階層に局限されている反面、韓国では社会全般的な現象として現れていて、大学進学という一つの目的を志向して、特定段階で集中的にそして画一的な方式で表出されている。教育熱の根源が子女教育に対する熱意にあるとすれば、教育熱は父母ならば誰でも持つ普遍的なモチベーションだと見なすことができる。

それにも拘わらず、国ごとに教育熱が異なって表現されているということは、教育熱の社会文化的環境が異なっているために、外国とは異なる韓国人の家族意識、父母ー子女間系、歴史的経験と文化、学校が持っている社会的位相と役割等は、韓国人の教育熱を独特なものにしている主要要因だと見なすことができる。質問紙調査の結果を学父母教育熱の形成背景、教育熱の実情、教育熱が子女に与える影響、関連項目間の相互関係分析結果の順に提示すれば、以下の如くである。

学父母の教育熱の形成背景

学父母の教育熱を呼び起こす際に影響を与えると考えられている「学父母教育熱形成背景」に関する分析の結果、教育熱は学力又は学閥と関連する学父母のそれまでの経験、人生への満足度、子女教育と社会に関する認識等によって形成されることがわかった。調査対象学となった父母の 84%が勉強を熱心にしなかったことを後悔していて、41.3%が社会生活をしながら学力のために絶望感、無力感、挫折感を感じることがあったと回答していて、大多数の学父母が社会・経済的理由から子女を大学に行かせようとしていることを示していた。このような現象は父母の学力や所得水準といった学父母の社会的背景に対応して、とても異なっていることを示した。社会階層が高い学父母は社会階層が低い学父母に比べて、大体において学力と関連したそれまでの経験や人生の満足度等において、より肯定的な状態にある反面、社会階層の低い学父母たちは学力に由来する否定的な経験の比率が高くて、人生の満足度も又低かった。従って、学父母たちは学父母自身の経験に比べて子女の大学進学に対する意志と熱望が形成されて、このような熱望は子女の「勉強を良くする」ことに集中すると推測することができる。これは大学進学を目標に子女に勉強することへの圧力を行使するという現象が、学父母たちの人生の経験とそれによって形成された意識に土台を置いていることを示唆している。

反面、79.3%の学父母が「成功の条件」として個人の能力を挙げて、「学力・学閥」よりは、「職務遂行能力」が職場生活においては重要だとする能力主義的価値観を持っていて、肯定的な認識を持っていると見られるが、個人の能力を学校の勉強をがんばって、良い成績をあげることと同一視する場合、学父母の教育熱が大学進学に集中することになるという現象は不可避である。

調査対象学父母の 71.3%が子女は大学に進学できると考えていることを示していて、基本的に子女に高い教育水準を期待していることを理解することができる。又、他人の子女教育支援行動と比較したり、同調する傾向が高く、子女主体の生活様式を見せたり、子女教育を私教育

費に依存する傾向が高いことを理解できるが、このことがまた教育熱を高める要因となっている。

教育熱の実情

実際に学父母たちの大部分は、子女を大学以上まで勉強させようと考えている。子女を大卒又は大学院以上まで勉強させたい（意志）と回答した学父母たちは、調査対象の92.3%である。「子女が大学進学に失敗した場合」でも、「大学を出なくても満足できる職業に就くことができる」場合でも、「就業、報酬、昇進等での学歴格差が少なくなる」という場合でも、なお子女を大学に行かせたいという父母が相当数（それぞれ41.5%、52.1%、58.9%）に達しているという事実は、大学進学に対する熱意が単に社会・経済的利益のためだけではなく、社会的条件が変化しても容易に冷めることはないことを示唆している。

大学進学に対する学父母の熱意は、学父母の子女教育への支援行動にもそのまま現れている。全体の学父母の76.2%が、「将来、何を置いても学校の勉強はひとまずがんばらなければならない」と回答していて、54.4%は「勉強以外に良くできることがないなら、勉強を強要するしかない」と答えて、53.7%は現在の子女の課外活動の大部分は成績を上げるためのものである」と答えている。そこで注目すべきことは、大多数の学父母たちは勉強よりは人格と生活習慣が重要だと認識しながらも、実際の教育支援行動は「学校の成績を上げること」に集中しているという事実である。「成績を上げること」への集中現象は、学生たちが受ける私教育の回数と種類分析からも確認されている。

現在、韓国の学生の10名中7名は何らかの形態の私教育を受けていて、幼稚園を除いた小・中・一般高校の学生たちは芸術や特技関連の私教育よりは、教科関連の私教育をより多く受けている。この中で、中学生たちが教科関連私教育を一番色々受けていて（小学生平均1.42個、中学生1.78個、一般高生1.62個）、私教育時間は週あたり平均6.80時間で一番長かった。韓国の学父母たちが子女1人あたり私教育費として使う費用は（2003年7月現在を基準に）平均27万ウォンで、平均家計所得に占める比率は13%を示している。私教育費は子女の学校段階が上がるにつれて増加し、私教育の数（種類）は主に教科教育に偏るようになり、子女の大学進学がさし迫っていればいるほど、学父母たちは「子女の成績を上げるため」により多くの投資をするように見受けられる。学父母の過半数は、家計に負担となっても子女の私教育費を減らす考えはなく、むしろ私教育費を減らせば心理的に不安を感じるという。

そして、このような傾向は学父母の社会・経済的水準によって差が出ていて、大体は学父母の社会経済的水準が高いほど子女の大学進学への熱意や子女教育支援行為、子女が受ける私教育時間と私教育の数が高く多いことを示していて、韓国学父母の教育熱は、社会・経済的水準が高い学父母においてより高く示されているといえる。

子女に現れた教育熱の影響

子女に父母の教育熱がどのように反映して、又学業と関連する母親との葛藤やストレスがどの程度であるかを調べてみた。学生たちが考える家庭の雰囲気は未だ健全で、肯定的だった。しかし、「勉強」と関連しては、母親との葛藤と意見の違いを感じていて、ストレスもあることを示している。母親との葛藤と学業関連ストレスは、中学生が一番深く自覚しているが、これは中学生が心理的・身体的に変化する時期だという点と、私教育を一番多く受けているということに関係がある。

学生たちは、勉強したり私教育を受けたりするとき「父母が心配するから」、又は「父母がさせるから」勉強する傾向は特にはないことが示された。又、学生たちは「私の父母は本当にすばらしい人です (84.9%)」、「私も父母のように子女を教育するでしょう (61.5%)」、「私の教育に対する父母の高い関心と支援に対して感謝している (79.3%)」と答えていて、仮に勉強と関連して父母と葛藤する部分があっても、未だに子女たちは父母を尊敬していることがわかる。

教育熱の影響による学生たちの学業関連の行動特性は、父母の学力や所得の水準に応じて異なった様相を見せている。学父母の学力と所得水準が高ければ、高いほど学生たちが母親と経験する勉強関連の葛藤、家庭での勉強を強要する雰囲気の自覚点数もより高い。けれども、子女たちは子女教育支援について父母に多く感謝していることが示されている。反面、学生が経験するストレスは、父母の学力が低いほど大きいことを示している。

項目間の相互関係の分析

学父母の教育熱の形成背景、教育熱の実情、教育熱の影響としての子女の行動特性等について、相互に関連が高いと予測される項目間の相互関係を分析した結果は、次の如くである。子女が大学に進学しないことを「子女教育の失敗」と認識する学父母たちほど、そうでない父母に比べて、より競争的で強圧的な「勉強中心」の子女教育の方式をとり、自分自身の勉強に対する後悔の程度がより高かった。又、子女教育を父母の道義的責任であると認識している程度が高かった。

又、「社会生活を送りながら学力による絶望感と無力感をたくさん経験した」という学父母ほど、そうでない学父母に比べて、「子女に強圧的に勉強をさせることが必要」で、「大学入学準備教育を少しでも早く始めることがよいことだ」と考えている。即ち、学力や学閥を重視するわが社会に対する経験が、学父母たちの子女の大学進学と勉強を強調する教育熱を発現させるのだと言うことが分かる。

学父母たちが、子女の現在の状態と実力をどのように認識しているかによっても、子女教育のやり方が異なることが示された。子女が大学に進学することが難しいと判断された場合には、道徳性や人間性の涵養よりは勉強をがんばることがより重要だと考えられており、子女の大学入学準備教育は早く開始することがよいことだと考えられ、子女の適性把握のために多様な活動をさせることがよいと考える傾向があった。

又、私教育の数（種類）と時間は、私教育に対する父母の心理的依存の程度、子女教育に対

する道義的適任を感じる程度と相関があった。子女が私教育を受ける間、心が平穏だと感じたり、私教育を止めたりしたときには不安感を感じたと回答した学父母たちは、そうでない学父母たちに比べて、子女により多くの時間、私教育を受けさせている。そして、子女教育において父母の道理を強く認識する学父母たちが、そうでない父母たちに比べて、より多くの数（色々な種類）の私教育をさせていた。

父母－子女関係に応じた父母の教育熱が子女に与える影響の違いを分析した結果、父母－子女関係が理想的であればあるほど、学生たちは家庭の雰囲気を肯定的に知覚して、学業と関連したストレスを少なく感じている。反面、子女が受ける私教育時間は、子女の学業関連ストレスと相関がないことが示された。子女のストレスを感じることに寄与するのは、学生たちが受ける私教育の程度ではなく、父母－子女関係の質であるということがわかった。これと同時に、学父母の過度の他人志向的な教育行動と勉強の強調が、学生たちのストレスを高めるということが示された。

韓国の学父母たちの教育熱に関する分析とそこから得られる示唆から、次のような提案をすることができる。

第１、基本的に学校成績向上と大学進学に集中している学父母教育熱の方向を、より本質的な教育熱に転換できるよう、全般的な社会及び教育体制の改善が必要である。

第２、学力・学閥よりは、個人の能力を重視する国家による人的資源の管理方策が必要である。学力による社会的な不利益に関する父母の心配を減らす方向で社会が変化するようにし、父母は、子女の適性を発見して経験を重視する教育を行わなければならない。教育の体制も又、学校生活を送りながら自分の適性を把握する努力とその分野の経験を追うことが、上級学校進学において重要視される体制に改善されるべきである。

第３、学校が学生個々人の適性と素質を発見して、これを開発してやるという役割を強化する必要がある。学父母教育熱が過度に大学進学に合わせられている重要な理由の一つは、わたしたちの教育体制が、学生たちの適性や素質を把握していないと言うことを挙げることができる。従って、学校は知識を教えるだけではなく、学生たちが適性と素質を発見するための場所としての役割と機能を必ず遂行しなければならない。

第４、学父母が望ましい方向に子女を育てることができるよう援助する学父母教育及び情報提供の機会を拡大する必要がある。学父母たちに、子女の成長と発達に応じた子女理解と指導能力を啓発させ子女たちが望ましい方向への成長が援助できるような父母教育又は父母啓発体制の整備が必要である。

第５に、健全な教育熱に転換するためには、多様な階層を対象とした意識転換と配慮が必要である。学力、職業、所得面での上位階層及び専門家集団においては、まず健康な教育熱の表出へと意識を変える努力が要請される。同時に、低所得層の家庭や低い学力の父母たちの教育熱に対して学校と国家次元の配慮も又、必要とされている。

目　次

Ⅰ．序論
　1．研究の必要性と目的
　2．研究内容
　3．研究方法

Ⅱ．教育熱分析のための理論的基礎
　1．教育熱の概念
　2．教育熱形成の背景
　3．教育熱の実情
　4．教育熱の影響と関連した子女の行動特性を扱う研究
　5．研究推進方向への示唆点抽出
　6．教育熱分析のための概念図設計

Ⅲ．外国の教育熱事例分析
　1．外国の教育熱現象分析の必要性と目的
　2．分析対象国家と分析内容及び方法
　3．外国の教育熱事例
　4．韓国との比較と論議

Ⅳ．韓国学父母の教育熱分析
　1．学父母教育熱形成の背景
　2．学父母教育熱の実情
　3．子女に現れた教育熱の影響
　4．重要項目間の相互関係分析

Ⅴ．要約と提言
　1．要約
　2．提言

参考文献

ABSTRUCT

付録：質問紙内容

編者注：本資料集に採録されているのは上記目次のうち、Ⅴ．要約と提言の部分のみである。

V. 要約と提言

1. 要約

1. 研究の目的と推進過程

本研究は、韓国学父母教育熱の実情を総合的に把握しようと遂行された研究として、学父母教育熱形成背景と実際の教育熱、そして学父母教育熱の影響で見られる学生の学業関連行動特性を学父母の背景要因に応じて分析することに主たる目的をおいた。

このような研究目的を達成するために、本研究では教育熱関連の先行研究を検討した。先行研究で検討された内容は教育熱の概念、教育熱形成背景、教育熱実情、そして教育熱の影響としての子女の行動特性を扱った研究等である。この先行研究の検討を通じて本研究の背景と教育熱分析の枠組み設定の基礎として活用した。

又、本研究では外国の教育熱を分析することで、教育熱が韓国特有の独特な現象ではなく、韓国と類似した社会文化的背景を持っている、又は全く異なる特性を持った国で共通的に現れている現象であることを把握しようとした、このためにアメリカ、日本、中国、イスラエル4カ国の教育熱を分析した。分析を通じて韓国の教育熱現象の普遍性と特殊性を同時に理解して、教育熱問題を解決する正しい代案を探そうとした。

韓国の学父母たちの教育熱を総合的に分析するために、質問紙調査を実施した。

質問紙を通じて分析しようとした内容は大きく教育熱形成背景に関する部分、教育熱の実際部分、教育熱の影響（学生の学業関連行動特性）の部分である。分析の方向は学父母教育熱の性格はどのような特性を見せて、どんな方法で、どの程度現れていて、このような学父母の教育熱は学父母背景（独立変因）によってどのような差違があるか、そして教育熱の結果として子女の側面において示される色々な種類の行動特性は学父母の教育熱と過程の父母－子女関係に応じてどのように異なっているのかを分析するために、次の事項について分析した。

1）教育熱形成背景

ア．教育経験と現在の生活に対する満足度

イ．子女の今の状態に対する認識

ウ．社会現実に対する認識

エ．子女教育に対する心配と心理状態

2）学父母教育熱の実情分析

ア．希望の子女教育水準及び大学進学への熱意

イ．子女教育で基本として考えていることと関心

ウ．子女教育のためにしている行為

エ．私教育に対する熱意

3）子女に現れた教育熱の影響分析

ア．子女の目に映った家庭と親の姿

イ．勉強と関連して経験した母親との葛藤

ウ．学生が受けたストレス

エ．父母の勉強への圧力に対する認識

オ．父母の教育支援に対する子女の考え（認識）

4）主要項目間の相互関係分析

ア．学父母教育熱形成背景内の主要項目間の関係

イ．学父母教育熱形成背景と教育熱実情との関係

ウ．学父母要因（学父母背景、教育熱形成、教育熱実情）と教育熱影響間の関係分析

本研究を遂行するために教育社会学者、家族学者、心理学者で構成された専門家協議会を通じて、研究の方向と設計に関する協議を行った。

また、分析のための質問紙開発に先だって、学父母と学生を対象とした深層面談を実施した。深層面談は学生の学年と成績、母親の学力等を考慮して選定された32名の幼、小、中、高（一般、実業）学生の学父母32名と学生24名の小、中、高（一般、実業）学生だった。深層面談の結果は、教育熱分析のための質問紙開発の基礎資料として活用された。

質問紙実施は全国を対象として比例郵送方式で選定された81の幼、小、中、一般高、実業高で、1校1学級づつ選定された全81学級で幼、小、中、一般高、実業高学生の学父母2,500名だった。実際の分析に使用された対象は幼、小、中、一般高、実業高学生の学父母2,368名と学生1,852名（幼稚園児を除外）だった。質問紙調査の実施は2003年7月5日から7月20日までだった。

2．研究結果及び示唆点

（1）教育熱に関する先行研究の検討

先行研究で検討された内容は、教育熱の概念、教育熱形成背景、教育熱の実情、そして子女に現れた教育熱の影響を扱う研究等である。教育熱の形成背景では社会文化的な要因、教育制度的要因、社会心理的な要因に分けて調べて見た。教育熱実情では教育熱に対する量的研究と

質的研究を検討して、終わりに教育熱の影響と見られる子女の行動特性に関しては学業と関連した学生たちのストレスと葛藤に焦点を当てて検討し、又家庭の父母ー子女関係の質による学生の心理的特性に関して検討した。先行研究を検討した結果は、本研究の方向と教育熱分析の枠を設定する基礎として活用した。この分析を通じて次のような示唆がえられた。

① 学父母の子女教育に関する認識次元から接近してみる必要がある。

養育熱に関するこれまでの研究は、教育熱を説明するのに、主に父母の社会経済的階層や地域のような構造的変因によって教育熱を説明することに力を注ぐ傾向が大きかった。しかし、これについては、父母の教育熱を研究する際に、父母の現在の生き方への満足度、父母の過去の社会的経験と教育経験等、現在の父母自身の経験と認識、そして現在の子女の状態に対する認識等が重要なこととして考慮される必要がある。また、父母の教育熱を研究する上で、このような教育熱が子女にどのような影響を与えるかに対する分析が必要だ、という示唆を受けた。

② 客観的で中立的な立場から研究する必要がある。

これまで、韓国の学父母の教育熱は「父母の過度な教育熱（良い成績維持）と歪曲された教育熱がつくり出した結果としての過度な私教育費（課外授業費）支出と子女たちの不適応行動（自殺、不登校等）」のような社会的、教育的病弊を惹起する主犯だと理解されてきて、いつも「過度な」教育熱、又は「歪曲された」教育熱という修飾語を前に置いていて、過去と異なった父母の教育熱も否定的なものとして理解される傾向が大きかった。しかし、実際にどんな特性を持った教育熱であるのか、なぜこのような特性を見せるのかを明らかにしないでいた。従って、教育熱をより中立的な立場から客観的に探求する必要があることを示唆された。

③ 抑制の対象ではない子女教育を援助する教育熱を明らかにする研究が必要である。

単純に父母の過度な教育熱を抑制しようとする努力よりは、学父母教育熱の肯定、否定的な特性を把握して、子女教育により役立つ教育熱の特性（父母子女関係を含む）を提示してくれる研究が必要なことを示唆された。

（2）外国の教育熱分析

外国の教育熱の事例分析は、教育熱は世界のどの場所でも存在していて発生する普遍的な現象だけれど、条件によって異なって現れるものだという前提のもとに、韓国と類似性が高く私たちに大きな示唆を与えてくれる中国と日本、そして文化背景の異なるアメリカとイスラエルの４カ国を対象にして行った。

分析の焦点は、各国ではどのような教育熱現象が現れていて、どんな社会経済的及び教育制度的環境からそうした教育熱現象が現れているかにおいた。

分析結果を全般的に見るとき、入試競争の形態で表出される教育熱は、学校の序列化と密接

に関連していた。中国と日本の場合には大学だけではなくて、中・高等学校も序列化されていて、選抜も試験によって行われている。従って中・高等学校進学のための教育熱現象が相当に多く現れている。中国の場合、大学への門戸が狭いために、大学段階で入試競争が熾烈で再修生（浪人生）が年ごとに増加している。日本の場合、大学入試はいわゆる一流大学入試のために中・上流層において競争が深刻で、下流層では大学入試のための教育熱現象は冷めている。

中国と日本を見るとき、学校の序列化が教育熱をより過熱させていると断定することは難しい。アメリカやイスラエルの学校は序列化されていると同時に特性化されていて、私たちとはとても異なった方式で国民の教育熱が表出されている。

外国の場合、教育熱が一部の階層に極限されているのに比べて、韓国では社会全般的な現象として現れているために社会問題として台頭していて、大学進学という一つの目的を志向して特定段階で集中的に、そして画一的な方式で表出されているために、教育熱現象が深刻なものと認識されていると見ることができる。

教育熱の根源が、子女教育に対する熱意にあるとするならば、教育熱は父母ならば誰でも持つ普遍的な動機と見なすことができる。それにも拘わらず国家ごとに教育熱が異なって表現されているのは、教育熱の社会文化的環境が異なっているために、外国とは異なった韓国人の家族意識、父母ー子女関係、歴史的経験と文化、学校が持っている社会的な位相と役割等を、韓国人の教育熱を独特なものにしている主たる要因だと見なすことができる。

（３）教育熱分析のための質問紙調査結果

a) 母の教育熱形成の背景

学父母の教育熱の形成背景を調査するために、学父母の教育経験と現在の生活の満足度、子女の今の状態についての認識、社会認識に対する自覚、子女教育及び父母の役割に対する認識、子女教育に関する心配と心理状態等を調べてみた。調査結果から明らかになった内容と得られた示唆点を提示すれば次の如くである。

第１、学父母たちの学力関連経験が子女教育熱に影響を与えることが分かった。

調査対象学父母の 84%が学生時代に勉強を熱心にしなかったことを後悔していて、41.3%が社会生活をしながら学力のために絶望感、無力感、挫折感を感じることがあったという調査結果は、わが社会の学父母教育熱の様相、即ち、大部分の学父母が子女を大学に進学させようとしていて、大学進学を目標に、子女に勉強に対する圧力を強くしているという現象が、学父母たちの生活経験とそれによって形成された意識に基づいていることを示唆している。

第２、学父母の学力水準及び所得水準が、学父母の生活の満足度と相関があることを知ることができた。

研究の結果、学父母の学力が低くて、収入が少ないほど学力のために絶望感、無力感、挫折

感をより多く味わっていて、現在の生活に対する満足度も低かった。職業別では専門職、事務職、自営業の場合、学力による絶望感、無力感、挫折感を他の職業よりも少なく感じていて、現在の生活に対する満足度も高かった。このような結果は、わが社会における学力と所得水準が学父母の生活の満足度に影響を与える主たる要因の一つであることを示唆している。

第３、学父母は子女の勉強と関連して子女にとても高い期待を持っていて、このような期待は学父母の学力と所得水準が高い集団で高く示された。

調査対象学父母の 71.3%が子女は大学に進学できると考えていて、86.3%が子女が勉強にがんばることを期待している。このような希望が、学父母の学力と所得水準が高ければ高いほど高く示された。この結果は、子女を大学に進学させようとする学父母の熱意が、子女に対する勉強への圧力として表現されていることを示唆している。

第４、大多数の学父母が子女を大学に行かせようとする理由として、社会・経済的理由を挙げていた。

学父母たちが子女を大学に行かせる主たる理由は、全般的に「専門的知識と技術を得るため」（59.9%）、「良い職業を得るとき有利だから」（25.4%）、「幅広い教養を積むため」（11.8%）等である。学父母の学力が高いほど「専門的知識と技術を得るため」と回答する傾向が高い反面、父母の学力が低いほど「良い職業を得るとき有利」と「幅広い教養を積むため」に相対的に高い回答を示した。専門的知識と技術を得るためと言うことも、結局は職業獲得と関連したものだという点から見るとき、わが社会の学父母たちの子女大学進学熱は大学教育がもたらす社会的、経済的保障が大きな比率を占めているということを示唆している。

第５、たくさんの学父母が、健全な成功基準と個人的能力を重視する社会観を持っていることを示している。

調査対象学父母の 61.6%が「何はともあれ、自分がしたいことをしながら生きていける人間」を成功した人間だと考えていて、79.3%の学父母が成功した人生を生きるために一番重要な基準として、「個人の能力」をおいていて、最近職場の採用・募集、昇進を決定するときに「学力と学閥」（39.6%）よりは、「職務遂行能力」（51.7%）を重視する、と回答している。このような結果に照らしてみるとき、大部分の学父母の認識が「学力と学閥」自体を重視する価値観よりは、肯定的な側面を持っている点はあるが、個人の能力を学校で良い学業を得ることを同一視する場合、学父母教育熱が大学進学に集中する現象が変化する可能性は大きくない。従って、学力以外に個人の能力を評価できる多様な能力別評価基準を用意して、この基準によって評価が行われるよう、領域別評価体系を準備するための努力が必要だという示唆を得た。

第６、大多数の学父母は子女のために教育費を支出することを、子女の将来のための投資だ

と考えている。

73.5%に及ぶ学父母が子女のために教育費を支出することを、子女の将来のための投資だと考えている。そしてこのような傾向は母親と父親の学歴が高くて、職業が専門職、事務職の場合により高くみられた。このような結果は韓国の学父母、特に高学歴と所得水準の高い階層の教育熱の実態が、教育または学識自体に対する熱望であるというよりは、教育がもたらしてくれる社会経済的利益に対する熱望であるという事実を間接的に承認している結果である。こうした結果は、現在私教育による教育競争がこれによって主導されているという可能性が大きいことを示唆している。従って、これら社会的指導層の教育熱を発展的な方向へ昇華させるための対策準備が必要である。

第7、多くの学父母は子女教育において他人志向的、子女中心的、私教育依存の傾向を持っていることが分かる。

多くの学父母が「周りで勉強が良くできる子どもの話を聞けば、自分の子どもに「勉強」をもっとさせたい」(58.1%) と考えていて、「子女の試験期間に子女と同じように緊張して生活を送っている」(53.4%) と回答していて、「子女が学院に行ったり課外授業を受けたりしている時間だけは心が休まる」(51.8%) と回答している点は、子女教育において学父母のより確固たる主体性と判断が要求されていることを示唆している。従って、父母が望ましい方向へ子女を教育できるように援助する学父母教育、及び情報提供の機会が、拡大される必要性があることを示唆している。

b) 熱の実情

学父母の教育熱の実情を調べるために、学父母の希望する市場教育水準と大学進学の熱意、学父母たちが子女教育において基本だと考えていること、韓国の学父母が子女教育のためにしている行為、私教育に対する熱意と子女の目に映った家庭と父母の姿等を調査した。調査の結果得られた主たる内容と示唆点は次の如くである。

第1、学父母たちのほとんど大部分は、子女を大学以上まで進学させようとしている。

子女を大卒または大学院以上まで勉強させたいと回答した学父母は、調査対象者 (2,338名) の92.3%である。そして、このような傾向は、学父母の背景によって異なっていることが示された。

子女の学校レベル別に見るとき、子女が実業高校に通っている場合、そのほかの学校レベルに比べて子女に対する希望教育水準が高卒と専門大卒に相対的に回答率が高い反面、子女が幼いほど大学院以上を希望する回答率が高かった。しかし、子女が実業高校に通っている場合にも少なくない父母たちが、子女の大学卒業に対する希望を持っていることを見せて、実際に実業系高校教育が有効に機能していないことが分かる。

父母の学歴によってみると、子女を大学院以上に行かせたいという回答は、大卒以上の学歴の父母が、子女を大学に行かせたいと回答した比率は高卒学歴の学父母で、そして子女を専門大に行かせたいとした回答は、高卒未満の学歴の父母において一番多く示されて、学父母たちは子女教育において自分が受けた教育よりすこしでも高い教育させたいという希望を持っていることが明らかになった。

家庭の経済的水準では、高所得の学父母であればあるほど、子女の大学院卒業を一層希望して、低所得家庭の場合でも大学卒業（専門大学を含む）を希望する比率が高い。そして、父親の職業が確実に保障されていない場合にも、学父母の多くが大学卒業（専門大学を含む）を希望していて、低所得層の父母たちは子女が生きていく上で、大学卒業を必須の要素だと認識していることを示している。これらのことは他の父母たちよりは、学力と学閥の社会的な効用価値が大きいと認識していることを表している。

第２、学父母の子女大学進学に対する希望と熱意は、積極的に表現されていて、この熱気は社会が変わっても冷めることはないように思われる。

学父母たちは、彼らの大学に行かないと強力に主張しない子女を大学に行かせようとしている。子女が大学進学に失敗した場合、学父母の41.5%は、再挑戦させても必ず大学に進学させようとする情熱を見せている。大学進学に対する熱意は、学父母の背景変因に応じて統計的に有意な差違を見せているが、子女の学校段階が上がるほど、父母の学歴と月平均収入が高くて、父親の職業が専門的である場合に相対的に子女の大学進学に対する学父母の熱意が高いことを示していた。

そして「大学に行かなくても満足できるだけの職業を得ることができる。」としても、子女を大学へ行かせたいいかという質問について、調査対象学父母（2,334名）の52.1%が「行かせたい」と回答していて、このような考えは実業系高校を除外すれば学校レベルが高ければ高いほど、父母たち全ての学歴が高いほど高いという傾向を見せている。職業、報酬、昇進等においての学歴格差が少なくなるとしても、依然として子女を大学に行かせたいという父母が相当数にあるという事実は、大学教育に対する熱意は大学卒業証書がもたらしている社会経済的利益のためだけではないという点を示唆している。

第３、学父母は子女が勤勉であることは、当然に身につけなければならない基本素養であると考えている。しかし、依然として人格が勉強より重要であると認識している。

調査対象学父母（2,363名）たちの76.2%は、「将来何をおいても学校の勉強はとにかくがんばらなければならない」と回答した。そして、このような考えは低学年の学父母において多くみられて、学父母は低学年の時は子女たちが全ての科目でがんばらせることを、子女教育の基本だと考えていることを示している。

また、調査対象となった学父母の半分を超える54.1%は「勉強以外に良くできることが発見

されないと、勉強を強要する他はない」と回答して、子女の適性把握が容易にできないことと勉強の強要がとても密接に関係していることを理解することができる。

学父母の勉強に対する考え方は、彼らの子女にさせている課外活動に対する基本的な考え方を通じても理解することができる。即ち、調査対象学父母の53.7%が「子女が現在行っているたくさんの課外活動が成績を上げるためのものである」と回答し、このような傾向は子女の学校段階が高いほど高かった。そして、父母の学歴が低いほど子女の課外活動の目的を「子女の成績を上げるため」においている傾向が見られた。

また、多くの学父母の認識は学業よりは、人格がより重要だと考えていることが明らかとなった。これは関連質問に関する回答結果によって理解することができるが、「勉強をしなかったり大学に行かなかったりしたならば、善良で正しい人格も特に意味をもたない」と見るかという質問の結果、87.4%の学父母は「そうではない」と回答していて、70.1%の学父母は「人格教育よりは学校の勉強に多くの優先度をおいてはいない」と答えている。また、調査対象の78.3%は「勉強よりは礼儀作法と生活習慣を優先的に教えている」と回答することで、人格教育を勉強より重要だと考えていることを示して、学父母たちが人格教育を軽視してはいないということが分かる。

このように学父母は、反面では子女がなんとしても一度は学校の勉強をがんばらなければならないと考えていて、また成績を上げるためにたくさんの課外活動をさせながら、別の面では人格教育の重要性を認識している。しかし、現実的に大学入試競争の中でこの二つの重要な事項をバランスよく調和的に進行させることは易しいことではない。結局、学父母たちは二層的に考えて行動する姿を見せるのである。従って、教育が追求する目標に応じて、正常に運営される教育環境及び学校運営が要請されている。

第4、学父母が子女と一緒に行う直接的な教育支援行為が少ない。

学父母2,363名に質問した結果、韓国の学父母たちが子女教育と関連して行う行為の中で一番多いのは、「子女の人格涵養のために友だちと遊ぶことができるよう配慮すること」だった。次は「子女に勉強しないさいということ」で、その次に「子女に栄養を供給する」、「他の父母の子女教育に対する情報収集」、「家庭で模範を見せること」、「子女の日常と日程を管理すること」等だった。

学父母たちが相対的にあまりしないこととしては「近くの図書館に一緒に行くこと」、「子女の勉強を直接教えること」、「教育情報収集のためのインターネット検索」、「学校の勉強と宿題について確認すること」等だった。学父母たちが比較的多くしている行為の中で、「子女に勉強しなさいとしょっちゅう言うこと」は、全ての学父母に共通して見られる現象で、小、中学生の学父母が高校生の学父母よりもさらに多くしていることが示された。

このような結果に照らしてみると、子女教育において学父母たちは子女に勉強しなさいという言葉を多く言うことよりは、現在まで相対的に少ない行為、特に子女の勉強を直接指導して、

宿題を確認して、子女と近くの図書館に行ってみたり、一緒に旅行や文化体験をしたりする等、子女と一緒にする直接的な経験の機会を増やす必要があると考えさせられた。また、学校段階別に父母の役割がどのように異なるべきかを、十分に思案する必要があるように思われる。

調査結果「子女の日常を管理すること」、「人格の涵養のために友だちと遊べるよう配慮すること」、「栄養供給」、「他の父母の子女教育情報収集」行為は、特に幼稚園の父母にとても多く現れたが、学年が上がるに連れて子女に必要なことが何であるかを考慮して、子女の発達傾向と個人的特性に適合した父母の役割を探すようにする必要性があるように思われる。

第5、韓国の学生たちの70%は私教育を受けていて、半数以上の父母が示した私教育に対する熱気は、心理的中毒現象を見せている。

現在韓国の学生10名中7名は、どのような形態であれ私教育を受けている。私教育を受ける程度は、学父母の背景要因によって差違があって、学校段階別では小学生が一番多く受けていて、続いて幼稚園、中学校、一般系高校、実業系高校の順に低くなっている。そして父親の学歴が高いほど、所得水準が高いほど、父親が専門職や事務職に従事している場合ほど、私教育をより多く受けていることを示している。

また私教育を芸能才能関連教育と教科の学習関連教育に区分して調べてみると、小・中・一般系高校の学父母が教科関連の私教育をより多くさせているのとは異なって、幼稚園の時期には私教育が芸術等の才能伸張に比重が置かれていることを理解することができる。

子女の平均私教育時間は週あたり平均6.80時間（学習紙=トレーニングペーパーを家庭でする時間を除く）で、標準偏差は7.04時間（学習紙の時間を除く）である。学校段階別では中学校が7.8時間で一番長く、その次は小学校7.2時間、実業系高校7.09時間、一般系高校6.3時間、幼稚園4.9時間であった。中学生の週あたり私教育時間が、他の学校段階に比べて相対的に長いが、中学生も一般系高校生がしていない私教育に対する負担に苦しめられていることが推測できる。また中学生の時に先行して行う高校の教育課程先行学習は大学入試の予備教育の年齢が中学生にまで下がっていることを示している。

父母の学歴別では有意な差違はなく、月平均収入程度による差違の分析では、所得水準が高いほど私教育時間が長いという傾向があった。特に所得水準が600～1000万ウォン代では私教育時間が一番長かった。また父親の職業が専門的な場合、他の職業に比べて私教育時間が長かった。

韓国の学父母達が1人あたりの子どもの私教育費に使う費用は（2003年7月現在を基準）平均27万ウォン、（標準偏差25万ウォン）で、平均家計所得に占める比率は13%（標準偏差10%）だった。このような傾向は学父母の背景変因によって異なっていた。まず課外費を基準にしてみると、①学校段階が上がるほど費用が多く、実業系高校の場合幼稚園水準と類似していた。②父母の学歴を基準とすると、大卒以上で一番多く、続いて高卒と専門大卒学父母は似たような水準で、高卒以下はとても低い。③月平均収入を基準とすると、収入が高いほど漸次課外教

育費をたくさん使うという傾向が見られるが、特に1000万ウォン以上の所得水準では、むしろ約600～1000万ウォンの範囲より少ないことが示された。④父親の職業別に見るならば、父親が専門職と事務職、そして自営業従事者の場合に高い。

そして、家計の中で私教育費が占めている比率は、家計所得が低いほど（また実業系高校子女を持つ家庭や、職業が無職、単純な職業の場合）比重が増加する傾向が見られる。

即ち、低所得家庭の場合、私教育費使用額が高所得家庭より少ないけれど、少ない収入に比べると教育費使用学が占める比率が大きく、低所得層父母が感じている経済的負担感は相対的により大きくなっている。

しかし、韓国の学父母達の半分くらいは子女教育費が家計負担に大きく、他の人たちには影響しない程度に優先的に割り当てて、困難があっても私教育費を減らすという考えのないことを示している。即ち、調査対象の50%以上が「私教育費による家計負担が大きい」に、54.1%は「家計運営において私教育費を優先的に配分する」に、56.8%は「他の人に影響しない程度に支援する」に、そして50.5%は「他のものを減らしても私教育費は減らさない」と回答した。そして特に「私教育費の優先的配分」と「課外費は減らさない」では父母の学歴が高いほどこうした傾向が強く、所得水準では全般的に所得水準が高いほどこのような傾向が高い中で、「私教育費の優先的配分」は、400～600万ウォン水準の家庭で、そして「他のものを減らしても課外費は減らさない」は600～1000万ウォン水準の家庭で一番高かった。

このように学父母の私教育費に対する熱意は心理的な中毒現象となっている。大多数の学父母たちは「子女が学院に行っている時や課外授業を受けている間、心が安まる」と述べて、「私教育をさせることを止めれば、不安な気持ちになる」と言っている。「周りの勉強が良くできる子どもについての話を聞くと、自分の子どもに『勉強』をもっとさせなければという考えが出てくるか」と聞いたところ、「子どもが勉強と関連したことをしないで、他のことをしていれば不安だ」と言っている。学父母達は心理的不安感を避けるために私教育に依存している。私教育をさせることとそのための経済的支援は、学父母に心理的安定感を与えて、また学父母に子女教育のためにまるで父母の役割を全て果たしたような自己満足感を与えている。

c) 教育において見られる教育熱の影響

学父母の教育熱が子女に与える影響を調べるために、勉強と関連して母親と子女が経験する葛藤、学生達が受けるストレス、学習に対する父母の影響力、家庭の父母一子女関係等を調査した。調査結果から得られた主たる内容と示唆点は、以下の如くである。

第1、学生達の目に映った家庭の姿は、大体肯定的である。

調査結果、学生達の目に映った家庭の姿は、大体「家族としての子女の役割を重要視」して、「体面は重要視しなくて」、「勉強をがんばることを第1にもしていない」雰囲気である。従って、子息たちが「腹を立ててしてはいけないことをしても、勉強をがんばれば容認される雰囲

気ではなくて」、「子女教育に関する父親と母親の考えは同じ」雰囲気である。

このように学生達の目に映った家庭の姿は、これまでの勉強関連の調査結果が示した否定的な側面とは異なって、今なお健全な雰囲気だった。このような点は、とても幸いなことで、学生たちの家庭に対する認識が継続して肯定的であることを期待させるというよりは、勉強と関連して現れた色々な社会的に否定的な側面から健全な家庭の雰囲気を守ることができるようにする努力が要求されている。

第２、学生たちは勉強と関連して母親との葛藤があり、意見の違いを感じている。

勉強と関連して母親との葛藤調査の８項目（①勉強する時間（努力の程度）、②学校の成績、③上級学校への進学、④将来の職業や進路、⑤勉強方法、⑥勉強とは関連しないＴＶ視聴時間、⑦課外や学院へ通うこと、⑧学習誌の選択）に対する調査分析の結果、学生たちは全体的に４点満点で平均2.42点を記録し、母親と葛藤及び意見の違いのあることを感じていることを示している。このような葛藤は、他の学校段階に比べて小・中学校生徒に多く現れていて、父母の学歴が高いほど、所得が多い家庭において葛藤がより多いことを示した。

また８種類の項目それぞれについて、学生たちが全体的に感じている葛藤の程度を比較してみると、「①勉強する時間（努力の程度）2.55点、、②学校の成績2.76点、③上級学校への進学2.44点、④将来の職業や進路2.53点、⑤勉強方法2.42点、⑥勉強とは関連しないＴＶ視聴時間2.40点、⑦課外や学院へ通うこと2.34、⑧学習紙の選択1.96点で、８種類の項目中「学校の成績」において一番大きく葛藤を感じている反面、「学習紙選択」では一番少なく感じていることが分かった。

学校段階別では①勉強する時間（努力の程度）や②学校の成績、⑤勉強方法、⑥勉強とは関連しないＴＶ視聴時間等は、小・中学生と母親との間に葛藤が深いことを示していて、③上級学校への進学の場合には、中学校と一般傾向高校の生徒に葛藤が深いことが示された。そして④将来の職業や進路については、実業系高校の生徒に葛藤が一番大きく、次に中学生に葛藤が大きかった。⑦課外や学院へ通うこと、⑧学習紙の選択は、小学生が葛藤が一番大きかった。

母親と子女間の葛藤の内容、各学校段階別の主要な葛藤状況、学父母の背景による葛藤の程度の差違等は、母親と子女間の葛藤を解消して、同時に学校段階別に効果的な父母－子女関係を位置付けることに重要な示唆があった。即ち、各学校段階別に問題視されている事案を中心にして、学父母が子女をどのように指導することがよいのかを、学父母に案内してやる際の基礎資料としての示唆を得るところが大きい。

第３、人文系の高校生よりは中学生が受けるストレスがより大きい。

学生たちは勉強と関連して困難さやストレスを感じている。特に学生たちは試験に対する不安感に一番大きなストレスを受けていて、また家で勉強しなさいという言葉を聞くことと、父母の成績に対する期待による深い心理的困難さとストレスを経験している。このようなストレ

スは学校段階別に見るとき、大体において中学生の場合に一番大きく示されて、中学生に対する配慮指導が要請されている。

学生たちが勉強と関連して感じるストレスの内容別に調べてみると、①勉強したほどには成績が上がらない、②学習時間がとても多い、⑤父母の成績向上に対する期待が負担である、⑦家で「勉強しなさい」という言葉や要求を聞く、⑧父母から周りの他の子どもたちと比較する言葉を聞く、の各項目について、中学生が一番ストレスを多く受けていて、その次に一般系高校の生徒にストレスが多いことが示された。そして、「③点数で人間の能力を評価される、④試験に対する不安感がある」については、一般系高校生のストレスが一番大きくて、その次に中学生であった。「⑥勉強のために友だちと遊んだり対話できる時間がない」については、盛んに友だちと交わっている中学生が、勉強のために友だちと遊んだり対話する時間がないことに対して一番大きなストレスを持っていて、反対に実業系高校生は他の学校段階に比べるとストレスは一番少なかった。また、「⑨これからも今までよりも勉強をがんばる自信がない」については、実業系高校生が他の学校段階に比べて一番多くストレスを受けていることが示された。

このように、中学生は勉強と関連してストレスを一番多く受けている側にあることを理解することができる。中学生の時期は、発達上身体的・精神的に急変する時期である。同時に大学入試の準備を始める出発点としての勉強や、父母たちとの葛藤も多くなる時期である。そして学校における青少年の問題行動の最初発生期でもある。反面、小・中・高校時代を相互に比較してみると、中学校の時代は相対的に生徒指導がなおざりにされている時期である。中学生の様々な特性と生徒指導の限界等を考慮して、この時期における格別の指導が要請される。

第４、学生たちは大体において父母の勧誘や主導によって学習する傾向が低い。

調査の結果、学生は全体的に「①勉強は放棄すると父母が心配するから学院へ行ったり課外をする（10.1%）」、「学院に行ったり課外を受けていても、自分が本当に熱心にしなければならないという考えで勉強することはない（13.3%）」、「③父母がさせなければ、わたしは学院に行ったり課外の勉強はしない（27.5%）」ということが示された。このような結果から、学生は大体において父母の勧誘や主導に対して学習する傾向は低いと言うことが分かる。即ち、多くの学生たちは、父母のために勉強をするのではないということは理解できている。それにもかかわらず、この３種類の質問を背景となる因子別に分析した結果、学生の学校段階が低いほど、そして父母の学歴が低いほど学生は自律的に学習する傾向が低く、父母の勧誘や主導によって学習をする傾向が見られる。即ち、小学生の場合、勉強は放棄すると父母が心配するから学院に通ったり課外授業を受ける傾向が一番高く、母親の学歴が低いほど学生たちは学院に通ったり課授業を受け受けていても、「自分が本当に熱心にしなければ」という考えから勉強する傾向が低くて、また父母の学歴が低いほど父母がさせなければ学院に行ったり課外での学習をしない傾向が高いことが示された。

調査結果に照らしてみると、全般的には学生たちが、父母の勧誘や強要によらないで、自ら

学習できる力量はほとんどないようだ。しかし、因子別の分析を通じて示されたように、やはり家庭や学校で学生たちが自主的に学習できるよう誘導する努力は、継続する必要があると考えられる。また、学校段階別の特性や家庭背景を考慮して、学生たちがより積極的に学習に臨めるようなさまざまな努力が要求されている。

第５に、仮に勉強と関連して父母と葛藤している部分があっても、子女は依然として父母を尊敬している。

全体の小・中・高校生（2,363 名）を対象に調査した結果、「私たちの父母は本当に立派な人である（84.9%）」、「わたしも父母のように子女を教育するだろう（61.5%）」、「わたしの教育に対する父母の高い関心と支援に対して感謝している（79.3%）と示された。このような結果から、学生たちは大体において父母の教育支援に対して感謝している傾向が大きいことが分かり、３種類の質問中、「私たちの父母は本当に立派な人である」に一番高い点数がでて、仮に勉強と関連して父母と葛藤がある人がいても、依然として子女は父母を尊敬する傾向があることが分かる。父母が立派な人間であると考える傾向は、小学生と一般系高校生で、父母の学歴が高い家庭の子女で、所得が高くて、父親が専門職に従事している子女で高かった。

そして、「私たちの父母のように子女を教育すること」では小学生が一番高く反応して、父母の学歴が高いほどこのような傾向が高かった。また、学年が低いほどより教育に対する父母の高い関心と支援について感謝していて、父母の学歴が高いほど、家庭の所得が高いほど学生たちはより父母の高い関心と支援について感謝していることが示された。

今までの研究の結果、即ち教育熱形成の背景、教育熱の実情、教育熱の影響に関する分析結果を基礎に、学父母たちの社会経済的階層に対応して高学歴／高所得／専門・事務職の学父母と低学歴／低所得／単純労務職の学父母に大きく区分して、教育熱の特性を整理すれば、次の＜表Ｖ－１－１＞の如くである。

この表に提示された相反する解釈は、ふたつの学父母の類型間の相対的な差異を意味するもので、絶対的なものではない。

高学歴／高所得／専門職の学父母は幼いときに裕福に生まれたという傾向があって、勉強に対する後悔及び学歴による挫折感などの経験の程度も少ない。子女の未来の大学進学に対する期待感も高くて、子女を大学に行かせたい一番大きな理由を、専門職の知識と技術の修得においている。

子女教育に関する認識においては、子女が大学に行かないことを子女教育の失敗だと認識する傾向が高くて、子女教育である程度の強圧性が必要だと考えていて、父母としての後悔がないよう、強制してでも勉強をさせなければと信じている傾向があって、教育費支出が子女の将来のための投資だと考えている傾向も大きい。また、子女の勉強と関連して他人への体面を強調する傾向が高い。

これらが示している教育熱においては、子女の大学進学の可否において、父母の意志（主張）が高くて、社会が変わっても子女を大学に行かせようとする傾向は依然として高くて、勉強をがんばることを基本だと考えている傾向が大きい。しかし、勉強を人格よりもより強調してはいない。

子女教育の支援行為においては、具体的には、子女を直接指導・監督・管理する、情報収集する、教育の雰囲気を提供（子女と一緒に）する、勉強時間を確保する、健康管理をする、教育費を家計から優先的にとる、他人がすることをする等の項目で、より高い教育熱が見られる。

子女のための私教育費支出が多くて、子女にさせる私教育の数も多い。

教育熱の傾向においては、子女が母親との勉強に関する葛藤の程度も高くて、子女が、家庭の勉強や体面を強調する雰囲気を知覚する程度も高い。しかし、子女たちは父母の教育支援に対して感謝している。

反面、低学歴／低所得／単純職の学父母は、幼いときに裕福ではない人生を送った傾向があって、社会生活を送りながら勉強や学歴による挫折感の経験も多い。その結果、現在の人生についての満足度が低い。

子女の今の状態の認識において、子女の未来の大学進学に対する期待も低い。

彼らが子女を大学に行かせようとする理由は、相対的に高学歴の学父母たちに比べて、良い職業を得て幅広い教養を積むためだと考える傾向がある。

子女教育に関する認識においては、子女が大学に行かないことを子女教育の失敗だと認識する傾向と子女教育においてある程度の強圧性が必要だと考える傾向、父母としての後悔がないよう強制しても勉強をさせなければと信じている傾向、教育費支出が子女の将来のための投資だと考える傾向が高学歴の学父母たちに比べて相対的に低い。

教育熱の実情において、高学歴の学父母に比べて、子女の大学進学の可否を決定するときに、父母の意志よりは子女の意志に従う傾向が多くて、社会が変化すれば子女を行かせないこともできて、実際には人間性よりは勉強を優先して考える傾向が高い。

子女教育支援行為においても、高学歴の学父母に比べて、相対的に低い支援傾向が見られた。私教育形態においても、高学歴学父母に比べて相対的に支出が低く、私教育も少なめである。

教育熱の傾向においては、高学歴家庭の子女たちに比べて母親との勉強をめぐる葛藤の程度が相対的に低くて、家庭における勉強の強調、体面強調の雰囲気の自覚も少ない反面、父母の教育支援に対する感謝は相対的に少ない。

<表Ⅴ－１－１>学父母の類型による教育熱の関連行動特性

区分	行動特性	学父母の類型	
		高学歴/高所得/専門職	低学歴/低所得/単純職
教育熱形成の背景	<学父母自身の生き方> －幼いときの生活 －勉強に対する後悔と学歴による挫折感の経験の程度 －現在の生活への満足度	裕福 少ない 高い	裕福でない 多い 低い
	<子女の将来の現状認識> －子女の将来の大学進学（一流大）に対する期待	高い	低い
	<子女大学進学理由> －子女が大学（一流大学）に行かないことを子女教育の失敗だと認識する傾向	専門的知識と技術習得	良い職業、幅広い教養
	<子女教育に対する認識> －子女教育である程度の弾圧性が必要だと考える程度 －父母としての後悔がないよう強制しても勉強をさせるべきだと信じている傾向 －教育費の支出は子女の将来に対する投資だと考える傾向 －他人に対する体面を強調する傾向	高い 高い 高い 高い	低い 低い 低い 低い
教育熱の実情	<　　> －子女の大学進学可否決定時父母の意志（主張） －社会が変化しても子女を大学に行かせる傾向 －勉強を良くすることを基本だと考える傾向（勉強を優先的に強調する傾向）	強い 強い 低い	弱い 弱い 高い
	<子女教育への支援行為> －子女教育支援行為の傾向 （子女の職業指導、情報収集、教育の雰囲気の提供、勉強時間確保、健康管理、教育費優先支援、他人志向の程度）	高い	低い
	<私教育形態> －子女教育費支出 －子女の私教育経験比率 －子女が受ける私教育数 －母親との勉強葛藤程度 －家庭での勉強強調、体面強調、雰囲気の知覚程度 －父母の教育支援に対する感謝の傾向	多い 高い 多い 高い 高い 高い	少ない 低い 少ない 低い 低い 低い

3．項目間の相互関係分析

（1）子女の大学不進学に対する学父母の認識が、学父母教育熱（形成背景と教育熱の実情）と高い相関があることが分かる。

子女が大学に行かないことを、「子女教育の失敗」だと認識する学父母であるほど、そうではない学父母たちに比べて次のような行動特性がより多く示された。

①より競争的な教育熱を呼び起こさせる子女教育方式を持っている。

－子女が勉強することを嫌がってもある程度は強圧的にさせることが当然だと考える傾向が大きい。

－道徳性の発達や人間性涵養よりは勉強をがんばることが重要だと考える傾向が高い。

－大学準備教育をいち早くさせることがよいことで、子女の適性把握のためにあれこれとたくさんの活動をさせることがよいことだと考えている傾向が高い。

－子女のための教育費支出が子女の将来のための投資だと考える傾向もとても大きい。

②勉強に対する後悔の度合いがとても高い。

③子女教育における父母としての道義的責任の認識程度が高い。

④子女の学習と関連して、子女が勉強（私教育を含む）をしていなければ、不安感をより多く感じ、他人がすることに影響を受け、他人を意識する傾向がとても高い。

⑤希望する子女教育の水準が高くて、子女を大学進学させることへの意志と熱意が高い。

⑥勉強を基本だと考え、勉強を強調する傾向が高い。

（2）韓国の学父母たちの教育熱には、学父母自身の学力に関する経験もとても大きく作用していることが分かる。

社会生活を送りながら学力によって絶望感／無力感／挫折感の経験が多い学父母であるほど、そうではない学父母に比べて次のような行動特性をより多く持っていることが示された。

①子女にある程度強圧的に勉強させることが必要だと認識している傾向が高い。

②子女教育において、道徳性や人間性涵養よりは勉強をがんばる方が重要だと考えている。

③大学入学準備教育を早くから始めることがよいことだと考えている。

④子女の適性把握のために、多様な活動をさせることが重要だと考えている。

⑤教育費支出が子女の将来のための投資だと見なす傾向が高い。

⑥子女が大学や一流大学に行かないことを、子女教育の失敗だと考える傾向が高い。

⑦子女教育において父母としての道義的責任を強く認識している。

このような結果を通じて、学力や学閥を重視する私たちの社会に対する学父母たちの経験が

子女教育において大学進学と一流大進学そしてそのために「勉強をがんばること」に目標を置く教育熱を生み出しているという示唆を得た。

（3）「子女の今の状態に対する認識」によって、学父母の子女教育方式が異なっていることが分かる。

学父母たちは子女の現在の状態を見て、子女が大学に進学することが難しいと判断した場合、望ましいことだとはいえないがより多くの子女教育の方式を採用していることが示された。例えば、子女教育において道徳性や人間性涵養よりは勉強をがんばることがより重要だと考えていて、子女の大学入学準備教育はとにかく早く始めることが良いのだと考えていて、子女の適性把握のために多様な活動をさせることが良いことだと考える傾向が、子女の現状をより肯定的に見る学父母に比べて、高いことが示された。

（4）子女の未来において学力と関連した心配が多い学父母ほど、より多くの勉強強要型の教育熱を示した。

子女の学力と関連して未来の心配を多くする父母ほどより多くの心配をする学父母に比べて、子女が「全ての教科目でがんばらなければならない」とか、「現在の教育の関心を人格よりは学校の勉強においている」等の「勉強を基本だと考えている程度」と「勉強強調度」において、全て高い点数を示していて、教育熱の実際の行為においても子女を直接指導し、友だち関係で成績を重視する傾向、他人志向、学校の勉強との関連性志向、勉強時間確保への努力、健康管理、教育費による家計負担程度、教育費優先支援程度等、「勉強中心の教育熱」においてより高い点数を示した。

（5）勉強を重視する学父母ほど、教育熱の実情においても勉強関連教育熱をより多く示した。

研究の結果、子女が全ての科目を均等にがんばらなければならないと考える傾向が高い学父母ほど、子女教育の支援行為においても子女の直接指導及び監督と管理、友だち関係において成績重視、他人志向程度、教育費優先支援等の領域で、より高い点数を示した。

（6）私教育に対する父母の心理が、子女が受ける私教育時間と相関があることが明らかになった。

「子女が学院に通ったり課外をしていたりする時間に心が穏やかだ」と「私教育をさせることを止めれば心が不安になる」に Yes と回答した学父母ほど、そうではない学父母に比べて子女により多くの時間の私教育を受けさせていた。

（7）学父母たちは、子女教育における父母の道義的責任をどの程度認識するかによって、子女が受ける私教育の数に影響を与えていることが分かった。

父母としての道理を測定するそれぞれの項目について、「そうです」と回答した学父母ほど、そうではない学父母たちに比べてより多くの種類の私教育をさせていることが分かった。

（8）教育熱の影響だと見なされる子女の学業関連行動特性は子女の学校段階、学力、所得水準によって異なっていて、父母ー子女関係によっても異なっていた。

学生たちが学業と関連してみせる行動特性は、子女の学校段階や家庭の所得水準、母親の学力によって領域別に少しずつ異なっていたけれど、家庭の父母ー子女関係による差違は一貫して現れた。学生たちは家庭の雰囲気の察知のしかたや、学業関連行動特性中、肯定的教育熱特性に該当すると判断される「家庭の家族構成員としての役割強調」と「教育についての父母意見の一致」、「適性と特技によって認定される程度」では、家庭の父母ー子女関係が理想的であるほど高い点数を示した反面、否定的な教育熱特性を持つ領域では家庭の父母ー子女関係が理想的でないほど、高い点数を示した。

否定的教育熱または否定的教育熱の影響だと考えられる領域は、「勉強関連での母親との葛藤」、家庭での「勉強の強調」、「体面強調」の雰囲気、学生の「ストレス」、「父母の権威や主導による勉強の程度」である。

そして、学生の学業関連行動特性に対する家庭の学父母の背景要因と父母ー子女関係間の相互作用効果は、子女の学校段階と父母子女関係による「学生の勉強関連での母親との葛藤」に一部示されただけで、残りの領域では相互作用の効果が示されなかった。このような結果は、学生の学業関連行動特性は、大体子女の学校段階、父母の学力、所得水準のような学父母の背景因子よりは、「父母ー子女関係の質がどうであるか」がより大きな影響を与えうることが示唆された。

（9）学生たちの私教育時間による「ストレス」の程度を、父母ー子女関係を含めた分析の結果、私教育時間の多少による学生のストレスの差違は示されなかったが、父母ー子女関係による学生ストレスの差違は　$p<.001$ 水準で有意だった。即ち、父母ー子女関係が愛情的、激励的、民主的、合理的であるほど敵対的、非難的、専制的、非合理的な場合に比べて、学生たちのストレス点数は有意に低かった。そして、この私教育時間の大小と父母ー子女関係間に相互作用は示されなかった。

（10）子女教育での学父母の過度な他人志向や勉強の強調が、学生たちのストレスと勉強関連の葛藤を高めている。

「子女が名門大へ進学しないならば、他人に対する体面が保てない」と「我が家で子息が勉強ができないことは父母の体面を汚すことだ」と回答した学父母の子女たちに比べて、ストレス点数と母親との勉強葛藤点数が、$p<.001$ 水準で、有意であるとが示された。

また、「我が家では成績が悪ければ鞭で叩く」において、「そうだ」と回答した学生は「そう

でない」と回答した学生に比べてストレスや母親との勉強葛藤点数が有意に、より高く示された。

このような結果は、子女教育において他人を過度に意識する学父母が、子女教育において勉強を過度に強調して、これが子女たちに心理的な問題を引き起こしていることを推測させてくれている。

次の<表Ｖ－１－２>は、項目間の相互関係分析を通じて示された学父母の特性による教育熱の性格を整理したものである。

この表によれば、「子女が大学に行かないことを子女教育の失敗だ」と認識する程度が高い学父母であるほど、そうではない学父母に比べて、子女にある程度は強圧的な勉強が必要だと認識していて、人間性の涵養よりは勉強が重要だと考えている。大学入学教育は早く始めるほど良くて、適性把握のために多様な活動を提供することがよいことだと考えている等、子女教育においての父母がしなければならないことを強く認識している。また、子女が勉強をがんばることを基本だと考えていて、実際に勉強に優先的に関心を寄せるという傾向が見られる。そして、子女の成績と大学進学において、他人を意識する傾向がとても高い。

社会生活を送りながら、学力による絶望感／挫折感をたくさん経験した学父母たちほど、そうではない学父母に比べて、子女にある程度の強圧的な勉強が必要で、人間性の涵養よりは勉強が重要だと認識している傾向がある。そして、大学入学教育は早く始めるほどよくて、適性把握のために多様な活動を提供しなければならないと考えている傾向がある。教育費支出は子女の将来のための投資だという考えと、子女が大学に行かないということは、即ち子女教育の失敗だとする傾向が高い。

現在の子女の実態から見ると大学進学が難しいと判断している学父母たちほど、人間性涵養よりは勉強を重視する傾向、大学入学教育の早期開始の必要性を認識して適性把握のために多様な活動の必要性を認識する傾向が高い。

子女の低い学力に対して心配の多い学父母たちは、そうではない学父母たちに比べて、勉強を良くすることを基本に考えていて、実際に勉強に優先的な関心を見せる傾向が高くて、「勉強」中心の教育熱をより示している。

また、私教育に対する不安感が高い学父母は、子女により多くの時間の私教育をさせて、父母としての責任についての認識の程度が高い学父母は、より多様な種類の私教育をさせている。

家庭と父母－子女関係が理想的ではない学父母ほど、子女が家庭の雰囲気をより否定的だと指摘していて、学生たちの母親との勉強葛藤及びストレスがより高くて、私教育の学習時間の多い少ないに関係なく、学生たちの勉強関連葛藤とストレスがより高い。

<表V－1－2>

学父母の特性	教育熱の性格
1. 子女が大学に通わないことを子女教育の失敗だと認識する傾向が高い学父母	ー強圧的に勉強させることが必要 ー人間性の涵養より勉強重視 ー大学入学教育の早期開始が必要 ー適性把握のために多様な活動が必要 ー教育費支出は子女の将来のための投資 ー子女教育における強い父母としての責任認識 ー子女の大学進学への高い熱意 ー勉強を頑張ることが基本だという考え ー実際に勉強に優先的な関心 ー他人を意識する傾向 ー他人によって影響を受ける傾向
2. 社会生活を送りながら学力による絶望感・無力感・挫折感をたくさん経験した学父母	ー強圧的な勉強が必要 ー人間性涵養より勉強重視 ー大学入学教育の早期開始が必要 ー適性把握のために多様な活動が必要 ー教育費支出は子女の将来のための投資 ー子女教育における強い父母としての責任認識 ー子女が大学に行かないことは子女教育の失敗だと認識する傾向
3. 現在子女の状態では大学進学が難しいと判断している学父母	ー人間性涵養より勉強重視 ー大学入学教育の早期開始が必要 ー適性把握のために多様な活動が必要
4. 子女の低い学力と関連して心配が多い学父母	ー勉強を頑張ることが基本だという考え ー実際に勉強に優先的な関心 ー教育熱の実情において「勉強」中心教育熱が多く見られる
5. 私教育に対する不安心理が高い父母	ー子女により多くの時間の私教育をさせる
6. 家庭の父母ー子女関係が理想的ではない学父母ほど	ーネガティブな教育熱がとても高い ー学生の母親との勉強葛藤とストレスがより高い ー私教育の多少に関係なく勉強関連の葛藤とストレスがより高い

2．提言

韓国の学父母たちの教育熱に関する分析とそこから得られる示唆点に学んで、次のような提案を行うことができる。

第1、学父母教育熱の性格を、より肯定的な方向へ転換することが必要である。

1）子女の大学（名門大）進学熱とは別の、より教育的な方向への子女教育熱が必要である。

韓国の学父母たちの教育熱は基本的には学校教育優先、名門大学を含む大学進学にある。硬い名前を付けるとすれば、名門大学進学熱または大学進学熱、または学校勉強熱だと言うことができる。学父母たちの大学進学熱はどのようになろうと、また社会がかわっても子女を大学（大学院）に行かせて、子女が自ら大学へは行かないと言えば、一旦説得してみたり、子女が大学進学に失敗すれば再挑戦させたりする方式を示している。しかし、子女と一緒に行う教育や、子女の学校の勉強に対する監督管理の様な基本的な子女教育への関心度はさほど高くはないようだ。父母も過度の大学入試中心の教育熱を持たないようにするためには、社会が子女の学歴による社会的不利益に関する父母の心配を越えることのできる方向へ変化させなければならない。また、教育体制においても学生が学校生活を送りながら、自分の適性を把握しようと努力して、その分野の経験を身につけるようにして、このような努力と経験がその後の上級学校進学の際に、重要なこととして考慮される体制も改善されるべきである。

2）子女の自己主導的学習能力を開発する方向へ向いた、学父母教育熱が必要である。

学父母の大多数が「周辺でよく勉強する子どもに対する話を聞けば、自分の子女に『勉強』をもっとさせたい」と考えていて、「子女が学院に行っていたり課外授業を受けていたりする時間だけが心が安らかだ。」と回答している点は、子女教育において学父母のより確固たる主体性と判断が要求されるということを示唆している。

また、少なからぬ学生が父母の勧誘や主導によって学院に行ったり課外授業を受けたりしていて、一部の学生は成績が低ければ鞭で叩かれることもあることを示している。自己主導的な学習が行われるとき、学習効果が極大化するという研究結果を見るとき、父母の一般的な教育熱は子女に心理的な問題だけを引き起こす可能性が大きい。実際に本研究の結果から、学生が受ける私教育時間の量とは無関係に、家庭での父母－子女関係の類型が学生ストレスに影響を与えることが示された。例えば絶対的、非難的、全体的、非合理的な父母を持つ学生は愛情があり、子どもを励まし、民主的で、合理的な父母を持つ学生に比べて、学業関連ストレス点数と母親との勉強関連点数がより高かった。このような調査結果から、学父母はこれ以上に子女を自分の所有物と見ないで、一人の人間として扱う必要があって、また学父母が、父母の一般的な教育熱に浮かされるのではなく、子女の自己主導的努力を誘発できるよう努力する必要が

あることが分かる。

第２、学歴・学閥よりは個人の能力を重視する社会とならなければならない。

１）個人の能力開発が学力と同一視されてはならない。

研究結果によれば、学父母の教育熱の目標は大体において大学進学に集中しているが、これは私たちの社会の学力、学閥重視の風潮と密接に関連していることだと見られている。言い換えれば、学父母たちは大体において大学は行かねばならないと考えていて、子女が専門的知識と技術獲得、そして良い職業を選択するために大学に行かなければと考えている。そして学父母たちは企業が人材を選抜するときの重要な基準は職務遂行能力と学力･学閥だと考えていて、結局職業選択のためには大学へ行くほかはないという現実が、学父母たちをして教育熱を大学進学という一方向へ追いやっているのだと見なすことができる。

２）個人の能力を優先的に考慮する国家の人材管理体制が必要である。

調査対象学父母の 41.3%が自身の学歴のために絶望感／無力感／挫折感を感じたことがあるという回答を通じて、学父母たち自身が学歴・学閥主義社会に生きていて、このような経験が子女の教育において学歴と学閥を強調するようになった悪循環が生まれたのだと見なすことができる。従って、学父母の教育熱を発展的な方向へ昇華させるためには、優先的に社会全般に及んでいる学力、学閥重視の雰囲気に対する適切な解決方案が準備される必要があると考えられる。そのために学力や学閥の他にも一人の個人の能力を評価することができる多様な評価体制と、個人が自ら自分の能力を開発することのできるような、多様な領域別能力基準が提示される必要がある。

第３、学校が学生個々人の適性と素質を発見して、それを開発してやる機能と役割を強化する必要がある。

学父母の教育熱が過度に大学進学に焦点化されている重要な理由の一つは、私たちの教育体制が、学生たちの適性や素質を把握していないことを挙げることができる。多くの父母たちが子女が特別にがんばることがない場合、勉強をさせるしかないと回答していて、また子女の学校段階が上がるほど、子女の適性把握のためにあれこれさせなければならないという回答が高い傾向が、特に実業系高校で高かった。これは学校教育を通じて学生の適性把握と啓発が最大限に行われていないことを示唆している。従って、学校は知識を教えるだけではなく、学生がこれから自分がどのようなことをしながら生きていくかを発見するための場所としての役割と機能を最大に遂行することで、子女の適性が何であるかを知らず、どんなことでも一つも粗末にすることができないような教育熱が生まれないようにする必要がある。

第４、学父母が理想的な方向へ子女を育てていくことができるように援助する、学父母教育及び情報提供の機会を拡大する必要がある。

１）学父母が教育熱に対する深みのある理解によって、学父母教育及び意識転換対策が行われなければならない。

学父母の子女教育に対する考えと実際の行為は相当に異なっている。人格教育の重要性と必要性を強調しながらも、実際の教育に対する支援は勉強が中心の様に見えるが、人格教育は考えているだけに留まっている。例えば学父母は子女教育において学校の勉強を人間性の教育よりはより優位にはおいていないと回答しているが、実際に子女にさせているいろいろな教育活動は「学校成績を上げること」に目的をおいていると回答していて、考えていることと実際の行為に差違があることを示している。そして、このような課程において生まれてくる父母の過度な勉強の強調は、子女に否定的な影響を充てることになる。従って子女のために本当の教育がなんであるのかを考えて、信念に従って行動できる父母となるように変えていく機会提供と同時に、これを後押しできる体制の準備が必要である。

２）子女の学校段階の特性に符合する教育情報の提供が必要である。

特に学生たちが学業と関連して持つようになる父母との葛藤やストレスは、大学進学を目前にした人文系高校生よりも、思春期に該当する中学生または小学生に、より高く現れているという本研究の結果を通じてみると、特に子女が幼いほど理想的な父母役割と機能が要求されるのだと見なすことができる。従って、学父母に子女の成長と発達に応じた子女理解と指導能力を開発させて、子女が理想的に成長できるよう援助する父母教育または父母啓発体制の準備が必要である。特に、学父母教育熱を理想的な方向へ誘導して、純化した結果を得るためには、母親だけではなく父親と母親の両方が対象となる子女教育に関する学父母教育や、意識転換に対する関心を傾けることが要求されている。

第５、健全な学父母教育熱に変えるためには、多様な階層の教育熱に対する理解と国家的配慮が必要である。

調査結果、学父母の学歴は学父母の教育熱特性と相関が高いことが示された。学歴と所得水準が高い学父母は、子女教育において勉強を重視するけれども、これに劣らず人格教育も重要だと考えている。これとは異なって、学歴が低くて所得水準が低い学父母たちは人格涵養よりは勉強をがんばることがより重要だと考えているという傾向がある。このような結果は、それぞれの学父母が社会生活において受けた経験に基づいて形成されたものだといえる。しかし、実際に学父母たちの勉強に集中した教育支援は、高学歴父母たちがよりたくさんしている反面、

低学力父母たちは低い経済水準によって子女教育に対する意志と考えはあっても、実際の教育支援行為はそれにはあっていない。

従って、特に社会的指導層の健康な教育熱表出を導いていく努力と要望と同時に、低所得層家庭や低い学歴の父母たちの教育熱に対して、学校と国家次元からの配慮が要望されている。

参考文献

・カンチャンドン（1996）　韓国教育熱の社会学特性に関する研究、教育問題研究第８巻、pp.209-227

・キムキョングン（1998）　韓国での教育需要決定の社会的規制、教育社会学研究第８巻２号、pp.1-32

・　キムドンソク（1990）　韓国入試競争に対する構造的分析、ソウル大学校大学院修士学位論文

・　キムソンミン（1992）　試験不安に影響を与える家庭環境変因に関する研究、淑明女大大学院修士論文

・キムヨンファ（1992）　学父母の教育熱：社会階層間比較を中心に、教育学研究 30 巻 4 号、pp.173-197

・キムヨンファ、イインヒュ、パクヒョンジョン（1993）　韓国人の教育熱研究、韓国教育開発院研究報告、pp.93-21

・キムヨンファ、イインヒュ、イムチンヨン（1994）　韓国人の教育意識調査研究、韓国教育開発院研究報告　pp.94-8

・　キムヨンスク（1986）　学力別漢字、ソウル：民族文化社

・　キムチェウン（1974）　韓国家族の心理、ソウル：梨花女大出版部

・キムチョンギ（1982）　学業成就に影響する諸要因に関する研究、延世大学校修士論文

・キムチス（2002）　代案学校学父母の教育熱に関する研究、ソウル大学校修士論文

・キムチンスック（2000）　日本人の学力意識と上昇意識に関する研究、延世大学校修士論文

・キムチャンデ、イジョンユン、キムテクホ、イヨンソン（1994）成績が落ちる子どもたち、青少年相談問題研究報告書９、ソウル：青少年対話の勧め

・キムテッヒ（1996）　母親と青少年子女との関係満足度：青少年発達、中年期変化、大学入試と関連して、延世大学校修士論文

・キムヒボック（1991）　学父母文化研究、ソウル大学校博士論文

・中村高康（2003）　日本の教育システムと教育熱・韓国との比較分析、2003 教育熱国際学術会議資料集　韓・美・日国際学術会議の教育熱診断・解剖・対策、カンウォン大学教育研究所韓国教育開発院、pp.49-68

・ノチネ（1994）　父母の成就圧力と学問的自我概念が試験不安に与える影響研究、淑明女大修士論文

・デブン企画マーケティング戦略研究所（1996）　韓国人：1989-1995　ライフスタイル変化、p.61
・ミンキョンファ（1996）弱機能的家族構造と大学生の心理的独立. 大学相談研究、第7巻、1号、pp.107-133
・パクカンフン（1997）　児童が知覚した父母の養育類型と知覚形成及び学業成就との関係、韓国教員大学校修士論文
・パクナムキ（1994）　韓国人の教育熱理解のための代案的観点. 教育学研究、32 巻 5 号
教育熱概念モデルに対する過熱課外と政策再分析、オマンソク他、教育熱の社会文化的構造、ソウル：韓国精神文化研究院
・パクスンヒ（1996）　父母の学業圧力が児童の学業動機と私権不安に与える影響、ハンヤン大修士論文
・パクヨンシン（2000）　父母ー子女関係変化が青少年に与える影響、教育学研究　Vol.38-No.2、pp.109-146
・シンソンミ（1990）　学校教育に対する希望と挫折、ソウル大学校修士論文
・アンチェスン（2003）　「中国の教育熱：媒体から見た最近動向」2003　韓・美・日国際学術会議　資料集教育熱診断解剖対策、カンウォン大学校教育研究所, pp. 127-150
・オマンソク、パクナンキ、イキルサン、イジョンガク（2000）　教育熱の社会文化的構造、ソウル：韓国精神文化研究院
・オオクハン（1986）　韓国大学教育拡張の社会学的解析、梨花女大韓国文化研究院研究論集第50集
・???（2000）　韓国社会の教育熱：起源と深化、ソウル：教育科学社
・ユソンギョン、ソンスミン、イソル（2000）　青少年の家出、青少年相談問題研究報告書40、ソウル：韓国青少年相談院
・ユヨンジェ（1990）　勉強に対する父母の過剰な関心が児童の試験不安と学業成績に与える影響、ハンヤン大学校修士論文
・ユンソンウォン（1985）　知能・自我概念・家庭環境と学業成就との関係研究、中央大学校修士論文
・　イギョンヒ（1997）　新都市への居住移転と母親の子女教育熱変化、梨花女大修士論文
・　イドンヒ（1985）. 韓国社会の教育熱と教育機会の管理問題、大韓教育連合会、「新教育」pp.12-18
・イドンウォン他（1996）　大学入試と韓国家族：入試戦争に揺れ動く家族、ソウル：タサン出版社
・イミョンスク（1990）　労働市場の類型面から見た入試競争のダイナミクス、韓国教育社会学会編、韓国社会と教育葛藤、ソウル：良書院
・イミョンヒ（1989）　高校生のストレスとそれによる障害に関する研究、啓明大学校修士論文
・イミナ（1990）　労働市場の類型面から見た入試競争のダイナミクス、韓国教育社会学会編韓国社会と教育葛藤　ソウル：良書院

・???（2001） 韓国教育の現実と早期留学、KEDI 教育政策フォーラム韓国教育の現実と代案(1)、韓国教育開発院、2001-1 号 pp.44-61
・イスンア（1993） 内・外統制疎外及び家庭環境変因が試験不安に与える影響に関する研究、淑明女大修士論文
・イウイガン（2000） 私教育行動の原因に対する社会心理学的分析、チュウブク大学校修士論文
・イウンジェ（1999） 父母－子女関係と心理的適応及び友だち需要度間の関係、高麗大学校修士論文
・イチェギョン(2003) Is Private Tutoring an Outgrowth of Educational Fever or Educational Need's？ 2003 韓・美・日国際学術大会の資料集：教育熱の診断解剖対策、カンウォン大学校教育研究所、pp. 423-468
・イジョンソン（1996） 学業成就の社会化：在米韓人高校生に対する文化技術的研究、 在外韓人研究第 6 号、pp.149-187
・イジョンファ（1994） 大学進学に対する学父母の目的意識と教育支援活動に関する研究、韓国教員大学校修士論文
・イジョンガク（1990）、教育競争様式と教育競争構造：一次論議、韓国教育社会学会編 韓国社会と教育葛藤、ソウル：良書院
・??? （2002） 教育熱と政策に対する 7 つの新試行、カンウォン大学校教育研究所 2002 教育熱国際学術大会資料 pp.123-140
・???（2003） 教育熱を正しく見ること、ソウル：ウォンミ社
・イチャンジャン（1987） 試験に対する父母の態度と学生の不安水準及び学業成就の関係、カンウォン大学校修士論文
・イチヨン（1994） 母親たちの子女教育に対する期待と子女教育支援活動に関する研究：ソウルカンナム地域母親たちを中心に、ソウル大学校修士論文
・チョンセナム（1989） 父母の教育的期待と試験不安及び学業成就の関係に関する研究、高麗大学校修士論文
・チョンカンヨン（2003） アメリカの私教育実態、教育広場 21、10 月号 pp.72-77
・ チョンスンウ（1999） 韓国社会教育熱に関する歴史・文化的接近、教育社会学研究、第 9 巻第 1 号、pp.1-16
・チョジンヒ（1999） 予備校生の試験不安に影響を与える心理社会的要因に関する研究、梨花女大修士論文
・チャジェホ（1981） 過去 100 年間に起こった韓国人の価値、信念、態度及び行動の変化、1981 年度、韓国心理学会学術発表抄録
・チボンヨン（2000） 教育熱の歴史的展開と性格、オマンソク他、教育熱の社会文化的構造、ソウル： 韓国精神文化研究院
・チェヨンピョ他（1989） 高学歴化現象の診断と対策－再修生と大卒実業問題を中心に、韓国教

育開発院、研究報告、pp.89-17
・チュビヨンシック（1999）　集団順応と代理満足の教育熱、教育社会学研究第９巻第１号、pp.17-30
・ハゴウナ（1998）　女高生の父母成就圧力と試験不安が学業成就に与える影響、キョンサン大学校修士論文
・ハンソンヨル（1994）　韓国文化と間違った教育意識及び慣行、韓国心理学会誌社会問題、pp.95-107
・ハンウンヒ（1991）　普通学校に対する抵抗と教育熱、教育理論、６巻１号
・ハンチョンソン（1998）　韓国女性の教育熱探求、淑明女大アジアア女性問題研究所、アジア女性研究第37集
・Ausbel, D.P.（1968）. Educational Psychology, New York : Holt Rindhor and Winston, Inc. pp.329-415
・Baumrind, D.（1991）. To nurture nature. Behavioral and Brain Sciences, 14, 386
・Bemdt, T. J., & Savin-Williams, R.C.（1993）. Peer Relations and Friendships. In P. H. Tolan, B, J. Cohler, (Eds), Handbook of clinical research and practice with adolescents. New York, Cambridge University Press.
・Chao, R.K.（1994）. Beyond parental control and authoritarian parenting style : Understanding Chinese parenting through the cultural notion of training. Child Development, 65, pp.1111-1119.
・Conger, R.D., Conger, K.J., Edger, G.H., Jr. Lorentz, F.O., Simons, R.L., & Whiltebeck, L.B.（1992）. A family process model of economic hardship and adjustment of early adolescent boys. Child Development, 63, pp. 527-541
・Dombush, S.M., Ritter, P.L., & Leiderman, P.H.,（1987）. The relation of parenting style to adolescent School performance, Child Development,58, pp. 1244-1257
・Duncan, G.J., Brooks - Gunn, J. & Klebanov, P.K.（1994）. Economic Deprivation and early childhood development, Special issue : Children and Poverty, Child Development、65, pp.296-318
・Hoffman, M.L.（1984）. Interaction of affect and cognition in empathy. In C. E. Izard, J. Kangan, & R.B. Zajonic (Eds), Emotions, Cognition, and Behavior, pp.103-131, Cambridge : Cambridge University Press.
・Hoi K. Suen（2003）. Exam-driven education fever and consequences : The case of the Chinese historical Keju 科挙 education / exam system. 韓・美・日国際学術会議資料集、カンウォン大学校教育研究所、pp. 1-29
・Kelly, M.L., Power, T.G., & Wimbush, D.D.（1982）. Determinants of disciplinary practices and intra individual change. Child Development, 63, pp.573-582
・Lee Jaekyung（2003）. Is Private Tutoring an Outgrowth of Educational fever or Educational Needs？ 韓・美・日国際学術会議資料集、カンウォン大学校教育研究所、pp. 423-468
・Luster, T.Roads, K. & Haas, B.（1989）. The relation between parenting behavior, Journal of Marriage and the Family, 51, pp.139-147
・Maccoby, E.E. & Martin, J.A.（1983）. Socialization in the context of the family ; Parent-child interaction.
・Macloyd, V.（1999）. The impact economic hardship on black families and children : Psychological distress,

parenting, and socio-emotional development. Child Development, 61, pp. 311-346
・Minuchin (1974). Family and family therapy. Cambridge, MA. Harvard University Press. ・OECD indicators (2002). 2002 国家報告書
・Steinberg, L. (1987). Recent research on the family at adolescents, Journal of youth and adolescence, 16, pp.191-198

参考記事

KBS 9時ニュース (2003.1.21)
保健福祉部報道資料 (2003.1.21)
USA, chosun. com. (2001) 中・高生中心の子女英国留学の春、(2001.9.4) 韓国教育新聞インターネット版 (2002) 2002-06-17 午前 11:29:00
http//www.donga.com/fbin/output?from=email&n=20201290257(登録日時：2002/01/29 (火))18:13 ／キムジョンアン記者 credo@donga.com)
・韓国教育新聞 (2003) "'第3学期'で大変な中国の子どもたち" 2003 年 9 月 1 日、世界の教育記事
・朝鮮日報. "韓国の母親とおばさん" (2002.0131)

韓国幼児教育学会　大討論会

幼児のための公教育・保育

何が問題なのか？

翻訳　　丹羽　孝

主催の言葉

2004年は「幼児教育法」と「乳幼児保育法改訂案」が通過した歴史的な年である。来る2005年は満5歳児のための無償教育・保育が施行される元年でもある。国連と世界の各国は、幼児の権利と質的な成長を保障するために多角的な努力を傾けているし、わが国でも満5歳児に対する無償教育・保育の実行を前にして、たくさんの論議が行われている。

このように重要な時点に専門家及び幼稚園・保育現場関係者の方たちを集めて、これに対する問題をともに十分に討論のうえ方策を提案して、望ましい方向を模索する機会を準備したのである。幼児教育・保育分野の方々の専門性の共有と熱意が、わが国の公教育・保育の発展の土台となることを信じている。今日を最初として、これからより持続的な論議と討論が行われることを期待して、韓国幼児教育・保育政策と制度の発展のための討論の場に多くの方が参加され、優れた意見を出してくださるようお願いする。

カムサハムニダ。

2004年12月

韓国幼児教育学会会長

金英玉

プログラム

- 日時：2004年12月28日（火）　午後　2:00－5:00
- 場所：大韓民国　国会　議員会館　大会議室
- 主催：韓国幼児教育学会
- 司会：チェヤンミ　（アンヤン大）

2:00-2:10	開会の辞及び国民儀礼
2:10-2:20	挨拶　キムヨンオク（全南大教授、韓国幼児教育学会会長）
2:20-2:30	祝辞　イグンヒョン（ハンナラ党　議員）
2:30-3:00	発題　李基淑　（梨花女子大教授）
3:00-3:15	討論１　ユングンジャ（ソウル市私立幼稚園連合会会長）
3:15-3:30	討論２　チョンヘソン（韓国国公立幼稚園教員連合会会長）
3:30-3:45	討論３　キムミョンス（韓国教員大教授／韓国教員教育学会主席副会長）
3:45-4:04	休息
4:05-4:20	討論４　ウォンミョンスン（韓国保育施設連合会／ソウル市保育施設連合会会長）
4:20-4:35	討論５　チェジンホ　（韓国保育施設連合会法人分科／全国保育施設連合会会長）
4:35-5:00	質疑応答及び閉会

（編者注：　本資料集に採録するのは、網掛け部分の　李基淑教授による問題提起のみである）

幼児教育の公教育・保育
何が問題なのか？

李　基　淑
（梨花女子大学幼児教育科教授）

Ⅰ．問題提起

今年制定された幼児教育法は、1997年に始めて発議されて以後7年間の極限的な対立と論争を経ながら、辛くも国会を通過（2004．1.8）して、法律第7120号として公布（2004．1.29）された法律である。幼児教育法は長い間、初中等教育法と幼児教育振興法に分散されていた幼児教育に関する規定を、独立法として体系化して、教育法体系を幼稚園段階から確立することができたことに大きな意味がある。幼児教育法の一番大きな骨子は満5歳児無償教育支援の拡大、低所得層支援による幼児教育の公教育化、私立幼稚園に対する支援への法的根拠の準備と幼稚園全日制運営に対する支援である。幼児教育界の長い間の宿願であった幼児教育法が通過した瞬間に、ヨイド（国会議事堂所在地・・・訳者注）で私たち皆が感激した瞬間は、今も新鮮である。今、幼児教育法制定の実現という大きな骨格が成立したことによって、私たちみんなはこれからへの期待に満ちている。この間、幼児教育代表者の連帯は、幼児教育法制定過程と今後の課題を点検するために、「幼児教育法制定の異議と今後の課題」という主題で討論会を開催したが、この間、保育界でも数多くの討論会が開催されて、女性部と教育部の関係者たちも忙しい日程を送らなければならなかった。なぜならば、幼児教育界と保育界は幼児教育法が制定されて、乳幼児保育法が改定されたことで、両法の一番重要な骨子である就学前満5歳児無償教育が実現されるからである。これまで低所得層を中心にしてわずか20%程度の支援だった無償教育費が、2007年までには先進国と同様に70%水準へ拡大されると同時に、本当に公教育・保育化がかなうようになると誰もが信じている。しかも政府は、大統領諮問機構として高齢化及び未来社会委員会を設置して、幼稚園教育と保育の問題を合わせた女性家族専門委員会を置いて、最近では合計特殊出産率1.17という低出産問題と、女性の経済活動参加を促進するための方案として「育児支援政策方案」（04.6.11）を発表するに至った。これは、今幼児教育を普遍化して女性の社会参加を促進することによって、誰もが希望する多様な幼児教育と保育を提供し、少なくとも満5歳児については無償教育を普遍化させようという、強力な意志での現れである。このような一連の努力は、「幼児教育と保育を公教育化する」という幼児教育界の長い間の宿願を解き放す試みであって、今や幼児教育が基礎教育としての席を占めんとする意志を示したものである。しかし、一歩ずつ前進しながら幼児教育の内容へ踏み込んでみると、このような普遍化にふさわしい幼児教育と保育の質的な内実化が果たして為されているかについては、疑問を禁じ得ない。

わが国の幼児教育は、80年代以降に幼児教育・保育の普遍化が試みられてきたが、幼児教育を公教育・保育の概念として、教育全体の脈絡の中で論議されたと言うよりは、特殊な分野として認識されてきたのだと考えられる。従って、幼児教育は法律、予算、行政支援全体の中で常に別のものとして認識されていて、行政当局では幼児教育というのは「本当に頭痛の種」、「問題ばかり引き起こすもの」だと認識されていた。幼児教育関連改革は、教育改革審議会を通じて1994年の1次改革案と、1995年に発表された2次改革案において既にその基盤が準備され、1997年6月2日、教育改革委員会は「公教育体制確立のための幼児教育改革法案」として三案を提示するに至った。しかし、幼児教育政策を立案する過程において、国家が推進する教育政策の優先順位としては、幼児教育は一番後にされて、2000年に入っても、実質的な側面では幼児教育の公教育化と普遍化はほとんど推進されなかった。

事実、この間政府では幼児教育・保育に関する新しい計画に急で、「衆論」を集めて決定する例が多かった。幼児教育・保育に関する長期的な研究に基礎をおくというよりは、その時その時の政策研究や要約をした研究によって、臨機応変に幼児教育・保育の問題を、いとも簡単に解決しようとしたことが多かった。だからその変遷過程は、国家発展と国家意志の次元から行われたというよりは、政治的な要因に左右される面が多かった。そのように見ると、政策は結局上層の数名の人間の手の中で行われるという方式だと考えられて、幼児教育研究は、無駄使いで幼児専門家たちの意見も結局無力な状況にあって、研究無用論の如く反知性的な思考に浸っているに過ぎないとも言われていた。

事実、幼児教育改革論議は、初・中等教育の改革論議よりは、さらに難しいことだと感じざるを得ない。初・中等教育は、既に制度的にも概念的にも確固と定着した枠を持っているのに比べて、幼児教育は、その必要性だけではなく、何を教育するのかという内容についても理解が不足しているという実情があるからである。即ち、「幼児教育」という言葉自体がどんな種類の研究領域と内容を指し示しているのかもはっきりしていない。幼児教育は「子どもたちを世話すること」だと認識され、教育内容は特技教育や技能教育なのだとも考えられているようだ。なぜならば、多くの母親たちは幼い子女が鞄だけを背負っていけば、それが学院であれ何であれ、その時間に正式の幼児教育を受けていると考えているからである。従って、各種学院が横行するようになって、学院や宣教院、各種保育施設、幼稚園の中からその需要者たちはその機能の差違点を認識もしないでまま選択し、うろうろとする現実を招くに至った。

このような現実の中で、最近小学生や中・高校生を対象にする特技・課外教育の年齢が下降して、流行しているという幼児早期・特技教育の現実が、言論メディアにたくさん報道された（朝鮮日報：2002.1. 21/22；中央日報：2002.1.21；KBS、2002; SBS、2002）。幼児教育の目的は、幼児を全人的な人間へと成長させることができるよう援助することである。しかし、このような幼児時教育の目的は、早期教育の熱風の中で、漸次立つ瀬を失っている。教育が社会的な成功や地位または階層上昇移動のための手段だと認識されるようになって、早期教育を通じて生まれたての早期から子女を支援しようとする父母たちの熱望は、社会階層及び教育水準

に関係なく高いものである。特に、わが社会に急激に増加している幼児対象産業体が、早期教育に対する父母の過度な教育熱に迎合することによって、幼児対象の各種特技学院と外国語学院等が急速度で拡散している。このような誤った早期教育の風土はわが社会に蔓延する注入式、知識伝達中心の教育と噛み合って、幼児の個々人の潜在能力や関心とは関係なく、成人社会において重要視されている一部の分野の特技や学問的基礎技術を身につけることを強要している。

1990年代になって幼児早期・特技教育の過熱現象や幼児発達に与える否定的影響について知らされ始めた。教育統計年報によれば、小学校入学前に学院を受講した幼児の数が段階的に増加するという趨勢で、学習誌市場の規模も毎年1000億ウォン以上の増加の勢いを見せている。教育対象の年齢も満１，２歳児へと下降している。

家庭において子女たちのために支出する私教育費も深刻な社会的な問題だと認識されている。国民の基礎教育である幼児教育の一番主たる目的は幼児の全人的な（Whole-Child）発達、即ち、身体、情緒、社会、言語、認知の発達が調和をとって成り立つよう援助することである。教育先進国では、幼児教育の公教育体制を確立して、正常的な幼児教育を通じて幼児の全ての面を等しく均衡がとれるように発達させるという全人教育を実行することで、幼児期から全人的な人的資源養成に力を注いできた。このような点を考慮すると、幼児教育に対する国家の強力な政策的支援が必要であるという視点が成立する。

このような一連の過程を見届けると同時に、私たちは次のような疑問を持つに至った。いまわが幼児教育界は公教育・保育体制として明るい未来を展望して、安心して全てのことが施行されるのを期待していればよいのだろうか？しかし幼児教育と保育界の現実は、解決しなければならない問題が山積している。その中で最大の争点は、今満５歳児無償教育費を学院に支援しようとする学院側の要求である。学院側の強力な示威に対して教育人的資源部は、今毎年 1 月 30 日から施行されようとしている幼児教育法施行令も立法予告はしていないのが実情である。言い替えれば、幼児教育と保育界は再度政治権力の圧力に振り回されているのである。

Ⅱ．幼児公教育・保育概念の重要性

公教育は、教育の個人的側面よりは、国家・社会的側面を重視することである。このような公教育の概念は学者によって多様に定義されているが、大統領諮問機構である教育改革委員会が主催した第１４次公聴会では、公教育を次のように定義している。（教育改革委員会、1997.3）公教育とは教育の社会的有用性によって、国家が積極的に関与する教育で、国家や公共団体が管理・運営・支援して、国民全てに開放して普遍的な教育を実施する教育のことである。このような公教育は教育の期間均等のために無償制と義務生を追求して、教育内容においての中立性と普遍性を追求して、国家が管理・監督・運営する学校制度中心の教育をその原理としてい

る。

キムハクチョン（1992）は、公教育とは誰にでも適性や能力にあった教育の機会を付与されて、国民の代表である公的機関がその運営と財政的責任を持つ教育であると定義した。またイサングムは「公教育は公共の財源が投入された普遍的な教育を、開放的に実施して、国家や地方の監督を受ける教育を言う」としている。（ナジョン、2002 から再引用）

保育の公共性は子女養育が父母によって遂行されることが難しい場合、社会がこれを支援して子女養育問題が解決するように支援する制度だとしている。キムヨンモ（2002）は、「公保育とは、公共の利益のための保育サービス」だと定義しながら、国家や社会（職場等）が児童保育に対する責任制を持って保育施設を設置するだけではなく、従事者の人件費と児童の需用費まで負担することだとしている。パクグムヒ（2003）は、公保育を保育の社会的有用性と公益性によって、国家が積極的に介入する保育であって、即ち、保育事業の目的実現のために国家が保育の水準に対する基準を提示して、公的財源を投入して、管理して、責任を持つことを意味している。ビョンヨンチャン（2001）は、「公保育とは保育が必要な全ての乳幼児に、平等に保育を受ける権利を保障するため国家が機会を提供するようにして、保育の内容においても質的水準の適正水準と普遍性が保障されなければならない。」と述べている。

キムヨンオクとチソンヘ（2002）は、保育を必要とする全ての乳幼児が質高い保育を受けることができるよう、公保育の基盤構築が要求されていて、次のような４種類の側面から実行が模索されていると述べている。

第１、公共保育財源の確保を通じて保育を希望する全ての乳幼児たちが保護者の所得水準及び経済的負担能力に応じて、無料または適切な水準の保育費用を負担するようにすることである。

第２に、乳幼児の適性に適合した質高い保育サービスを提供することである。即ち、公保育は一般乳幼児の発達的特性だけではなく、障害児等全ての乳幼児の特性を考慮した質高い保育を通じて成立することができる。

第３に、都市、農漁村、中産層、低所得層地域等、乳幼児が居住している地域社会の規模及び生活水準に関係なく、乳幼児家庭の経済水準にあった適切な費用で、隣接居住地において便利で質高い保育を提供することである。

第４に、保育に対する国家の責務性強化と同時に保育に対する財政支援が拡大されて、国家が負担する費用で保育を受ける乳幼児の規模を先進国水準にしていくよう、公保育の制度的基盤を準備することだとしている。

チョンミンジャ（2002）は、保育の公共性について「児童保育問題を家庭と私保育市場に任せないで、国家または社会が責任を持って意図的で計画的な政策的支援をすることであって、これによって保育が必要な全ての児童に平等な保育を受ける権利を保障するために、国家が介入すること」だと定義している。

以上のように、幼児教育・保育における公共性という国家発展及び社会的必要性に応じた、

全ての乳幼児に安定的で質高い保育サービス提供を、国家が責任を持って運営、管理する体制だと定義することができる。このような定義によれば、わが国の幼稚園教育は公立幼稚園の国家支援と私立幼稚園の国家管理を準拠にしてみるとき、厳密に言えば公教育が一部で実施されているということができる。しかしわが国の幼稚園教育は、公立幼稚園にだけ支援が行われて、私立幼稚園の場合、高い教育費によって本当の意味での公教育が国家的次元では行われていない。このような現象は、保育界でも同様である。即ち、開放性と公費支援が不足していることによって、一般的で普遍的な教育・保育機会が成立していないことによって、名実ともに公教育・保育の機能を遂行できないのだということができる。わが国憲法第３１条には「全ての国民は能力に応じて均等に教育を受ける権利を有する」と明示されている。即ち、わが国の幼児たちは国民の基本権利としての教育を受け保育されるということを明らかにしている。だから全ての幼児が均等に教育を受けるためには幼稚園を公教育化することが一番効率的で、適正だと言うことができる。この時の公教育化とは、全ての幼児を対象にして、無条件の無償教育や義務教育として実施することを意味しているのではない。現在 OECD 加盟国家の大部分でも、幼児教育を義務教育としていない（OECD、1995）。義務教育として制度化した国は、主として社会主義国家である。しかし、公教育化した多くの国家では、幼稚園教育を無償または部分的な無償教育として実施していて、このような傾向がより普遍的な趨勢なのである。言い替えれば、義務制を執らなくても既に先進国の多くは義務教育化したのと同様に、誰でも行くことができる教育機関として認識していて、殆ど全ての幼児が就園する公教育として席を占めている。

公教育・保育体制確立の必要性は次のように整理することができる。

第１、幼児教育・保育の機会均等を実現するためである。わが国大都市低所得層子女の就園率がとても低く、不平等が大きいという問題が提起されていて、質の管理ができない幼児対象の幼児教育機関の乱立によって、幼児教育の正常的な運営を困難にしている。

第２、幼児教育・保育に対する各家庭の費用負担を解消するためである。わが国の幼稚園教育と保育施設は、この間私立・民間によって運営されてきたと言っても過言ではない。とりわけ私立では国家の支援が皆無なために各家庭の教育・保育費負担がとても高くて、家計負担の大きな要因として作用している。特に、幼児を持つ家庭は大体において若い夫婦なので、生活基盤が安定していないという関係によって、家計負担の程度は相対的に高いといえる。

第３、女性就業のための社会的変化に対応するためである。育児負担は、女性人力の社会参加を相当難しくしている。特に価格が低廉で質の高い乳幼児保育施設と幼児教育機関が絶対的に不足していて、就業による育児費用が就業を通じて得られる所得に肉薄するためである。女性人力の社会参加率を高めるためにも、幼児教育・保育に対する国家の積極的な関与が至急に要請されている。

第４、幼児教育に対する投資価値を極大化するためである。幼児教育に対する投資は初・中等学校での施行に肯定的な影響を与えて、青少年期の非効率を減少させて、福祉費用を節約さ

せることによって国家的次元からも投資価値が高い教育であることが理解できる。実際に　ハイスコープ教育研究財団が研究したところによれば、幼児教育に対する投資分析では１ドルを投資すれば 8.74 ドルの費用効率性が示されたと報告されている（Vande、2004）。最近急激な増加の趨勢を見せているわが国の青少年の非行率を考慮すると、今後の福祉費用を節約させてくれる幼児教育と保育に対する投資価値の効果は一層極大化する必要がある。

以上に於いて述べたように、わが国の幼児のための公教育と保育の推進問題は、この間国家主導の教育改革が樹立される時ごとに、数多くの論議を経て推進されてきた幼児教育と保育分野の最大政策課題だということができる。

Ⅲ．幼児のための公教育・保育と美術学院支援の妥当性

教育部は幼児教育法につづく下位法令の制定過程において、満５歳児無償教育費支援対象に美術学院も包含する幼児教育法施行規則を制定することを検討している。学院が幼児のための公教育・保育と同等な位置のものとして支援を受けることができるかを調べるために、学院に関する法律を整理すれば次のようになる。

学院の設立運営及び課外教習に関する法律［一部改定 2004.3.22］第２条（定義）この法律で使用する用語の定義は次の如くである。＜改定　2004.3.22＞

１．“学院”とは、「私人が、大統領令が定める数以上の学習者で、30 日以上の教習課程によって知識技術（技能を含める。以下同じ）、芸能を教習するか、30 日以上学習の場所を提供されている施設で、次の各項の１に該当しない施設」を言う。

ア．教育法その他の法令による学校

イ．・・・　ウ．・・・

このような定義によれば、次の２種類の重大な問題点を指摘することができる。

① 学院は教育法やその他の法令によって明示されている学校ではない施設を意味していて、教育内容も知識技術と芸能を教習する機能だと法律に提示されている。万一、学院が学院側の主張通り、わが国低所得層幼児のために幼児教育と保育の機能を担当しているならば、それはむしろ法にはずれた不法な教習行為であって、管理監督を受けなければならない事項である。

② 低所得層のために長い間幼児教育と保育を行ってきたと主張しているが、その為になおさら国家が認定する正規教育機関である幼稚園と保育施設に通わせるために、国家はいろい

ろなしなければならない。欠陥の多い低所得層の子どもたちこそ、誰よりも良い環境の中で全人的な幼児教育と保護を受けるべきだからである。彼らをこのまま、放置された体・美術学院で美術だけ学ばせればよいのかと反問したい。国家はこういった低所得層に対する満５歳児の無償教育・保育を普遍化するために、育児支援政策をつくったのであって、政策案の中でもはっきりと幼稚園と保育施設を中心に無償教育を拡大していくことを明らかにしている（未来社会委員会、2004）。しかし、美術学院側は大規模のデモンストレーションと政府に対する圧力を行使していて、教育人的資源部も幼児教育法施行令と施行規則を今まで発表していなくて、ぐらついているのが実情である。これに対して幼児教育代表者連帯は次のような趣旨の説明書を発表するに至ったのである。（幼児教育代表者連帯、2004）

１．総論的立場

○幼児教育法は幼稚園のための法で、「学院の設立・運営及び課外学習に関する法律（以下「学院法」）に根拠を置く美術学院は適用対象ではない。満５歳児無償教育費の支援を受けることにだけ幼児教育法の適用を受けて、残りは学院法を適用されることは矛盾している。
○幼児教育の公教育化のための幼児教育法の制定趣旨が、私設学院に支援することによってゆがめられる。
○国家が幼児段階からの私教育機関に国家予算を支援することによって、私教育万能風土が拡散される。これは私教育軽減という広義の政府の政策に反する。
○就学前１年（満５歳児）完全無償教育実現が、美術学院支援で遅延されることである。
○学院法の適用を受けているその他の施設学院（ピアノ学院、舞踊学院、テッコンド学院等）が平等性を主張して、支援を主張するようになることである。
○幼稚園の場合、国家からの厳格な施設、教育課程、教師資格、奨学指導等を受けている反面、美術学院の場合、幼稚園に較べて低い基準の適用と行政指導を受けていて、私的な特技、適性教育次元で行われている等、幼稚園教育との差別化がある事項において同じような国家支援が行われるというのは問題である。

―― 「幼児教育公教育化の基本法である幼児教育法制定趣旨に反するだけでなく、政策の大枠としての私教育費軽減対策を推進しながら、美術学院に国民の血税を支援するということは、国民情緒には適合しない。
―― 一部では幼児教育法第24条に、満５歳児無償教育費を幼児の保護者に支援するよう（バウチャー制度）になっていて、支援方法等に関して必要な事項を教育人的資源部令で定めるようになっていて、これを根拠に低所得層のたくさんの子どもたちが美術学院に通っている現実を勘案して、支援対象に包含させるべきだという主張をしている。同時に、「幼稚園が全体の

市場において占めている比重は27.8%に過ぎないので、低所得層地域には施設すら無い」という内容も、美術学院支援主張の妥当性として提示されている。

―― しかし、幼児教育法を最初から終わりまで調べても目的、定義、教育課程、幼稚園設　立等、全ての内容が幼稚園教育推進のための法であって、美術学院のための法ではないことは明確である。美術学院の関連法である「学院の設立・運営及び教習に関する法律」にも全く財政支援の根拠が無いという内容を、年齢帯が同じで、低所得層幼児たちが就園しているという理由だけで財政支援問題においては幼児教育法を適用しようという意図は糾弾を受けて当然のことである。農・漁村及び脆弱地域幼児教育のために地方自治団体が併設幼稚園を設立・運営していて、万一そのような恵沢が与えられないところがあれば公私立幼稚園と保育施設を支援したり新設したりする方式で解決するようにすべきで、美術学院に国民の税金を支援する方式で問題を解決することは正しくない。

―― また、バウチャー制度の本来の趣旨も学生、学父母の学校選択権を保障するという趣旨から生まれたもので、私教育機関に国民の税金を支援しようというものではない。即ち、万一学生が私立学校に行こうとする場合に、公立学校に支援される程度のお金を、学生が通う私立学校に支援することを意味するものであるという点において、幼児教育法上の満5歳児無償教育費を美術学院に支援する形態をバウチャー制度という名前で活用されてはならない。

―― 特に、2004年現在、教育部の満5歳児無償教育費支援予算は全体幼児の約14%程度でしかないという点である。幼児教育法固有の目的である満5歳児幼稚園就園児に対する国家的な無償教育がこのように不備な中で、美術学院にその予算を支援すると言うことは、満5歳児無償教育実現が後退するほか無いことを意味している。

―― また、現実的にたくさんの幼児が美術学院だけではなくピアノ学院、舞踊学院、雄弁学院，幼児英語学院、テコンドー学院等に通っている点を勘案するとき、唯一、幼児対象美術学院にだけ幼児教育法上の満5歳児無償教育費を支援すれば、その他の学院に通わせている学父母たちとの公平性の問題だけではなく、該当する学院の支援要求等数多くの問題が派生することだろう。ひいては現在私教育費軽減対策次元において小学校で施行している特技・適性教育費さえも国家が責任を持つべきであるという主張が提起されるであろうことも憂慮される。

――さらに国民も私教育費軽減政策に対する政府の政策の信頼喪失どころか、私教育費万能主義の考え方を一層拡散させることが憂慮される。

2．細部事案に対する立場

全国美術学院協議会の主張	幼児教育界の立場
1．低所得子女幼児教育費平等支援のために	○美術学院に通う幼児たちが低所得層子女だという客観的な根拠がないばかりか、幼稚園と

必要	保育施設に通う幼児が重複して美術学院に通う場合がある。 ○低所得層子女の幼児教育費平等支援は美術学院を支援対象に含めて解決することではなく、幼稚園や保育施設新設、支援強化を通じて根本的に解決する事案であって、私教育機関支援によってつぎはぎをする処方によって解決できる性質のものではない。
2．全ての低所得層子女に支援するのではなく、幼稚園や保育施設に通う低所得層子女（幼児）にだけ支援をしてやって、幼児美術学院に通っている56万名の幼児たちを対象から除外するのは問題である。	○このような美術学院の主張は次のような虚構性を持っている。 満5歳児童無償教育費支援対象に美術学院も含ませなければならないという主張、即ち「幼児美術学院に通っている56万名の幼児も国家から恵沢を受けるべきである」という論理は、政府の統計を見ればその虚構を理解することができる。大統領諮問「高齢化及び未来社会委員会」の「児童支援政策方案」中、<保育と幼児教育サービス利用現況>を調べてみると、5歳児全体の人口は(2003年基準)640,643名で、このうち保育施設利用園児数は172,225名(26,9%)で、幼稚園利用園児数は300,363名(46,9%)で、合計が472,588名(73.8%)である。 ○従って、幼稚園や保育施設に就園していない園児数は2003年基準で168,055名である。この数字の全部が美術学院に通っているとは言えなくて、幼稚園や保育施設に通っている幼児たちの中に美術学院に重複して通っている幼児まで含んでいると推量される。結局、美術学院の主張する満5歳児無償教育費支援年齢である満5歳児だけに絞って話をしなければならないのに、満3,4歳児、幼稚園及び保育施設に通う重複幼児まで併せてふくらませている。

3．低所得層子女幼児教育に対する費用を父母たちに直接支給（クーポン・確認書）して学父母たちが自分が願う教育機関を選択するようにする幼児教育方案を幼稚園、幼児美術学院、オリニジップ団体及び幼児教育教授陣等全ての関係者が協議（覚書にする）して制定する。	○去る１月７日、ハンナラ党主導で幼児教育法制定関連の争点となる事項について幼稚園、幼児美術学院、オリニジップ団体及び幼児教育教授陣等、全ての利害対象者が協議（覚え書）したことは事実で、協議（覚え書）の核心内容は、幼児教育法上の教育に既に保護機能が包含されているので、「保護」条項を削除することに対する同意であって、美術学院支援に対する合意ではない。現在女性部や保育施設も全て満５歳児童無償教育費支援対象に美術学院を含めることを絶対に反対している事実でも確認されている。 ○学父母が教育機関を選択する、いわゆるバウチャーシステムが幼児教育法上に含まれているが、バウチャーシステムは私立学校に通う学生（園児）たちに公立学校に通う費用分だけを国家が支援することを意味しているもので、私設学院支援までも含んではいない。 幼稚園は教育基本法第９条によって、学校の種類に含まれている。
4．幼児教育法国会通過過程において、教育人的資源部長官が幼児美術学院に通う低所得層幼児たちにも支援をしたいと、固く約束（国会会議の席上での回答）している。	○昨年 12 月 11 日、国会教育委で幼児教育法案が通過した当時、前任ユドクフン教育部長官が野党モ議員の執拗な美術学院支援の主張に仕方なく支援可能を回答したというのが事実である。 ○しかし、幼児教育公教育化を毀損する美術学院支援を前任長官が約束したと無条件に守ることではなく、誤った約束であることを認定して、今からでも正しくとらえることが、国民に対する政府の政策信頼度を高める正しい道である。 これは国民に対する大統領公約事項でも、いろいろな理由で相当数履行されていない場合と同様である。

5．各教育機関（幼稚園、幼児美術学院、オリニジップ）等が善意の競争を通じて、多様で創造的な良質の教育が行われるようにするためである。	○幼児対象美術学院の教育プログラムは、国家の教育課程を運営することとは違うことを勘案するとき、公教育や公保育に対する私教育的補充機能である。このような美術学院側の主張は国家教育である初・中等教育が私設学院との善意の競争を通じて良質の教育が成立していくのだという主張と同じことである。

実際美術学院側が主張することを立証する研究を探してみた結果、わが国で公式的に確認された研究は探すことができなくて、唯一、2002年に行われた全国保育実態調査において学院に関連した現況の一部を見つけることができたのみである。

ソムンヒ等（2002）が保健福祉部の委嘱で実施した全国世帯別訪問調査結果によれば、3,369世帯を対象にしたとき、次の<表－１>の結果が示された。

<表１>児童区分別養育支援サービス利用率　　（単位%）

区分	乳幼児			小学生
	乳児（0-2）	幼児（3-5）	全 体	
保育施設	10.1	29.9	21.3	0.6
幼稚園	0.4	31.9	18.2	0.1
宣教院	0.7	4.6	2.9	0.3
学院	0.8	25.9	15.0	75.0

注：重複面談結果である。

資料：「2002年度全国保育実態調査」中、世帯保育実態調査資料　p.125

上の結果は、重複回答なので、学院の場合は、保育施設と幼稚園に就園する幼児の数字が含まれている。これは小学生の場合、学院に通う児童が75%であることを見ても理解できるだろう。これを地域別乳幼児及び小学生養育支援サービス利用率で整理すれば、次の（<表２>の如くである。

＜表２＞地域別乳幼児及び小学生養育支援サービス利用率　　(%)

区分	乳幼児			小学生		
	大都市	中小都市	邑・面	大都市	中・小都市	邑・面
保育施設	19.2	21.0	27.9	0.4	0.5	1.2
幼稚園	17.0	19.5	19.1	0.2	0.2	/
宣教院	3.4	1.5	4.4	0.2	0.3	0.4
学院	15.5	16.1	11.3	77.1	75.4	68.7

注：重複回答を含む

資料：「2002 年全国保育実態調査」中　世帯保育実態調査資料、p.129

学院の場合、乳幼児（0-5 歳）や、小学生の場合や、邑・面（農村）の場合よりは、大都市と中小都市の児童がより高くなっている。これを所得別に分析してみれば、つぎの＜表３＞の如くである。

＜表３＞　世帯所得別乳幼児　及び　小学生養育支援サービスの利用率　(%)

区　分		99 万 W 未満	100-149	150-199	200-249	250-299	300-349	350-399	400-以上	全体
乳幼児	オリニジップ	29.6	18.3	18.8	12.9	19.7	21.8	22.7	17.4	18.9
	ノリバン	1.3	1.0	1.3	2.0	2.7	2.7	2.7	3.4	6.3
	幼稚園	11.3	11.0	17.6	17.0	23.0	21.8	27.7	25.7	18.2
	宣教院	3.3	3.3	1.3	4.3	2.7	2.3	5.0	2.8	2.9
	学院	11.8	10.5	12.3	16.8	16.0	18.3	21.8	19.8	15.0
小学生	オリニジップ	1.1	1.6	0.4	/	/	/	/	0.6	0.5
	ノリバン	/	/	/	/	0.6	0.3	/	0.6	0.2
	幼稚園	/	/	/	0.2	/	0.6	/	0.3	0.1
	宣教院	0.6	0.3	/	0.2	0.3	0.3	0.8	/	0.3
	学院	40.6	63.7	73.0	74.9	83.1	85.3	77.7	88.7	75

注：重複回答を含む

.資料：「2002 年全国保育実態調査」中、世帯保育実態調査資料、p.134,135.

上の＜表３＞を見ると、世帯あたり所得水準が高いほど乳幼児の場合や小学生の学院利用率

が高い傾向を見せている。従って、学院側の主張のように、低所得層の児童が主として学院を利用するという主張は根拠がないと言える。

Ⅳ．わが国の幼稚園と保育施設の現況

これからのわが国の幼児たちのための幼児教育施設の公教育・保育発展のために、現在の幼稚園と保育施設の就園現況を理解することは重要である。なぜならば、学院側は「幼児美術学院に通っている56万余名の幼児たちも国家からの恵沢を受けるべきである」という論理を主張しているために、政府の統計を通じて現況を分析してみる必要がある。

１．幼稚園と保育施設現況

幼稚園は国・公立と私立幼稚園に区分されていて、就園率は　＜表４＞の如くである。

＜表４＞幼稚園、保育施設及び利用児童の現況

（単位：園、名）

区分		国公立	私立・民間	計
幼稚園	施設数	4,284(51.7%)	4,008(48.3%)	8,292(100%)
	児童数	121,322(22.2%)	425,209(77.8%)	546,531(100%)
保育施設	施設数	1,327(5.7%)	22,097*(94.3%)	23,424(100%)
	児童数	104,945(12.6%)	728,374*(87.4%)	833,269(100%)

注：2004年保育事業案内、保健福祉部（2003.6）．設立類型別幼稚園現況（2003.4）

＊法人　1,612個、職場　214個、5-20人以下の小規模家庭保育施設　8,633個、

個人　10,978個等を含む。高齢化及び未来社会委員会（2004.6.1）育児支援政策方案から再引用。

＜表４＞でみられるように、韓国の幼児教育は民間保育施設が88%に及んでいて、私立幼稚園が77.8%で、殆ど私立の施設に依存しているけれど、これに対する国家の支援がほとんど無いのが実情である。

２．幼稚園・保育施設統合現況

幼稚園と保育施設を統合して就園率を調べてみると、0～2歳児の14%が保育施設に通っていて、3～5歳児の61.8%程度が幼稚園や保育施設に通っている。

＜表５＞ 保育施設と幼稚園に通う子どもの年齢段階別比率

単位： 名（%）

区分	人口数 (2003)	保育施設 (2003.12)	幼稚園 (2004.4)	小 計
0 歳	469,270	14,686(2.6)	—	
1 歳	492,091	66,901(11.9)	—	
2 歳	558,093	159,972(26.8)	—	
0-2 歳小計	1,519, 454	241,559(14.1)	—	
3 歳	638,482	213,559(35.8)	76,829(13.8)	290,386(49.6)
4 歳	620,038	201,303(32.7)	168,613(26.4)	188,916(59.1)
5 歳	640,643	172,225(27.7)	296,271(47.8)	468,496(85.5)
3-5 歳小計	1,899, 163	587,085(32.0)	541,713(29.8)	1,128,798(61.8)

注：高齢化及び未来社会委員会（2004.6.1）育児支援政策方案

李玉（2004）．児童のための育児支援政策の方向と課題。2004 年保育支援教授協議会フォーラム。

「保育、私たちの子どもがその中心にいるだろうか？」保育支援教授協議会。P.9-10 部分再引用。

このように幼稚園と保育施設の全てが満 3～5 歳児を主対象にしているので、満 0～2 歳児の乳児保育施設が絶対的に不足していることが分かる。満 5 歳児無償教育対象の就園率は保育施設 27.7%、幼稚園 47.8%で 75.5%を占めている。

Ⅴ．社会現象と公教育・保育の問題点

現代韓国社会における家族構造、人生の価値観等が急速に西洋化されていて、これによって子女養育に関しても多くの変化が起こっている。即ち、家族構造の変化及び社会価値観の変化、女性社会参加の増加、忙しげな社会の雰囲気などによって子女養育が社会問題化されている。また少子化現象によって出産率が低くなっていて、これと関連して子女たちに対する早期教育現象が加速化されている。現在韓国で起こっている幼児教育と保育の現象と問題点を中心に、わが国幼児たちのために一日も早く公教育・公保育体制が成立するようにすることの正当性を整理してみたい。

１．出産率低下による小子化現象

80 年代以降、出産児数が減少している。15 歳以上 49 歳のでは、女性 1 人あたり出産は 1992 年 1.78 名を頂点に持続的に減少して、2002 年 1.33 名、2003 年には 1.17 名となって、これは

OECD 加盟国中でも一番低い出産率である（統計庁 2002）。2003 年に生まれた新生児数が 49 万名水準に過ぎず、史上最低値となったのである。これは 1970 年代の年間 90 万名に較べて約半分の水準に過ぎない。20 代の女性が減って、結婚率も減少するという趨勢の中で、景気沈滞によって子どもを持つことを忌避するためだと把握されている。子女数が減ると同時に、父母たちの子女教育熱は一層加重されていて、子女養育の問題は社会問題化している。

2．韓国社会の家族構造及び価値観の変化

子女養育と関連した社会変化の内で、家族構造の変化は過去の拡大家族から核家族へと急速に変化している点を挙げることができる。又、韓国社会では最近になって人生に対する価値観の変化によって離婚率が高く待っていて、離婚率は 1990 年度の 11.4%から 2000 年 35.9%だったものが、2002 年には 47%に増えて、離婚率は毎年急速に増加している。父母が離婚をしたり死別したりした場合はまた子女養育が深刻な社会問題となっているのが実情である。

3．早期教育の熱風

家庭において学院や学習誌等を利用して早期教育を実施する最小開始年齢は、乳児の 3 ヶ月が一番早くて、このほかに大部分の早期教育の最小開始年齢が 1～2 歳に実施されていることを知ることができる。私立幼稚園と保育施設でも 80%以上が平均 3～4 種類程度の特別活動を幼児を対象に実施していることが分かっている。このような研究結果は、社会的に早期学習を強調する雰囲気と父母たちの早期教育に対する過熱現象を良く反映している。

4．女性就業率の増加

現代韓国の社会現象の一つとしては女性就業率の増加を挙げることができる。2000 年度では全体女性に経済活動参加率は 48.3%であって、2002 年 9 月現在、15 歳以上の女性の経済活動参加率は 49.8%に至った。このうち、既婚女性の経済活動参加率は 49%である。

女性の立場から見れば、幼い子女を持った結婚初期というのは経済的な活動が一番多く要求される時期である。しかし、わが国の場合子女養育支援制度、特に乳児養育支援制度が不足で、多くの就業母たちが子女が幼い時期に職場を放棄するようになっていて、女性の経済活動参加率はM字曲線を形作っている。

5．出産休暇及び育児休職の制度的不十分さ

育児休職制度は 1987 年から制度化され、施行された。しかし、利用者数が少なくてこの制度を活性化するために 2001 年 11 月から男性勤労者の育児休職、育児休職給与新設、育児休職期間の間解雇禁止等の社会的基盤を構築した。産前産後の休暇の内容は産前・産後を通じて 90 日として、最初の 60 日は事業主が給与を負担して、最終 30 日は国家が支給するようになっていた。

しかし韓国の育児休職制度利用率はとても低い。これは少ない育児休職手当（40万ウォン）および非現実的な代替人力手当（10万～15万ウォン支援）と復職以後の不利益（経歴管理の不利益等）によって育児休職制度利用率が低調であることが示されている。又、職場を持っている就業夫婦のために職場託児施設が運営されているが、活性化されていなくて、全体保育施設の1.03%に過ぎない。

6．家庭内養育支援制度不足

0歳児の父母の大部分は家庭で赤ちゃんを育てたいと願っているけれど、家で育てることができるプログラム支援や情報提供等が不十分である。又、過去には祖母が養育を支援してくれたが、現在は核家族形態なので父母たちが養育情報不足で難しさを経験している。従って、新生児の場合、就業している母親と専業主婦みんなのための家庭における養育支援が要求されている。

7．共働き夫婦等就業母に対する支援対策不足

父母が安心して預けることのできる施設が限定されていて、その利用率が低く、現在保育施設利用費と家庭保育料が高くて、父母負担が重くなっている。現在就業母たちの乳児委託現況を調べてみると血縁54.9%、非血縁者9.4%、施設3.1%、何の援助も無いという事例が32.8%となっている。現在夜間保育を開始する保育施設も一部できていて、障害を持った児童との統合保育も開始されている。しかし、今までは就業母の経済活動参加を支援するための夜間保育、時間制保育、時間延長制保育、休日保育等の多様なサービスはほとんど提供されていなかった。

8．保育及び幼児教育の質的水準

幼児教育の施設別にプログラムの質的水準の違いが多くて、施設で必要な情報を体系的に提供してくれる機能も不十分である。一般的に教師の待遇が低くて優秀な教師の確保が難しく、長い勤務時間（平均10.4時間）と休暇期間が無くて、保育施設は補充教育が難しい。これからは優秀な教師を確保するために現行教師養成体系、資格付与、経歴管理、教育訓練・研修、報酬等に対する総合的な検討が必要である。

9．施設活用の不均衡と国公立・民間との大きな格差

保育及び幼稚園教育施設が地域別に不均衡に分布していて、保育施設及び幼稚園選択に難しさがある。又、都市の場合、国公立の施設が中心となっていて、国公立利用する幼児たちは所得水準に関係なく国家の支援を受ける反面、78－84%に及び民間施設利用幼児には国家支援の恵沢がない。特に就学直前である5歳児の場合、低所得層及び農漁村地域の幼児たちについては無償幼児教育が行われているが、全体幼児たちを対象とする普遍的な満5歳児無償保育が不十分であるのが実情である。

10. 障害児及び貧困児童に対する国家支援

障害児は登録をした場合、特殊施設を無料利用することができる。現在満３－５歳の障害児は28,900名で、特殊教育対象障害幼児の数は12,000名へ修正されている。３－５歳障害児の無償保育・教育は障害者登録証所持者に限定している。又貧困児童のための包括的な特殊サービスが不十分な実情である。このような貧困児童は青少年非行と貧困の世襲化に繋がる確率が大きいので、根本的な対策が必要である。

11. 放課後教室の需要増大

小学校低学年は午前の授業だけを行っているために、就業母の退勤時間とあっていなくて、放課後保育が必要である。しかし、現在放課後教室を運営している学校は297校（5,423校中の0.5%）に過ぎない。

以上のようなたくさんの減少を解決するためには、政府は乳幼児教育と保育を公教育・保育課して、そこに支援をする財政確保が緊急である。これを解決するためには財源をこのような形の私教育に配分し支援できるかという問題ではない。従って、一日も早く政府は公教育と保育が成立できるようにすることはできない。従って、一日も早く政府は公教育化と保育が成立するような政策の推進戦略を立てねばならないのである。

Ⅵ. 公教育と保育政策の推進戦略

１．幼稚園と保育施設の公共性を強化する。

就学前乳幼児は性別、所得、地域に関係なく、全て国家が認定する幼児教育機関に通う権利がある。これから学院を支援することになれば、これは財政支援の次元を越えて学院を幼児教育機関として認定すると同時に、わが国幼児教育機関は幼稚園と保育施設の二元化ではなく、幼稚園と保育施設と学院に三元化するという重大な誤謬を犯すことであって、世界的に類例を見ない政策を施行することになる。現在幼児教育予算が全体の教育予算の１%水準であって、保育料を少しでも受恵している児童は20余万名に過ぎないという現実では、どのような予算でも今私教育に支援することができる余地はないはずである。

このために、次のような４大原則と政策方向を提示する。

－乳幼児は所得水準、性別、地域に相関無く質高い教育と保育サービスを受けるべきである。
－公教育・保育を保証するために政府の財政及び支援を拡大すべきである。
－国・公立幼稚園と保育施設を拡大しなければならない。
－私立幼稚園と民間保育施設に対する財政支援が絶対的に必要である。

2．満５歳児無償教育及び保育を拡大する。

満５歳児になる児童は、低所得層から実施して、所得水準別に支援対象を増やして、'08 年に都市勤労者平均所得水準（全体満５歳児対象者の約 70%）まで拡大するという政府の方針は守られなければならない。

＜表　６＞満５歳児無償教育及び保育費支援年次別計画（案）　　（単位：名）

区分	2004	2005	2006	2007	2008
満５歳児	622,299	614,775	595,030	559,735	550,371
支援児数	131,475	184,432	302,259	391,814	385,259
支援率	21%	30%	50%	70%	70%

注：女性部、教育部 2005 年　５歳児無償保育予算案（ソウルは国費：地方費　20:80　地方は 50:50）、教育（国費：地方費　50:50）

3．幼稚園及び保育教師の総合的な待遇改善方案を準備しなければならない。

―― 教師の賃金を段階的に引き上げることの現実化

―― 幼稚園と保育施設の教師も８時間の法的勤労時間を遵守するようにして、超過勤務手当及び代替人力提供等、勤労基準法上の勤務が可能となるよう、運営費及び人件費に加算するべきである。

―― 劣悪な勤務環境改善と資格・経歴管理体制の確立が必要である。

4．政府の政策に対するこれからの指標はそのまま施行されなければならない。

政府は 2004 年後半期に実施された関係部署共同基礎調査結果に応じて、2005 年に総合計画を樹立するよう計画している。このような総合計画によって年次別政策を推進して、2008 年度までに完了させる方針である。このような年度別推進計画に応じて、2008 年度に行われる政策は次の如くである。

＜表　７＞　幼児教育推進政策

政　策　名	現　在	2008 年度
保育・幼児教育機関利用率	14～60%	40～90%
0-2 歳児保育利用率	14.1%	40%
3-4 歳児保育・教育	53.3%	80%
5 歳教育及び保育	73.8%	90%

育児費用の本人負担率	70%	50%
育児費用支援対象児童比率 0-4 歳（部分支援を含む）	24.3%	70%
5 歳無償保育教育	20.9%	70%
女性経済活動参加率	53.4%	60%
新規雇用創出		26 万個

＊　2004 年 4 月　雇用動向、統計庁

未来社会委員会の育児支援政策は、現在より家計負担が平均 50%程度軽減されるよう支援されて、所得水準別に差等支援して、2008 年まで基礎生活保障受給者及び次上位階層の費用は全額負担して、平均所得以下は 60%まで、平均所得者は 30%まで支援するようにしている。最近保育予算の増加にも拘わらず、父母の幼稚園と保育費用の負担率は依然として高くて、私立・民間依存もまだ高い。

育児支援政策の目標は現在 14～60%程度の育児サービス利用率を、3～4 年以内に最高で 40～90%にまで高めることである。現在の保育及び教育予算に較べて相当な予算の必要なことが予想されるので、予算確保だけではなく予算使用の効率性も又、重要な政策である。現在女性部、教育部、労働部、農林部の育児支援予算の執行方式と支援対象に対する総合的な政策を通じて、育児支援を受けていない児童に対する支援を拡大することが、予算執行の効率性を高めることになるのである。現在 2004 年度基準育児支援費は、女性部 4,038 億、教育部 408 億、農林部の養育費支援 255 億、労働部 126 億（雇用保険）と報告されている（イオック、2004）。従って、このような支援を幼児対象美術学院に分けて支援することは、予算執行の効率化を逸脱する政策となるものである。

Ⅶ. 結び

幼児教育法制定は、わが国の 100 余年の幼児教育の歴史において、幼児教育の新しい場面を得る契機となった。幼児教育法が制定されて、乳幼児保育法が改定されることによって、国家的には幼児段階から体系化された乳幼児に対する方を完成することになって、乳幼児たちは均衡のとれた調和のある良質の教育と保育を受けることができる機会を持つことになった。しかし、幼児教育法の場合、法案が制定されて幼児教育施行令やその施行規則が幼児教育現場に反映されるためには、今でもしなければならないことがたくさん残されている。基礎教育を強化することができる本当の意味での幼児教育法となろうとするならば、幼児教育法制定過程で見たような意味で整備して手入れしなければならない難題が山積しているからである。韓国幼児教育は、これから低所得層と農漁村地域の乳幼児たちに、幼児教育と保育の機会を拡大してい

かなければならない。現在２歳未満の保育率は15%程度に過ぎず、3～5歳の場合でも幼稚園と保育施設を統合しての就園率は60%程度である。これを解消するためには幼児教育法と乳幼児保育法で明示された満５歳児に対する、無償教育・保育を拡大していかなければならない。特に、わが国の女性の経済活動参加要求は増加していて、そのためには多様な養育支援要求を充足させるよう保育サービスの供給を拡充して、保育サービスの質的向上と多様化を模索しなければならない。就業母のために乳児（0-2歳）保育サービスを拡充、夜間・休日・24時間等の特殊保育、放課後保育施設、障害児保育施設と職場保育施設の活性化が要求されている。

韓国の幼児教育は同一年齢の3-5歳を対象に幼稚園と保育施設が教育部と女性部に二元化していることで協調ができるというよりは、多くの問題点を見せている。同一年齢に対する政策が重複している場合が多くて、幼児に対する根拠法が相互に異なって、行政の一貫性が不足して財政の非効率的な側面がある。従って、国家的次元からこれに対する適切な役割分担と協助に対する要求が高くなっている。

その上「大統領諮問高齢化及び未来社会委員会」が幼児教育と保育の新しい枠を提示した育児支援政策方案を提案しているけれど、幼児を中心にした幼児教育と保育の究極的な問題点（行・財政支援体制及び立法体制の一元化等）に対する根本的な解消方案だというよりは現象学的問題解決に集中しているので、これからこれによって幼児教育界と保育界、教育人的資源部と女性部、労働部、農林部間の行政重複、予算乱費、部署間非協助及び葛藤招来の余地がある。

このような課題において、韓国の幼児たちの安寧と幸福のために、女性界と幼児教育・保育界がどのときよりも力を合わせるべきだという視点に立つことだと考えられている。今、これ以上の葛藤をしてはならず、賢明に子どもたちのために知恵を併せて論議しなければならないのである。幼稚園及び利害関連団体の要求と期待が施行令制定過程に均衡を保って反映されなければならないし、幼児教育法と乳幼児保育法間の重複規定の円満な調整を至急に行わなければならない。幼稚園と保育施設の性格と役割区分も確実に定立しなければならない。又、今当面は難しくとも、これからの幼児教育は一元化された幼児教育と保育体制を究極的には志向しながら、幼児関連法体系を一元化する方案も長期的に研究してみなければならないことである。それがこれからの韓国の「公教育体制としての幼児教育・保育」を確立する上で一番重要な要因となるだろう。そしてこのような公教育体制の確立のために、国家が私教育である学院に満５歳児無償教育費を支援することは、してはならないことなのである。

参考文献

・高齢化及び未来社会委員会（2004.6.1）　未来人力及び女性の経済活動参加拡大のための育児支援政策方案

・教育改革委員会（1997）　第14次　公聴会資料

・キムヨンボ（2002）「乳幼児保育の正体性と公保育」．2002韓国幼児教育学会秋季学術大会　韓国乳幼児保育学会論文発表資料集．韓国乳幼児保育学会．

・キムヨンオク・チソンヘ（2002）「農漁村保育施設現況と活性化方案」．2002韓国乳幼児保育学会秋季学術大会．資料集

・ナジョン（2002）「公教育化のための幼児教育政策方向」．公教育化のための幼稚園経営改善方案．開放幼児教育学会　夏季学術大会　資料集．

・パクグミ（2003）「保育の社会的役割と公共性」．保育の社会的役割と公共性。ソウル市保育施設連合会・共同育児と共同体教育・ソウル市オリニジップ／ノリバン連合会・韓国保育教師会

・イオック（2004）．児童のための育児支援政策の方向と課題．2004　保育支援教授協議会フォーラム「保育、わたしたちの子どもがその中心にいるだろうか？」保育支援教授協議会．p.9-10　部分的再引用

・ソムンヒ、イムユギョン、パクエリ（2002）．2002年度全国保育実態調査報告。保健福祉部　韓国保健社会研究院。

・幼児教育発展のための幼児教育代表者連帯（2004）．満5歳児無償教育費の美術学院包含に対する幼児教育界の立場

・チョンミンジャ（2002）．「公保育のための乳幼児保育事業の財政推計」．2002韓国乳幼児保育学会秋季学術大会　韓国乳幼児保育学会論文発表資料集．韓国乳幼児保育学会．

・Vandell, Deborah Lowe（2004）．Policies and Strategies to Improve Early Education and Care. 2004　サムソン国際学術大会．

東アジアにおける早期教育の現状と課題
資料集２

科学研究費補助金基盤研究(B)(2)
「東アジア地域における『早期教育』の現状と課題
に関する国際比較研究」

発　　行　　平成 17 年 3 月

研究代表者　　一見(鎧屋)真理子

発 行 所　　国立教育政策研究所　国際研究・協力部
〒153-8681　東京都目黒区下目黒 6 丁目 5 番 22 号
電話　03-5721-5070

印　　刷　　株式会社光和テック　電話　03-3756-1661(代表)